

# 稲荷塚道東遺跡

前橋警察署新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第320集

TOU KA ZUKA MITI HIGASI  
稲 荷 塚 道 東 遺 跡

前橋警察署新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 3

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





稲荷塚道東遺跡全景（南東上空より）



銅・鉄製品（63号住居）



転用硯朱墨痕（31号住居）



白磁・青磁（表）



白磁・青磁（裏）



# 序

『稲荷塚道東遺跡』は、前橋警察署が現在の太友町から総社町へ新築移転する工事に伴って発掘調査された、前橋市総社町に所在する遺跡の調査報告書です。調査は平成14年1月7日～6月28日、整理事業は平成14年10月1日～平成15年8月31日まで、群馬県教育委員会が調整し、群馬県警察本部と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託契約を締結し実施しました。

遺跡地は、相馬ヶ原扇状地が前橋台地に移行するあたりに位置し、上野国府、上野国分僧寺・尼寺、山王庵寺、総社古墳群等重要な遺跡の存在する古代上野国にあつては中枢的地域の一角を占めています。調査では、古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡などの遺構とともに、数多くの土器・石器・金属器などの遺物が発見されました。特に、調査区の中央部で検出された竈構築材採掘痕は、その竈構築材を利用した竪穴住居跡群もセットで発見されており、県内では鳥羽遺跡、大屋敷遺跡に次ぐ、貴重な発見となりました。今回の調査で明らかになった事実は、地域の歴史を明らかにする上で大いに役立つものと確信しております。

最後になりますが、群馬県警察本部、群馬県教育委員会文化課、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行まで終始ご協力を賜り、心から感謝の意を表すとともに、発掘調査担当者、作業員及び整理事務担当者、整理嘱託員・補助員の労をねぎらい序といたします。

平成15年8月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 小野 宇三郎





## 例 言

1. 本書は、前橋警察署新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した「稲荷塚道東遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に所収の遺跡名と発掘調査地の所在地番は、以下の通りである。  
遺跡名 稲荷塚道東（とうかつかみちひがし）遺跡  
所在地 群馬県前橋市総社町1-9-3番地
3. 発掘調査は、群馬県教育委員会が調整し、群馬県警察本部と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託契約を締結し実施した。
4. 試掘調査は、群馬県教育委員会文化財保護課が平成12年10月5日～10月7日まで実施した。
5. 調査期間 平成14年1月7日～平成14年6月28日
6. 調査組織

平成13年度

事務担当

理事長 小野宇三郎

常務理事（総務担当） 吉田 豊

常務理事（事業担当） 赤山容造

管理部長 住谷 進

調査研究部長 能登 健

総務課長 大高信夫

調査研究第1課長 真下高幸

総務課係長 笠原秀樹、小山建夫

調査研究係長 國定 均

総務課係長代理 須田朋子、吉田有光、森下弘美 総務課主事 片岡徳雄

事務補助員 吉田恵子、今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり

狩野真子、松下次男、吉田 茂、藤原正義、若田 誠

調査担当

専門員 田村公夫、今井和久 調査研究員 諸田康成

発掘作業員

小林延子、井野口久代、富岡昌次、細谷ひさえ、松田チカ子、吉田美津子、堀越みな子、久保初江、関口エイ、春山米子、神保君江、涌上光代、三木幹枝、桜井康広、工藤きみよ、高橋春代、田中みき江、若林トヨ子、小瀬智志、小林喜美子、小林千代子、桜井はる枝、治田あやの、松本嘉久治、小池信治、平柳雅子、阿部七郎、山口光明、河野みどり、松田伸夫、松田日登美、大野久子、阿久沢和子、高桑久子、木嶋三郎、木暮シズイ、中里八郎、長井由美子、茂木満、渡辺紀子、川田佳子、時田正義、高林操、木間武夫、塚越栄次、萩野三枝子、鎌田裕義、野尻信子、野積弓子、真下初江、野口敏男、石井緑、安藤好美、柿沼英、鈴木キミ子、徳江幸雄、大沢昭雄、青木林蔵、足利寛、天田絢子、今井靖子、木間良定、佐藤茂夫、吉田純一、五十嵐幸

平成14年度

事務担当

理事長 小野宇三郎

常務理事 吉田 豊

事業局長 神保信史

管理部長 萩原利通

調査研究部長 巾 隆之

総務課長	植原恒夫	調査研究第2課長	小山友孝
総務課係長	小山建夫、高橋房雄	調査研究係長	國定 均
総務課係長代理	須田朋子、吉田有光、森下弘美	総務課主事	田中賢一
事務補助員	今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子 松下次男、吉田 茂、若田 誠		

調査担当 専門員 田村公夫、今井和久

#### 発掘作業員

角田令子、茂木美恵、大塚日呂美、矢口豊子、横山美千代、大前美智子、後藤友英、飯野文子、小金澤たみ子、牧口ケサノ、竹内八重子、深沢ヨシ子、斉藤文子、石原侃一、石原紀一、山田由美子、堀口武子、串淵春江、中村元久、吉田えい、瀧澤洋子、大村美枝子、村井田実、武藤とく江、阿部善充、清水正男、小杉君代、長谷川ツネ子、青木雅代、林実、木村昌子、小林一雄、大山光代、伊佐悦子、永井由美子、佐藤世利子、原沢菊次郎、青木けい子、宮崎亀寿、三水邦得、石田悦司、川上哲男、田川真知、加藤智恵子、井野国雄、石田高義、岡田千枝子、狩野恵子、高木克巳、鈴木和子、中野勝雄、新井孝司、箱田茂、富沢晟、武田洋、浜名新平、塩ノ谷正男、原沢泰明、角田和子、櫻井敏江、榑沢菊司、高橋末治、橋元裕児、若松良幸、狩野真、久保田行男、真下美昭、山本松治、安田智恵、本間富子、吉田久子、山田卓乃、成瀬ケイ子、高橋清、村磯光子、采女直美、平方正廣、白石悦子、本多和子、井上清、小島京子、宇賀美代子、遠藤逸子、宮口るみ子、横谷純子、狩野良夫

7. 整理事業は、群馬県教育委員会が調整し、群馬県警察本部と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託契約を締結し実施した。

8. 整理事業期間 平成14年10月1日～平成15年8月31日

#### 9. 整理組織

平成14年度

##### 事務担当

理事長	小野宇三郎		
常務理事	吉田 豊	事業局長	神保侑史
管理部長	萩原利通	調査研究部長	巾 隆之
総務課長	植原恒夫	資料整理課長	西田健彦
総務課係長	高橋房雄、小山建夫	調査研究係長	國定 均
総務課係長代理	須田朋子、吉田有光、森下弘美 総務課主事 田中賢一		
事務補助員	今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子 松下次男、吉田 茂、若田 誠		

整理担当 今井和久

整理補助員 新谷さか江、土田三代子、光安文子、高橋優子、吉澤照恵、渡辺八千代

臨時雇用職員 角田 修、吉田圭子、土井洋子、国安真美、桜井次男、山岸洋一、白石満美子  
吉尾千鶴、小池次男、金井隆明、竹之内芳明、三浦 尚

平成15年度

##### 事務担当

理事長 小野宇三郎

常務理事	住谷永市	事業局長	神保侑史
管理部長	萩原利通	調査研究部長	右島和夫
総務課長	植原恒夫	資料整理課長	相京建史
総務課係長	高橋房雄、竹内 宏	調査研究係長	國定 均
総務課主幹	須田朋子、吉田有光		
総務課主任	阿久澤玄洋	総務課主事	田中賢一
事務補助員	今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子 松下次男、吉田 茂、若田 誠		
整理担当	今井和久	整理嘱託員	新井悦子
整理補助員	土田三代子、光安文子、田中富子、吉澤照恵、渡辺八千代		

#### 10. 本書作成担当

編集	今井和久
執筆	第1章田村公夫・今井和久、第4章第2節神谷佳明、第5章第2節飯島静男 第5章第3節橋崎修一郎、前記以外は今井和久

#### 遺物観察

陶磁器・瓦・鉄製品・石製品観察 大江正行 石器観察 関口美枝

上記以外の遺物に関しては、当事業団諸氏にご教授頂き、今井が観察を行った。

遺構写真撮影	田村公夫、今井和久、諸田康成	遺物写真撮影	佐藤元彦
遺物保存処理	関 邦一、土橋まり子、小村浩一	臨時雇用職員	本所智子、矢部素子
機械実測	田中富子、富沢スミ江、伊東博子、岸 弘子		
遺構図（竅穴住居跡）修正	田村公夫・今井和久	空中写真撮影	技研設計測量株式会社
遺構図等測量	技研設計測量株式会社、株式会社測設		
古井戸掘削測量	株式会社原澤ボーリング	自然科学分析	古環境株式会社
獣骨（馬歯）の鑑定・分析	橋崎修一郎	石材鑑定・分析	飯島静男（群馬地質研究会）
遺構デジタルトレース	技研設計測量株式会社		

11. 本遺跡の記録図・記録写真・出土遺物は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理し、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

12. 発掘調査及び本書作成にあたり、下記の関係機関・関係諸氏にご助言・ご指導・ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

矢部良明（郡山市立美術館長）、群馬県警察本部、前橋市教育委員会、群馬県教育委員会文化課、地元関係者各位

## 凡 例

1. 挿図縮尺は図版に記載した。概要は以下の通りである。

遺構 全体図1/200、堅穴住居跡・堅穴状遺構・井戸1/60、竈1/30、溝1/100・1/200、土坑・ピット1/40

遺物 土器1/3・1/6、瓦1/3、石器・砥石1/3、火打ち石1/2、紡錘車1/2、土鍾1/2、鉄器（鉄製品）1/3

2. 遺構図の方位は座標北である。座標系は、国家座標第Ⅸ系（旧測地系、日本測地系）である。  
 3. 遺構断面実測図及び等高線に記した数値はL=mで表示し、標高値を示す。  
 4. 遺構図の方眼枕名は5mごとにE区a-1枕をEa-1と記し、5m以内の地点では方眼枕の南東枕を基準に北、西方向への距離を+○m（mは省略）で表し位置を示す。

例：Ea-1から北へ2mは、Ea+2-1

例：Ea-1から西へ3mは、Ea-1+3

5. 遺構面積は、デジタルプランメーターによる3回の計測の平均値である。  
 6. テフラの名称は次の略号で表した。

As-A …… 浅間A軽石、1783年（天明3年）

As-B …… 浅間B軽石、1108年（天仁元年）

As-C …… 浅間C軽石、4世紀初頭

Hr-FA …… 榛名二ッ岳沢川テフラ、6世紀初頭（本文中はFAと略）

Hr-FP …… 榛名二ッ岳伊香保テフラ、6世紀中葉（本文中はFPと略）

7. 住居の方位は、竈の付設された住居では、竈を持つ壁（竈を持つと推定された壁）に直交する線を、炉の付設された住居では北辺に対して直交方向を、主軸線とした。溝の方位は、上流方向を基準に走行方向を主軸線とした。土坑・ピット・井戸は、長軸方向を主軸線とした。  
 8. 本書で使用したスクリーンパターンは、下記のとおりである。

### 遺構



### 遺物



9. 遺物番号は、遺構ごとに登録した。遺物番号は、遺構図中番号と遺物番号が統一されるようにした。  
 10. 土器の実測図は原則として四分制法をとった。残存量が1/2以下の遺物は180°展開して図上復元した。回転実測の場合は口縁線を切断し表現した。へら削りの方向は→で示す。  
 11. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、新版標準土色帖（1987年）によった。  
 12. 遺物写真の番号は、遺物図の番号と同一である。

# 目 次

口絵

序

例言

凡例

目次 (挿図目次・表目次・写真図版目次)

報告書抄録

## 第1章 発掘調査の経過と方法

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査の方法	
(1) 調査・整理方法	5
(2) 基本土層	6

## 第2章 周辺的环境

第1節 遺跡の立地	7
第2節 周辺の遺跡	9

## 第3章 検出された遺構と遺物

第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構	13
第2節 溝、竈構築材採掘痕群	114
第3節 井戸、土坑、ピット	122
第4節 トレンチ調査	133
第5節 遺構外出土遺物	
1 縄文・弥生時代	134
2 古墳時代	136
3 奈良・平安時代	136
4 中世以降	138

## 第4章 調査の成果

第1節 稲荷塚道東遺跡出土施釉陶器 (神谷佳明)	139
第2節 竈構築材採掘痕について (今井和久)	143

## 第5章 付編

第1節 自然化学分析について (古環境)	149
第2節 稲荷塚道東遺跡の土坑より採取した試料について (飯島静男)	171
第3節 稲荷塚道東遺跡出土馬歯・馬骨 (楢崎修一郎)	172

遺物観察表

写真図版

付図1 2号溝・竈構築材採掘痕群 付図2 全体図

# 挿 図 目 次

第1図	稲荷塚東遺跡位置図	1	第53図	28号住居跡	45
第2図	調査区図	3	第54図	28号住居跡竈、出土遺物	46
第3図	グリッド設定図	4	第55図	29号住居跡	46
第4図	基本土層図	6	第56図	29号住居跡出土遺物	47
第5図	遺跡周辺の地質図	8	第57図	30号住居跡	47
第6図	地質断面図	8	第58図	31号住居跡・竈、出土遺物	48
第7図	周辺遺跡図	11	第59図	32号住居跡・竈	49
第8図	竪穴住居跡・竪穴状遺構全体図	13	第60図	32号住居跡出土遺物	50
第9図	1号住居跡	14	第61図	33号住居跡・竈・掘り方、出土遺物	51
第10図	1号住居跡出土遺物	15	第62図	34号住居跡・竈、出土遺物	52
第11図	2号住居跡出土遺物	15	第63図	35号住居跡	53
第12図	2号住居跡	16	第64図	35号住居跡竈、出土遺物	54
第13図	3号住居跡、出土遺物	17	第65図	36A・B・C号住居跡、出土遺物	55
第14図	4号住居跡、出土遺物	18	第66図	38号住居跡・竈	57
第15図	5号住居跡、出土遺物	18	第67図	38号住居跡出土遺物	58
第16図	6号住居跡、出土遺物	19	第68図	39号住居跡、出土遺物	59
第17図	7号住居跡	19	第69図	40号住居跡・竈、出土遺物(1)	59
第18図	8号住居跡、出土遺物	20	第70図	40号住居跡出土遺物(2)	61
第19図	9号住居跡、出土遺物	21	第71図	41号住居跡・竈、出土遺物(1)	62
第20図	10号住居跡	21	第72図	41号住居跡出土遺物(2)	63
第21図	11号住居跡	22	第73図	42・46号住居跡、42号住居跡出土遺物	63
第22図	12号住居跡	22	第74図	46号住居跡出土遺物	64
第23図	12号住居跡出土遺物	23	第75図	43号住居跡	64
第24図	13号住居跡出土遺物	23	第76図	43号住居跡竈、出土遺物	65
第25図	13号住居跡	24	第77図	44号住居跡、出土遺物	65
第26図	14号住居跡	25	第78図	45号住居跡	66
第27図	14号住居跡北竈・掘り方	26	第79図	45号住居跡出土遺物	67
第28図	14号住居跡東竈	27	第80図	47号住居跡	67
第29図	14号住居跡出土遺物(1)	27	第81図	47号住居跡竈、出土遺物	68
第30図	14号住居跡出土遺物(2)	28	第82図	48号住居跡、出土遺物	69
第31図	15号住居跡出土遺物	28	第83図	49号住居跡・竈、出土遺物	70
第32図	15号住居跡	29	第84図	50号住居跡	71
第33図	16号住居跡、出土遺物	30	第85図	50号住居跡竈、出土遺物	72
第34図	17号住居跡、出土遺物	30	第86図	51号住居跡出土遺物	72
第35図	18号住居跡	31	第87図	51号住居跡	73
第36図	19号住居跡	31	第88図	52号住居跡・竈、出土遺物	74
第37図	19号住居跡竈、出土遺物	32	第89図	53号住居跡	75
第38図	20号住居跡、出土遺物(1)	33	第90図	53号住居跡竈、出土遺物	76
第39図	20号住居跡出土遺物(2)	34	第91図	54号住居跡	76
第40図	21号住居跡出土遺物	34	第92図	54号住居跡出土遺物	77
第41図	21号住居跡	35	第93図	55号住居跡、出土遺物	78
第42図	37号住居跡・竈、出土遺物	36	第94図	56号住居跡出土遺物	78
第43図	22号住居跡、出土遺物	37	第95図	56号住居跡・竈	79
第44図	23号住居跡、出土遺物(1)	38	第96図	57号住居跡	80
第45図	23号住居跡出土遺物(2)	39	第97図	57号住居跡出土遺物(1)	81
第46図	24号住居跡	40	第98図	57号住居跡出土遺物(2)	82
第47図	24号住居跡竈、出土遺物(1)	41	第99図	58号住居跡	82
第48図	24号住居跡出土遺物(2)	42	第100図	58号住居跡出土遺物	83
第49図	25号住居跡、出土遺物	42	第101図	59号住居跡・竈	83
第50図	26号住居跡	43	第102図	59号住居跡出土遺物	84
第51図	26号住居跡竈、出土遺物	44	第103図	60号住居跡竈	84
第52図	27号住居跡、出土遺物	45	第104図	60号住居跡、出土遺物(1)	85

第105回	60号住居跡出土遺物(2).....	86
第106回	61号住居跡.....	87
第107回	61号住居跡竈、出土遺物.....	88
第108回	63号住居跡、出土遺物.....	89
第109回	64号住居跡、出土遺物(1).....	89
第110回	64号住居跡竈、出土遺物(2).....	90
第111回	65・70・71号住居跡.....	91
第112回	65・70号住居跡出土遺物.....	92
第113回	66号住居跡.....	92
第114回	66号住居跡出土遺物.....	93
第115回	67号住居跡.....	93
第116回	67号住居跡竈、出土遺物.....	94
第117回	68号住居跡.....	94
第118回	68号住居跡竈、出土遺物.....	95
第119回	69号住居跡・竈、出土遺物(1).....	96
第120回	69号住居跡出土遺物(2).....	97
第121回	72号住居跡・竈、出土遺物(1).....	98
第122回	72号住居跡出土遺物(2).....	99
第123回	73号住居跡・竈、出土遺物(1).....	100
第124回	73号住居跡出土遺物(2).....	101
第125回	75号住居跡.....	101
第126回	75号住居跡竈、出土遺物.....	102
第127回	76号住居跡.....	103
第128回	76号住居跡出土遺物.....	104
第129回	77号住居跡出土遺物.....	104
第130回	77号住居跡.....	105
第131回	78号住居跡出土遺物.....	105
第132回	78号住居跡・竈.....	106
第133回	79号住居跡.....	106
第134回	79号住居跡出土遺物.....	107
第135回	80号住居跡.....	107
第136回	80号住居跡出土遺物.....	108
第137回	81号住居跡、出土遺物(1).....	108
第138回	81号住居跡出土遺物(2).....	109
第139回	82号住居跡竈、出土遺物.....	109
第140回	83号住居跡、出土遺物.....	110

第141回	84号住居跡、出土遺物.....	111
第142回	85号住居跡、出土遺物.....	112
第143回	86号住居跡、出土遺物.....	112
第144回	1～3号竪穴状遺構、出土遺物.....	113
第145回	溝・竈構築材採掘痕跡全体図.....	114
第146回	1・3号溝.....	116
第147回	4～6号溝、2号溝出土遺物(1).....	117
第148回	2号溝出土遺物(2).....	118
第149回	2号溝出土遺物(3).....	119
第150回	3・4号溝出土遺物.....	120
第151回	竈構築材採り残し痕①・②.....	121
第152回	井戸・土坑・ピット全体図.....	122
第153回	1号井戸、出土遺物(1).....	123
第154回	1号井戸出土遺物(2).....	124
第155回	2号井戸.....	124
第156回	2号井戸出土遺物.....	125
第157回	1～4号土坑.....	125
第158回	5～9号土坑、出土遺物.....	126
第159回	11～13・15号土坑、出土遺物.....	127
第160回	16～18・20・21号土坑、出土遺物.....	128
第161回	22～27号土坑、出土遺物(1).....	129
第162回	25・26号土坑出土遺物(2).....	130
第163回	8・22・24・35・36・54号ピット、出土遺物.....	131
第164回	B・D・Eトレンチ全体図.....	133
第165回	縄文(弥生)時代出土遺物(1).....	134
第166回	縄文(弥生)時代出土遺物(2).....	135
第167回	古墳時代出土遺物.....	136
第168回	奈良・平安時代出土遺物(1).....	136
第169回	奈良・平安時代出土遺物(2).....	137
第170回	奈良・平安時代出土遺物(3).....	138
第171回	中世以降出土遺物.....	138

付図1 2号溝・竈構築材採掘痕跡(1:100)

付図2 稲荷塚道東遺跡全体図(1:200)

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表.....	12
第2表	土坑計測表.....	130

第3表	ピット計測表.....	132
第4表	割片類の石材・量.....	134

# 写真図版目次

PL 1	B・E区堅穴住居跡群 (上空から)		38号住居跡遺物出土状況 (西から)
	2号溝・竈磚茶材探掘痕群 (上空から)		38号住居跡竈掘り方 (西から)
PL 2	1号住居跡方全景 (南から)		39号住居跡全景 (西から)
	2号住居跡掘り方全景 (南から)	PL12	34号住居跡全景 (西から)
PL 3	3号住居跡掘り方全景 (西から)		34号住居跡竈掘り方 (西から)
	4号住居跡掘り方全景 (西から)		36A・B・C号住居跡遺物出土状況 (南西から)
	5号住居跡掘り方全景 (西から)		36A・B・C号住居跡概念図
	6号住居跡掘り方全景 (西から)		36号住居跡掘り方実測風景 (南西から)
	6号住居跡貯蔵穴 (西から)	PL13	40号住居跡遺物出土状況 (南から)
	7号住居跡掘り方全景 (西から)		40号住居跡竈全景 (西から)
	8号住居跡掘り方全景 (東から)		41号住居跡遺物出土状況 (西から)
	9号住居跡掘り方全景 (南から)		41号住居跡竈全景 (西から)
PL 4	10号住居跡掘り方全景 (西から)		42・46号住居跡全景 (西から)
	11号住居跡掘り方全景 (西から)	PL14	43号住居跡全景 (西から)
	12号住居跡掘り方全景 (西から)		43号住居跡土舗出土状況 (北から)
	12号住居跡竈遺物出土状況 (西から)		44号住居跡掘り方全景 (西から)
	13号住居跡遺物出土状況 (西から)		45号住居跡遺物出土状況 (西から)
PL 5	14号住居跡遺物出土状況 (南から)		47号住居跡全景 (西から)
	14号住居跡北竈遺物出土状況 (南から)		47号住居跡竈全景 (西から)
	14号住居跡北竈セクション (西から)		48号住居跡全景 (南西から)
	14号住居跡掘り方全景 (南から)		49号住居跡全景 (西から)
	14号住居跡遺物出土状況 (北から)	PL15	50号住居跡全景 (西から)
PL 6	15号住居跡全景 (南から)		50号住居跡竈全景 (西から)
	16号住居跡全景 (西から)		51号住居跡全景 (南西から)
	16号住居跡竈全景 (西から)		52号住居跡全景 (西から)
	17号住居跡竈全景 (北から)		52号住居跡竈全景 (西から)
	18号住居跡掘り方全景 (西から)	PL16	53号住居跡全景 (南西から)
PL 7	19号住居跡遺物出土状況 (西から)		53号住居跡竈全景 (南西から)
	19号住居跡竈全景 (西から)		54号住居跡遺物出土状況 (西から)
	20・21・37号住居跡遺物出土状況 (西から)		55号住居跡全景 (南西から)
	20・21・37号住居跡概念図		58号住居跡全景 (西から)
	20・21・37号住居跡掘り方全景 (西から)	PL17	56号住居跡掘り方全景 (西から)
PL 8	22号住居跡全景 (南から)		56号住居跡竈全景 (西から)
	24号住居跡竈全景 (西から)		57号住居跡遺物出土状況 (西から)
	23・24号住居跡遺物出土状況 (西から)		57号住居跡全景 (西から)
	23・24号住居跡概念図		57号住居跡炉遺物出土状況 (西から)
	25号住居跡掘り方全景 (西から)	PL18	59号住居跡全景 (西から)
PL 9	26号住居跡遺物出土状況 (西から)		59号住居跡遺物出土状況 (西から)
	26号住居跡竈全景 (西から)		60号住居跡遺物出土状況 (西から)
	27号住居跡全景 (西から)		60号住居跡遺物出土状況 (西から)
	28号住居跡遺物出土状況 (西から)		60号住居跡竈全景 (西から)
	29号住居跡掘り方全景 (西から)	PL19	61号住居跡全景 (南西から)
PL10	30号住居跡全景 (西から)		61号住居跡竈全景 (西から)
	31号住居跡遺物出土状況 (西から)		63号住居跡全景 (西から)
	31号住居跡竈全景 (西から)		65・66・70・71号住居跡掘り方全景 (西から)
	32号住居跡遺物出土状況 (西から)		65・66・70・71号住居跡概念図
	32号住居跡遺物出土状況 (西から)		64・69号住居跡遺物出土状況 (西から)
	32号住居跡竈遺物出土状況 (西から)	PL20	64号住居跡竈全景 (西から)
	32号住居跡鉄製紡錘車出土状況 (北から)		64号住居跡竈遺物出土状況 (西から)
	33号住居跡全景 (西から)	PL21	69号住居跡竈全景 (西から)
	33号住居跡竈全景 (西から)		64・69号住居跡全景 (西から)
PL11	35号住居跡全景 (西から)		64号住居跡竈天井石 (西から)
	35号住居跡竈掘り方 (西から)		64号住居跡竈支脚石 (西から)



	67号住居跡全景 (西から)		8号土坑全景 (北から)
	67号住居跡掘り方 (西から)		11号土坑全景 (南から)
	68号住居跡全景 (西から)		12号土坑全景 (西から)
	68号住居跡竈・貯蔵穴 (西から)		15号土坑全景 (南から)
PL22	72号住居跡遺物出土状況 (西から)		18号土坑全景 (南から)
	72号住居跡遺物出土状況 (西から)		20号土坑全景 (西から)
	72号住居跡掘り方 (西から)	PL28	22号土坑全景 (北から)
	73号住居跡全景 (西から)		23号土坑全景 (西から)
	73号住居跡竈全景 (西から)		24号土坑全景 (西から)
PL23	75号住居跡全景 (西から)		25号土坑全景 (西から)
	75号住居跡竈全景 (西から)		26号土坑全景 (南から)
	76号住居跡掘り方全景 (西から)		8号ピット全景 (南から)
	76号住居跡伊全景 (西から)		24号ピット全景 (南から)
	77号住居跡掘り方全景 (南西から)		35・36号ピット全景 (南から)
	78号住居跡全景 (西から)	PL29	Bトレンチ全景 (北から)
	78号住居跡竈全景 (西から)		Dトレンチ全景 (西から)
	79号住居跡全景 (西から)		Bトレンチセクション (西から)
PL24	80号住居跡全景 (西から)		Dトレンチセクション (南から)
	80号住居跡貯蔵穴 (西から)		Eトレンチ全景 (西から)
	82号住居跡全景 (西から)		Eトレンチ (旧河道) セクション (南から)
	82号住居跡竈全景 (西から)	PL30	1～14号住居出土遺物
	83号住居跡全景 (西から)	PL31	14～20号住居出土遺物
	84号住居跡全景 (西から)	PL32	20～24号住居出土遺物
	85号住居跡全景 (西から)	PL33	24～29号住居出土遺物
	86号住居跡全景 (西から)	PL34	31～36号住居出土遺物
PL25	2号溝全景 (北から)	PL35	36～39号住居出土遺物
	2号溝全景 (南上空から)	PL36	39～44号住居出土遺物
	2号溝セクション (南から)	PL37	45～52号住居出土遺物
	2号溝馬面出土状況 (東から)	PL38	52～56号住居出土遺物
	3号溝全景 (南から)	PL39	57号住居出土遺物
	4号溝全景 (西から)	PL40	57～60号住居出土遺物
PL26	5号溝全景 (西から)	PL41	60～64号住居出土遺物
	6号溝全景 (東から)	PL42	64～72号住居出土遺物
	竈構築材採掘痕全景 (南から)	PL43	72～73号住居出土遺物
	竈構築材採掘痕全景 (北から)	PL44	75～81号住居出土遺物
	竈構築材採掘痕近景 (北東から)	PL45	81～86号住居、1・2号竈穴遺構、2号溝出土遺物
	竈構築材採掘痕近景 (東から)	PL46	2～4号溝、1・2号井戸出土遺物
	竈構築材採り残し痕① (西から)	PL47	2号井戸、8～26号土坑、8～54号ピット、遺構外 (縄文) 出土遺物
	竈構築材採り残し痕② (東から)	PL48	遺構外 (縄文、古墳、奈良・平安、中世) 出土遺物
PL27	1号井戸全景 (東から)		
	2号井戸全景 (西から)		

## 発掘調査報告書抄録

ふりがな	とうかつかみちひがしいせき						
書名	稲荷塚道東遺跡						
副書名	前橋警察署新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	なし						
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書						
シリーズ番号	第320集						
編著者名	今井和久						
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL 0279(52)2511						
発行年月日	平成15(2003)年8月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	東経		m <sup>2</sup>	
稲荷塚道東遺跡	群馬県前橋市 中込町 総社町	10201	00829	36°23'45" 139°02'36"	20020107 ～ 20020628	6,500m <sup>2</sup>	前橋警察署新築工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
稲荷塚道東	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代  中近世	なし なし 竪穴住居跡、井戸、土坑 竪穴住居跡、井戸、土坑 溝、竪構築材探掘痕		土器、石器 石器 土師器、須恵器 土師器、須恵器 灰軸陶器、石製 品、土製品、鉄 製品 馬歯、陶磁器	条痕文系土器  赤色土器、石製紡錘車 鉄製紡錘車、墨書土器 刻書土器、転用硯  中国製青磁、白磁	

## 第1章 発掘調査の経過と方法

### 第1節 発掘調査に至る経過

前橋警察署は老朽化のため、大友町から総社町に新築移設することとなった。この工事に先立ち建設地内の埋蔵文化財について、群馬県警察本部より県教育委員会文化財保護課に問い合わせがあり、予備調査として建設予定地内の遺跡分布調査が実施され遺跡が確認された。建物建設は、平成14年度から開

始され平成16年度完成の予定である。群馬県教育委員会文化財保護課が平成13年12月に試掘調査を実施し、平成14年1月より財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団による調査が開始された。調査は順調に進み、平成14年6月28日に無事終了し、7月上旬に残務処理をし、7月15日に群馬県警察本部に引き渡した。



第1図 稲荷塚道東遺跡位置図（国土地理院地形図1：50,000「前橋」使用）

## 第2節 調査の経過

本遺跡の発掘調査は、平成14年1月7日より調査区北西部から開始し、平成14年6月28日まで実施した。その後、引き続き平成14年10月1日から平成15年8月31日まで整理事業を実施し、本事業を終了した。発掘調査の事前準備として、平成13年12月3日から調査事務所・器材庫・遺物取蔵庫の設置を始めた。発掘調査に使う物品・資材等は、12月18・19日に搬入し、平成14年1月からの調査に備えた。以下、調査日誌より、調査経過の概略を記す。

平成14年1月

平成14年1月7日より重機によるE区（一部F区・B区も含む）3,500㎡の表土及び攪乱部分の除去を開始した。8日より作業員を導入し、遺構確認・遺構調査を進めた。9日からは測量会社に委託し、方眼杭打ち、ベンチマークの設置をした。10日には、県教育委員会文化課（以下、文化課）職員1名と群馬県警察本部（以下、県警）職員5名が現場の視察に見えた。

調査区の東側は予想以上に遺構の残りが悪く、しかも土層がわかりにくかったため、重機による、試掘トレンチ・攪乱層除去を効果的に行い、土層断面を確認しながら遺構確認を実施した。その結果、堅穴住居跡数十基、多数の土坑・ピット、数条の溝跡などが確認された。重機による表土除去は順調に進み、22日に終了した。特に調査区を北東から南西に走る大溝（2号溝）は断面調査の結果、幅約5m、深さ約2.5mを測り、覆土（排土）を除去するのに困難が予想された。そこで、1月22日～30日まで、ベルトコンベアーを使い、排土搬出を行いながら調査した。27日（日）には県内平野部にも降雪があり、28日午前中は、調査区の除雪作業を行った。

平成14年2月

2月1日には、前橋共愛中学校の2年生5名が職場体験学習の事前打ち合わせに來跡した。5日には、県警職員5名が調査区東側の河川との境界測量の下見に見えた。7～8日には河川との境界測量のため

の除草作業を県警の委託業者が行った。12日には河川との境界の測量を県警の委託業者が行った。14日には前橋共愛中学校の2年生5名が職場体験学習を実施した。また、同日、県警、河川課、土木課の職員が來跡し、前橋警察署の建物配置がほぼ確定なので、調査対象地域について協議が必要との話があった。20日～25日には、業者に委託し、1・2号井戸の掘削・調査を行った。21日には、2号溝から東側調査区（約2,000㎡）の空中写真撮影・航空測量を業者に委託し実施した。西側調査区（約1,500㎡）の調査は土層もわかりにくい上に、遺構の重複も予想されたので、グリッド杭に沿ってサブトレンチを掘りながら調査を進めた。27日には県警職員4名、文化課1名、当事業団担当課長、調査担当との打ち合わせがあり、その場で、工事設計図が提出され、調査範囲が最終的に確定した。

平成14年3月

3月1日には、高所作業車から縄文時代草創期の遺構確認Eトレンチなどの全景写真を撮影した。2日～15日まで調査区の東側の埋め戻し作業を重機により実施した。15日には本年度で退職する作業員2名に感謝状を贈呈した。20日には高所作業車から2号溝などの全景写真を撮影した。21日には西側調査区の空中写真撮影・航空測量を業者に委託し実施した。22日には、平成13年度の作業員による調査を終了した。25日には発掘担当者により遺構図（平面断面図）の作成を行った。平成13年度の調査では、遺構総数で住居39軒、溝6条、土坑15基、ピット約60基の調査が終了した。

平成14年4月

4月4日には測量会社に委託し、平成14年度調査区（2,500㎡）の設定を実施した。8、9日には発掘担当者により遺構図（平面断面図）の作成を行った。11日より重機による表土及び攪乱部分の除去を開始した。17日より作業員を導入し、遺構確認・遺構調査を進めた。その結果、古墳・奈良・平安時代の住

居が重複して検出された。22日には測量会社に委託し、方眼杭打ち、ベンチマークの設置をした。22日～25日まで本遺跡で当事業団の平成14年度新任研修が行われた。

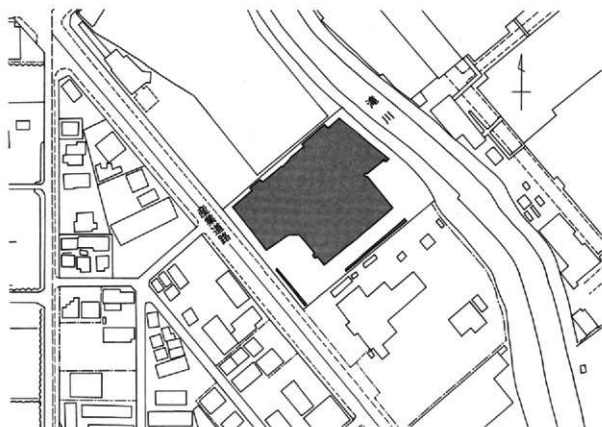
平成14年5月

5月2日、8日には調査区東側の河川（滝川）の護岸工事の下見に、石井設計事務所の職員が来踏した。5月13日には、作業員の健康診断を実施した。22日には県警の岡部氏他2名が現場の視察・挨拶に見えた。29日には、産構築材の石材を鑑定するために、飯島静男氏（群馬地質研究会）が来踏した。

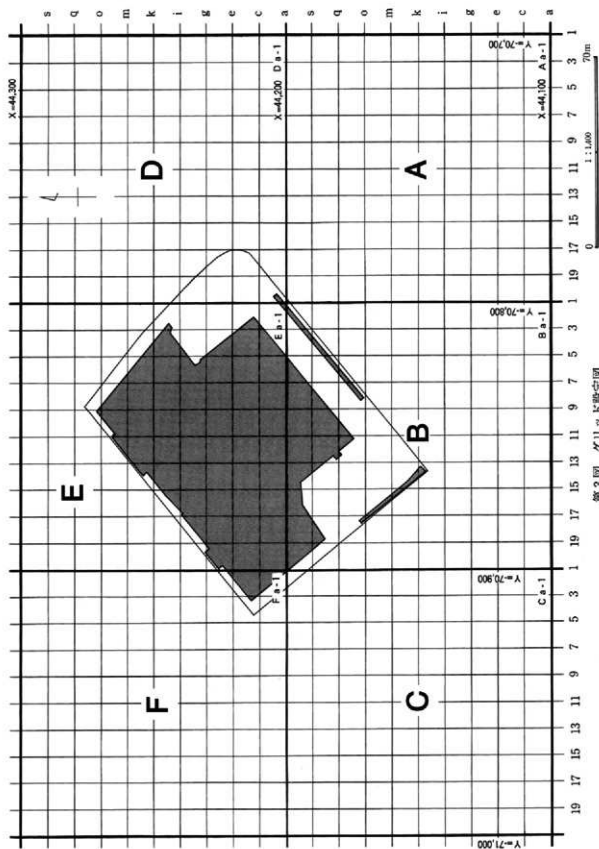
平成14年6月～7月

4日から、6月中に調査を終了させるために作業員25名が増員された。7日には、前橋地建株式会社の下真下氏が滝川の流木処理の打ち合わせに来踏し

た。調査に支障が出ないように、流木の運搬には、調査区の北側の工所用道路を使用することになった。18日には、上毛新聞の記者石垣氏が取材のため来踏した。19日には県警職員4名が来踏し、工所用の看板を南西隅に立てた。20日には、測量会社に委託し、平成14年度調査区（2,500㎡）の空中写真撮影を実施した。24日から重複による埋め戻し作業を開始し、28日に完了した。25日には出土遺物約65箱を事業団へ搬入した。平成14年度の調査では、住居47軒、土坑20基、ピット約30基が検出された。28日にはすべての現場作業を終了した。7月第1週は、図面・写真類の整理等の残務処理、発掘器財・事務用品等の搬出、産業廃棄物の処理等を実施した。第2週には事務所・電気・水道等の撤去が完了した。7月15日に警察本部へ調査区を引き渡した。



第2図 調査区図（1：2,500）



第3図 グリッド設定図

## 第3節 調査の方法

### (1) 調査・整理方法

#### 調査区及びグリッド設定

遺構・遺物の記録保存方法として、グリッド設定による調査方法を基本とした。基準点測量・ベンチマーク設置は平成14年1月に行った。調査区周辺に三角点がないため、基準点測量を行った。使用した基準点は、前橋市の一級及び二級基準点である。観測はGPS測量とし、新点2点設置した。なお、一級は群馬郡群馬町北原752所在の基3 (X45,567.600、Y-72,756.109)、二級は前橋市岩神町三丁目13-15所在の基2 (X44,951.061、Y-69,453.785)と前橋市総社町総社3060所在の基4 (X43,782.440、Y-71,343.486)を使用した。新点は、調査区西を走る産業道路東沿いの調査区北西隅付近に001 (X44,206.910、Y-70,913.737)、調査区南東250m付近に002 (X43,904.798、Y-70,667.308)を設置した。座標値は国家座標区系である。方眼杭は、新点001及び002の座標データを基準に設置した。標高は前橋市下水道築造工事のKBM4-1 (H=121.283)の標高データを基準にBMを設定した。グリッドは国家座標 X44,100、Y-70,700をAa-1を基準に西へ100mごとにA・B・C、北へ100mにA・D、Dから西へ100mごとにD・E・Fとし調査区全域に100mの方眼を設定した。さらに、この100m方眼内を5mごとに西へ1・2・3～20の数字で、北へa・b・c～tのアルファベットを付した。グリッドの呼称は、南東隅の方角杭番号で表した。

#### 調査手順

調査に際しては、表土部分及び攪乱部分については重機による一括掘削を行った。その後は、人力による精査及び小トレンチ調査を行い遺構確認、遺構調査を進め、必要に応じてベルトコンベヤー等も使用した。

#### 実測方法

記録図面類は、住居跡1/20・竈1/10、井戸・土坑は1/20、溝は1/40を基準に作成した。平面図は、平板測量を主な手段としたが、竈・土坑は簡易やり方実測を施した。断面図は1/20を基準に竈は1/10で行い、水糸レベルは標高で記すようにした。その他航空測量による全体図作成や一部の図面は業者委託した。

#### 遺物取り上げ

出土遺物は、遺構を重視し遺構内で取束するように番号を付した。遺構外遺物については、グリッドごとに番号を付した。なお、微細片は出土遺構・出土グリッドを明記し取り上げた。

#### 写真撮影

写真は、各遺構に対し担当職員により撮影した。遺構に対しては遺物出土状態、全景、土層断面等々々撮影し、さらに特徴的な遺物出土状態、土層断面については接写を行った。住居跡等の撮影にはローリングタワー2段組で行った。また、広域にわたる遺構等については業者委託によるラジコンヘリによる撮影も行った。使用した主な機種は、カメラはブローニー版(120)一眼レフ6×7(ペンタックス)、ライカ版(135)一眼レフ35mm(キャノンEOS)。フィルムは、モノクロはKodakTX120ISO400、KodakTX135-36ISO400及びリバーサルはKodachrome36ISO200である。

#### 基本整理

調査途中より、出土遺物の洗浄・注記、図面・写真整理を行い、整理事業段階の省力化を図った。図面写真への番号は事業団資料管理取扱要項に準じて行った。

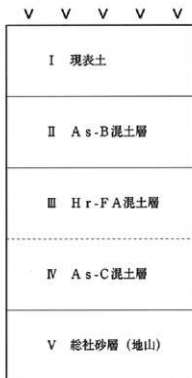
#### 整理方法

実測図・写真・記述の三つの方法を用いて行う。視覚的な方法を主に記述で補足し、わかりやすく、簡潔で、正確な報告書を目指して作業を進めた。

## (2) 基本土層

発掘調査で確認された遺構の時期を決定する上で、その遺構がどのような土層の面で確認されたかが重要な鍵となる。その点では、本遺跡の周辺には浅間山と榛名山の火山活動による噴出物の堆積が見られ、地質学と考古学の両者の研究によって、それらの形成された時期がほぼ明らかにされている。

本遺跡の北東部に設定したEトレンチ（第4節トレンチ調査参照）から観察される地層は、基本的には、大きく二つに分類できる。上位の厚さ1mほどの暗褐色土層と下位に堆積するラミナ（縞目）状の硬く締まった砂とシルトとの互層（総社砂層）である。ここでは上位に堆積する暗褐色土層を模式図に示しておきたい。調査によって確認された土層は、上位から第Ⅰ層：現表土、第Ⅱ層：As-B混土層、第Ⅲ層：Hr-FA（以下FAと略）混土層、第Ⅳ層：As-C混土層、第Ⅴ層：総社砂層（地山）である。昭和60年代まで工場用地、その後群馬県庁の見学者用駐車場として使用していたため、覆土は非常に硬く締まっている。第Ⅰ層の表土は、工場建設に伴う造成のために、重機等で硬く踏み固められている。また、中央部には工場（建物）の基礎部分と砕石・鉄骨廃材・古タイヤなどの産業廃棄物が大量に埋められた攪乱が広がっていた。第Ⅱ層は暗灰色土でAs-B軽石が混じる。第Ⅲ層は暗褐色土でFA軽石が混じる。第Ⅳ層は暗褐色土でAs-C軽石が混じる。第Ⅴ層は地山で総社砂層に対比される層である。第Ⅲ層と第Ⅳ層は分層が困難で、調査時にはⅢ層とⅣ層をあわせて、FA・As-C混土層として扱った。Ⅲ～Ⅴ層は暗灰～暗褐色土と色調が似かよっている。遺構のほとんどがⅢ～Ⅴ層を掘り込み、Ⅲ～Ⅴ層を起源とする土が遺構の覆土となるため、プラン確認は困難を極めた。土層の詳細については、第5章第1節自然科学分析「稲荷塚道東遺跡におけるテフラ分析」を参照されたい。



第4図 基本土層図



基本土層写真（Dトレンチ）



## 第2章 周辺環境

### 第1節 遺跡の立地

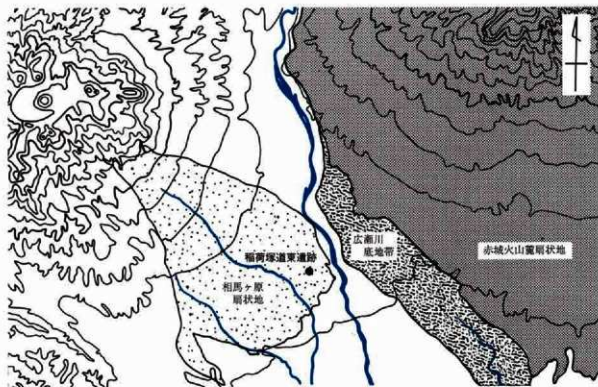
本遺跡は、前橋市中心部から西へ約3kmの前橋市総社町に所在する。標高は約120mである。遺跡地の周囲には主要幹線道路が縦横に走っている。西側には市道大友町西通線（通称、産業道路）、北側約300mには前橋・箕郷線が東西に、南側約1kmには国道17号バイパスが東西に走り、また、約200m東にはJR上越線が南北に走っている。そして、これらの主要幹線道路に沿って市街化が進み、工場や住宅街が遺跡地を取り囲むように立ち並んでいる。榛東村に源を発する八幡川と、江戸時代初期、総社藩主秋元長朝により開削された天狗岩用水が遺跡地の北約150m地点で合流し、滝川と名前を変えた後、遺跡地のすぐ東側を通り、利根川と並行する形でさらに流下していく。

本遺跡は、榛名山東南麓に広がる相馬ヶ原扇状地の扇端が前橋台地に移行する付近に立地する。相馬ヶ原扇状地は、榛名山東南麓に約1.4万年前に形成された扇状地であり、堆積物が岩塊層と基質層の組み合わせからなることから山体崩落に伴う岩屑なだれの堆積物に由来していると考えられている。この堆積物には、粗粒の斜長石と斜方輝石を斑晶として含む灰色の安山岩が多く認められる。その範囲は、標高600m付近を扇頂として、扇端地は標高110m付近に達し、北は渋川市南部から榛東村、吉岡町、箕郷町北東部、群馬町にわたる。この扇状地の傾斜変換線に当たる標高150m前後の地点には各所に湧水点がある。これらの湧水は榛名山の標高260～280m付近（榛東村）に源を持つ。前橋台地は利根川が赤城山と榛名山の山麓の間から関東平野に流れ出した場所に広がる約2万年前に形成された緩斜面の台地である。層位や分布域、含まれる岩石の特徴から、浅間山の山体崩落に由来していることが明らかにされている。この台地は、旧利根川の流域である桃ノ木川と烏川との間に広がる広大な台地面である。台

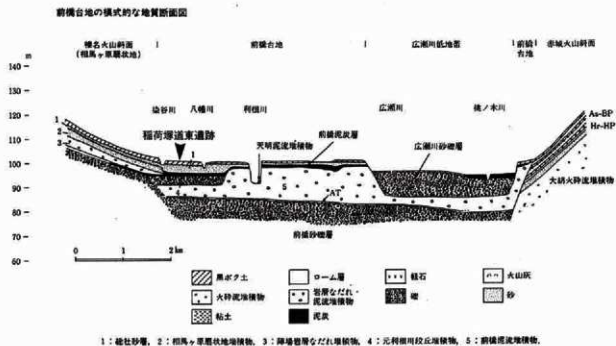
地面は多少の起伏はあるが、ほとんどが平坦地形である。総社砂層は利根川右岸の前橋台地の上位に堆積しており、総社町の市街地がのる扇状地を形成している。相馬ヶ原扇状地上には縄文時代のある時期に堆積した砂層が存在するが、この砂層が総社砂層と連続している可能性が高く、総社砂層は相馬ヶ原扇状地上も含めて幅広く堆積しているのではないかと考えられている。遺跡地の自然科学分析では、相馬ヶ原扇状地堆積物の上層から総社砂層堆積物に対比される可能性が高い水成堆積物層が確認された。また、この厚い水成堆積物の堆積開始時期は、この層の基底から検出されたテフラが約8,200年前に浅間山火山から噴出した浅間扇同軽石（As-F0）に同定される可能性が高いので、約8,000年前と考えられる。相馬ヶ原扇状地堆積物層と総社砂層に対比される層の間には、浅間板鼻黄色軽石（As-Yp、約1.3～1.4万年前）、浅間総社軽石（As-Sj、約1.1万年前）の指標テフラが検出された。本遺跡の総社砂層に対比される層の上面には、下位より浅間C軽石（As-C）、榛二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）、浅間Bテフラ（As-B）などを含む黒褐色土が覆っている。基本土層については、本報告書の第1章第3節（2）基本土層、第5章第1節自然科学分析（I. テフラ分析）を参照されたい。

#### 引用・参考文献

- 2001 『総社川西川遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 1995 『大屋敷遺跡調査』（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）
- 1980 『群馬県史 通史編1』
- 1998 『群馬町誌 資料編1』
- 2001 『群馬町誌 通史編上』



第5図 遺跡周辺の地質図



第6図 地質断面図

## 第2節 周辺の遺跡

今回の調査によって、検出された主な遺構は古墳時代から中近世にかけてであるが、調査区の出土遺物の中には縄文時代早期後半～後期の土器片も若干検出されている。ここでは本遺跡地周辺の歴史的環境を時代別に概観してみたい。

本遺跡周辺は、上野国府跡(9)、上野国分僧寺跡(7)、国分尼寺跡(8)、山王庵寺跡(6)、総社古墳群等周知の遺跡の存在する古代上野国にあっては中核的地域である。

**旧石器時代** 旧石器時代の遺構は、本遺跡周辺では現在まで検出されていない。

**縄文時代** 縄文時代では、早期押型土器を検出した熊野谷遺跡、前期末葉の包含層調査の高井桃ノ木遺跡(50)等があげられる。また、上野国分僧寺・尼寺中間地域(11)や清里長久保遺跡等では、前期の住居跡も検出している。中期になると遺構量が増え、上野国分僧寺・尼寺中間地域を初め、北原遺跡(13)、大屋敷遺跡(5)、沼南遺跡の集落跡のほか、産業道路東遺跡(2)では石囲い炉、長久保大畑遺跡では配石遺構が検出されている。後期では、産業道路西遺跡(3)で石囲い炉が検出されている。本遺跡では縄文時代の遺構は検出されなかったが、早期後半の条痕文系土器片・打製石斧などの石器が数点出土している。

**弥生時代** 弥生時代では、県内平野部で水田跡が検出されている。周辺の遺跡では、中期後半の環濠集落が検出された清里・庚申塚遺跡や後期集落・方形周溝墓の検出された上野国分僧寺・尼寺中間地域がある。弥生時代は、本遺跡周辺では遺物の散布は見られるものの遺構はほとんど検出されていない。本遺跡では弥生時代の遺構は検出されなかったが、2号溝から石鉄1点が出土している。

**古墳時代** 古墳時代では、この地域も上毛野の他地域同様多くの古墳が存在する地域である。本遺跡周辺の総社古墳群には、山王古墳(39)、薬師塚古墳(42)、遠見山古墳(43)、蛇穴山古墳(44)、宝

塔山古墳(45)、大小路山古墳(46)、稲荷山古墳(47)、愛宕山古墳(48)、総社二子山古墳(49)、等が存在する。山王古墳は、榛名山ニッ岳火山灰(FA)の上に構築されており、6世紀初めとされ、当初円墳を構築した後に前方部を構築したことが明らかとなっている。宝塔山古墳は、7世紀後半の方墳で石室は複室横穴式両袖型で、輝石安山岩と角閃石安山岩が使用されており、塗喰が塗布されている。玄室には脚部に格狭間をくり込んだ家形石棺が安置されており、仏教文化の影響が推測されている。蛇穴山古墳は、県内でも最も新しい7世紀末葉の古墳である。

その他の遺構では、元総社西川遺跡(22)で、古墳時代初頭の堅穴住居跡4軒とAs-C直下の畠跡が検出されている。他には、前期の集落跡としては、新保遺跡、熊野堂遺跡、保波田荒神前遺跡、寺屋敷I遺跡、保波田Ⅶ遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域、鳥羽遺跡(10)などがあげられる。古墳時代中期～後期になると、周辺には県内を代表する遺跡が分布する。三ツ寺I遺跡の居館跡は、全国で初めて発見された古墳時代首長層の館である。周辺で発見されたHr-FA下木田、1000軒を超える堅穴住居跡、二子山・八幡塚・薬師塚古墳の三つの前方後円墳を擁する保波田古墳群との関連が指摘され、5世紀中頃から6世紀にかけて、高度な技術力と大量の労働力を駆使してきた巨大な権力者が存在したことを明らかにした。本遺跡では、前期4軒、中期11軒、後期14軒の堅穴住居跡が検出された。

**奈良・平安時代** 本遺跡の西へ1250mには上野国分尼寺、西へ1750mには上野国分寺、北西750mには山王庵寺、南へ750mには上野国府跡、また、南へ1750mには推定東山道(27)が存在し、遺跡地周辺がこの時代の上野国の政治・文化・宗教の中核を担った地域であったことが伺える。そのため、周辺地域には奈良・平安時代の多くの遺跡が発見されている。特に、関越自動車道(新海線)に伴う発掘調

査では、中尾遺跡(29)約250軒、鳥羽遺跡約1000軒、上野国分僧寺・尼寺中間地域約1200軒、国分境遺跡(12)約130軒、北原遺跡約100軒と多数の堅穴住居跡が検出されている。また、前橋市の調査でも、弥勒遺跡(28)、開泉樋南遺跡(34)、総社開泉明神北Ⅱ遺跡(36)、総社甲稲荷塚大道西遺跡(37)などで堅穴住居跡が検出されている。上野国分僧寺は、1980年から史跡の整備保存に伴って県教委が発掘調査し、寺域と主要建物の構成が明らかになった。周辺では、上野国分二寺中間地域(21)、元総社西川遺跡、元総社西川・塚田中原遺跡(23)、国分寺参道遺跡(24)、国府南部遺跡群(25)、塚田村東遺跡(26)などが調査され、築垣で囲まれた寺域とその周辺の様子が研究されている。上野国分尼寺は、確認調査が実施されただけでその全貌は明らかではないが、講堂は調査が実施されている。山王庵寺は、白鳳期に建立され平安時代中期(7世紀後半～11世紀)まで存続した「放光寺」であろうと考えられている。7世紀後半は宝塔山古墳、蛇穴山古墳が築造された時期で、共通の石材加工技術の存在が想定されることから、並行して造営が進められていたことが指摘されている。また、鳥羽遺跡、大屋敷遺跡Ⅲ(5)では、該期の遺跡内の堅穴住居跡の礎に使用したと思われる構築材(凝灰岩)を採掘した痕が多数検出されている。本遺跡でも、49軒の堅穴住居跡、約130基の礎構築材採掘痕群、溝、井戸が検出された。

中世以降 平安時代の末期、国衙役人の力が衰えたといえ、国府周辺は、地方の中心都市であり、軍事的・政治的に重要な位置に置かれていた。周辺遺跡では、鎌倉時代を限定する調査例がなく、中世といっても、大半が室町時代以降のものである。本遺跡の周辺にも、総社城跡(52)、蒼海城跡(53)、石倉城跡(54)、前橋城跡(55)、金尾城跡(56)等の城跡があり、他にも微高地にはいくつもの中世城館が存在していたと思われる。室町時代に入ると、上野守護は上杉氏、守護代は主に長尾氏で戦国時代まで続く。長尾景行(総社長尾氏)は、永享元年

(1429年)に上野国府跡に蒼海城を築き、国府は完全に姿を消す。その後、長尾景行の子忠房は、文明17年(1485年)に現在の利根川右岸に石倉城を築城する。やがて、戦国時代に入ると、強力な戦国大名の成長しなかった上野国は、北条・武田・上杉の戦国大名の争奪の場となり、100余年もの長い間各地で戦乱が続いた。この間、西上州では箕輪城を本城とする長野氏が勢力を伸ばしたが、遺跡周辺の菅谷城、蒼海城は長野氏にとって重要な砦であった。長野氏は最後まで上杉管領体制を守りぬいて、北条、武田の両雄に対抗するが、武田信玄により滅ぼされる。その後は、この地は武田、織田、北条、徳川の重臣が封ぜられる。延徳元年(1489年)には、厩橋城(前橋城)が長野氏によって築造された。厩橋城は、徳川家康が「関東の華」と称した名城で、酒井、松平氏と譜代大名が配置された。戦国の世を経て、江戸時代(17世紀初め)になると秋元長朝が総社城を築き、天狗岩用水を開削し、新田の開発を行った。前述の遠見山古墳はこの総社城の物見台に利用されていた。城跡以外では、上野国分僧寺・尼寺中間地域で寺院跡と推定される溝・土壌墓、元総社西川遺跡では幅6m、深さ2mの大溝が検出されている。本遺跡では、溝1条、数基の土坑が検出された。

## 引用・参考文献

- 2001 『元総社西川遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)  
 2000 『長久保大田・新田入口遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)  
 1997 『前橋城遺跡Ⅰ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)  
 1995 『大屋敷遺跡Ⅲ』(前橋市埋蔵文化財発掘調査団)  
 1987 『下東西遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)  
 1971 『前橋市史』  
 1971 『群馬県古史蹟の研究 上巻』山崎一



第7図 周辺遺跡図 (国土地理院 1 : 25,000 「前橋・渋川」使用)

## 第2章 周辺の環境

第1表 周辺道跡一覧表

No.	道跡名	時代	主な文献	No.	道跡名	時代	主な文献
1	稲刈等道遺跡跡	古墳～中世	本巻古書	29	中尾道跡	古墳～中世	「中尾道跡」 鳥居文事集 1963・1964
2	産養道跡東道跡	縄文前～中	「新橋市史」 新橋市教育委員会 1971	30	牧原道跡	縄文～中世	「元島名目・牧原道跡」 鳥居文事集 1962
3	産養道跡西道跡	縄文前～中	「新橋市史」 新橋市教育委員会 1971	31	草作道跡	縄文～中・近世	「草作道跡」 新橋市史調査報告 1985
4	野間山古墳 (総社町野間部)	古墳	「野間山道跡合編」Ⅰ(東毛編) 群馬県教育委員会 1971	32	元郷社寺町道跡	縄文～中・近世	「元郷社寺町道跡」Ⅰ～Ⅱ 鳥居文事集 1953・1964・1966
5	大原道跡群	縄文中～古墳前 ～中世	「大原道跡群」Ⅰ～Ⅱ 群馬県史調査報告 1993～1996	33	熊倉道跡	奈良・平安	「熊倉道跡群」 群馬県教育委員会 1983
6	山王高寺	奈良～平安	「山王高寺跡発掘調査報告」 群馬県教育委員会 1976～1982	34	熊倉道跡群	古墳～奈良・平安	「熊倉道跡群」 群馬県教育委員会 1986
7	上野国分寺	奈良～	「上野国分寺跡調査報告書」 群馬県教育委員会 1969	35	総社開良明神北道跡	古墳～中・近世	「総社開良明神北道跡」 群馬県教育委員会 1989
8	上野国分寺	奈良～	「上野国分寺跡調査報告書」 群馬県教育委員会 1969・1970	36	総社開良明神北道跡	平安	「総社開良明神北道跡」 群馬県教育委員会 2001
9	上野国分寺東城	奈良～	「熊倉道跡群」 群馬県教育委員会 1983	37	総社寺町稲塚大塚西道跡	平安	「総社寺町稲塚大塚西道跡」 群馬県教育委員会 2001
10	高沼道跡	古墳～中世	「高沼道跡」 鳥居文事集 1986・1988・1989・1992	38	総社寺町稲塚大塚西道跡 東道跡	平安	「総社寺町稲塚大塚西道跡」 群馬県教育委員会 2001
11	上野国分寺中野中 中野道城	縄文中～中・近世	「上野国分寺中野中野中道城」 鳥居文事集 1967～1992	39	山王古墳	古墳後	「野間山道跡合編」Ⅰ(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
12	国分道跡	古墳後～平安	「国分道跡群」 鳥居文事集 1990	40	塚原	古墳	「野間山道跡合編」Ⅰ(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
13	北原道跡	縄文中～奈良 古墳後～平安	「北原道跡」 群馬県教育委員会 1986	41	塚原	古墳	「野間山道跡合編」Ⅰ(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
14	下東道跡	縄文前～中世	「下東道跡」 鳥居文事集 1967	42	藤原道跡	古墳	「野間山道跡合編」Ⅰ(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
15	下東道跡水上道跡	縄文～中・近世	「下東道跡水上道跡」 鳥居文事集 1986	43	湯見山古墳	古墳中	「東田古墳時代の研究」 池島和夫・1994
16	清室所部道跡群 (下東道跡)	古墳・奈良・平安	「清室所部道跡群」 群馬県教育委員会 1986	44	蛇穴山古墳	古墳終	「群馬県史 資料編3」 群馬県教育委員会 1981
17	柿木道跡	縄文～中・近世	「柿木道跡」 群馬県教育委員会 1984	45	宝塚山古墳	古墳終	「群馬県史 資料編3」 群馬県教育委員会 1981
18	国分道跡	古墳後～奈良	「国分道跡」 群馬県教育委員会 1982	46	大小島山古墳	古墳	「野間山道跡合編」Ⅰ(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
19	国分道跡	縄文中～古墳後 ～平安	「国分道跡」 群馬県教育委員会 1986	47	磐石山古墳 (総社町磐石)	古墳	「野間山道跡合編」Ⅰ(東毛編) 群馬県教育委員会 1971
20	国分道跡	縄文中～古墳後 ～平安	「国分道跡」 群馬県教育委員会 1983	48	愛宕山古墳	古墳後	「前橋市総社古墳群の形成過程とその 展開」池島和夫・群馬県史研究第22号
21	上野国分寺中野 中野道城	奈良・平安	「上野国分寺跡・上野国分寺中野 中野道城」 鳥居文事集 1993	49	総社二子山古墳	古墳後	「前橋市総社古墳群の形成過程とその 展開」池島和夫・群馬県史研究第22号
22	元郷社西川道跡	古墳～中世	「元郷社西川道跡」 鳥居文事集 2001	50	高森橋ノ水道跡	縄文前～中世	「高森橋ノ水道跡」 大分町西道跡調査委員会 1989
23	元郷社西川・塚田中 道跡	古墳～中世	「元郷社西川・塚田中道跡」 鳥居文事集 2003	51	新田入口道跡	縄文～中・近世	「真久保大塚道跡・新田入口道跡」 鳥居文事集 2000
24	上野国分寺道跡	古墳～平安	「上野国分寺道跡」 群馬県史調査報告 1987	52	総社城跡	近世	「群馬県古墳群の形成過程とその 展開」山崎一 1971
25	国分南道跡群	古墳後～平安	「国分南道跡群」 群馬県教育委員会 1987	53	釜倉城跡	中世	「群馬県古墳群の形成過程とその 展開」山崎一 1971
26	塚田町道跡	平安	「塚田町道跡調査報告書」 群馬県教育委員会 1986	54	石倉城跡	中世	「群馬県古墳群の形成過程とその 展開」山崎一 1971
27	塚田町山道	奈良～	「塚田町山道」 群馬県教育委員会 1986	55	石倉城跡	縄文～近世	「前橋城跡」Ⅰ 鳥居文事集 1987
28	舟形道跡	古墳・奈良・平安	「舟形道跡」 群馬県史調査報告 1990	56	金尾城(中尾城)	中世	「群馬県古墳群の形成過程とその 展開」山崎一 1971

## 第3章 検出された遺構と遺物

## 第1節 竪穴住居、竪穴状遺構

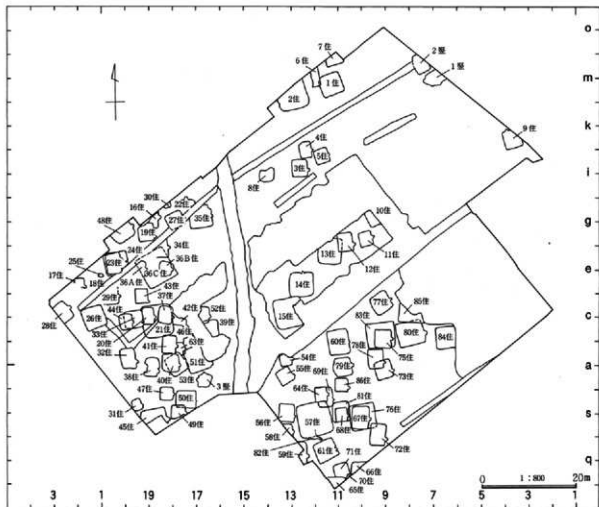
## 竪穴住居、竪穴状遺構の概要

調査により古墳時代前期4軒・中期11軒・後期14軒、8世紀13軒・8世紀末～9世紀初2軒・9世紀10軒・9世紀末～10世紀初1軒・10世紀20軒・10世紀末～11世紀初2軒・11世紀1軒、時期不明6軒、計84軒の竪穴住居が検出された。

このことから、4世紀～11世紀にかけて、本地域には、途切れることなく人々が生活を営んでいたことが明らかとなった。また、古墳時代中期11軒のうち、3軒は竈がなく、残りの8軒には竈が付設される住居であった。本地域の竪穴住居に竈が出現する

社会的な画期を物語る重要な遺構である。検出された竪穴住居は、後世の擾乱や他の住居との重複により遺構の残存が悪いものが多かった。竈は使用面がはっきりしないものが多く、人為的に壊したと思われるものもあった。

また、調査時に竪穴住居跡として認定されなかった、竪穴状遺構3軒も本節で報告したい。3軒は、擾乱などのため削平され残存が悪く、出土遺物も少ないため、遺構の性格が不明なものである。



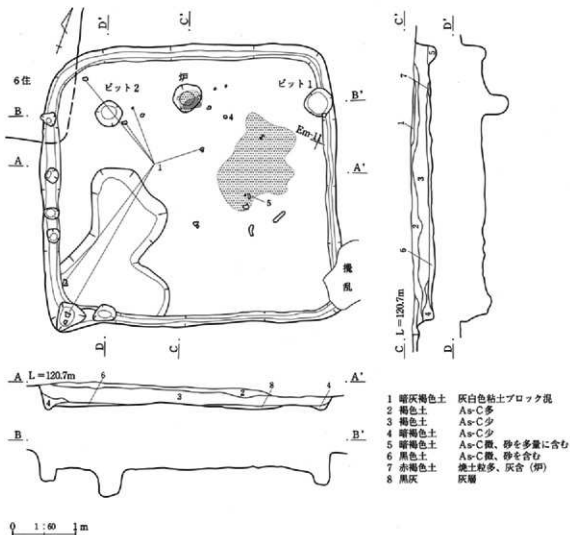
第8図 竪穴住居跡・竪穴状遺構全体図

(1) 竪穴住居

1号住居跡 (第9・10図, P.L2・30)

位置 E1~m-10~11 重複 6号住居と重複している。本遺構が古い。形状 長軸4.8m、短軸4.5mの隅丸方形を呈する。面積 16.88㎡  
 方位 N-69° -E 床面 遺構確認面より22cm掘り込んで床面となる。床面の標高は平均120.15mを測る。東側中央付近に灰・炭化物の分布を確認した。壁溝 幅約18cm、深さ約7cmの壁溝が一周している。凹凸が多く、壁溝内に大小7基のピットが検出された。貯蔵穴 検出されなかった。

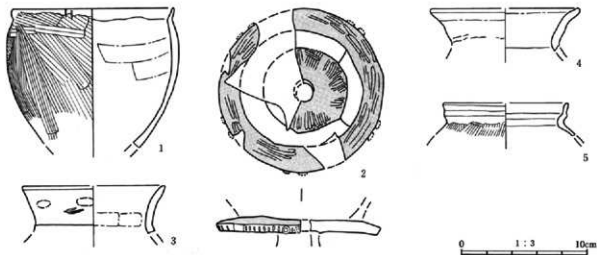
柱穴 柱穴と思われるピットは2基検出された。ピット1は、径48cm・深さ17cm。ピット2は、径42cm・深さ38cmを測る。炉 北側のほぼ中央部に設置。規模は、径48cm・深さ15cmを測る。  
 遺物 土師器鉢、小型壺、S字状口縁台付壺、赤色塗彩のある特殊器台の器受部片が出土している。他に土師器片1.2kg、須恵器片110g出土。所見出土遺物から4世紀中葉と考えられる。



第9図 1号住居跡



第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構



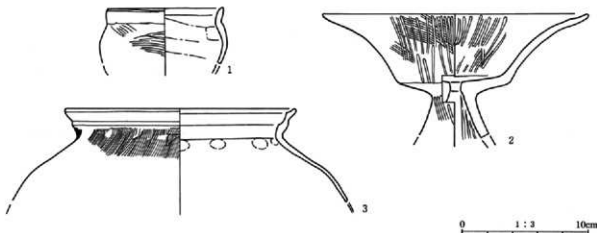
第10図 1号住居跡出土遺物

2号住居跡 (第11・12図、PL 2・30)

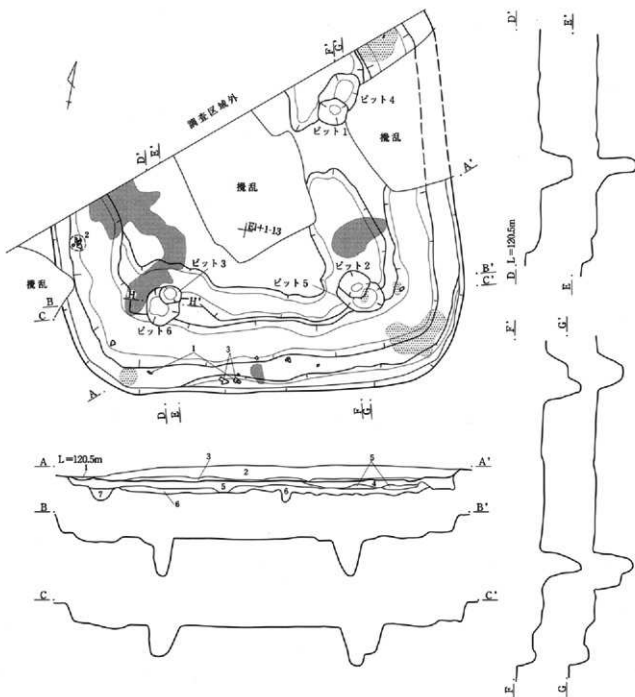
位置 Ek-1-12~13 重複なし。形状 長軸 6.5m、短軸 (5.5)m の隅丸方形。面積 (26.56) m<sup>2</sup>。方位 N-77°-E 床面 遺構確認面より 12cm 掘り込んで床面となる。床面の標高は平均 120.29m を測る。西側中央部に焼土分布、東側・壁溝付近に灰・炭化物の分布を確認した。壁溝 幅約 26cm、深さ約 11cm の壁溝が一周している。

貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 柱穴と思われるピットは 6 基検出された。ピット 1 は、径 48cm・深さ 85cm。ピット 2 は、径 50cm・深さ 91cm。ピット 3 は、径 38cm・深さ 82cm。ピット

4 は、径 74cm・深さ 87cm。ピット 5 は、径 80cm・深さ 70cm。ピット 6 は、径 62cm・深さ 71cm を測る。同じ場所に新旧関係のわかる二つの柱穴が確認されたことから、住居の建て替えが行われた可能性が考えられる。炉 検出されなかった。遺物 土師器高坏、小型壺、S 字状口縁台寛が出土している。他に土師器片 710g、須恵器片 82g 出土。所見 住居の北側は調査区域外で、攪乱も多く、全容は明らかにできなかった。出土遺物から 4 世紀中葉と考えられる。



第11図 2号住居跡出土遺物



- 1 暗褐色土 As-C混、焼土ブロック多
- 2 暗褐色土 As-C含、焼土粒・灰粒混
- 3 黒褐色土 As-C少、粘質土ブロック混、  
灰粒含、炭化
- 4 黒褐色土 As-C少、暗灰褐色シルトブロック多  
灰色ブロック・焼土粒含
- 5 黒褐色土 As-C少、粘質土
- 6 黒褐色土 暗灰褐色シルトブロック含、粘質土
- 7 黒褐色土 As-C少、灰色ブロック・焼土粒少



- ピット6
- 1 暗褐色土 As-C微
  - 2 淡褐色土と黒褐色土の混土
  - 3 暗褐色土 As-C少
  - 4 黄褐色土 黒褐色土を含む
  - 5 暗褐色土 黒褐色土を含む
  - 6 暗褐色土 5層に比之色調明るい

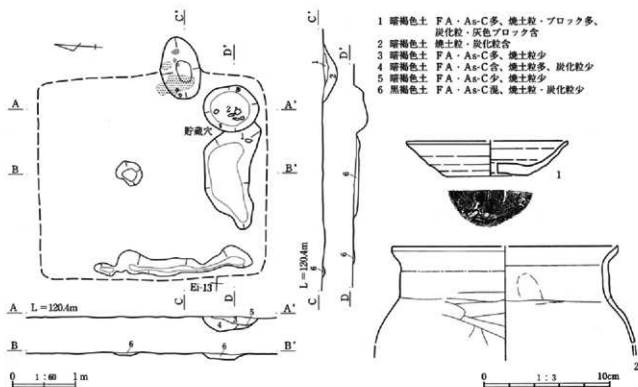
0 1:60 1m

第12図 2号住居跡

## 3号住居跡 (第13図、P L 3・30)

位置 E h ~ i-12 重複なし。形状 長軸 3.6m、短軸3.3mの隅丸方形を呈する。面積 (11.50) m<sup>2</sup> 方位 N-80°-W 床面 攪乱のため床面は検出できなかったため、焼土・炭化物の分布状況から、竈・貯蔵穴を認定し、住居範囲を想定した。掘り方面の標高は平均120.35mを測る。壁溝 幅約 25cm、深さ約 5cm、長さ約 2mの壁溝が西側で検出された。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。径

89cm・深さ22cmの隅丸形を呈する。柱穴 検出されなかった。竈 東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出。燃焼部に焼土粒・炭化物が残っていた。両袖方向 24cm、煙道方向50cmを測る。遺物 貯蔵穴から土師器壺、須恵器片が出土している。他に土師器片 600g、須恵器片40g出土。所見 出土遺物から 9世紀中葉と考えられる。



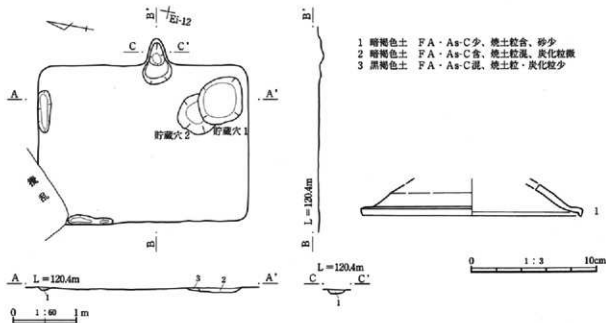
第13図 3号住居跡、出土遺物

## 4号住居跡 (第14図、P L 3・30)

位置 E i ~ j-12 重複なし。形状 長軸 3.4m、短軸2.6mの隅丸長方形を呈する。面積 8.18 m<sup>2</sup> 方位 N-84°-E 床面 攪乱のため床面は検出できなかったため、焼土・炭化物の分布状況から、竈・貯蔵穴を認定し、住居範囲を想定した。掘り方面の標高は平均120.29mを測る。壁溝 幅約 20cm、深さ約 4cm、長さ約70cmの壁溝が北西側と北側で2カ所検出された。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。新旧と思われる2基を検出。貯蔵穴1は

径90cm・深さ11cmの隅丸方形、貯蔵穴2は径 70cm・深さ 8cmの円形を呈する。貯蔵穴1が新しいと考える。柱穴 検出されなかった。竈 東壁面のほぼ中央を掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出。両袖方向14cm、煙道方向38cmを測る。遺物 貯蔵穴から須恵器壺が出土している。他に土師器片170g、須恵器片30g出土。所見 出土遺物から 9世紀と考えられる。

第3章 検出された遺構と遺物

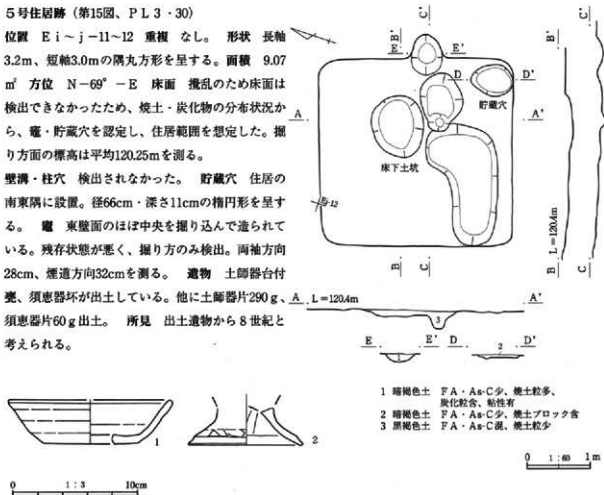


第14図 4号住居跡、出土遺物

5号住居跡 (第15図、PL 3・30)

位置 E i ~ j - 11 ~ 12 重複なし。形状 長軸 3.2m、短軸3.0mの隅丸方形を呈する。面積 9.07 m<sup>2</sup> 方位 N-69° - E 床面 攪乱のため床面は検出できなかったため、焼土・炭化物の分布状況から、竈・貯蔵穴を認定し、住居範囲を想定した。掘り方面の標高は平均120.25mを測る。

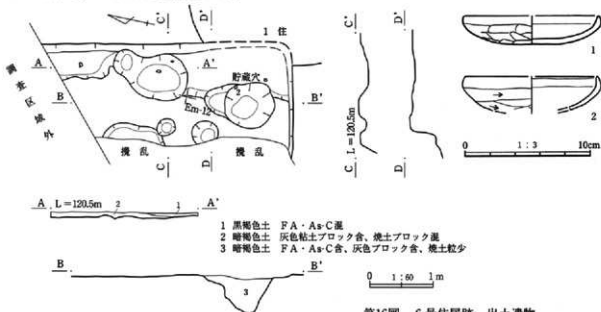
壁溝・柱穴 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。径66cm・深さ11cmの楕円形を呈する。竈 東壁面のほぼ中央を掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出。両袖方向28cm、煙道方向32cmを測る。遺物 土師器台付壺、須恵器帯が出土している。他に土師器片290g、須恵器片60g出土。所見 出土遺物から8世紀と考えられる。



第15図 5号住居跡、出土遺物

## 6号住居跡 (第16回, P.L 3・30)

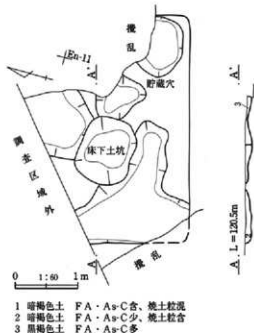
位置 E1~m-11~12 重複 1号住居と重複している。本道構が新しい。形状 長軸(4.2)m、短軸(1.8)mを測る。面積(4.97)m<sup>2</sup> 方位 測定不可能。床面 攪乱のため床面は検出できなかった。掘り方面の標高は平均120.40mを測る。壁溝・竈 検出されなかった。柱穴 検出されなかったが、浅いピットが2基確認された。



第16回 6号住居跡、出土遺物

## 7号住居跡 (第17回, P.L 3)

位置 Em~n-10~11 重複 なし。形状 長軸3.7m、短軸(2.7)mを測る。面積(5.94)m<sup>2</sup> 方位 測定不可能。床面 攪乱のため、確認面は使用面下までおよんでおり、掘り方面しか検出できなかった。掘り方面の標高は平均120.32mを測る。掘り方下層は旧河川砂層。壁溝・柱穴 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東に設置。径94cm・深さ5cmの楕円形を呈する。竈 検出されなかったが、焼土・灰が少量確認されたため、東側に竈は設置されていたと思われる。遺物 掲載遺物はないが、土師器片250gが出土している。所見 住居の北側は調査区域外で、東側・西側は攪乱で壊されており、全容は明らかにできなかった。時期は不明である。



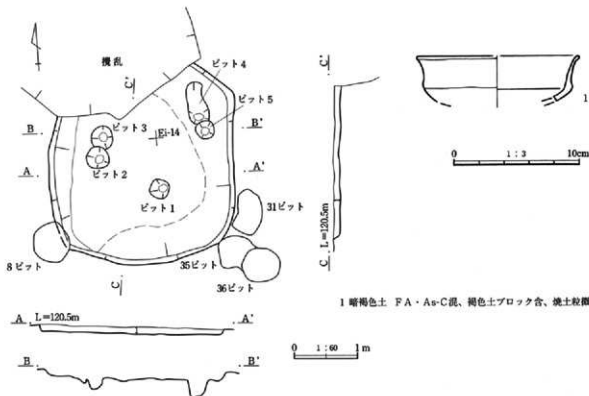
第17回 7号住居跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

#### 8号住居跡 (第18図、P L 3・30)

位置 E h-i-13-14 重複 8号ピットと重複。形状 長軸(3.1)m、短軸3.0mを測る。面積 (6.58) m<sup>2</sup> 方位 測定不可能。床面 遺構確認面から12cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.31mを測る。壁溝・貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 柱穴と思われるピットは5基検出された。ピット1は、径32cm・深さ28cm。ピット2は、径36cm・深さ22cm。ピット3は、径37cm・深さ16cm。ピット4は、長径66cm・深さ

13cm。ピット5は、径31cm・深さ27cmを測る。竈 検出されなかった。調査時、35・36号ピットが竈の可能性があると想定されたが、確証は得られなかった。また、住居の北側が攪乱で壊されており、北竈の可能性も考えられる。遺物 土師器坏が出土している。他に土師器片110g、須恵器片2g出土。所見 住居の北側は攪乱で壊されており、全容は明らかにできなかった。出土遺物から7世紀前半と考えられる。



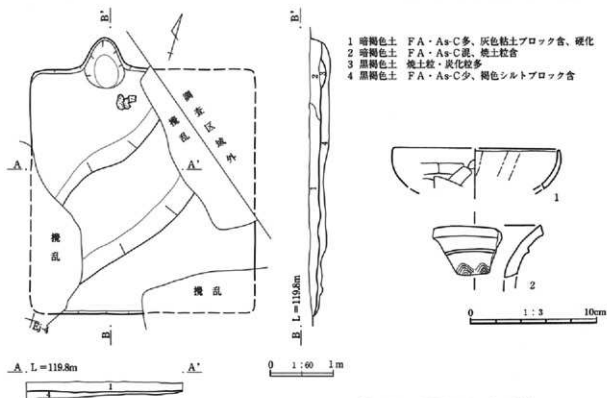
第18図 8号住居跡、出土遺物

#### 9号住居跡 (第19図、P L 3・30)

位置 E j-3~4 重複 なし。形状 長軸4.0m、短軸(3.2)mの隅丸長方形を呈する。面積 (7.96) m<sup>2</sup> 方位 N-16°-W 床面 攪乱のため、確認面は使用面下までおよんでおり、掘り方面しか検出できなかった。掘り方面の標高は平均119.44mを測る。掘り方下層は旧河川砂層。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 北壁面の西寄り掘り込んで造られている。残存状態

が悪く、掘り方のみ検出。袖部・支脚に使用されたと思われる石が3点出土。両袖方向48cm、煙道方向48cmを測る。遺物 土師器坏、須恵器壺が出土している。他に土師器片430g、須恵器片120g出土。所見 住居の北東側は調査区域外で、南東側・南西側は攪乱で壊されており、全容は明らかにできなかった。出土遺物から6~7世紀と考えられる。

第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構

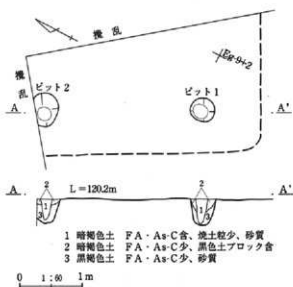


第19図 9号住居跡、出土遺物

10号住居跡 (第20図、P L 4)

位置 E f - g - 9 重複なし。形状 長軸 (3.8) m、短軸 (2.1) m を測る。面積 (6.89) m<sup>2</sup> 方位 測定不可能。床面 確認面は使用面下までおよんでおり、掘り方しか検出できなかった。焼土・炭化物の分布、2基の柱穴から住居の範囲を想定した。掘り方面の標高は平均120.14mを測る。壁溝・貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 柱穴と思われるピットは2基検出された。ピット1は、径40cm・深さ47cm。ピット2は、径54cm・深さ37cmを測る。竈 検出されなかった。

遺物 掲載遺物はないが、土器器片70gが出土している。所見 住居の北側、東側は攪乱で壊されており、全容は明らかにできなかった。時期は不明。



第20図 10号住居跡

11号住居跡 (第21図、P L 4)

位置 E f - 9 ~ 10 重複なし。形状 長軸 (3.0) m、短軸 (2.5) m の隅丸方形を呈する。面積 (7.95) m<sup>2</sup> 方位 N-82° - E 床面 確認面は使用面下のため、掘り方しか検出できな

った。焼土・炭化物の分布から住居の範囲を想定した。掘り方面の標高は平均120.15mを測る。

壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面のほぼ中央を掘り込んで造られている。残存状

### 第3章 検出された遺構と遺物

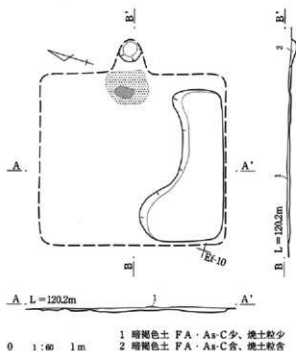
態が悪く、掘り方のみ検出した。両袖方向22cm、煙道方向34cmを測る。遺物 掲載遺物はないが、土師器片20g、須恵器片5gが出土している。

所見 時期不明。

#### 12号住居跡 (第22・23図、P.L4・30)

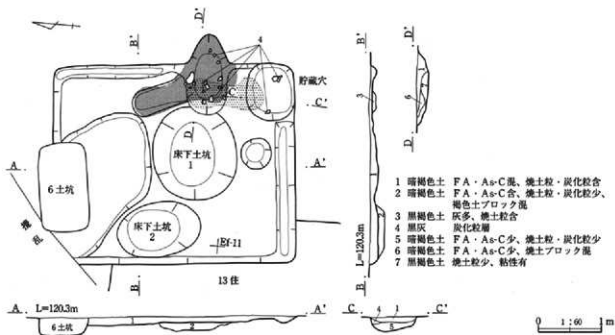
位置 E e ~ f - 10 ~ 11 重複 13号住居と6号土坑と重複。本遺構が6号土坑より古く、13号住居より新しい。形状 長軸3.8m、短軸3.2mの隅丸長方形を呈する。面積 (10.60) m<sup>2</sup> 方位 N-89° - E 床面 遺構確認面から6cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.11mを測る。

壁溝 幅約26cm、深さ約9cm、長さ約2mの壁溝が南側、東側で2カ所検出された。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長径90cm・深さ25cmの長楕円形を呈する。柱穴 検出されなかった。竈 東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出した。燃焼部に焼土粒・炭化物が残っていた。両袖方向42cm、煙道方向62cmを測る。遺物 竈から土師器鉢・甕、貯蔵穴から須恵器坏2点が出土している。他に、土師器片1.81kg、



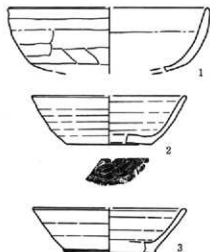
第21図 11号住居跡

須恵器片240gが出土。所見 出土遺物から8世紀後半と考えられる。



第22図 12号住居跡





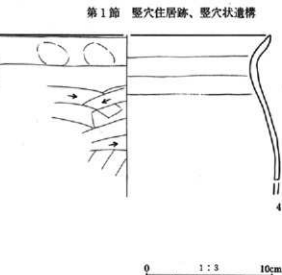
第23図 12号住居跡出土遺物

13号住居跡 (第24・25図、PL 4・30)

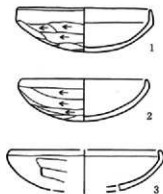
位置 E e ~ f - 10 ~ 11 重複 12号住居と重複。本遺構が古い。形状 長軸5.6m、短軸5.0mの隅丸方形を呈する。面積 (21.38) m<sup>2</sup> 方位 N - 86° - W 床面 遺構確認面から12cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.14mを測る。

壁溝 幅約28cm、深さ約8cmの壁溝が一周している。壁溝から土器片やこも編み石が出土。

貯蔵穴 住居の南東に設置。長径103cm・深さ64cmの楕円形を呈する。柱穴 柱穴と思われるピットは6基検出された。ピット1は、径66cm・深さ78cm。ピット2は、径66cm・深さ75cm。ピット3は、径63cm・深さ42cm。ピット4は、長径

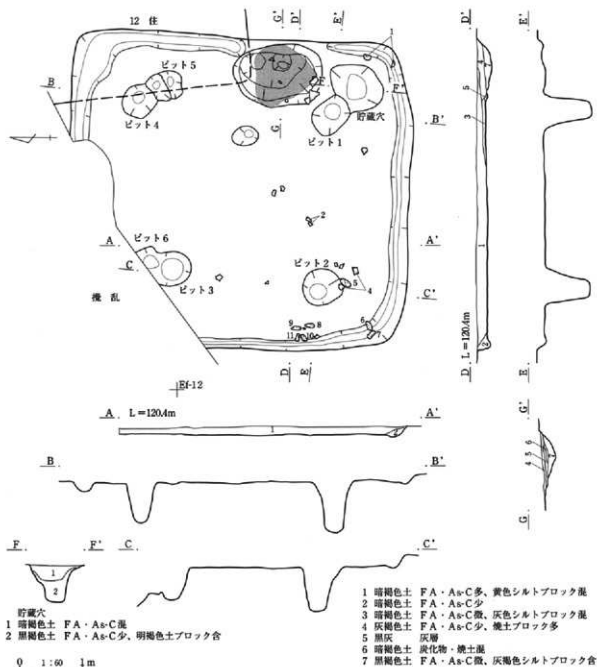


58cm・深さ62cm。ピット5は、径48cm・深さ61cm。ピット6は、径42cm・深さ43cmを測る。ピット4と5、ピット3と6は柱の立て替えと思われる。竈 東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。残存状態が悪く、煙道部は確認できなかった。燃焼部に焼土粒・炭化物が残っていた。両袖方向約95cmを測る。遺物 土師器坏・寛、こも編み石が出土している。他に土師器片5.2kg、須恵器片200g出土。所見 住居の北西側は攪乱で壊されており、全容は明らかにできなかった。出土遺物から7世紀後半と考えられる。



第24図 13号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物



第25図 13号住居跡

14号住居跡 (第26~30図、PL 5・30・31)

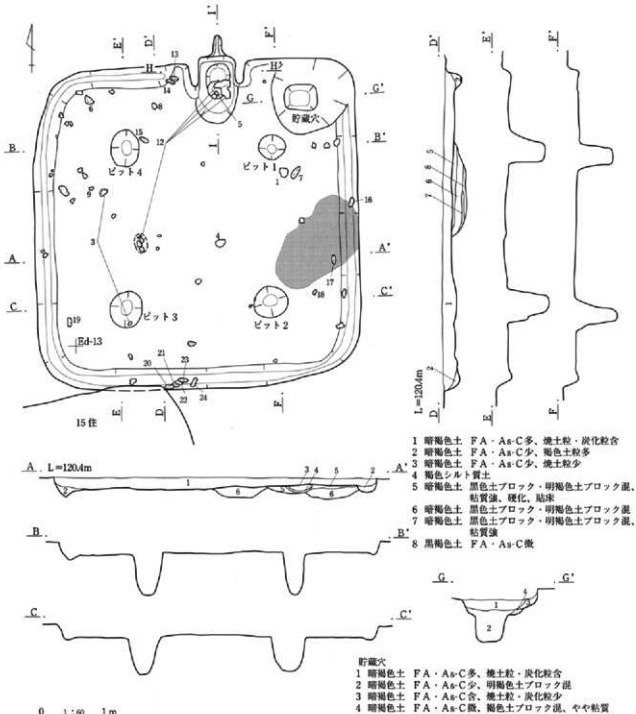
位置 E c - d - 12 ~ 13 重複 15号住居と重複。  
本遺構が古い。形状 長軸5.1m、短軸4.9mの隅  
丸方形を呈する。面積 23.79㎡ 方位 N -  
3° - W (北嚨)、N - 87° - E (東嚨) 床面  
遺構確認面から12cm掘り込んで、床面になる。標高  
は平均120.11mを測る。壁溝 幅約31cm、深さ  
約7cmの壁溝が一周している。壁溝から土器片や  
こもろみ石が出土。貯蔵穴 北嚨の住居の貯蔵穴

は、北東隅に設置。長径110cm・深さ74cmの楕円  
形を呈する。東嚨の住居の貯蔵穴と思われるピット  
5・6は、南東隅に設置。ピット5は径70cm・深  
さ55cmの楕円形、ピット6は径62cm・深さ63cm  
の楕円形を呈する。柱穴 柱穴と思われるピット  
は4基検出された。ピット1は、径42cm・深さ  
66cm。ピット2は、径51cm・深さ53cm。ピット  
3は、径58cm・深さ58cm。ピット4は、径

第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構

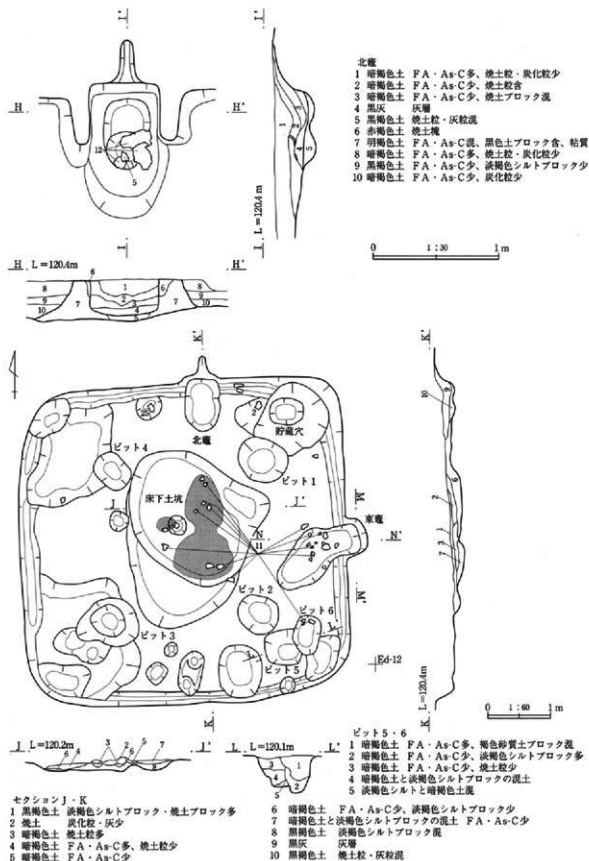
58cm・深さ67cmを測る。北竪 北壁面のはぼ中央を掘り込んで造られている。両袖は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていた。燃烧部内から土師器甕、須恵器坏が出土した。両袖方向60cm、煙道方向100cmを測る。東竪 東壁面のはぼ中央を掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方

のみ検出。燃烧部内から土師器甕が出土した。両袖方向50cm、煙道方向40cmを測る。遺物 土師器坏・皿・甕、須恵器坏・有台坏・高坏・長頸壺、こも編み石が出土。他に土師器片8.89kg、須恵器片1.17kg出土。所見 出土遺物から8世紀前半と考えられる。



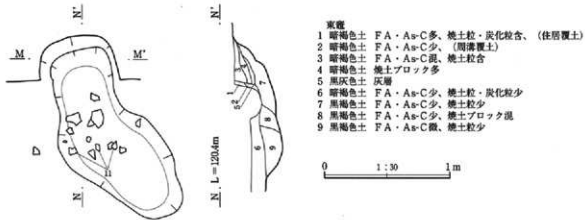
第26図 14号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

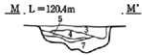


第27図 14号住居跡北廬、掘り方

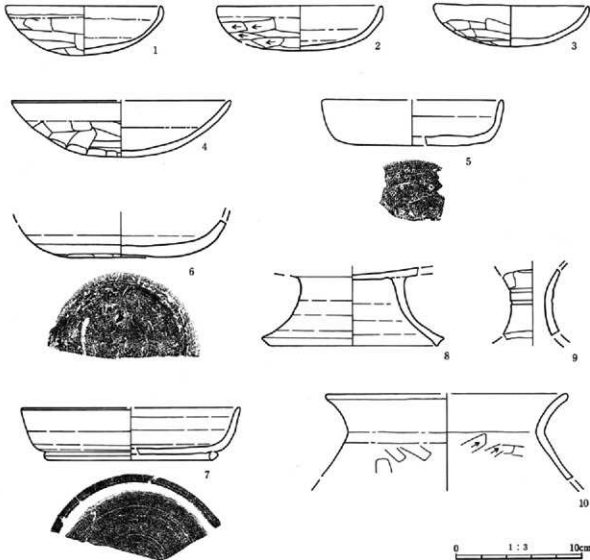
第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構



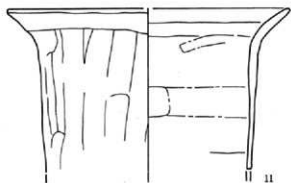
- 東壁
- 1 暗褐色土 FA・As・C多、焼土粒・炭化殻含、(住居覆土)
  - 2 暗褐色土 FA・As・C少、(周溝覆土)
  - 3 暗褐色土 FA・As・C混、焼土粒含
  - 4 暗褐色土 焼土ブロック多
  - 5 黒灰色土 灰層
  - 6 暗褐色土 FA・As・C少、焼土粒・炭化殻少
  - 7 暗褐色土 FA・As・C少、焼土粒少
  - 8 暗褐色土 FA・As・C少、焼土ブロック混
  - 9 暗褐色土 FA・As・C微、焼土粒少



第28図 14号住居跡東壁

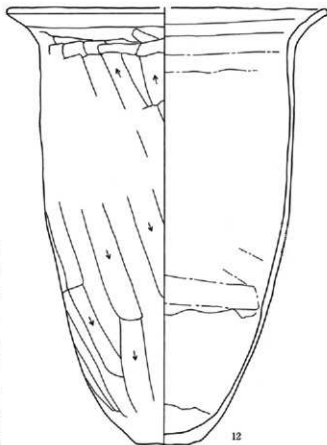


第29図 14号住居跡出土遺物(1)



15号住居跡 (第31~32図、P L 6・31)

位置 E b-c-12~13 重複 14号住居・7・11号土坑と重複。本遺構が14号住居より新しく、7・11号土坑より古い。形状 長軸6.3m、短軸5.9mの隅丸方形を呈する。面積 (29.76) m<sup>2</sup> 方位 N-83°-E 床面 遺構確認面から17cm掘り込んで、床面になる。床面は一部貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。標高は平均120.11mを測る。床面の南半分には炭・炭化物・焼土が多量に分布していた。壁溝幅約24cm、深さ約5cmの壁溝がほぼ一周しているが、レベルが一定せず、凹凸が多い。貯蔵穴 住居の北東隅に設置。径85cm・深さ82cmの円形を呈する。土師器小型甕が出土。柱穴 柱穴と思われるピットは4基検出された。ピット1は、径45cm・深さ68cm。ピット2は、径78cm・深さ53cm。ピット3は、径39cm・深さ59cm。ピット4は、長径55cm・深さ45cmを測る。竈 焼土・炭化物の分布から、東壁面の南寄りに設置してあったと推定されるが、攪乱のため検出できなかった。遺物 須

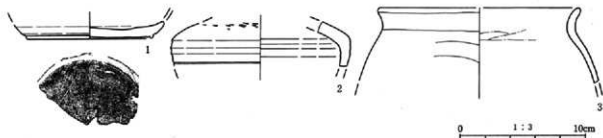


0 1:3 10cm

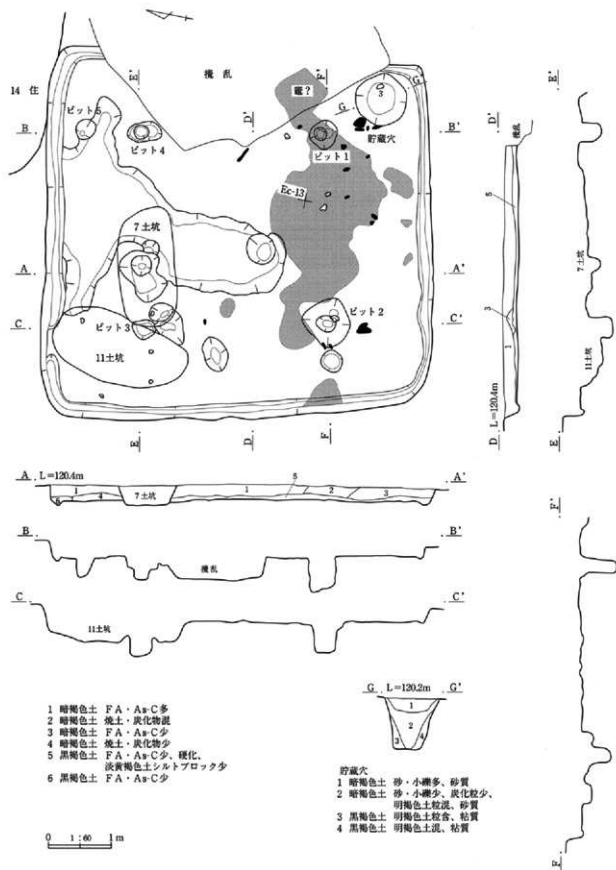
第30図 14号住居跡出土遺物 (2)

恵器有台坏・長頸壺、土師器小型甕が出土している。他に土師器片1.03kg、須恵器片680g出土。

所見 住居の東側は攪乱で壊されており、全容は明らかにできなかった。出土遺物から8世紀中葉と考えられる。



第31図 15号住居跡出土遺物



第32図 15号住居跡

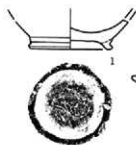
第3章 検出された遺構と遺物

16号住居跡 (第33図、P L 6・31)

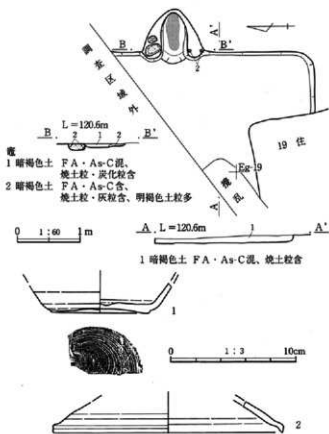
位置 E f ~ g - 18 重複 19号住居と重複。本遺構が古い。形状 長軸 (3.28) m、短軸 (0.98) m。面積 (3.53) m<sup>2</sup> 方位 N-90° 床面 遺構確認面から5cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.44mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面を掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出。左袖部には竈構茶材探掘痕から掘り出されたとと思われる凝灰岩が使用されていた。右袖部内から須恵器壺が出土した。両袖方向32cm、煙道方向76cmを測る。遺物 須恵器壺、蓋が出土している。他に、土師器片210g、須恵器片150gが出土している。所見 住居の半分以上が調査区域外・攪乱のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から8~9世紀と考えられる。

17号住居跡 (第34図、P L 6・31)

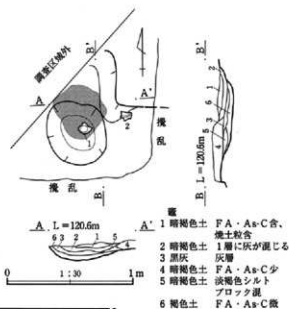
位置 F d - 2 重複 なし。形状 竈のみの検出。面積 測定不可能。方位 N-2° - E 床面 一部分で確認された床面の標高は平均120.40mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 北壁面を掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出。燃焼部には、灰層が確認された。両袖方向 (67) cm、煙道方向 (50) cmを測る。遺物 須恵器壺、羽釜が出土している。他に、土師器片250gが出土している。所見 住居のほとんどが調査区域外・攪乱のため、全容は明らかにできなかった。また、出土遺物から10世紀と考えられる。



第34図 17号住居跡、出土遺物



第33図 16号住居跡、出土遺物

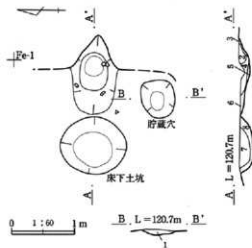




第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構

18号住居跡 (第35図、PL 6)

位置 E d-20~F d-1 重複なし。形状 竪・貯蔵穴・床下土坑のみを検出した。面積 測定不可能。方位 N-89°-W 床面 遺構確認面から5cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.58mを測る。焼土・炭化物の分布から竪・貯蔵穴・床下土坑を確認した。壁溝・柱穴 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。径76cm・深さ8cmの楕円形を呈する。竪 東壁面を掘り込んで造られている。残存状態が悪く、掘り方のみ検出。燃焼部からは土師器片が出土した。両袖方向44cm、煙道方向62cmを測る。遺物 掲載遺物はないが、土師器片250gが出土している。所見 住居のほとんどが攪乱のため、全容は明らかにできなかった。また、出土遺物も少なく、時期は不明。

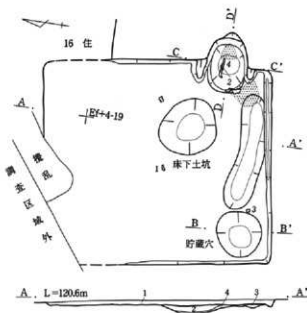


- 1 暗褐色土 FA・As-C少、焼土ブロック混
- 2 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒少
- 3 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒少、褐色ブロック混
- 4 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒・炭化粒含
- 5 黒褐色土 FA・As-C混、焼土粒少、粘質
- 6 暗褐色土 FA・As-C混
- 7 暗褐色土 FA・As-C少、明褐色土ブロック多
- 8 暗褐色土 FA・As-C混、明褐色土粒含

第35図 18号住居跡

19号住居跡 (第36~37図、PL 7・31)

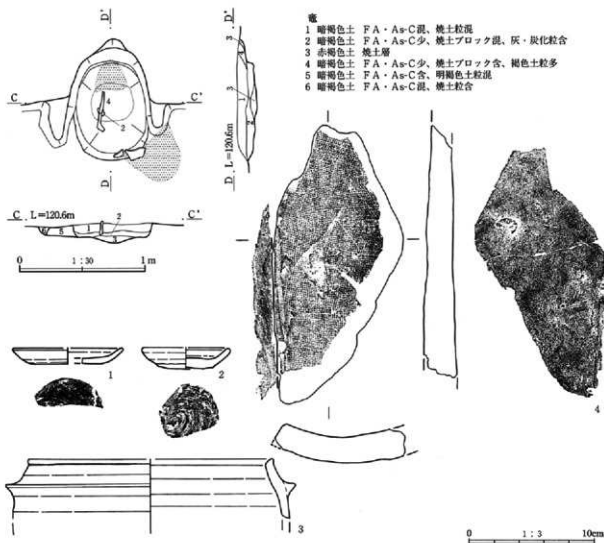
位置 E f-18~19 重複 16号住居と重複。本遺構が新しい。形状 長軸3.7m、短軸3.3mの隅丸方形を呈する。面積 (10.67) m<sup>2</sup> 方位 N-86°-E 床面 遺構確認面から5cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.47mを測る。燃焼部に焼土・炭化物が分布していた。壁溝 幅約10cm、深さ約5cm、長さ1.8mの壁溝が南東で確認された。貯蔵穴 住居の南西隅に設置。径77cm・深さ43cmの楕円形を呈する。柱穴 検出されなかった。竪 東壁面の南寄り掘り込んで造られている。両袖は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていた。燃焼部内から須恵器杯、平瓦が出土した。瓦は天井などの補強に用いられたと思われる。両袖方向70cm、煙道方向76cmを測る。遺物 須恵器皿・杯・羽釜・瓦が出土している。他に、土師器片630g、須恵器片410gが出土している。所見 出土遺物から10世紀末~11世紀初頭と考えられる。



- 1 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒含
  - 2 黒褐色土 FA・As-C混、明褐色土粒含
  - 3 黒褐色土 FA・As-C少、褐色土ブロック含
  - 4 暗褐色土 FA・As-C混、粘質
- 貯蔵穴
- 1 暗褐色土 FA・As-C混、明褐色土粒混
  - 2 暗褐色土 FA・As-C少、明褐色土粒含、粘まりなし
  - 3 暗褐色土 FA・As-C少、明褐色土粒混、炭化粒含
  - 4 暗褐色土 FA・As-C混、明褐色土粒混、やや粘質
  - 5 暗褐色土 明褐色土粒・ブロック混、粘質

第36図 19号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第37図 19号住居跡、出土遺物

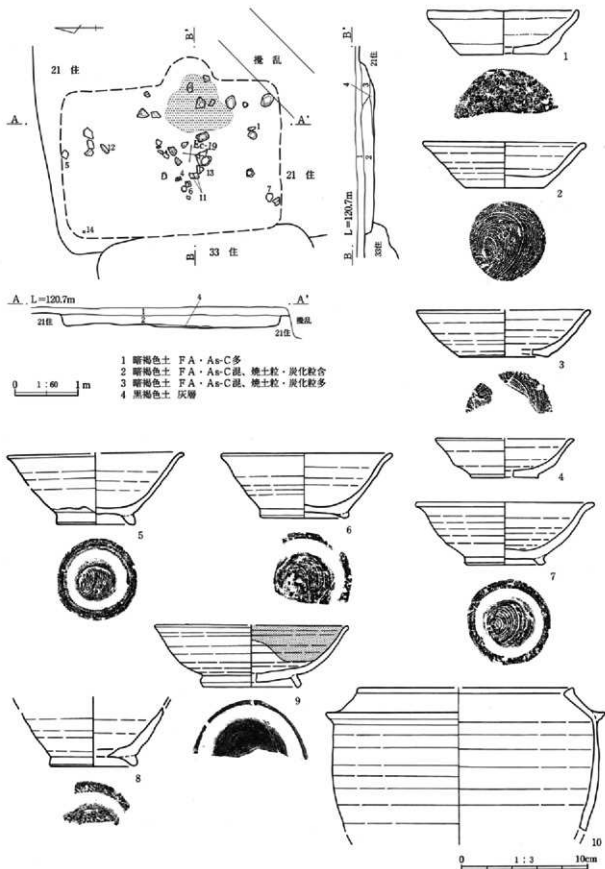
20号住居跡 (第38~39図、P L 7・31・32)

位置 E b-c-18-19 重複 21・33号住居と重複。本遺構が新しい。形状 長軸 (3.6) m、短軸 (2.4) mを測る。面積 (8.19) m<sup>2</sup> 方位 N-83°-E 床面 遺構確認面から25cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.40mを測る。

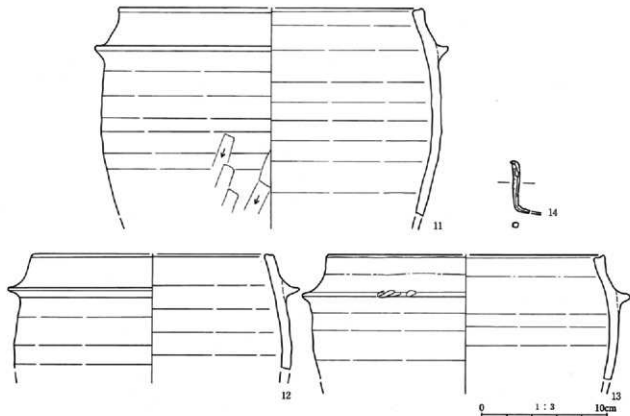
壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面を掘り込んで造られていたと思われる。焼土・炭化物の分布範囲等から竈と確認した。燃焼部の前に灰層が確認され、竈の袖部などの構築材として用いられたと思われる凝灰岩が散乱していた。凝灰岩はいずれも被熱し赤化していた。両袖方向 (70) cm、煙道方向 (28) cmを測る。遺物 土師器坏、

須恵器坏・塊・羽釜、灰釉陶器塊、鉄釘が出土している。他に、土師器片4.65kg、須恵器片1.56kgが出土している。所見 調査時は、21号住居と同時に調査したため、竈のみ検出された。土層断面と遺物の分布・標高から床面を認定し、住居範囲を決定した。出土遺物から10世紀前半と考えられる。

第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構



第38図 20号住居跡、出土遺物(1)



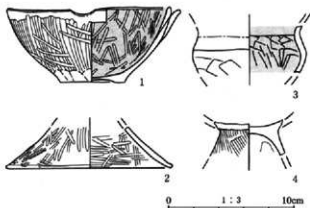
第39図 20号住居跡出土遺物(2)

21号住居跡(第40~41図、PL7・32)

位置 E b ~ c - 17 ~ 19 重複 20・33・37・41・42・46号住居と重複。本遺構が古い。形状 長軸6.8m、短軸6.6mの隅丸方形を呈する。面積 39.00 m<sup>2</sup> 方位 N-7°-W 床面 遺構確認面から40cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.23mを測る。壁溝 幅約20cm、深さ約8cmの壁溝がほぼ一周している。貯蔵穴 住居の南東に設置。径70cm・深さ28cmの楕円形を呈する。完形の片口鉢が1点出土。柱穴 柱穴と思われるピットは4基検出された。ピット1は、径42cm・深さ30cm。ピット2は、径64cm・深さ60cm。ピット3は、径40cm・深さ23cm。ピット4は、径43cm・深さ59cmを測る。炉 検出されなかった。遺物 赤色塗彩のある土師器片口鉢・埴・器台・台付壺が出土している。他に、古墳時代前期の古式土師器の台付壺・壺などの破片1.2kgが出土している。

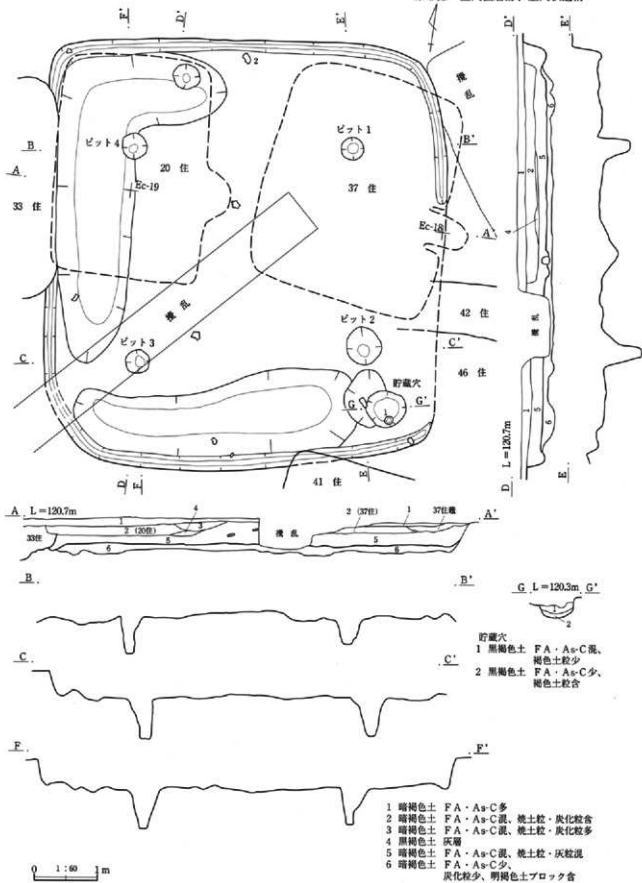
所見 出土遺物から4世紀前半と考えられる。調査時は4世紀、7世紀、9世紀、10世紀の各時代の土

器が出土したため、いくつもの住居の重複が予想された。4世紀前半の本住居を壊して、33号住居(7世紀)、37号住居(9世紀)、20号住居(10世紀)が造られたと考えられる。そのため、古墳時代前期の土器の出土量は多いが、破片資料が多く、掲載できなかった。



第40図 21号住居跡出土遺物

第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構



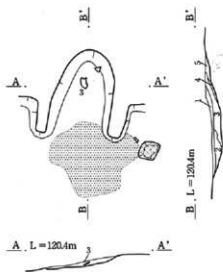
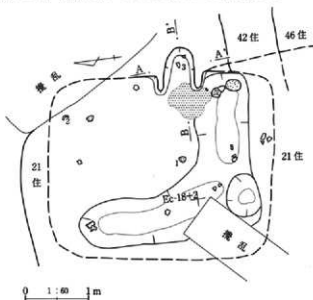
第41図 21号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

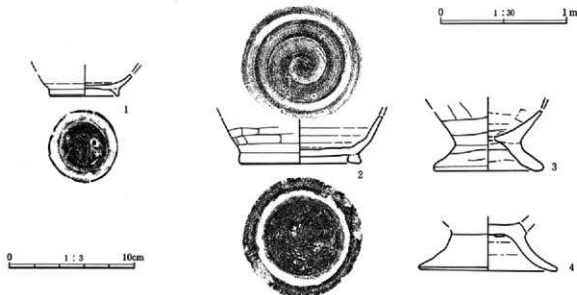
37号住居跡 (第42図、PL 7・35)

位置 E b ~ c - 17 ~ 18 重複 21・42・46号住居と重複。21号住居より本遺構が新しい。42・46号住居と重複関係は不明。形状 長軸(3.6)m、短軸(3.0)mを測る。面積 (10.24) m<sup>2</sup> 方位 N-80° - W 床面 掘り方面の標高は平均120.25mを測る。竈 東壁面を掘り込んで造られている。竈内から土師器台付甕が出土した。燃焼部に灰層が確認され、袖部に用いられたと思われる凝灰岩が出

土した。両袖方向35cm、煙道方向71cmを測る。遺物 土師器台付甕、須恵器碗、長頸壺が出土している。他に、土師器片440g、須恵器片2.03kgが出土。所見 調査時は、21号住居と同時に調査したため、竈のみ検出されたが、掘り方面の調査と出土遺物の分布・標高から住居範囲を認定した。出土遺物から9世紀と考えられる。



- 竈
- |   |      |                    |
|---|------|--------------------|
| 1 | 暗褐色土 | A s - C 混、焼土粒含     |
| 2 | 暗褐色土 | A s - C 少、焼土粒少、灰層含 |
| 3 | 暗褐色土 | A s - C 少、焼土粒・灰粒混  |
| 4 | 暗褐色土 | A s - C 少、焼土ブロック混  |
| 5 | 黒褐色土 | A s - C 混、焼土粒混     |

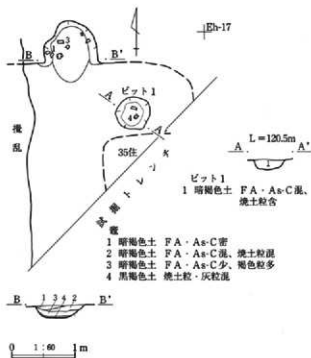


第42図 37号住居跡・竈、出土遺物

## 22号住居跡 (第43図、P L 8・32)

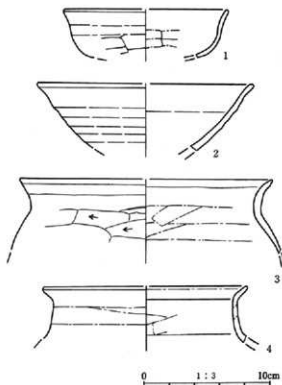
位置 E g-h-17 重複 35号住居と重複。本遺構が新しい。形状 長軸(2.8)m、短軸(2.1)mを測る。面積 (4.76) m<sup>2</sup> 方位 N-2°-W 床面 床面の標高は平均120.38mを測る。

壁溝・貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 ビット1は径55cm・深さ13cmを測り、土師器甕が出土している。竈 北壁面を掘り込んで造られている。



第43図 22号住居跡、出土遺物

残存悪く、焼土・炭化物の分布範囲等から竈と確認した。燃烧部からは土師器坏・甕、凝灰岩が出土している。両袖方向58cm、煙道方向68cmを測る。遺物 土師器坏・甕、須恵器坑が出土している。他に、土師器片290g、須恵器片30gが出土。所見 攪乱や試掘トレンチのため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から9世紀前半と考えられる。

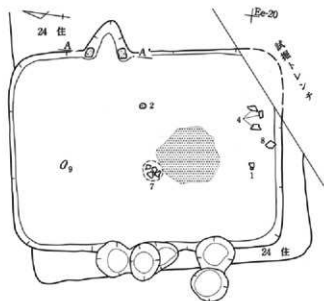


## 23号住居跡 (第44・45図、P L 8・32)

位置 E e-20 重複 24号住居と重複している。本住居が新しい。形状 長軸4.2m、短軸2.9mの隅丸長方形を呈する。面積 (11.74) m<sup>2</sup> 方位 N-87°-E 床面 調査時は24号住居内で竈のみ検出。袖石に用いられた凝灰岩、焼土・灰の分布、出土遺物の広がり等から住居範囲を認定した。床面の標高は平均120.50mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検

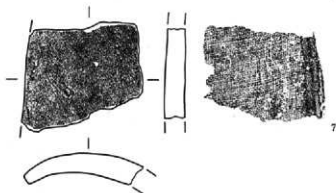
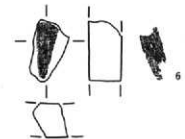
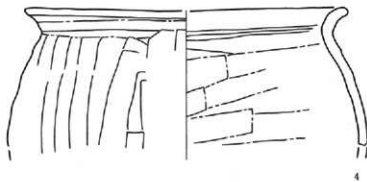
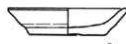
出されなかった。竈 東壁面の北寄りを掘り込んで造られている。左右の袖石に用いられた凝灰岩2点が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向36cm、煙道方向62cmを測る。遺物 須恵器皿・坑、土師器土釜、瓦が出土している。他に、土師器片1.58kg、須恵器250gが出土。所見 出土遺物から10世紀末~11世紀初頭と考えられる。

第3章 検出された遺構と遺物



A. L=120.7m  
3 1 23 A' 庫  
1 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒少  
2 暗褐色土 FA・As-C少、焼土粒微  
3 暗褐色土 FA・As-C微、被熱し赤化

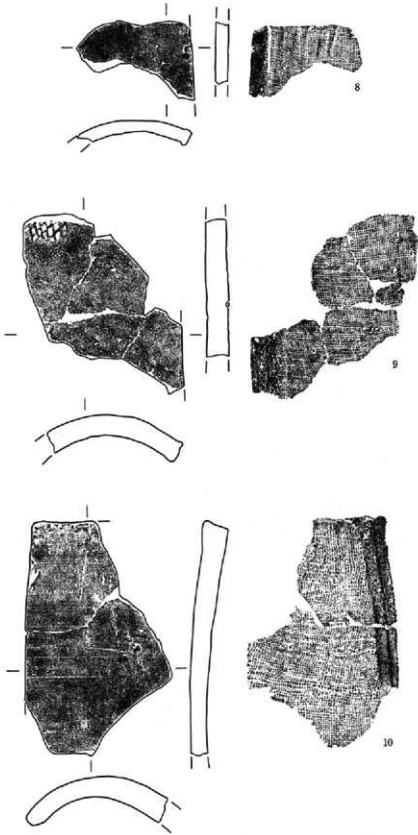
0 1:60 m



0 1:3 10cm

第44図 23号住居跡、出土遺物(1)





0 1:3 10cm

第45図 23号住居跡、出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物

24号住居跡 (第46~48図、P.L.8・32・33)

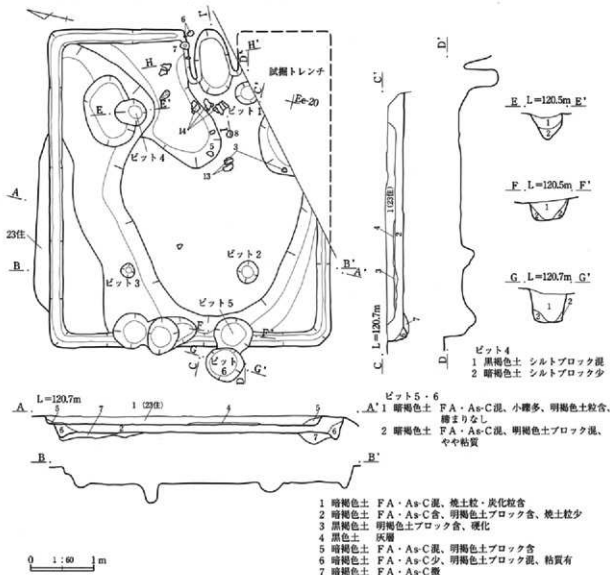
位置 E d - e - 19-20 重複 23号住居と重複している。本住居が古い。形状 長軸5.6m、短軸4.8mの長方形を呈する。面積 (18.61) m<sup>2</sup> 方位 N-78° - E 床面 遺構確認面から26cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.37mを測る。

壁溝 幅約22cm、深さ約5cmの壁溝がほぼ一周している。西側壁溝内に3基のピットを確認。

貯蔵穴 貯蔵穴は、南東隅にあったと思われるが、試掘トレンチによって壊され検出されなかった。

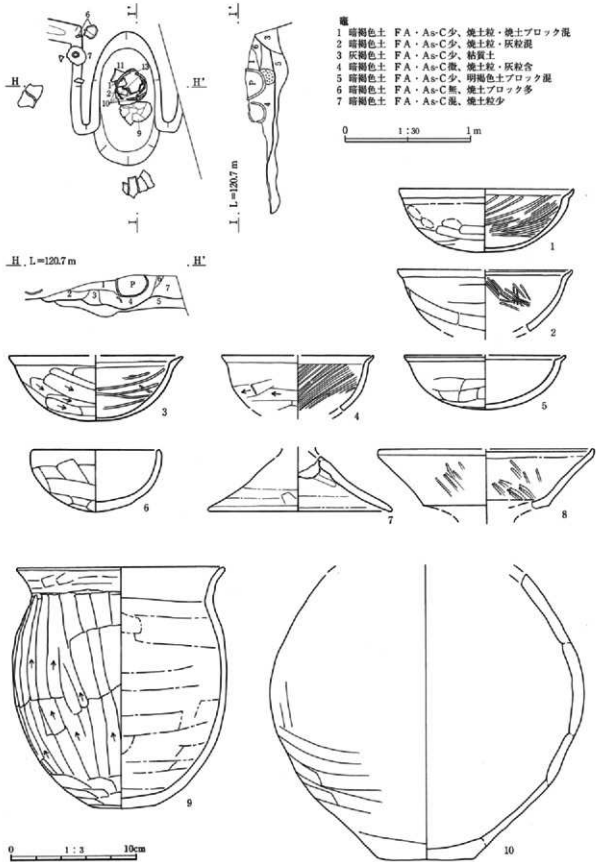
柱穴 柱穴と思われるピットは4基検出された。ピット1は、径36cm・深さ53cm。ピット2は、径

34cm・深さ34cm。ピット3は、径22cm・深さ23cm。ピット4は、径49cm・深さ24cmを測る。竈 東壁面のほぼ中央部を掘り込んで造られている。燃焼部は住居内にあり、袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていた。燃焼部内から土師器杯・壺・瓶が出土した。両袖方向43cm、煙道方向78cmを測る。遺物 土師器杯・鉢・高坏・壺・瓶が出土している。他に、土師器片2.9kg、須恵器片390gが出土。所見 出土遺物から5世紀末~6世紀初頭と考えられる。



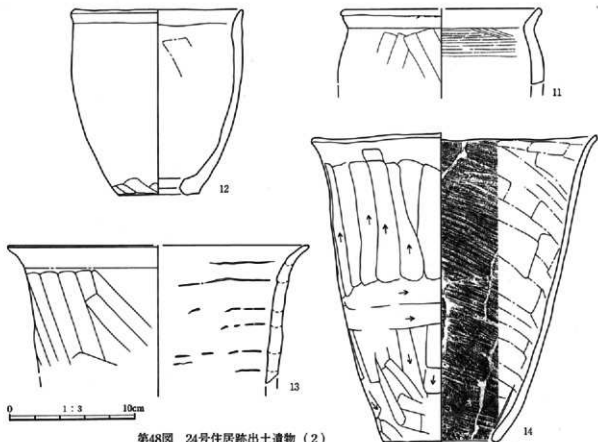
第46図 24号住居跡

第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構



第47図 24号住居跡竪、出土遺物(1)

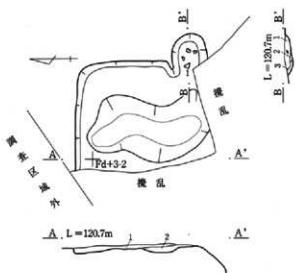
第3章 検出された遺構と遺物



第48図 24号住居跡出土遺物(2)

25号住居跡(第49図、PL 8・33)

位置 E d-1~2 重複なし。形状 長軸(2.2)m、短軸(1.9)mを測る。面積(3.14)m<sup>2</sup> 方位 N-88°-W 床面 遺構確認面から10cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.39mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面を掘り込んで造られている。燃焼部内から土師器台付甕、須恵器壺が出土した。両袖方向34cm、煙道方向64cmを測る。遺物 土師器台付甕、須恵器壺が出土している。他に、土師器片50gが出土。所見 住居の南側・西側は、攪乱や調査区域外のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から9世紀と考えられる。



- 1 暗褐色土 FA・As・C混、褐色土ブロック含
- 2 暗褐色土 FA・As・C少、明褐色土ブロック混

甕

- 1 暗褐色土 FA・As・C含、焼土粒・灰粒混
- 2 赤褐色土 焼熱し赤化、粘質
- 3 暗褐色土 焼熱ブロック・灰粒含、粘質

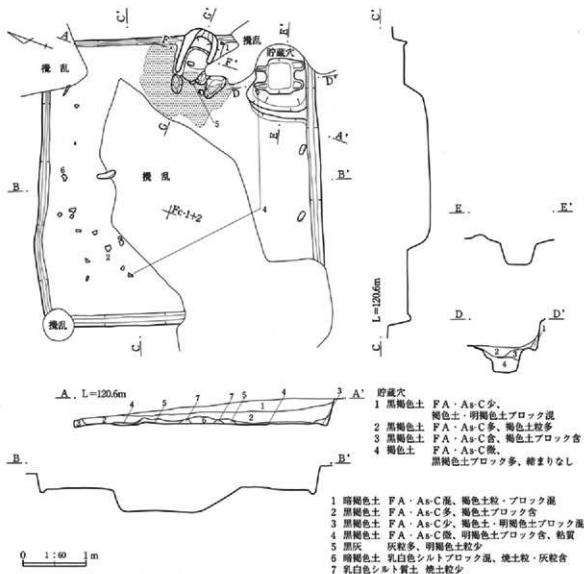


第49図 25号住居跡、出土遺物

## 26号住居跡 (第50・51図, PL 9・33)

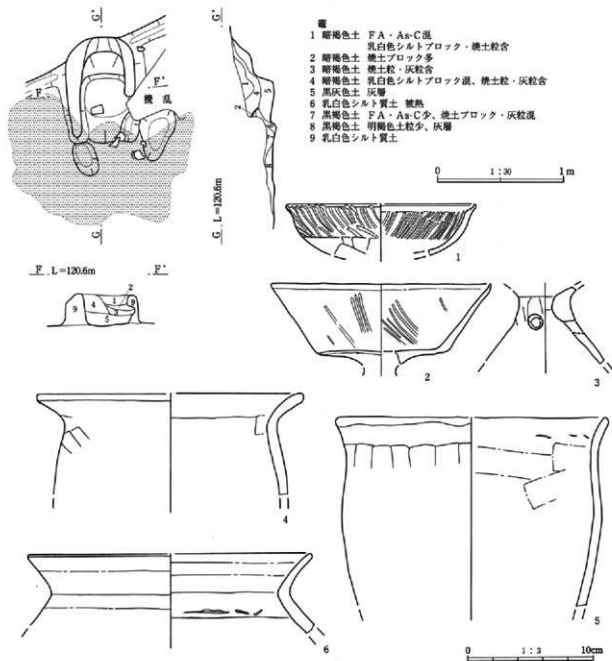
位置 E b-c-20, F b-c-1 重複なし。  
 形状 長軸(4.7)m、短軸(4.6)mの方形を呈する。  
 面積 (11.94) m<sup>2</sup> 方位 N-78°-E  
 床面 遺構確認面から31cm掘り込んで、床面になる。床面は貼床構造で、明褐色ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。標高は平均120.18mを測る。壁溝 幅約16cm、深さ約6cmの壁溝が一周している。貯蔵穴 住居の南東に設置。南側、北側に2つずつ小穴が確認され、板状の蓋をした痕跡と考えられる。長軸55cm・短軸

41cm・深さ42cmの長方形を呈する。柱穴 検出されなかった。竈 東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。燃焼部は住居内にあり、袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていた。竈の前に灰層が広範囲で確認され、燃焼部内から土師器甕が出土した。両袖方向34cm、煙道方向80cmを測る。遺物 土師器杯・高坏・器台・甕が出土している。他に、土師器片2.62kgが出土。所見 住居の西側は、攪乱のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から6世紀前半と考えられる。



第50図 26号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第51図 26号住居跡、出土遺物

27号住居跡 (第52図、P L 9・33)

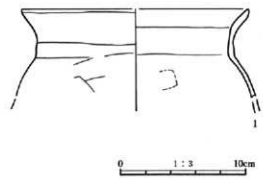
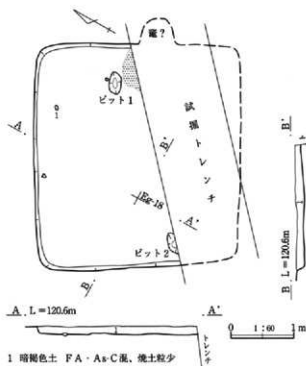
位置 E f ~ g - 17 ~ 18 重複なし。形状 長軸3.6m、短軸 (2.3) mの長方形を呈する。

面積 (6.27) m<sup>2</sup> 方位 測定不可能。床面 遺構確認面から6cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.41mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。ピット1は、径36cm・深さ11cm。ピット2は、径35cm・深さ10cmを測る。ピット

1・2の性格は不明。竈 検出されなかったが、焼土・灰の分布状況から東壁面に設置されていたと思われる。遺物 土師器甕が出土している。

所見 住居の南側は、試掘トレンチのため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から8世紀中葉と考えられる。

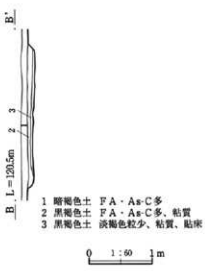
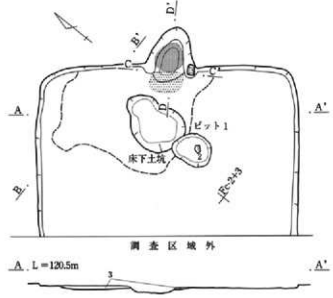
第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構



第52図 27号住居跡、出土遺物

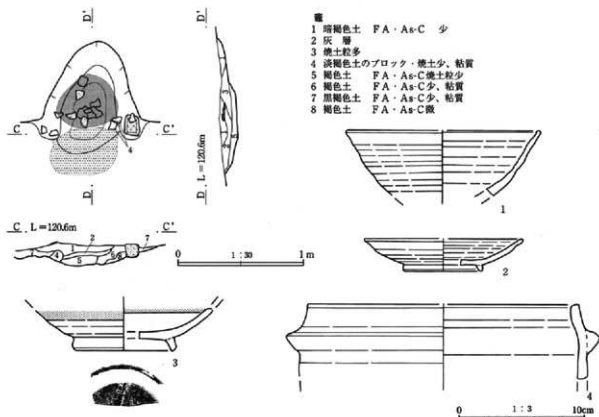
28号住居跡 (第53・54図, PL 9・33)  
 位置 Fb~c-2~3 重複なし。形状 長軸6.2m、短軸(3.9)mの長方形を呈する。  
 面積 (6.27) m<sup>2</sup> 方位 N-58°-E 床面 遺構確認面から7cm掘り込んで、床面になる。北側の床面は貼床構造で、淡褐色粒を含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。その貼床の下からは不定形の床下土坑が確認された。標高は平均120.40m

を測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。  
 竈 東壁面の中央部を掘り込んで造られている。右側の袖部からは袖石に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。また、燃焼部内からは羽釜などを含む土器片が多量に出土した。両袖方向44cm、煙道方向76cmを測る。  
 遺物 灰釉陶器壺、須恵器壺・羽釜が出土している。他に、土師器片1.38kg、須恵器片830gが出土。所見 住居の西側は、調査区域外のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から10世紀前半と考えられる。



第53図 28号住居跡

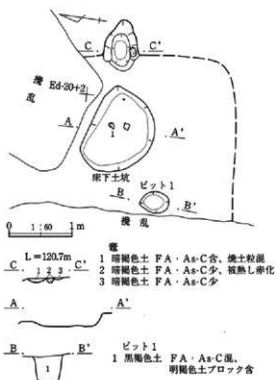
第3章 検出された遺構と遺物



第54図 28号住居跡竈、出土遺物

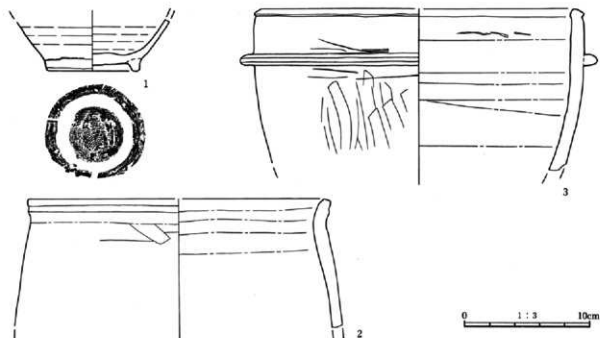
29号住居跡 (第55・56図、P.L.9・33)

位置 E c-20 重複 なし。形状 長軸 (2.5) m、短軸 (2.2) m を測る。面積 (6.36) m<sup>2</sup> 方位 N-83° -E 床面 攪乱のため床面は検出できなかったため、袖石と思われる凝灰岩、焼土・炭化物の分布状況から、竈を認定し、住居範囲を想定した。床下土坑から須恵器碗が出土した。壁溝・貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 柱穴と思われるピット1は、径46cm・深さ44cmを測る。竈 東壁面を掘り込んで造られている。右側の袖部からは袖石に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向30cm、煙道方向62cmを測る。遺物 土師器土釜、須恵器碗・羽釜が出土している。他に、土師器片70g、須恵器片10gが出土。所見 攪乱のため、住居の全容は明らかにできなかった。出土遺物から10世紀後半と考えられる。



第55図 29号住居跡

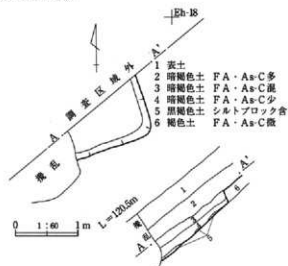




第56図 29号住居跡出土遺物

## 30号住居跡 (第57図、P.L10)

位置 E g-18 重複なし。形状 長軸(1.3)m、短軸(0.8)mを測る。面積(0.73)m<sup>2</sup>  
 方位 測定不可能。床面 遺構確認面から6cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.31mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴・竈 検出されなかった。遺物 土師器片10gが出土している。所見 住居の本体が調査区域外のため全容は明らかにできなかった。時期は不明。



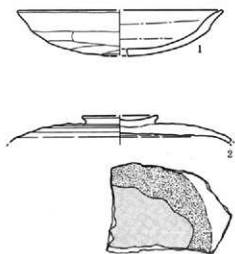
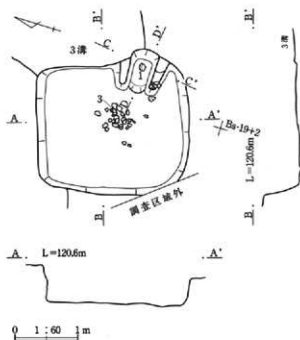
第57図 30号住居跡

## 31号住居跡 (第58図、P.L10・34)

位置 B s-19 重複 3号溝と重複している。本遺構が古い。形状 長軸2.4m、短軸2.4mの隅丸方形を呈する。面積 3.95m<sup>2</sup> 方位 N-71°-E 床面 遺構確認面から52cm掘り込んで、床面になる。床面は貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。標高は平均119.86mを測る。中央部付近から土器片が多量に出土した。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。燃焼部は住居内にあり、袖部は石材ではなく、

粘質土を張り付けて造られていた。竈の前に灰層が確認され、燃焼部内から土師器皿が出土した。両袖方向27cm、煙道方向70cmを測る。遺物 土師器皿・甕、須恵器蓋(朱墨と思われる赤色の残る転用視)が出土している。他に、土師器片1.88kg、須恵器片180gが出土。所見 出土遺物から7世紀後半と考えられる。

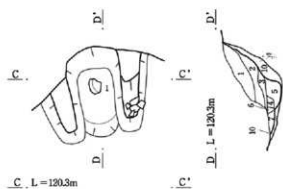
第3章 検出された遺構と遺物



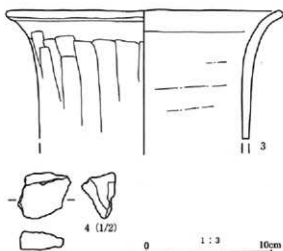
第58図 31号住居跡・竈、出土遺物

32号住居跡 (第59・60図, P L 10・34)

位置 B t・E a-19~20 重複 3号溝と重複している。本遺構が古い。形状 長軸4.3m、短軸3.6mの隅丸長方形を呈する。面積 11.13m<sup>2</sup> 方位 N-77°-E 床面 遺構確認面から43cm掘り込んで、床面になる。床面は貼床構造で、明褐色ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められ

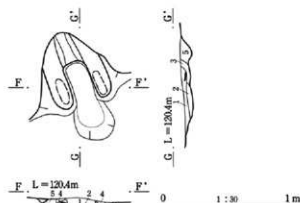


- 竈
- 1 暗褐色土 FA・As-C混
  - 2 暗褐色土 FA・As-C混、焼土ブロック混
  - 3 黒灰 灰層
  - 4 灰褐色土 砂質
  - 5 暗褐色土 FA・As-C少、焼土粒・灰粒含
  - 6 明褐色土ブロック
  - 7 黒褐色土 FA・As-C微、焼土粒含
  - 8 暗褐色土 FA・As-C微、灰ブロック・焼土ブロック混
  - 9 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒含、灰色粘土ブロック混
  - 10 暗褐色土 FA・As-C含、焼土粒少、明褐色土粒含

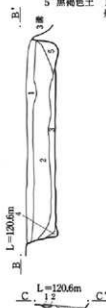
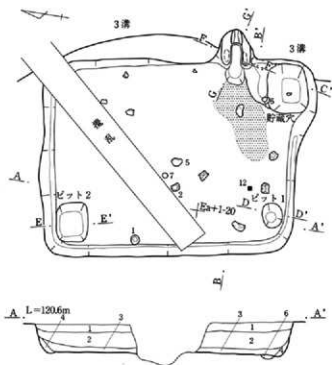


ていた。標高は平均120.03mを測る。壁溝 幅約8cm、深さ約5cmの壁溝が南側・西側・北側を巡っている。貯蔵穴 住居の南東に設置。長軸59cm・短軸48cm・深さ26cmの長方形を呈する。柱穴 柱穴と思われるピットは2基検出された。ピット1は、径40cm・深さ22cm。ピット2は、径

64cm・深さ29cmを測る。竈 東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。竈上面を3号溝によって壊されており、残存が悪い。住居内からは袖石に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向46cm、煙道方向63cmを測る。遺物 土師器甕、須恵器坏・埴・皿・蓋、灰釉陶器皿、鉄製紡錘車が出土している。他に、土師器片1.57kg、須恵器片1.25kgが出土。所見 出土遺物から9世紀後半と考えられる。



- 竈
- 1 黒褐色土 焼土ブロック・灰粒混
  - 2 黒灰 灰層
  - 3 暗褐色土 FA・As-C少、焼土ブロック含
  - 4 黄褐色土 シルトブロック
  - 5 黒褐色土 FA・As-C混、黒色土ブロック含、焼土粒少、粘質



- 貯蔵穴
- 1 黒色土 灰層
  - 2 赤褐色土 焼土ブロック
  - 3 暗褐色土 焼土粒・灰粒混
  - 4 黒褐色土 FA・As-C少、黄褐色土粒

- 1 黒褐色土 FA・As-C多
- 2 黒褐色土 FA・As-C混
- 3 黒褐色土 FA・As-C混、炭化粒含、粘質
- 4 暗褐色土 黄褐色土ブロック多
- 5 黒褐色土 FA・As-C混、凝灰岩混
- 6 暗褐色土 FA・As-C含、黄褐色土粒混

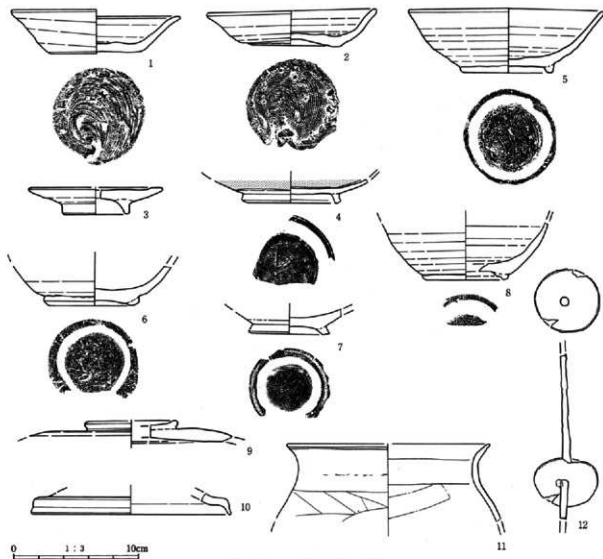


- ピット1
- 1 暗褐色土 FA・As-C少、小礫含、締まりなし
  - 2 暗褐色土 FA・As-C含、黄褐色土粒混
  - 3 暗褐色土 FA・As-C含、黄褐色土ブロック混

- ピット2
- 1 暗褐色土 黄褐色土粒ブロック少
  - 2 暗褐色土 黄褐色土ブロック多



第59図 32号住居跡・竈



第60図 32号住居跡出土遺物

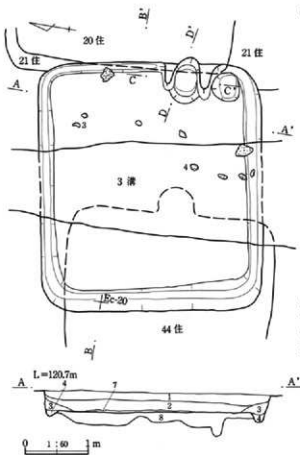
33号住居跡 (第61図、P L10・34)

位置 E b ~ c - 19 ~ 20 重複 20・21・44号住居、3号溝と重複している。本遺構が20・44号住居、3号溝より古く、21号住居より新しい。形状 長軸4.1m、短軸3.6mの隅丸方形を呈する。

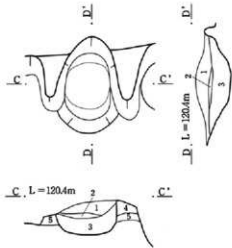
面積 12.46㎡ 方位 N-88° - E 床面 遺構確認面から24cm掘り込んで、床面になる。床面は貼床構造で、明褐色土粒を含む暗褐色粘質土で固く踏み固められていた。標高は平均120.30mを測る。壁溝 幅約28cm、深さ約12cmの壁溝が一周している。貯蔵穴 住居の南東に設置。径44cm・深さ60cmの楕円形を呈する。柱穴 検出されなかった。竈 東壁面の南寄りを掘り込んで造られてい

る。竈上面を20号住居によって壊されており、残存が悪い。燃烧部は住居内にあり、袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。両袖方向36cm、煙道方向60cmを測る。遺物 土器器坏6点(内完形2点)・小型甕1点・赤色顔料の付着した埴1点が出土している。埴は覆土からの出土で、21号住居(4世紀)からの混入遺物と思われる。他に、土器器片740g、須恵器片380gが出土。所見 本住居は、上面を20・44号住居、3号溝によって壊されていたが、床面(掘り方面)の深度が深かったため、比較的残存が良好であった。出土遺物から7世紀中葉と考えられる。

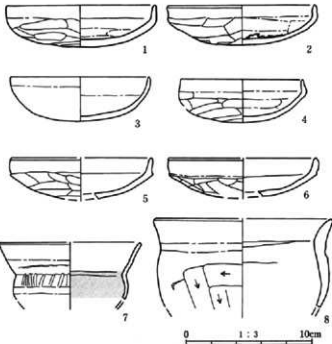
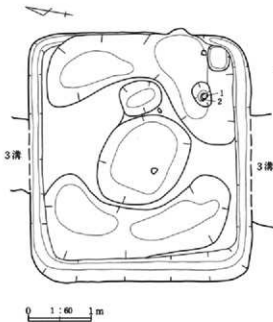
第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構



- 1 暗褐色土 FA・As-C多
- 2 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒少
- 3 暗褐色土 FA・As-C混、明褐色土ブロック混
- 4 暗褐色土 FA・As-C混、明褐色土ブロック混
- 5 暗褐色土 FA・As-C混、炭化粒多
- 6 暗褐色土 FA・As-C少、明褐色土粒少
- 7 暗褐色土 FA・As-C少、明褐色土粒・焼土粒含
- 8 暗褐色土 FA・As-C少、明褐色土多
- 9 暗褐色土 FA・As-C混、明褐色土・炭化粒混
- 10 暗褐色土 FA・As-C混、明褐色土含



- 竪
- 1 暗褐色土 FA・As-C含、焼土粒・炭化粒混
  - 2 黒灰 灰層
  - 3 暗褐色土 FA・As-C少、焼土粒・炭化粒混
  - 4 暗褐色土 FA・As-C少、明褐色土ブロック混、粘質
  - 5 暗褐色土 FA・As-C混、明褐色土ブロック、灰褐色粘質土ブロック混



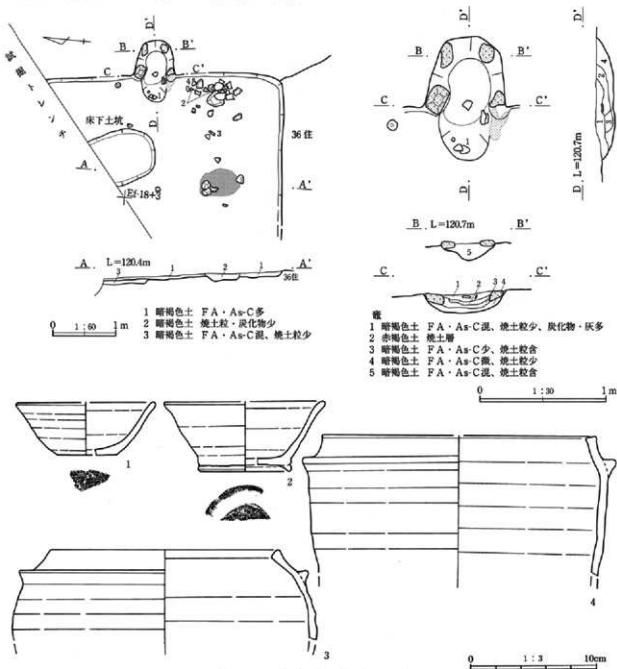
第61図 33住居跡・竪・掘り方、出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

34号住居跡 (第62図、P.L12・34)

位置 E e ~ f-18 重複 36号住居と重複している。本住居が新しい。形状 長軸 (3.9) m、短軸 (2.3) m を測る。面積 (7.01) m<sup>2</sup> 方位 N-84°-E 床面 遺構確認面から3cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.25mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面を掘り込んで造られている。竈には竈構築材採掘痕から掘り出されたとと思われる凝灰岩が4点袖

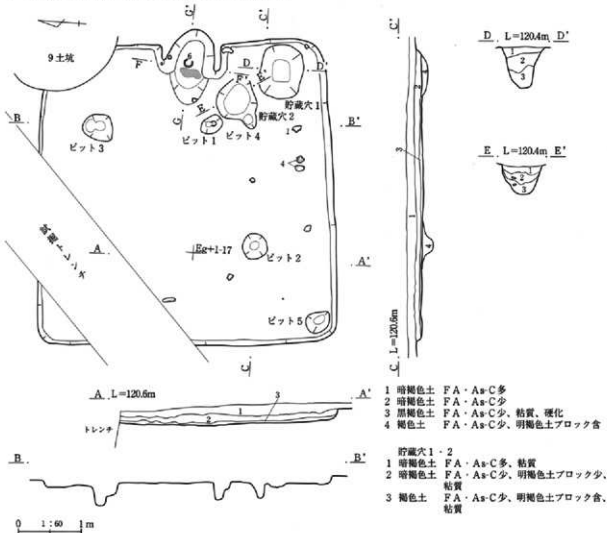
石・煙道部の構築材として使用されていた。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向30cm、煙道方向60cmを測る。遺物 須恵器坏・埴・羽釜が出土している。他に、土師器片580g、須恵器片1.05kgが出土。所見 試掘トレンチのため、住居の全容は明らかにできなかった。出土遺物から10世紀中葉～後葉と考えられる。



## 35号住居跡 (第63・64図、P.L11・34)

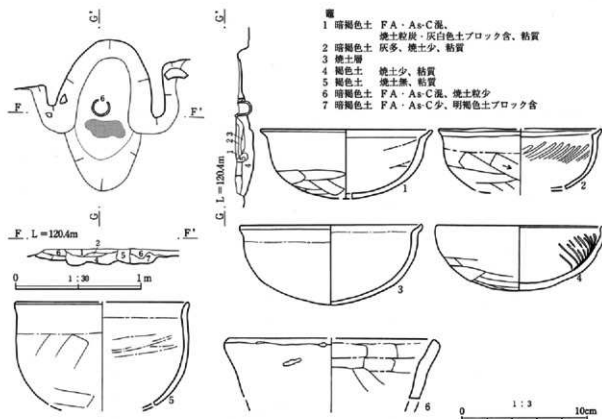
位置 Ef-g-16~17 重複 9号土坑と重複している。本住居が古い。形状 長軸4.8m、短軸4.0mの隅丸方形を呈する。面積 (17.06) m<sup>2</sup>  
 方位 N-85° - E 床面 遺構確認面から17cm掘り込んで、床面になる。床面は貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。標高は平均120.29mを測る。壁溝 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東に設置。貯蔵穴1は長軸92cm・短軸68cm、深さ64cmの楕円形、貯蔵穴2は径68cm・深さ37cmの楕円形を呈する。貯蔵穴2から土師器片・鉢が出土した。柱穴 柱穴と思われるピットは4基検出された。ピット1は、径36cm・深さ29cm。ピット2は、径

38cm・深さ30cm。ピット3は、径47cm・深さ38cm。ピット4は、径24cm・深さ22cmを測る。竈 東壁面の中央部を掘り込んで造られている。削平され残存悪いが、燃焼部は住居内にあり、袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。支脚石は検出されなかったが、燃焼部中央から土師器片が出土した。両袖方向40cm、煙道方向74cmを測る 遺物 土師器片・鉢が出土している。他に、土師器片1.12kg、須恵器片10gが出土。所見 試掘トレンチのため、住居の全容は明らかにできなかった。出土遺物から5世紀末~6世紀初頭と考えられる。



第63図 35号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



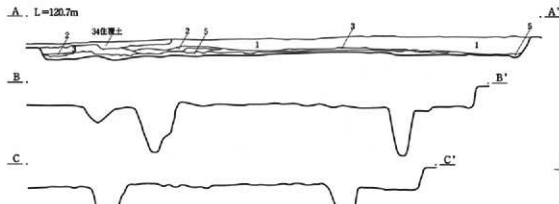
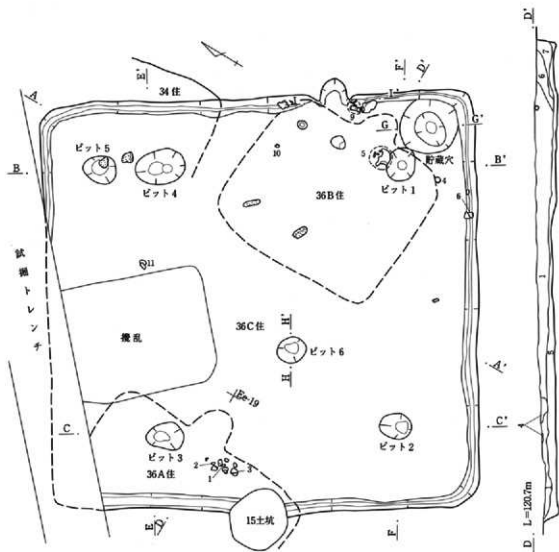
- 1 暗褐色土 FA・As-C混、  
 焼土殻灰・灰白色土ブロック含、粘質  
 2 暗褐色土 灰多、焼土少、粘質  
 3 焼土層  
 4 褐色土 焼土少、粘質  
 5 褐色土 焼土層、粘質  
 6 暗褐色土 FA・As-C混、焼土殻少  
 7 暗褐色土 FA・As-C少、明褐色土ブロック含

第64図 35号住居跡竈、出土遺物

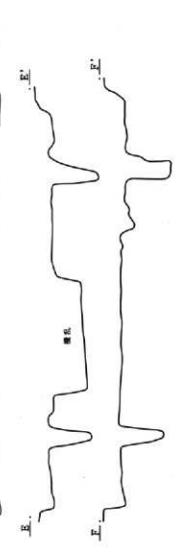
36A・B・C号住居跡 (第65図、P L12・34・35)  
 位置 Ed-e-17~19 重複 34号住居、15号土  
 坑と重複。本住居が古い。形状 長軸7.1m、短  
 軸6.8mの隅丸方形を呈する。面積 (35.60) m<sup>2</sup>  
 方位 N-58°-E 床面 遺構確認面から30cm  
 掘り込んで、床面になる。床面は一部貼床構造で、  
 明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固  
 められていた。標高は平均120.18mを測る。壁溝  
 幅約20cm、深さ約6cmの壁溝が一周している。  
 貯蔵穴 住居の南東に設置。貯蔵穴は長軸92cm・  
 短軸78cmの楕円形を呈する。柱穴 柱穴と思わ  
 れるピットは4基検出された。ピット1は、径  
 52cm・深さ68cm。ピット2は、径51cm・深さ  
 56cm。ピット3は、径60cm・深さ67cm。ピット  
 4は、径80cm・深さ72cmを測る。性格不明なピ  
 ット5は、径56cm・深さ22cm。ピット6は、径  
 50cm・深さ15cmを測る。竈 (36C住) 東壁面  
 の南寄り掘り込んで造られている。削平され残存

悪いが、袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて  
 造られていたと思われる。支脚石は検出されなかつ  
 たが、右袖部から土師器甕が出土。両袖方向34cm、  
 煙道方向42cmを測る。遺物 土師器坏・甕、須  
 恵器坏・羽釜、石製紡錘車が出土している。1~3  
 の羽釜は36A住、4の須恵器坏・5の土師器甕は36  
 B住、他は36C住の出土遺物。他に、土師器片  
 440g、須恵器片2.0kgが出土。所見 出土遺物か  
 ら36C住居は5世紀末~6世紀初頭、36B住居は9  
 世紀、36A住居は10世紀と考えられる。36C住居を  
 壊して、9世紀と10世紀の住居が造られたと考えら  
 れる。調査時、4・5の遺物が出た周辺には焼  
 土・灰が分布し、竈の構築材と思われる凝灰岩も出  
 土した。また、1~3の遺物出土付近にも焼土・灰  
 が確認できた。それぞれ36B・A住居の竈と思われ  
 るため、破線で住居範囲を想定した。

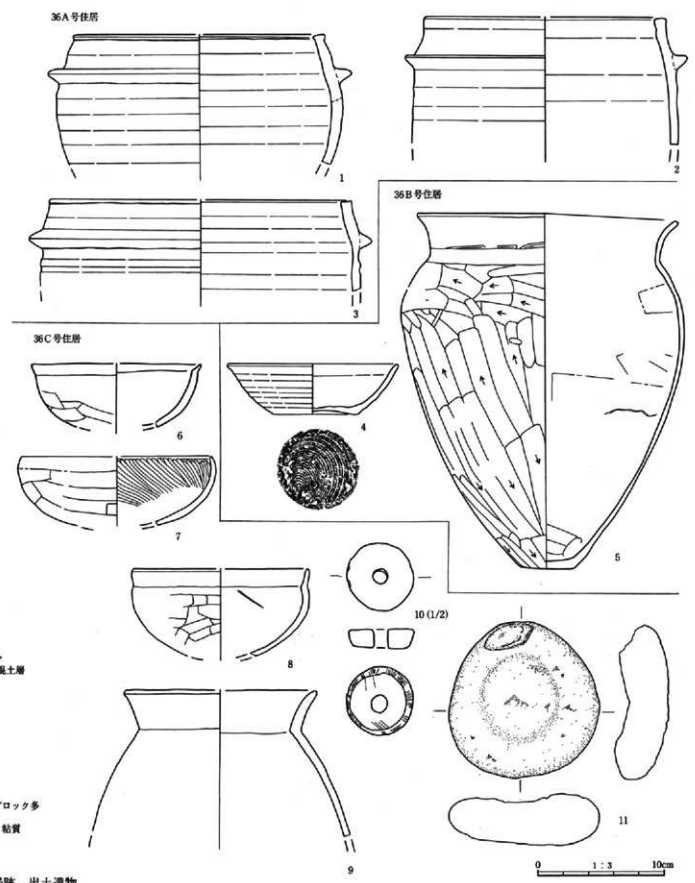




- 1 暗褐色土 FA・AsC多、  
黒褐色土 F.A・AsC混、  
2 黒褐色土 FA・AsC混、  
3 黒褐色土 FA・AsC混、  
4 暗褐色土 炭土粒・炭化物含  
5 褐色土 FA・AsC混  
6 暗褐色土 炭土粒・炭化物多  
7 暗褐色土 炭土粒・炭化物含
- ピット6  
1 暗褐色土 FA・AsC混、明褐色土含  
2 暗褐色土 FA・AsC混、明褐色土多



- 井  
1 褐色土 FA・AsC少  
2 赤褐色土 焼土多、灰少  
3 暗褐色土 FA・AsC多、  
4 暗褐色土 FA・AsC多  
5 暗褐色土 FA・AsC少、  
6 暗褐色土 FA・AsC少、



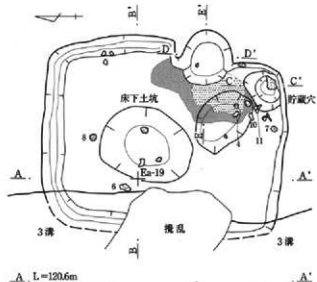
第65図 36A・B・C号住居跡、出土遺物



38号住居跡 (第66・67図、P L11・35)

位置 B t・E a-18~19 重複 3号溝と重複している。本遺構が古い。形状 長軸4.1m、短軸3.2mの隅丸長方形を呈する。面積 (8.97) m<sup>2</sup> 方位 N-90° 床面 遺構確認面から33cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.06mを測る。床面は一部貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。中央部に長軸150cm・短軸110cm・深さ約32cmの床下土坑を検出した。壁溝 幅約26cm、深さ約5cmの壁溝が北側を巡っている。壁溝は南側では検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東に設置されている。径

72cm・深さ25cmの隅円形を呈する。柱穴 検出されなかった。竈 東壁面の南寄り掘り込んで造られている。住居内からは袖土に用いられたと思われる凝灰岩が出土しており、袖部等の構築材として用いられていたと思われる。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向50cm、煙道方向65cmを測る。遺物 土師器甕、須恵器杯・塊、灰袖陶器塊が出土している。他に、土師器片1.9kg、須恵器片2.2kgが出土。所見 出土遺物から9世紀末~10世紀初頭と考えられる。

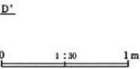
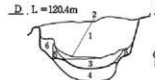
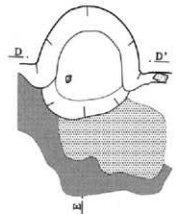


- 竈
- 1 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒多
  - 2 暗褐色土 灰層、焼土粒含
  - 3 暗褐色土 焼土ブロック混、褐色粘質ブロック含
  - 4 暗褐色土 FA・As-C混、明褐色土粒含、焼土粒・灰粒混、締まりなし
  - 5 暗褐色土 FA・As-C少、焼土粒少、粘性有
  - 6 暗褐色土 FA・As-C混、明褐色土ブロック含、焼土粒少
  - 7 暗褐色土 灰色、灰層、焼土粒少
  - 8 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒少、明褐色土粒含
  - 9 暗褐色土 FA・As-C少、焼土粒・灰化物混
  - 10 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒少、明褐色土粒混

- 1 暗褐色土 FA・As-C多
- 2 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒含、褐色土ブロック混
- 3 黒褐色土 FA・As-C少、明褐色土粒含、粘質、硬化
- 4 暗褐色土 FA・As-C混、明褐色土粒含
- 5 黒褐色土 FA・As-C混、粘質
- 6 暗褐色土 明褐色土粒多、締まりなし
- 7 暗褐色土 明褐色土ブロック混
- 8 暗褐色土 FA・As-C含、明褐色土粒・焼土粒含
- 9 黄褐色土 黒色土ブロックを層状に含む (床下土坑)
- 10 黒色土 粘性有、9層に混じる土 (床下土坑)

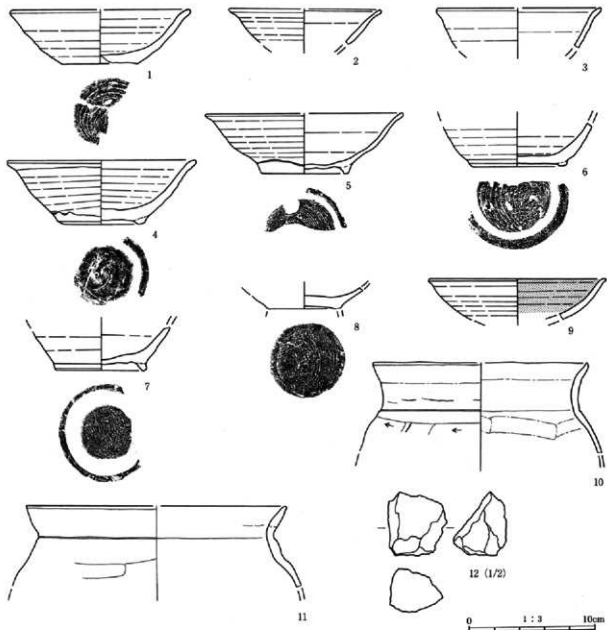


- 貯蔵穴
- 1 暗褐色土 FA・As-C少、明褐色土粒少、焼土粒含
  - 2 黒灰 灰多、焼土粒含
  - 3 暗褐色土 FA・As-C混、明褐色土粒含、焼土粒少



第66図 38号住居跡・竈

第3章 検出された遺構と遺物



第67図 38号住居跡出土遺物

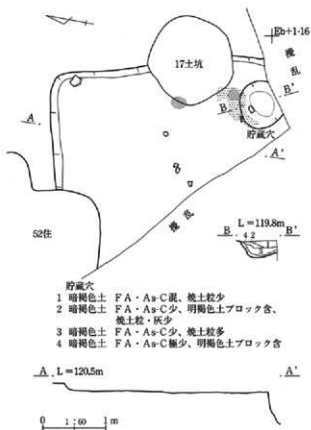
39号住居跡 (第68図、P L11・35・36)

位置 E b-16 重複 52号住居、17号土坑と重複している。本住居が古い。形状 長軸(3.8)m、短軸(2.8)mを測る。面積 (6.51)m<sup>2</sup> 方位 (N-88°-E) 床面 遺構確認面から12cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.25mを測る。

壁溝・柱穴 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東に設置。径78cm・深さ27cmの楕円形を呈する。

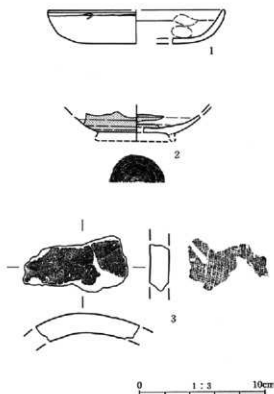
竈 17号土坑に壊され、検出できなかった。焼土・灰の分布状況から竈は東壁面の南寄り

に設置されていたと思われる。遺物 土師器坏、灰軸陶器坑、丸瓦が出土している。他に、土師器片790g、須恵器片540gが出土。所見 住居の半分以上が攪乱や他の遺構に壊され、全容は明らかにできなかった。また、出土遺物も少なく、時期は不明。



第68図 39号住居跡、出土遺物

第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構



40号住居跡 (第69・70図、P L 13・36)

位置 B t・E a-17~18 重複 53号住居と重複している。本住居が新しい。形状 長軸3.8m、短軸3.5mの隅丸方形を呈する。面積 11.46㎡ 方位 N-89°-E 床面 遺構確認面から34cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.03mを測る。床面は一部貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。

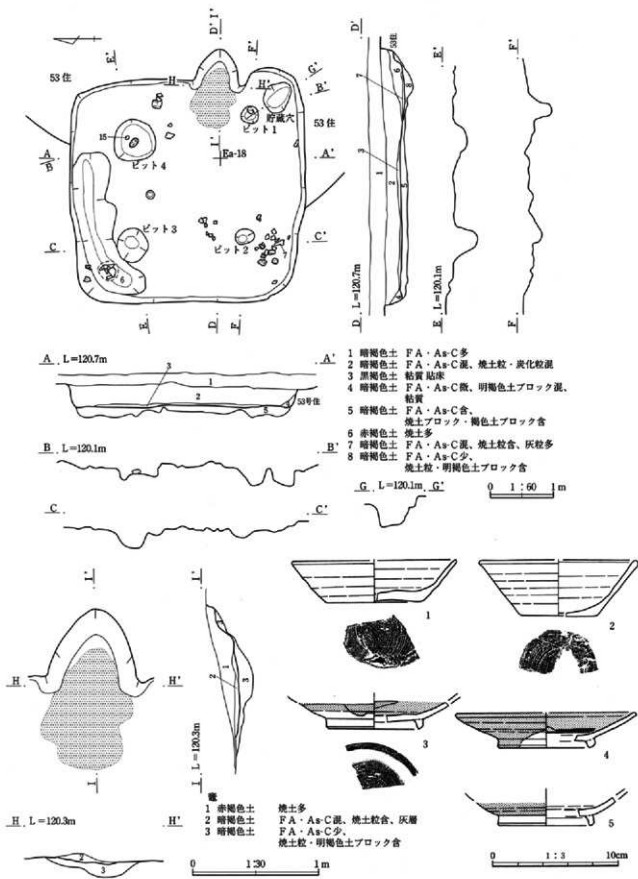
壁溝 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東に設置。径51cm・深さ27cmの楕円形を呈する。

柱穴 柱穴と思われるピットは4基検出された。ピット1は、径30cm・深さ29cm。ピット2は、径30cm・深さ25cm。ピット3は、径52cm・深さ22cm。ピット4は、径68cm・深さ15cmを測る。

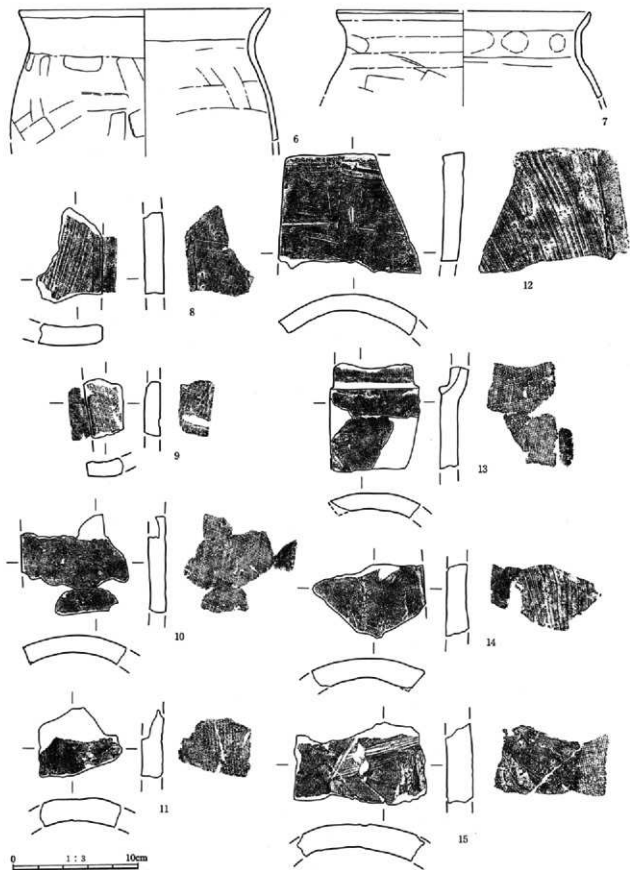
竈 東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。削平されて、残存が悪い。住居内からは竈構築材に用いられたと思われる凝灰岩が出土しており、袖部等の構築材として用いられていたと思われる。凝灰岩

は被熱し赤化していた。両袖方向45cm、煙道方向68cmを測る。遺物 土師器甕、須恵器杯、灰袖陶器塊・皿、瓦が出土している。他に、土師器片5.5kg、須恵器片2.2kg、竈構築材探掘痕から掘り出されたと思われる未加工の直方体を呈する凝灰岩(掲載番号16、写真図版PL36)が出土。所見出土遺物から9世紀後半と考えられる。

第3章 検出された遺構と遺物



第69図 40号住居跡・竈、出土遺物(1)



第70图 40号住居跡出土遺物(2)

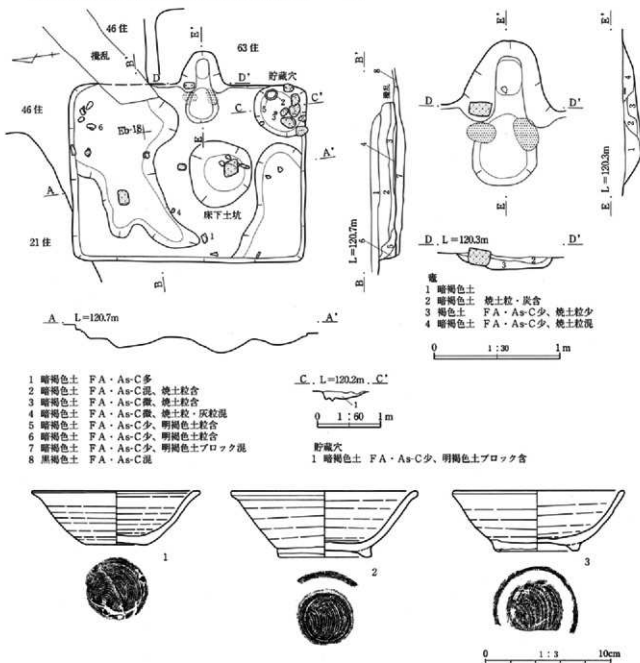
第3章 検出された遺構と遺物

41号住居跡 (第71・72図、P.L13・36)

位置 E a ~ b-17~18 重複 21・46・63号住居と重複している。本住居が新しい。形状 長軸 3.5m、短軸2.9mの隅丸方形を呈する。面積 9.44 m<sup>2</sup> 方位 N-87° -W 床面 遺構確認面から32cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.2mを測る。壁溝・柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 住居の南東に設置。径90cm・深さ18cmの楕円形を呈する。須恵器埴3点、凝灰岩7点が出土した。

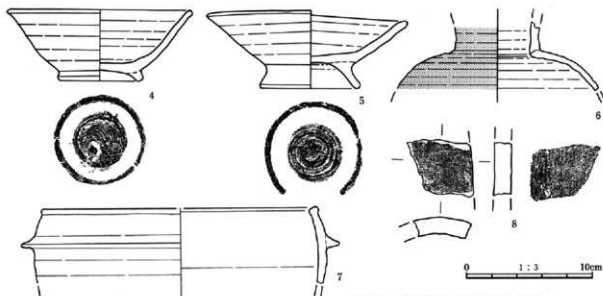
した。竈 東壁面の中央部を掘り込んで造られている。左側の袖部からは袖石に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向26cm、煙道方向65cmを測る。遺物 須恵器坏・埴・羽釜、灰釉陶器長頸壺、瓦が出土している。他に、土師器片1.69kg、須恵器片1.71kgが出土。所見 出土遺物から10世紀後半と考えられる。



第71図 41号住居跡・竈、出土遺物 (1)



第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構

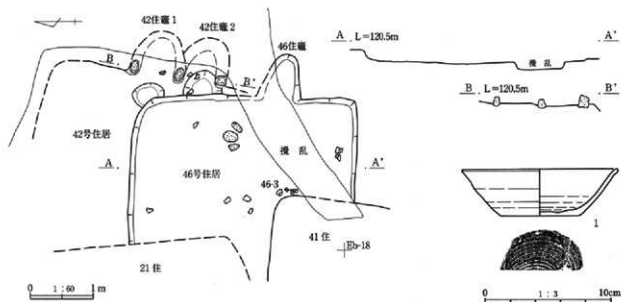


第72図 41号住居跡出土遺物(2)

42号住居跡(第73図、P L13・36)

位置 E b-17 重複 21・46号住居と重複している。21・46号住居より本住居が新しい。形状 長軸(2.4)m、短軸(2.0)mを測る。面積(4.32) $m^2$  方位 N-70°-W 床面 床面の標高は平均120.35mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面を掘り込んで造られている。竈構築材採掘痕から掘り出されたとと思われる3点の凝灰岩が一直線に並んで出土した。凝灰岩は竈の袖

石で、焼土・灰の分布状況などから竈は新旧の2基あったと思われる。凝灰岩は被熱し赤化していた。竈1は両袖方向53cm、煙道方向(65)cm。竈2は両袖方向48cm、煙道方向(70)cmを測る。遺物 須恵器片が出土している。他に、土師器片1.08kg、須恵器片390gが出土。所見 後世の擾乱のため、住居の全容は明らかにできなかった。出土遺物から9世紀前半と考えられる。



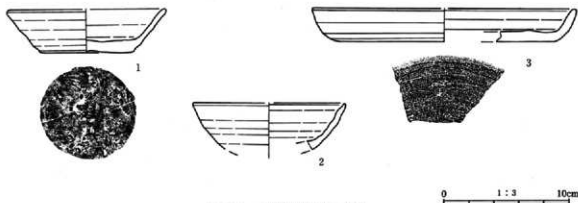
第73図 42・46号住居跡、42号住居跡出土遺物

### 第3章 検出された遺構と遺物

#### 46号住居跡 (第73・74図、P.L13・37)

位置 E a ~ b - 17 重複 21・41・42号住居と重複している。21号住居より本住居が新しく、41・42号住居より古い。形状 長軸3.7m、短軸(3.2)mを測る。面積 (6.72) m<sup>2</sup> 方位 N-88°-W 床面 床面の標高は平均120.14mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面の南寄り掘り込んで造られている。攪乱で削平され残存悪い。袖部は石材ではなく、粘質土を張

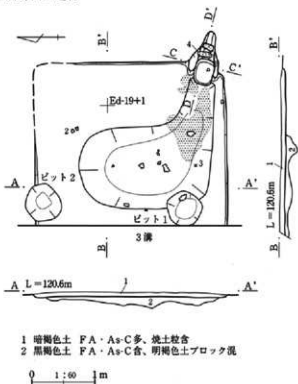
り付けて造られていたと思われる。支脚石等は検出されなかった。両袖方向42cm、煙道方向71cmを測る。遺物 須恵器杯・埴・盤が出土している。他に、土師器片550g、須恵器片280gが出土。所見 攪乱や住居の重複が激しく、住居の全容は明らかにできなかった。出土遺物から8世紀前半と考えられる。



第74図 46号住居跡出土遺物

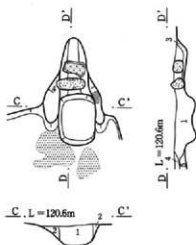
#### 43号住居跡 (第75・76図、P.L14・36)

位置 E c ~ d - 18 ~ 19 重複 3号溝と重複している。本住居が古い。形状 長軸3.08m、短軸(2.84)mの隅丸方形を呈する。面積 (7.57) m<sup>2</sup> 方位 N-88°-W 床面 遺構確認面から13cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.47mを測る。壁溝・貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 柱穴と思われるピットは2基検出された。ピット1は、径56cm・深さ14cm。ピット2は、径60cm・深さ32cmを測る。竈 東壁面の南隅を掘り込んで造られている。煙道部には構築材に用いられたと思われる凝灰岩と川原石(支脚に使用されたと思われる)が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向27cm、煙道方向74cmを測る。遺物 須恵器杯・羽釜、土錘が出土している。他に、土師器片1.12kg、須恵器片690gが出土。所見 出土遺物から10世紀と考えられる。

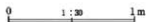


第75図 43号住居跡

第1節 竪穴住居跡、竪穴伏遺構



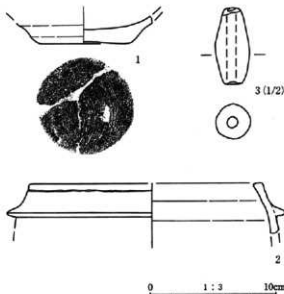
- 竪  
 1 暗褐色土 焼土粒含、炭化粒少、明褐色土粒混  
 2 暗褐色土 FA・As・C含、明褐色土ブロック多、  
 焼土粒少  
 3 暗褐色土 FA・As・C含、焼土ブロック混  
 4 黒褐色土 FA・As・C含、焼土粒含、灰混  
 5 黒褐色土 FA・As・C少、焼土粒混、灰粒含



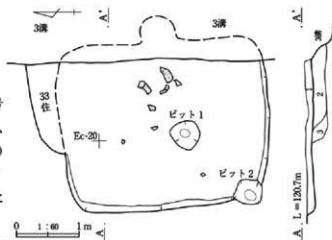
44号住居跡 (第77図、P L14・36)

位置 E b～c-19～20 重複 33号住居、3号溝と重複している。本住居が33号住居より新しく、3号溝より古い。形状 長軸3.2m、短軸(1.6)mを測る。面積 (7.81) m<sup>2</sup> 方位 N-90° 床面 遺構確認面から8cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.50mを測る。

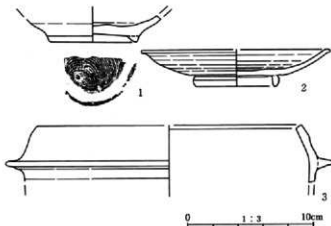
壁溝・貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 柱穴と思われるピットは2基検出された。ピット1は、径44cm・深さ31cm。ピット2は、径46cm・深さ12cmを測る。竈 東壁面を掘り込んで造られていたと思われるが、3号溝によって削平され、検出されなかった。構築材に用いられたと思われる凝灰岩が散乱していた。凝灰岩は被熱し赤化していた。遺物 須恵器環・羽釜、灰軸陶器皿が出土している。他に、土師器片10g、須恵器片10gが出土。所見 出土遺物から10世紀前半と考えられる。



第76図 43号住居跡竈、出土遺物



- 1 暗褐色土 FA・As・C多  
 2 暗褐色土 FA・As・C混、焼土粒少  
 3 暗褐色土 FA・As・C混、明褐色土ブロック混



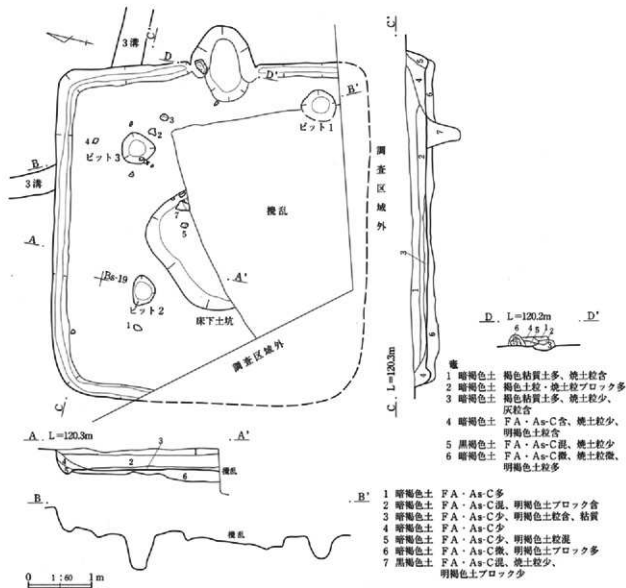
第77図 44号住居跡、出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

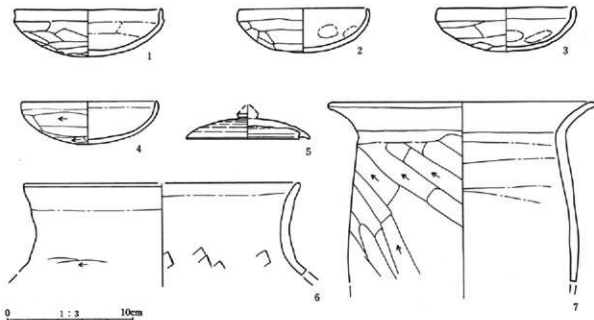
45号住居跡 (第78・79図、P.L14・37)

位置 B r ~ s - 18 ~ 19 重複 3号溝と重複している。本住居が古い。形状 長軸5.3m、短軸(3.9)mを測る。面積 (13.16) m<sup>2</sup> 方位 N-75° - E 床面 遺構確認面から25cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.8mを測る。床面は貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。壁溝 幅約26cm、深さ約6cmの壁溝が一周している。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 柱穴と思われるピットは3基検出された。ピット1は、径53cm・深さ20cm。ピット2は、径49cm・深さ10cm。ピット3は、径

52cm・深さ30cmを測る。竈 東壁面の中央部を掘り込んで造られている。左側の袖部からは袖石に用いられたと思われる石材が出土した。両袖方向44cm、煙道方向82cmを測る。遺物 土師器坏・甕、須恵器壺が出土している。他に、土師器片1.36kg、須恵器片70gが出土。所見 住居の北西部分が攪乱や調査区域外のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から7世紀後半と考えられる。



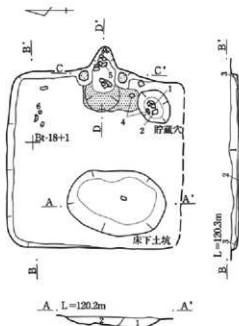
第78図 45号住居跡



第79図 45号住居跡出土遺物

## 47号住居跡 (第80・81図、P L14・37)

位置 B s - t - 17 - 18 重複なし。形状 長軸2.8m、短軸2.7mの隅丸方形を呈す。面積 6.82 m<sup>2</sup> 方位 N - 85° - W 床面 遺構確認面から18cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.12mを測る。床面は一部貼床構造で、明褐色ブロックを含む暗褐色粘質土で固く踏み固められていた。壁溝・柱穴 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東に設置。径64cm・深さ22cmの楕円形を呈する。須恵器杯・碗、土師器甕が出土した。竈 東壁面の中央部を掘り込んで造られている。左右の袖部・燃焼部からは、袖石・支脚に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。また、燃焼部・煙道部内からは羽釜などの多量の土器片が出土。両袖方向34cm、煙道方向64cmを測る。遺物 土師器甕、須恵器杯・碗・羽釜、砥石が出土している。他に、土師器片2.34kg、須恵器片1.55kgが出土。所見 出土遺物から10世紀前半と考えられる。



- 1 黒褐色土 FA・As-C含
- 2 黒褐色土 明褐色土ブロック含、粘性有、硬化
- 3 暗褐色土 FA・As-C混、炭化粒少

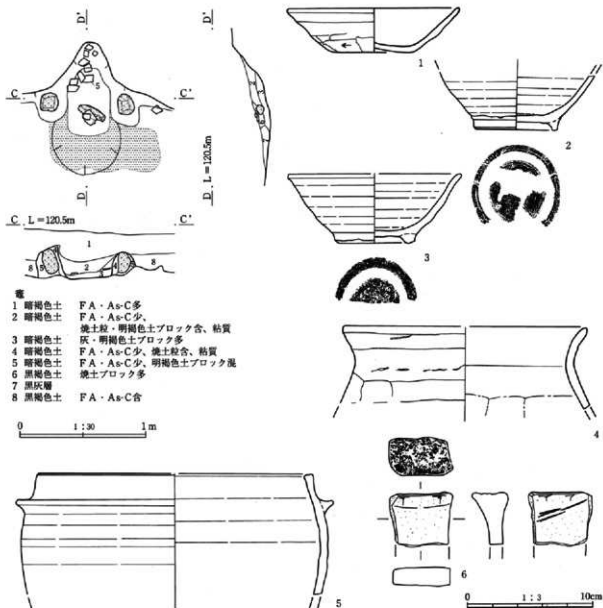
床下土坑

- 1 黒褐色土 FA・As-C混
- 2 暗褐色土 FA・As-C混、明褐色土ブロック含

0 1:60 1m

第80図 47号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第81図 47号住居跡竈、出土遺物

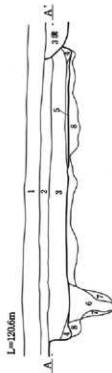
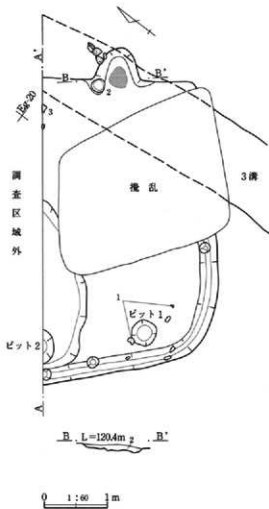
48号住居跡 (第82図、P L14・37)

位置 Ef-19~20 重複 3号溝と重複している。本住居が古い。形状 長軸(4.7)m、短軸(2.6)mを測る。面積(6.34)m<sup>2</sup> 方位 N-35°-E 床面 遺構確認面から13cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.34mを測る。床面は一部貼床構造で、明褐色土ブロックを含む暗褐色粘質土で固く踏み固められていた。壁溝 幅約26cm、深さ約6cmの壁溝が巡る。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 柱穴と思われるピットは2基検出

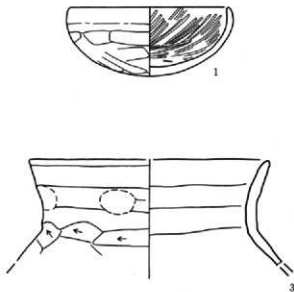
された。ピット1は、径39cm・深さ26cm。ピット2は、径44cm・深さ46cmを測る。竈 東壁面を掘り込んで造られている。燃焼部には焼土・灰が分布していた。左側の袖部からは構築材に転用されたと思われる、土器器変が出土した。また、煙道部の北から礫5点が出土した。礫は被熱し赤化していたので、竈の構築材として用いられたと考えられる。両袖方向44cm、煙道方向72cmを測る。遺物 土器器変・変が出土している。他に、土器器片10gが

第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構

出土。所見 擾乱や調査区域外のため、住居の全容は明らかにできなかった。出土遺物から6世紀前半と考えられる。



- 1 表土
- 2 暗褐色土 As・B混
- 3 暗褐色土 FA・As・C混、焼土粒含
- 4 暗褐色土 FA・As・C含、焼土粒・灰白色シルトブロック含
- 5 暗褐色土 FA・As・C混、明褐色土ブロック含、粘性有
- 6 暗褐色土 FA・As・C少、明褐色土粒含
- 7 暗褐色土 FA・As・C微、明褐色土ブロック多
- 8 暗褐色土 FA・As・C少、明褐色土ブロック混



第82図 48号住居跡、出土遺物

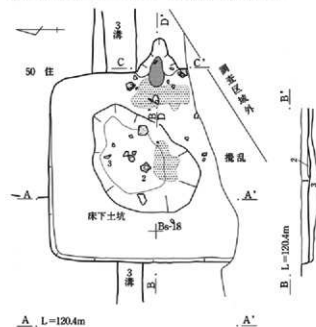
第3章 検出された遺構と遺物

49号住居跡 (第83図、P.L14・37)

位置 B r - s - 17 ~ 18 重複 3号溝、50号住居と重複している。本住居が3号溝より古く、50号住居より新しい。形状 長軸2.8m、短軸(2.6)mの隅丸方形を呈する。面積 (7.50) m<sup>2</sup> 方位 N - 90° 床面 遺構確認面から23cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.17mを測る。

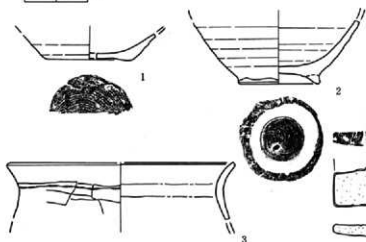
竪溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面を掘り込んで造られている。左右の袖部の近く

からは構築材に使用された凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向24cm、煙道方向59cmを測る。遺物 土師器甕、須恵器坏・埴、鉄製紡錘車、砥石が出土している。他に、土師器片1.03kg、須恵器片1.00kgが出土。所見 住居の南側は、攪乱や調査区域外のため、調査できなかった。出土遺物から9世紀後半と考えられる。

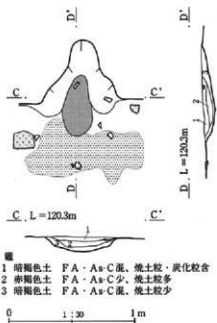


- 1 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒・炭化物含
- 2 黒灰 灰層
- 3 暗褐色土 FA・As-C少、炭化物少、明褐色土ブロック含

0 1:60 m



第83図 49号住居跡・竈、出土遺物



- 竈
- 1 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒・炭化物含
- 2 暗褐色土 FA・As-C少、焼土粒多
- 3 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒少

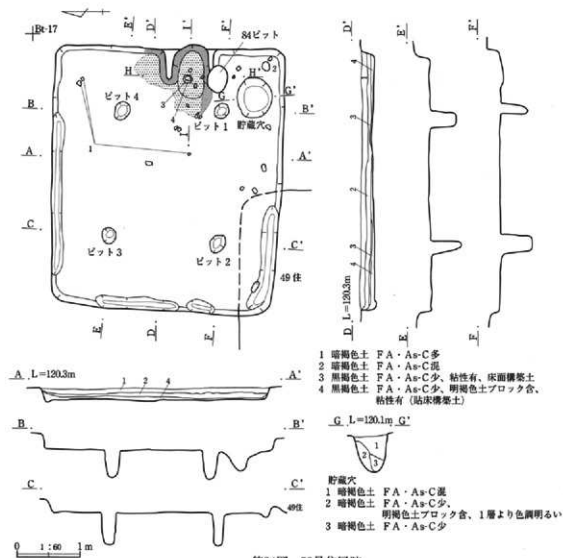
0 1:30 1m



## 50号住居跡 (第84・85図、P.L15・37)

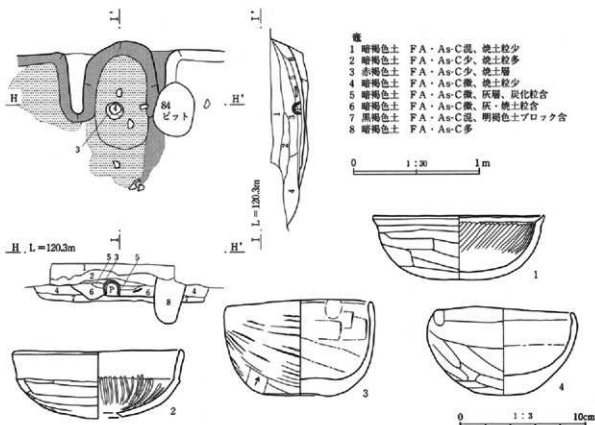
位置 B s-17 重複 49号住居、84号ピットと重複している。本住居が古い。形状 長軸4.2m、短軸3.7mの隅丸方形を呈す。面積 13.85<sup>2</sup>  
 方位 N-89° -W 床面 遺構確認面から16cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.01mを測る。床面は貼床構造で、明褐色ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。壁溝 幅約20cm、深さ約6cm、全長約5mの壁溝が南西側、西側、北側の4カ所検出された。貯蔵穴 住居の南東に設置。径64cm・深さ58cmの楕円形を呈する。柱穴 柱穴と思われるピットは4基検出された。ピット1は、径25cm・深さ45cm。ピット2は、径

26cm・深さ53cm。ピット3は、径32cm・深さ46cm。ピット4は、径32cm・深さ43cmを測る。竈 東壁面の中央部を掘り込んで造られている。燃焼部からは、支脚に用いられたと思われる土師器鉢が重なった状態で2点出土した。土器は一部被熱し赤化していた。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。また、右袖部は84号ピットで壊されていた。両袖方向40cm、煙道方向60cmを測る。遺物 土師器環・鉢が出土している。他に、土師器片2.49kg、須恵器片100gが出土。所見 出土遺物から6世紀前半と考えられる。



第84図 50号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

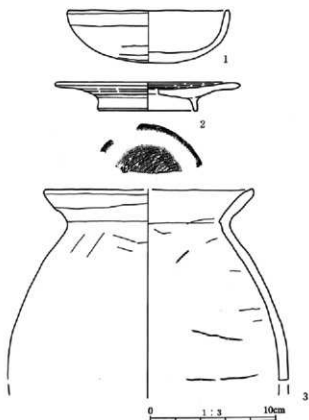


第85図 50号住居跡、出土遺物

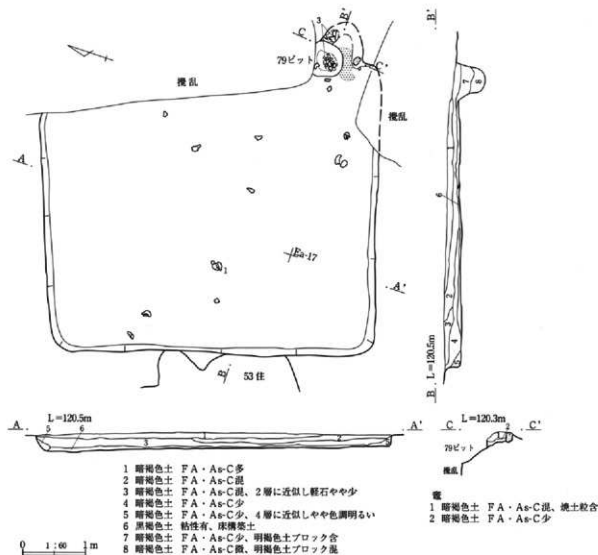
51号住居跡 (第86・87図、P L15・37)

位置 B t・E a-16-17 重複 53号住居、79号ビットと重複している。本住居が古い。形状 長軸5.4m、短軸(4.1)mの隅丸方形を呈する。

面積 (20.58) m<sup>2</sup> 方位 N-75°-E 床面 遺構確認面から22cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.12mを測る。床面は貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面の南隅を掘り込んで造られている。右袖部には構築材に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。左袖部は79号ビットによって壊されていた。両袖方向32cm、煙道方向74cmを測る。遺物 土師器坏・甕、須恵器皿が出土している。須恵器皿(9世紀)は混入遺物。他に、土師器片3.05kg、須恵器片450gが出土。所見 出土遺物から7世紀後半と考えられる。



第86図 51号住居跡出土遺物



第87図 51号住居跡

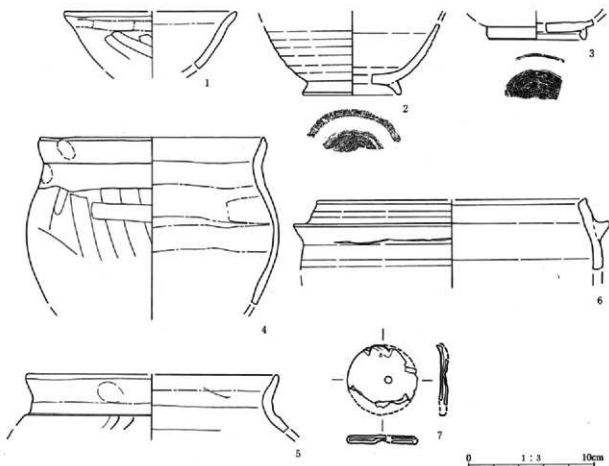
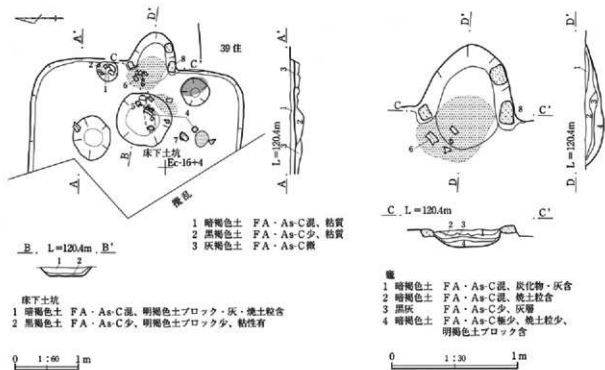
52号住居跡 (第88図、PL15・37・38)

位置 E b - c - 16 重複 39号住居と重複している。本住居が新しい。形状 長軸3.2m、短軸(1.8)mを測る。面積 (5.79) m<sup>2</sup> 方位 N - 81° - W 床面 遺構確認面から11cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.29mを測る。中央部から、径96cm・深さ18cmの床下土坑を検出した。

竪溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竪 東壁面の中央部を掘り込んで造られている。左右の袖部からは、構築材に使用された凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。燃焼部からは羽釜などの土器片が出土した。両袖方向44cm、煙道方向

63cmを測る。遺物 土師器坏・甕、須恵器塊・羽釜、灰軸陶器皿が出土している。他に、土師器片750g、須恵器片500gが出土。所見 住居の西側が攪乱のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から10世紀前半と考えられる。

第3章 検出された遺構と遺物

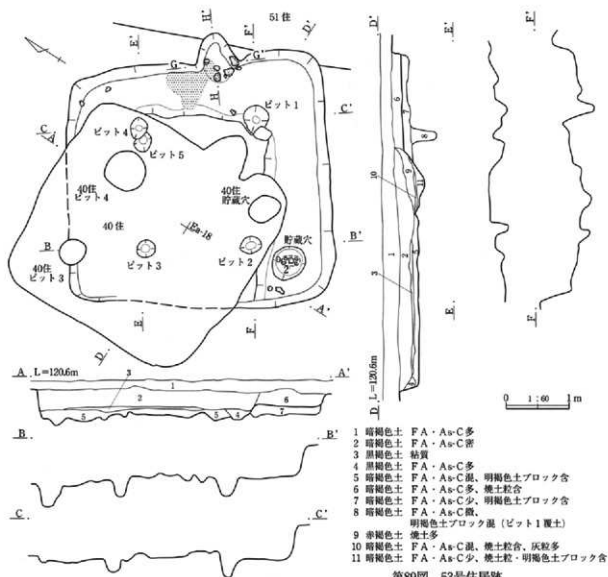


第88図 52号住居跡・竈、出土遺物

## 53号住居跡 (第89・90図, P.L16・38)

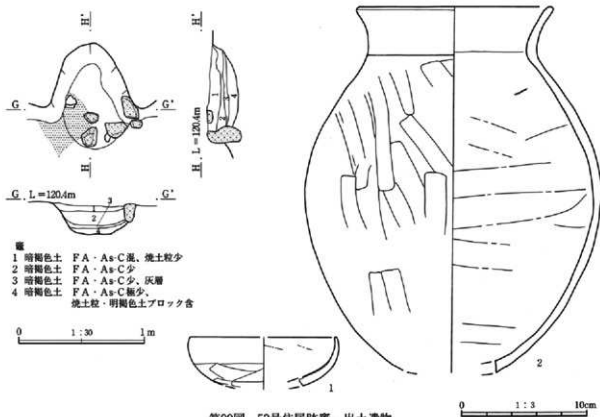
位置 B t・E a-17~18 重複 40・51号住居と重複している。本住居が古い。形状 長軸4.4m、短軸4.0mの隅丸方形を呈する。面積 (15.00) m<sup>2</sup> 方位 N-55°-E 床面 遺構確認面から31cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.05mを測る。壁溝 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南側に設置。径60cm・深さ40cmの楕円形を呈する。貯蔵穴内から土師器甕が出土。柱穴 柱穴と思われるピットは5基検出された。ピット1は、径47cm・深さ28cm。ピット2は、径34cm・深さ18cm。ピット3は、径36cm・深さ20cm。ピット4は、径31cm・深さ23cm。ピット5は、径

33cm・深さ12cmを測る。竈 北東壁面の中央部を掘り込んで造られている。袖部・燃烧部から、被熱し赤化した凝灰岩が5点出土した。右袖部・支脚には、凝灰岩が構築材に用いられたと思われる。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向39cm、煙道方向60cmを測る。遺物 土師器坏・甕が出土している。他に、土師器片1.57kg、須恵器片150gが出土。所見 40号住居(平安時代)に半分以上を壊されており、全容は明らかにできなかった。出土遺物から7世紀前半と考えられる。



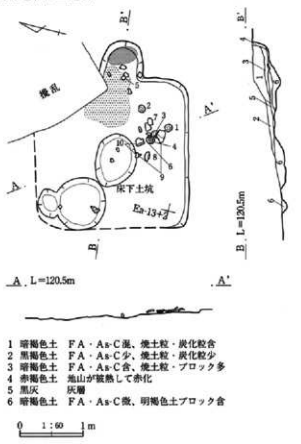
第89図 53号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

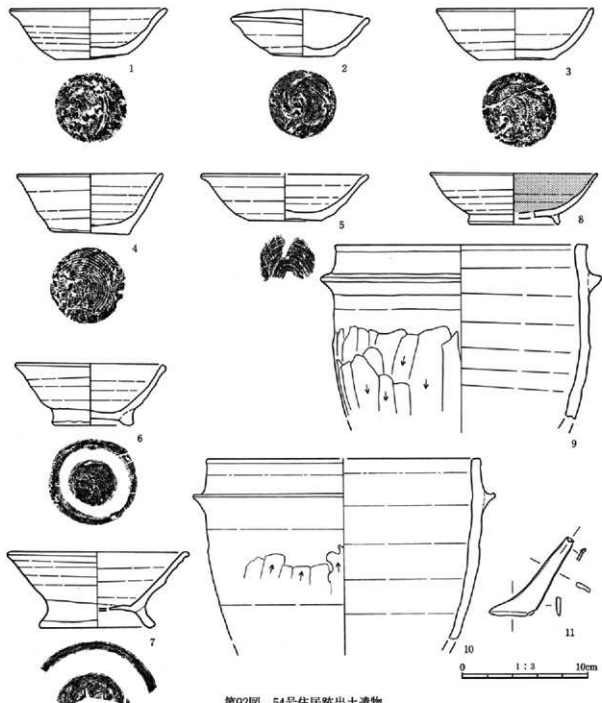


第90図 53号住居跡竈、出土遺物

54号住居跡(第91・92図、P L16・38)  
 位置 B t・E a-12-13 重複 なし。  
 形状 長軸2.3m、短軸(2.3)mの隅丸方形を呈する。  
 面積 (4.98) m<sup>2</sup> 方位 N-87°-E 床面 攪乱のため削平されて、床面は南側半分のみで検出された。遺構確認面から19cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.13mを測る。中央部から、長径98cm・短径63cm・深さ18cmの床下土坑を検出した。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面を掘り込んで造られている。右袖部には構築材に用いられたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。左袖部は攪乱によって壊されていた。両袖方向50cm、煙道方向62cmを測る。遺物 須恵器杯・碗・羽釜、灰軸陶器碗、鉄製品(刃器)が出土している。他に、土師器片540g、須恵器片610gが出土。所見 出土遺物から10世紀中葉と考えられる。



第91図 54号住居跡



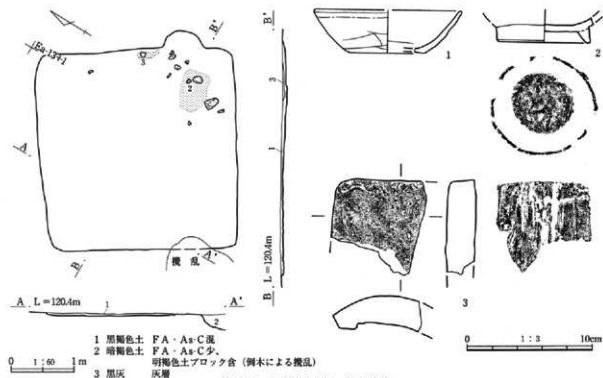
第92図 54号住居跡出土遺物

55号住居跡 (第93図、P L16・38)

位置 B t-12~13 重複なし。形状 長軸 3.3m、短軸3.2mの隅丸方形を呈する。面積 9.70 m<sup>2</sup> 方位 N-59°-E 床面 遺構確認面から2cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.21mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面の南寄り掘り込んで造られている。削平され残存悪い。袖部などの構築材として用いられ

たと思われる凝灰岩1点が床面から出土した。凝灰岩は被熱し赤化していた。両袖方向54cm、煙道方向24cmを測る。遺物 土師器坏、須恵器埴、瓦が出土している。他に、土師器片260g、須恵器片270gが出土。所見 出土遺物から10世紀後半と考えられる。

第3章 検出された遺構と遺物



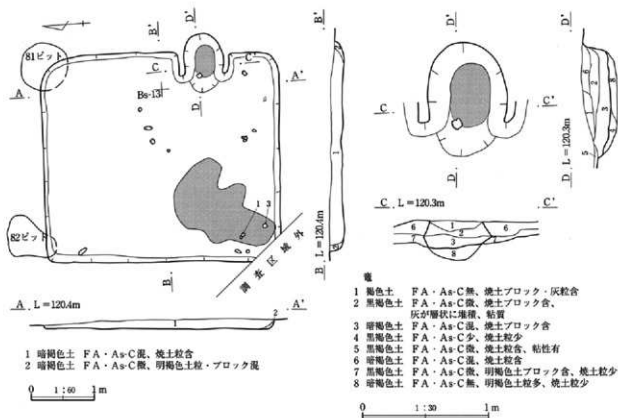
56号住居跡（第94・95図、P.L.17・38）

位置 Br-s-12-13 重複 81・82号ピットと重複している。本住居が新しい。形状 長軸3.8m、短軸3.3mの隅丸方形を呈する。面積 11.07㎡ 方位 N-88°-W 床面 遺構確認面から12cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.12mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面の南寄り掘り込んで造られている。袖

部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。支脚石等は検出されなかった。両袖方向31cm、煙道方向75cmを測る。遺物 土師器壺、鉄滓、瓦が出土している。他に、土師器片2.81kg、須恵器片800gが出土。所見 出土遺物から8世紀と考えられる。







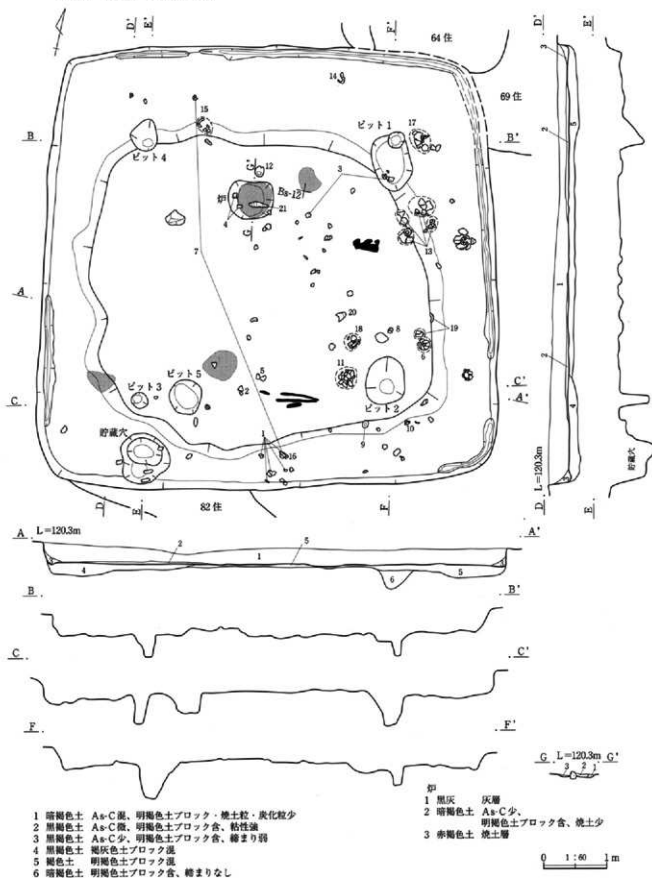
第95図 56号住居跡・竪

## 57号住居跡 (第96~98図, P L 17・39・40)

位置 Bq-s-11~12 重複 64・69・82号住居と重複している。本住居が古い。形状 長軸7.4m、短軸7.1mの隅丸方形を呈する。面積 46.76m<sup>2</sup> 方位 N-5°-W 床面 遺構確認面から26cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.91mを測る。床面は貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。また、床面上に、多量の炭化材が検出され、焼失住居の可能性もある。壁溝 幅約18cm、深さ約6cmの壁溝が、全長約12m検出された。貯蔵穴 住居の南西に設置。径84cm・深さ43cmの楕円形を呈する。土師器片、礫が出土。柱穴 柱穴と思われるピットは5基検出された。ピット1は、径30cm・深さ56cm。ピット2は、径70cm・深さ54cm。ピット3は、径34cm・深さ50cm。ピット4は、径50cm・深さ60cm。ピット5は、径52cm・深さ

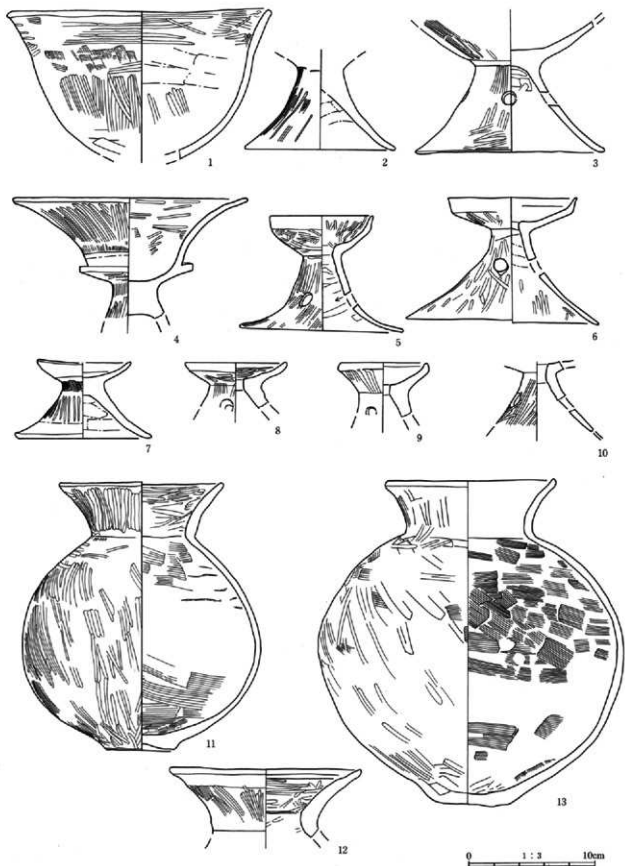
31cmを測る。炉 住居の中央部北壁寄りで検出された。炉石に使用されたと思われる石も出土した。炉石は被熱し赤化していた。また、土師器高坏などの土器片が出土した。遺物 土師器鉢・器台・高坏・壺・直口壺・小型甕・台付甕が出土している。他に、土師器片6.97kg、須恵器片500gが出土。所見 出土遺物から4世紀前半と考えられる。

第3章 検出された遺構と遺物

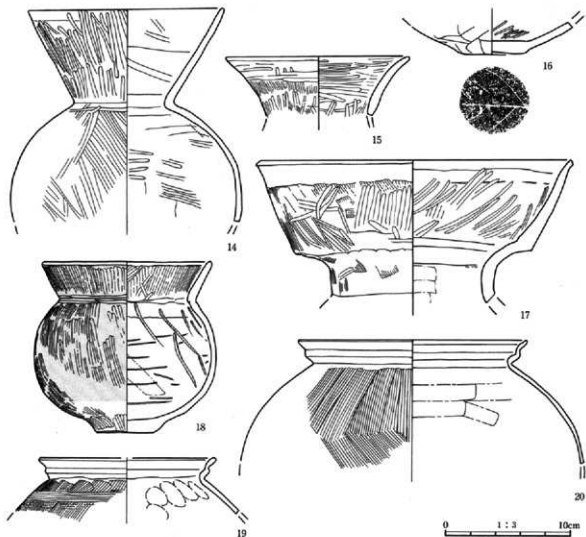


第96図 57号住居跡

第1節 堅穴住居跡、堅穴状遺構



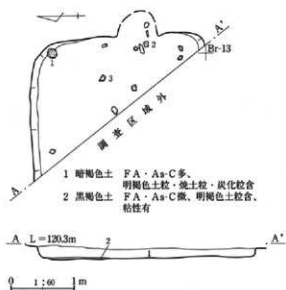
第97图 57号住居跡出土物(1)



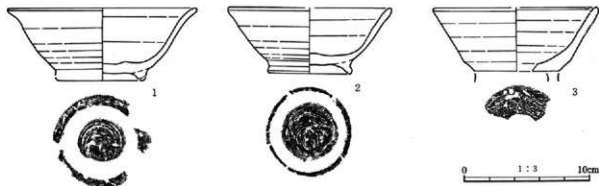
第98図 57号住居跡出土遺物(2)

58号住居跡(第99・100図、P L 16・40)

位置 Br-12~13 重複なし。形状 長軸 2.7m、短軸(2.1)mを測る。面積(3.03)m<sup>2</sup> 方位 N-88°-W 床面 遺構確認面から6cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.14mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面を掘り込んで造られていたと思われるが、削りされ残存状態悪い。支脚石等は検出されなかった。遺物 須恵器焼が出土している。他に、土師器片550g、須恵器片350gが出土。所見 住居の南西半分が調査区域外のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から10世紀と考えられる。



第99図 58号住居跡



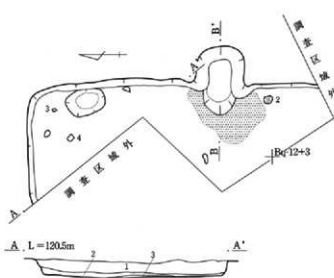
第100図 58号住居跡出土遺物

## 59号住居跡 (第101・102図、P.L18・40)

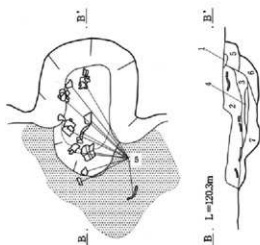
位置 Bp~q-12 重複なし。形状 長軸(4.8)m、短軸(1.8)mを測る。面積(4.99)m<sup>2</sup> 方位 N-89°-E 床面 遺構確認面から15cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.06mを測る。床面は一部貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。

壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面を掘り込んで造られている。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られており、両袖部は熱

を受け赤化していた。支脚石等は検出されなかったが、土師器甕などの土器片が多量に出土した。両袖方向34cm、煙道方向80cmを測る。遺物 土師器杯・甕、須恵器杯・壺が出土している。他に、土師器片1.00kg、須恵器片450gが出土。所見 住居の西半分が調査区域外のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から8世紀前半と考えられる。



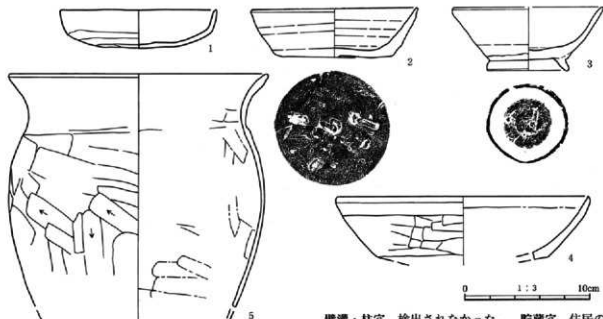
- 1 暗褐色土 FA・As・C混、焼土粒混
- 2 暗褐色土 FA・As・C含、明褐色土粒・明褐色土ブロック含
- 3 黒褐色土 FA・As・C少、明褐色土ブロック含、粘質



- 竈
- 1 赤褐色土 焼土ブロック
  - 2 褐色土 褐色粘質土・焼土粒混
  - 3 黒褐色土 FA・As・C多、灰粒多、焼土粒含
  - 4 赤褐色土 焼土ブロック
  - 5 褐色土 焼土ブロック含、粘質
  - 6 暗褐色土 明褐色土粒混、焼土粒含
  - 7 黒褐色土 焼土粒・炭化粒含

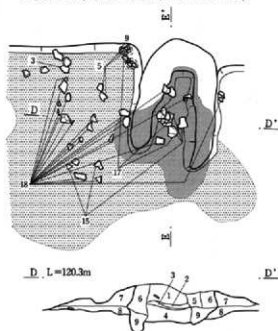
第101図 59号住居跡・竈

第3章 検出された遺構と遺物



第102図 59号住居跡出土遺物

60号住居跡(第103~105図, P L 18・40・41)  
位置 E a~b-10~11 重複 なし。形状 長軸5.1m、短軸4.4mの隅丸方形を呈する。  
面積 21.24㎡ 方位 N-88°-E 床面 遺構確認面から21cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.01mを測る。南側に、コの字状の明褐色土ブロックを含む暗褐色粘質土で固く踏み固めた部分を検出した。住居の出入り口と思われる。

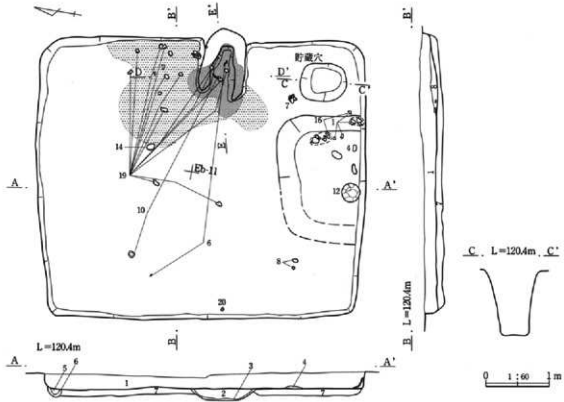


第103図 60号住居跡竈

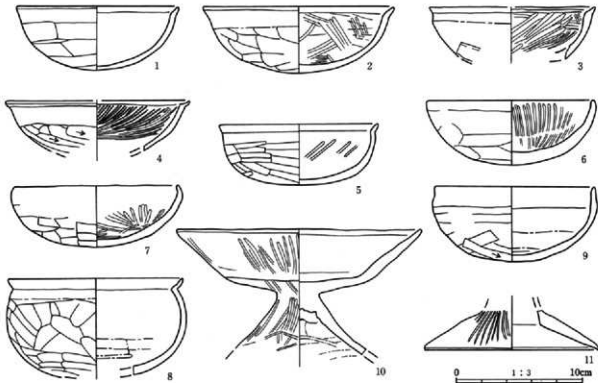
壁溝・柱穴 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東に設置。径74cm・深さ90cmの楕円形を呈する。竈 東壁面の中央部を掘り込んで造られている。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られており、両袖部・煙道部は熱を受け赤化していた。支脚石等は検出されなかったが、土師器甕・壺などの土器片が多量に出土した。両袖方向25cm、煙道方向114cmを測る。遺物 土師器坏・鉢・高坏・壺・甕、石製紡錘車が出土している。遺物は竈内・竈北側、出入り口部分から集中して出土した。他に、土師器片5.08kg、須恵器片100gが出土。所見 出土遺物から5世紀末~6世紀初頭と考えられる。

- 竈
- 1 暗褐色土 FA・As-C含、焼土粒混、明褐色土粒含
  - 2 赤褐色土 焼土ブロック層
  - 3 乳白灰層
  - 4 暗褐色土 FA・As-C少、焼土粒・灰粒含
  - 5 赤褐色土 焼土ブロック多、焼成し硬化
  - 6 黄褐色土 一部は軟熟し赤化
  - 7 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒混、明褐色土粒含
  - 8 黒褐色土 FA・As-C含、焼土粒少、明褐色土粒含
  - 9 暗褐色土 焼土粒・明褐色土粒・灰粒混
  - 10 黒褐色土 FA・As-C混
  - 11 乳白シルト層
  - 12 赤褐色土 焼土ブロック多
  - 13 暗褐色土 FA・As-C少、焼土粒・明褐色土粒含
  - 14 黒褐色土 FA・As-C混、黄色シルトブロック含、焼土粒少
  - 15 黒褐色土 FA・As-C含
  - 16 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒少

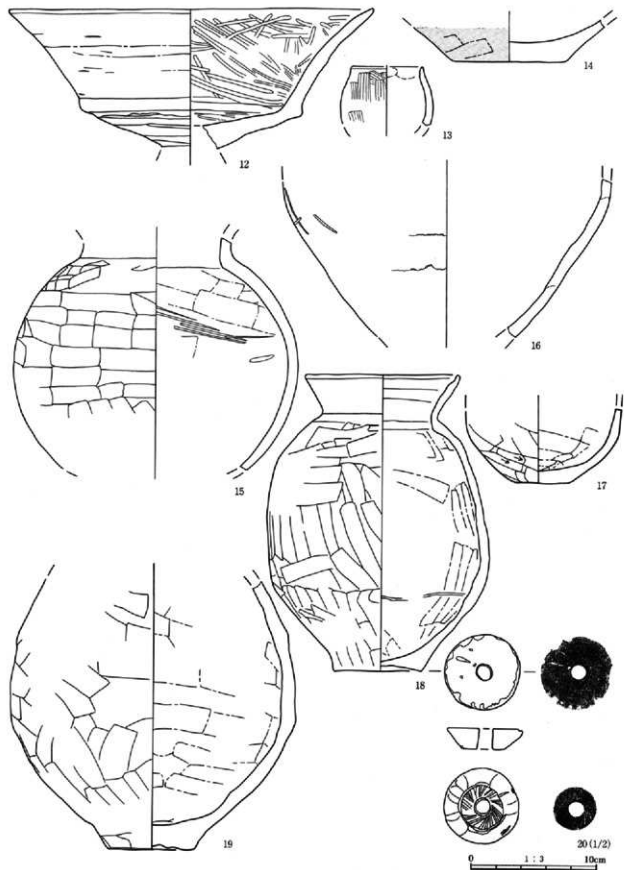
第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構



- |   |                           |
|---|---------------------------|
| 1 暗褐色土 FA・As-C多、黒色土ブロック混、<br>織土粒・明褐色土粒含 | 4 暗褐色土 FA・As-C微、明褐色土ブロック多 |
| 2 黒褐色土 FA・As-C少                         | 5 褐色土 FA・As-C微            |
| 3 黄褐色土 明褐色土ブロック貼付層                      | 6 黒褐色土 FA・As-C少           |
|   | 7 黒褐色土 褐色粘質土ブロック多         |
|   | 8 黒灰 灰粒多                  |



第104図 60号住居跡、出土遺物(1)



第105図 60号住居跡出土遺物（2）



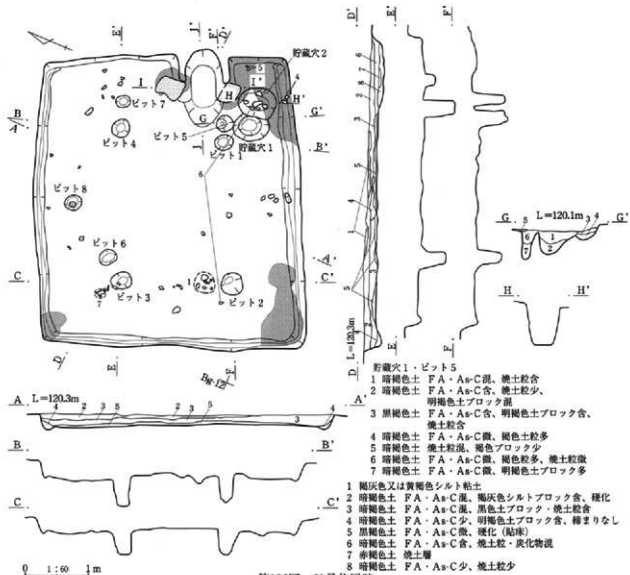
## 61号住居跡 (第106・107図、P L19・41)

位置 Bp~q-10~12 重複なし。形状 長軸5.0m、短軸4.3mの隅丸方形を呈する。

面積 19.11 $\text{m}^2$  方位 N-67°-E 床面 遺構確認面から16cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.01mを測る。床面は貼床構造で、明褐色土ブロックを含む黒褐色粘質土で固く踏み固められていた。壁溝 幅約22cm、深さ約5cmの壁溝がほぼ一周している。貯蔵穴 住居の南東から2基検出された。貯蔵穴1は径56cm・深さ40cm、貯蔵穴2は径60cm・深さ75cmの楕円形を呈する。貯蔵穴2からは、土師器壺・坏などの土器片が出土した。柱穴 柱穴と思われるピットは5基検出された。ピ

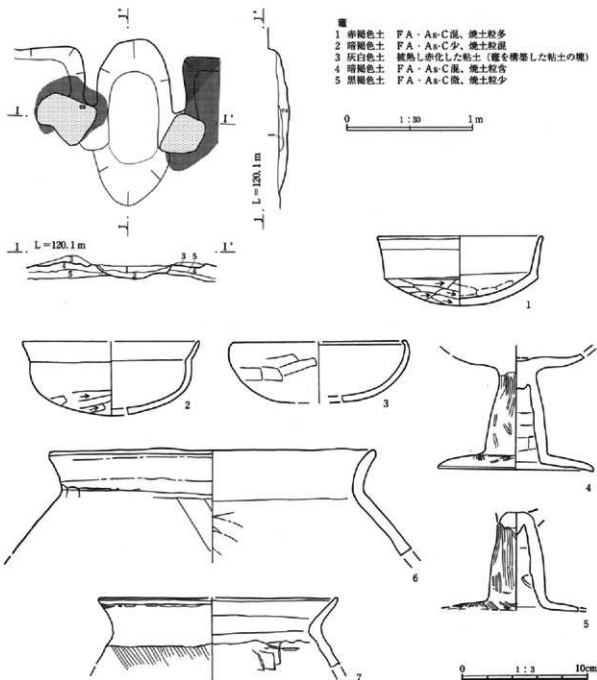
ット1は、径30cm・深さ44cm。ピット2は、径39cm・深さ43cm。ピット3は、径34cm・深さ41cm。ピット4は、径31cm・深さ45cm。ピット5は、径26cm・深さ46cmを測る。他のピットは深度も浅く、性格は不明。竈 東壁面の南よりを掘り込んで造られている。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られており、両袖部は熱を受け赤化していた。両袖部からは崩落した粘土が検出された。両袖方向40cm、煙道方向88cmを測る。

遺物 土師器坏・高坏・壺・甕が出土している。他に、土師器片4.52kgが出土。所見 出土遺物から6世紀前半と考えられる。



第106図 61号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

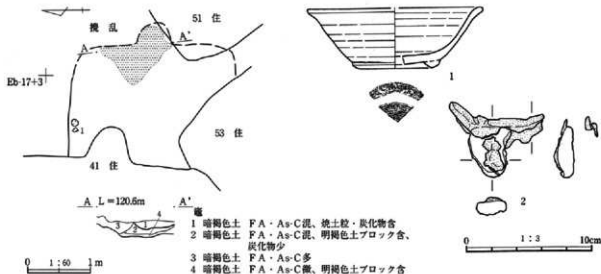


第107図 61号住居跡、出土遺物

63号住居跡 (第108図、P L19・41)

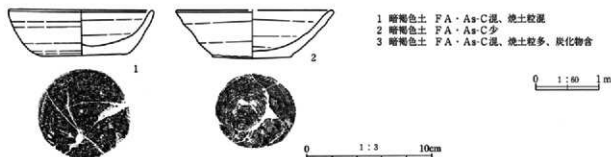
位置 E a-17 重複 41・51・53号住居と重複している。本住居の出土遺物が少なく、時期不明のため、新旧関係は不明。形状 長軸(2.6)m、短軸(1.8)mを測る。面積 (3.25) m<sup>2</sup> 方位 N-90° 床面 床面の標高は平均120.19mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。甕 東壁面を掘り込んで造られている。残存状態が悪く、

焼土・炭化物の分布状況で認定した。両袖方向50cm、煙道方向35cmを測る。遺物 須恵器焼、金属製品(銅・鉄製品)が出土している。他に、土師器片200g、須恵器片40gが出土。所見 住居の重複・攪乱多く、全容は明らかにできなかった。また、出土遺物も少なく、時期は不明。



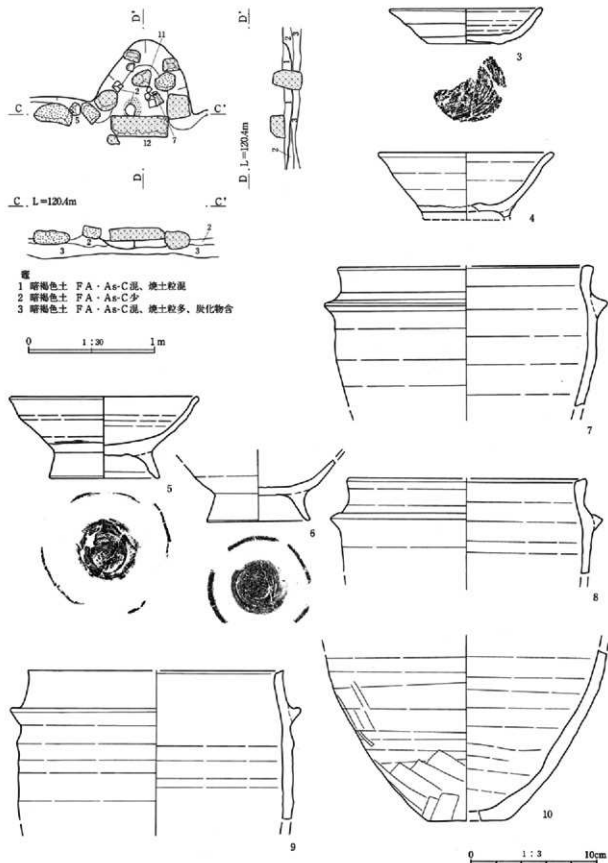
第108図 63号住居跡、出土遺物

64号住居跡(第109・110図、P L20・21・41・42)  
位置 Bs~t-11~12 重複 57・69号住居と重複している。本住居が新しい。形状 長軸3.2m、短軸2.7mの隅丸方形を呈する。面積 7.58m<sup>2</sup>  
方位 N-89°-E 床面 遺構確認面から20cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.10mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竪 東壁面の中央部を掘り込んで造られている。袖部・燃焼部からは、被熱し赤化した凝灰岩が出土した。袖部・支脚・天井材などには、凝灰岩が用いられたと思われる。両袖方向44cm、煙道方向69cmを測る。遺物 須恵器杯・埴・羽釜が出土している。他に、土師器片495g、須恵器片2.38kgが出土。所見 出土遺物から10世紀後半と考えられる。



第109図 64号住居跡、出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第110図 64号住居跡、出土遺物(2)

## 65号住居跡 (第111・112図、P L 19・42)

位置 B o ~ p - 10 ~ 11 重複 70・71号住居と重複している。70号住居より古く、71号住居より新しい。形状 長軸 (1.6) m、短軸 (0.4) m を測る。面積 (4.43) m<sup>2</sup> 方位 測定不可能。床面 遺構確認面から26cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.89mを測る。壁溝 幅約20cm、深さ約3cmの壁溝が、全長2m検出された。

貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面に設置されていたと思われるが、調査区域外のため検出されなかった。遺物 土師器坏・台付甕・甕、須恵器有台坏 (転用甕)、灰軸陶器坏が出土している。他に、土師器片1.05kg、須恵器片170gが出土。所見 住居の重複・調査区域外が多く、全容は明らかにできなかった。出土遺物から7世紀後半~8世紀前半と考えられる。

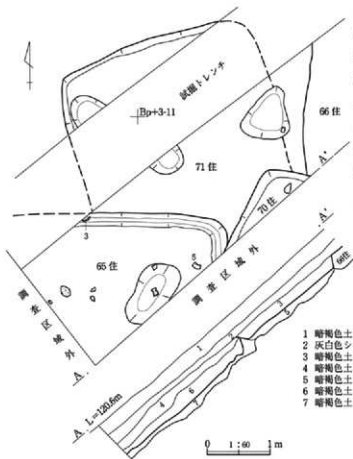
## 70号住居跡 (第111・112図、P L 19・42)

位置 B p - 10 重複 65・66・71号住居と重複している。本住居が新しい。形状 長軸 (1.3) m、短軸 (0.6) m を測る。面積 (0.28) m<sup>2</sup> 方位 測定不可能。床面 遺構確認面から20cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.86mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴・竈 検出されなかった。遺物 覆土から須恵器坏が出土している。

所見 住居のほとんどが調査区域外のため、全容は明らかにできなかった。時期は出土遺物から10世紀か。

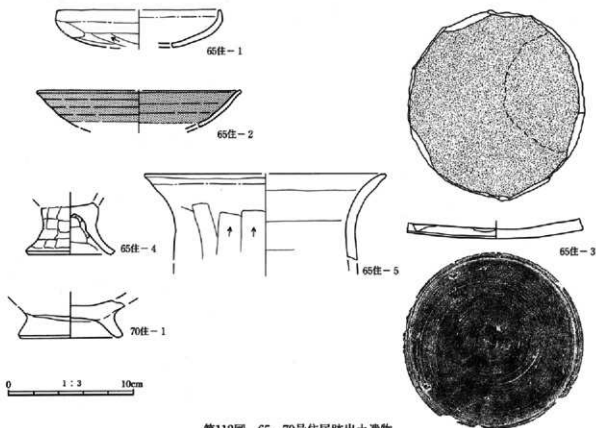
## 71号住居跡 (第111図、P L 19)

位置 B p - 10 ~ 11 重複 65・70号住居と重複している。本住居が古い。形状 長軸 (2.7) m、短軸 (2.5) m を測る。面積 (3.05) m<sup>2</sup> 方位 測定不可能。床面 遺構確認面から6cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.96mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面に設置されていたと思われる。削平され残存状態非常に悪い。遺物 掲載遺物なし。覆土から、土師器片130g、須恵器片35gが出土。所見 住居のほとんどが試掘トレンチや攪乱のため、全容は明らかにできなかった。出土遺物も少なく、時期は不明。



第111図 65・70・71号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



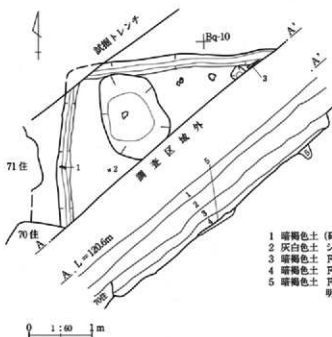
第112図 65・70号住居跡出土遺物

66号住居跡 (第113・114図、P L19・42)

位置 B p - 9 ~ 10 重複 70号住居と重複している。本住居が古い。形状 長軸 (2.8) m、短軸

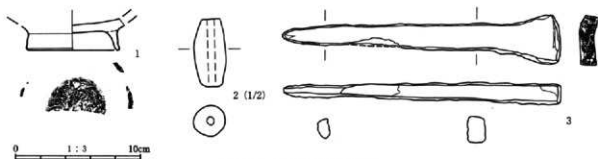
(2.2) mを測る。面積 (3.72) m<sup>2</sup> 方位 測定不可能。床面 遺構確認面から27cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.79mを測る。

壁溝 幅約20cm、深さ約3cmの壁溝が、全長4.7m検出された。貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 北壁面で検出されなかったので、調査区域外の東壁面に設置されていたと思われる。遺物 須恵器埴、土唾、鉄釘 (鑿) が出土している。他に、土師器片380g、須恵器片490gが出土。所見 住居の南東側は調査区域外のために、全容は明らかにできなかった。出土遺物から9世紀と考えられる。



- 1 暗褐色土 (碎石・軽石混) 表土
- 2 灰白色土 シルト 表土
- 3 暗褐色土 FA・As-C多
- 4 暗褐色土 FA・As-C少、明褐色土ブロック含
- 5 暗褐色土 FA・As-C少、焼土粒含、明褐色土ブロック混

第113図 66号住居跡

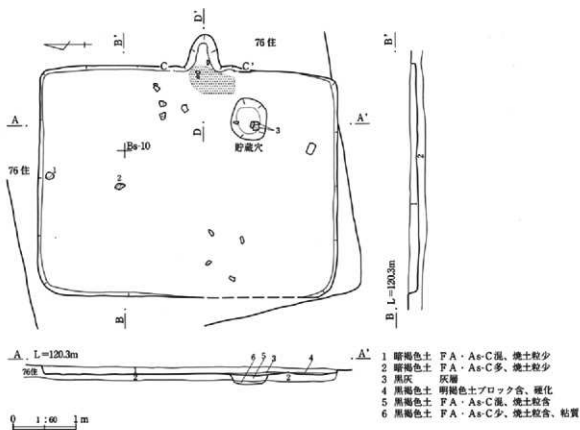


第114図 66号住居跡出土遺物

## 67号住居跡 (第115・116図、P L 21・42)

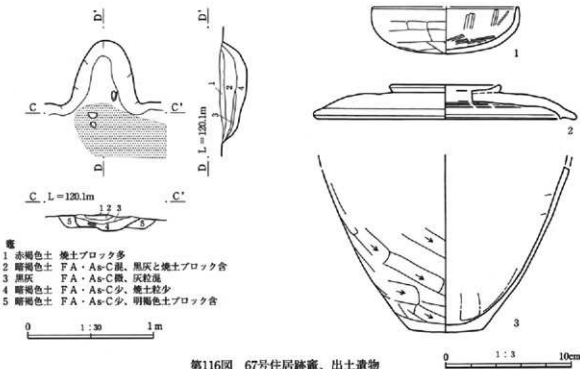
位置 B r ~ s - 9 ~ 10 重複 76号住居と重複している。本住居が新しい。形状 長軸4.7m、短軸3.7mの隅丸長方形を呈する。面積 16.40m<sup>2</sup> 方位 N-87°-E 床面 遺構確認面から13cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.09mを測る。壁溝・柱穴 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東に設置。径71cm・深さ20cmの楕円形を呈する。土師器甕が出土。竈 東壁面の中央部を掘り込ん

で造られている。削平され残存悪いが、袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。支脚石等は検出されなかった。両袖方向28cm、煙道方向59cmを測る。遺物 土師器坏・甕、須恵器蓋が出土している。他に、土師器片4.23kg、須恵器片230gが出土。所見 出土遺物から8世紀前半と考えられる。



第115図 67号住居跡

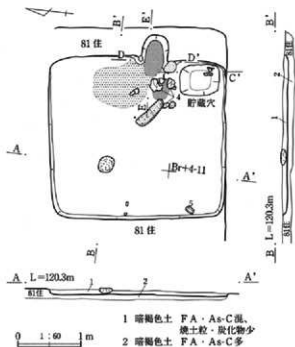
第3章 検出された遺構と遺物



第116図 67号住居跡竈、出土遺物

68号住居跡 (第117・118図, P L21・42)

位置 Br~s-10~11 重複 81号住居と重複している。本住居が新しい。形状 長軸3.0m、短軸2.8mの隅丸方形を呈する。面積 6.73㎡  
 方位 N-87°-E 床面 遺構確認面から5cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.02mを測る。

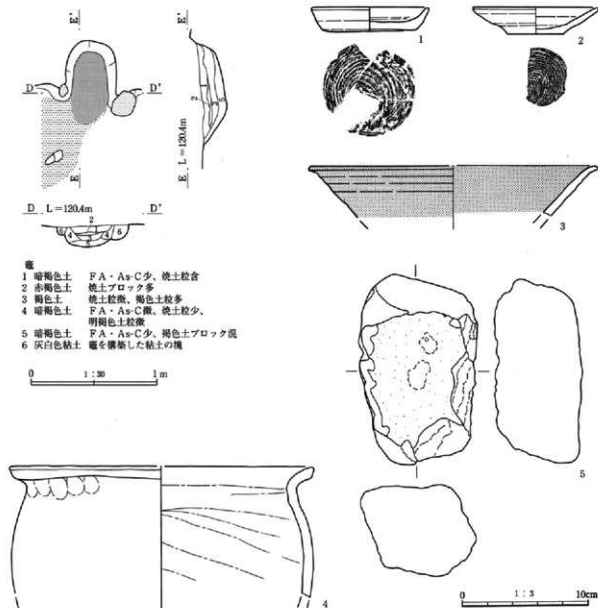


第117図 68号住居跡

壁溝・柱穴 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東に設置。径56cm・深さ68cmの楕円形を呈する。竈 東壁面の中央部を掘り込んで造られている。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていた。支脚石等は検出されなかったが、竈の構築材(天井材か)に使用されたと思われる凝灰岩が出土した。凝灰岩は被熱し赤化しており、長さ53cm、幅14cm、厚さ11cmを測る。両袖方向25cm、煙道方向50cmを測る。遺物 須恵器皿、灰釉陶器碗、土師器土釜、磨石が出土している。他に、土師器片2.34kg、須恵器片280gが出土。所見 出土遺物から11世紀前半と考えられる。



第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構



- 竪
- 1 暗褐色土 F A・As・C少、焼土粒含
  - 2 赤褐色土 焼土ブロック多
  - 3 褐色土 焼土粒微、褐色土粒多
  - 4 暗褐色土 F A・As・C微、焼土粒少、明褐色土粒微
  - 5 暗褐色土 F A・As・C少、褐色土ブロック混
  - 6 灰白色粘土 竪を構築した粘土の塊

0 1:30 1m

0 1:3 10cm

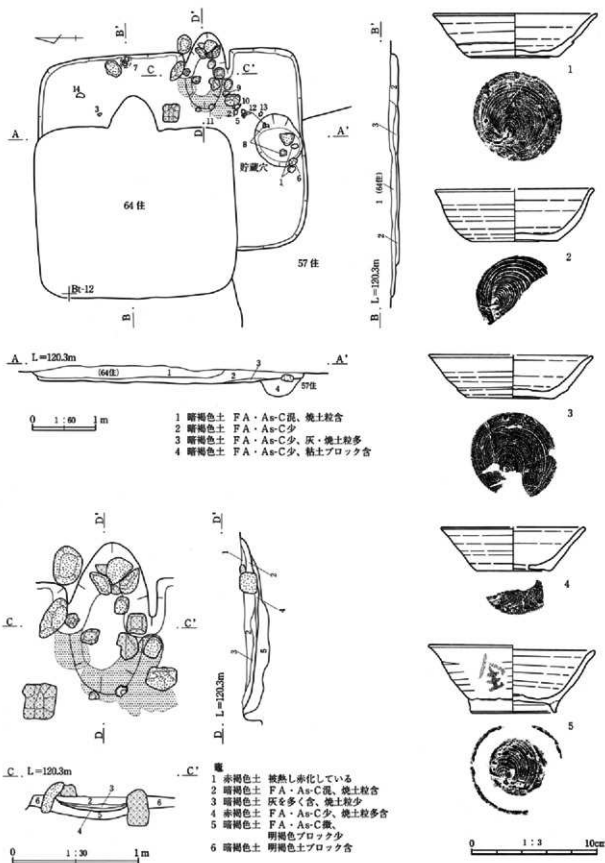
第118図 68号住居跡竪、出土遺物

69号住居跡 (第119・120図、P L 20・21・42)

位置 Bs ~ t-11 重複 57・64号住居と重複している。本住居が57号住居より新しく、64号住居より古い。形状 長軸4.2m、短軸3.2mの隅丸長方形を呈する。面積 (6.26) m<sup>2</sup> 方位 N-87°-E 床面 遺構確認面から10cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.20mを測る。壁溝・柱穴 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南隅に設置。径85cm・深さ22cmの楕円形を呈する。須恵器坏・埴が出土。竪 東壁面の南寄り掘り込んで造られ

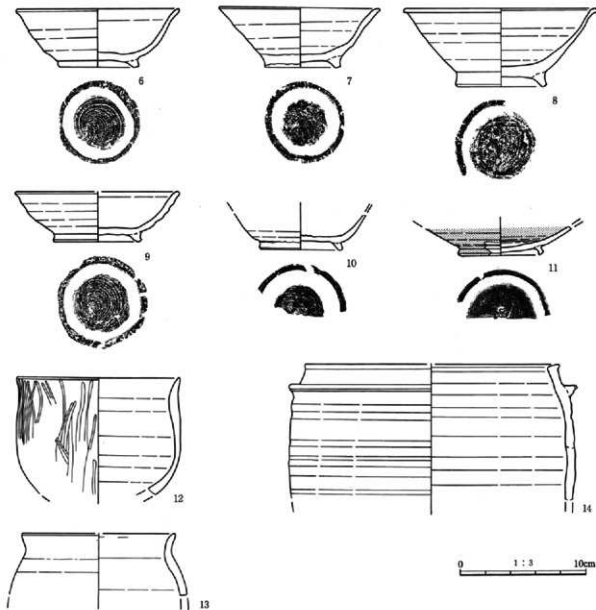
ている。袖部・燃焼部からは、被熱し赤化した凝灰岩と川原石が出土した。袖部などの構築材には、凝灰岩や川原石が用いられたと思われる。両袖方向32cm、煙道方向74cmを測る。遺物 須恵器坏・埴・鉢・小型甕・羽釜、灰胎陶器皿が出土している。他に、土師器片950g、須恵器片1.49kgが出土。所見 出土遺物から10世紀前半と考えられる。

第3章 検出された遺構と遺物



第119図 69号住居跡・竈、出土遺物(1)

第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構



第120図 69号住居跡出土遺物(2)

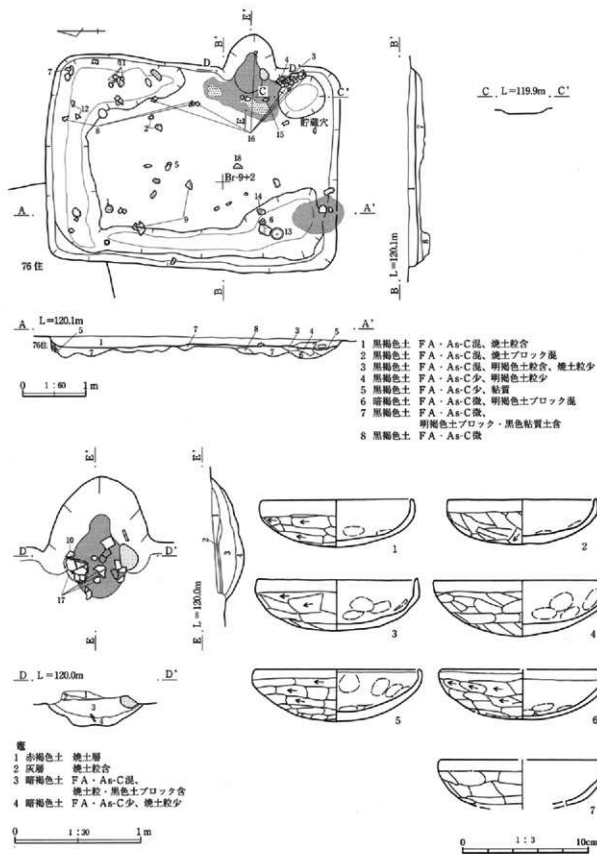
72号住居跡 (第121・122図、P.L.22・42・43)

位置 Bq-r-8-9 重複 76号住居と重複している。本住居が新しい。形状 長軸4.2m、短軸3.2mの隅丸長方形を呈する。面積 13.37㎡ 方位 N-85°-W 床面 遺構確認面から16cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.81mを測る。壁溝・柱穴 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南隅に設置。径73cm・深さ10cmの楕円形を呈する。土師器甕が出土。竈 東壁面の南寄り掘り込んで造られている。袖部は石材ではなく、粘質土を張

り付けて造られていたと思われる。両袖部は熱を受け赤化していた。支脚石等は検出されなかったが、土師器甕、須恵器環などの土器片が多量に出土した。両袖方向45cm、竈道方向75cmを測る。

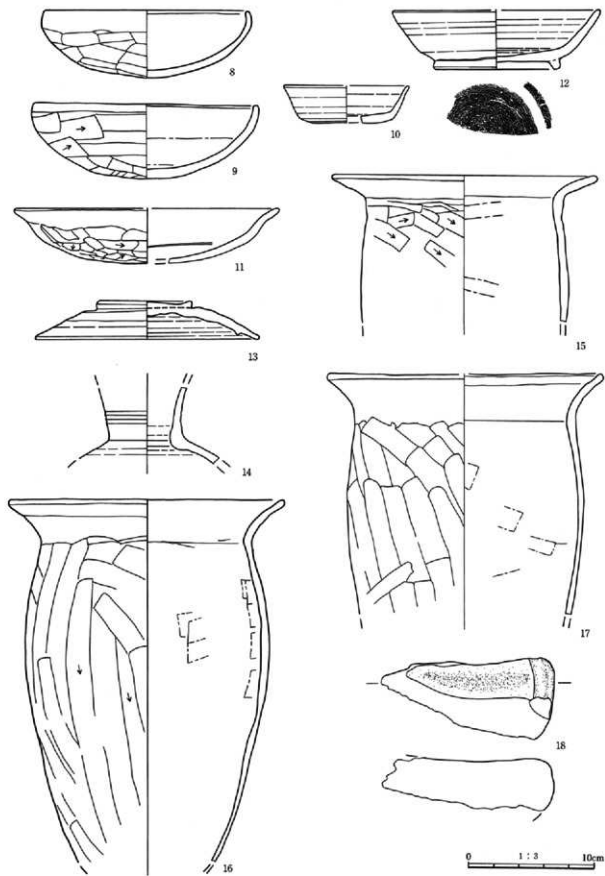
遺物 土師器環・甕、須恵器環・埴・蓋・長頸壺、石皿が出土している。他に、土師器片4.17kg、須恵器片1.08kgが出土。所見 出土遺物から8世紀前半と考えられる。

第3章 検出された遺構と遺物



第121図 72号住居跡・竈、出土遺物(1)

第1節 堅穴住居跡、堅穴状遺構



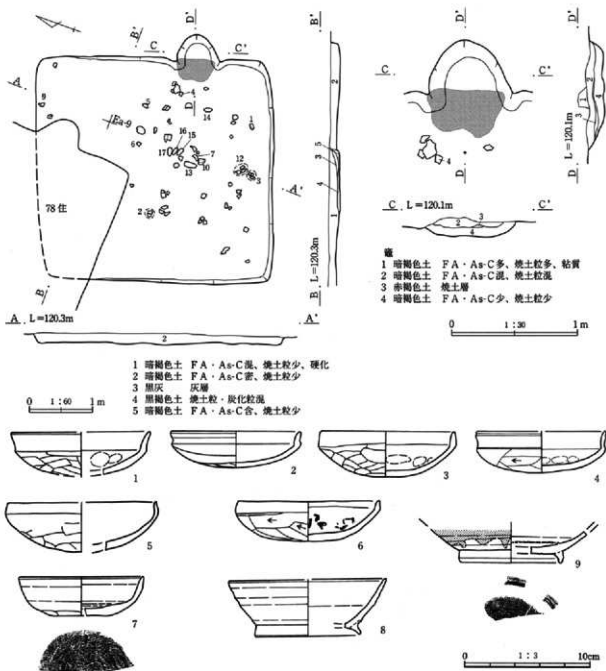
第122图 72号住居跡出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物

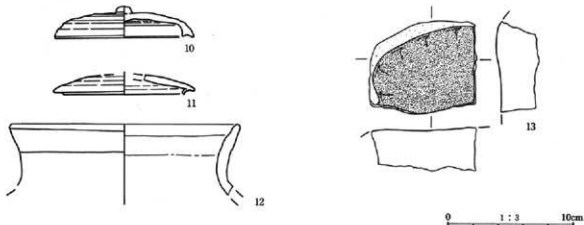
73号住居跡 (第123・124回, P L22・43)

位置 B・t・Ea-8~9 重複 78号住居と重複している。本住居が古い。形状 長軸3.7m、短軸3.5mの隅丸方形を呈する。面積 (10.11) m<sup>2</sup> 方位 N-69°-E 床面 遺構確認面から10cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.95mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。袖

部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思われる。支脚石等は検出されなかった。両袖方向40cm、煙道方向55cmを測る。遺物 土師器 坏・甕、須恵器 坏・埴・蓋、灰釉陶器 埴、磨石、こも編み石が出土している。他に、土師器片3.88kg、須恵器片340gが出土。所見 出土遺物から7世紀後半と考えられる。



第123図 73号住居跡・竈、出土遺物(1)

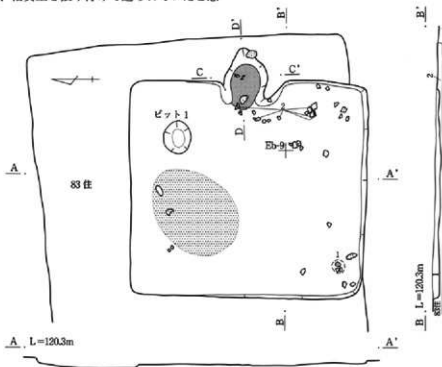


第124図 73号住居跡出土遺物(2)

## 75号住居跡(第125・126図、P.L23・44)

位置 E a ~ b - 8 ~ 9 重複 83号住居と重複している。本住居が新しい。形状 長軸3.9m、短軸3.5mの隅丸方形を呈する。面積 12.20m<sup>2</sup> 方位 N-90° 床面 遺構確認面から12cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.01mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面の中央部を掘り込んで造られている。袖部は石材ではなく、粘質土を張り付けて造られていたと思

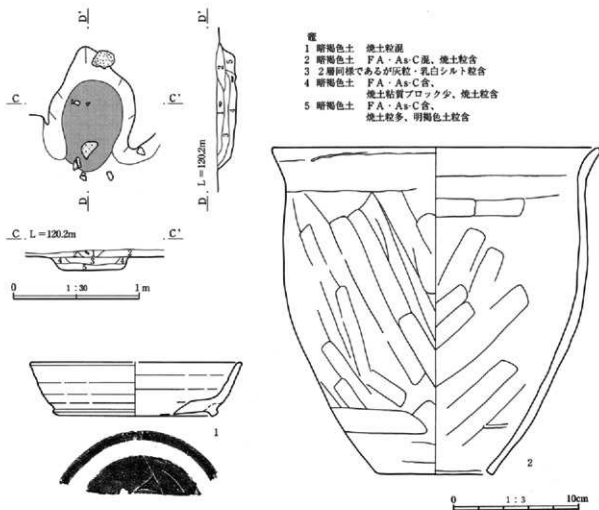
われる。支脚石等は検出されなかったが、煙道部から川原石が出土した。燃焼部からは土師器甌などの土器片が出土した。両袖方向48cm、煙道方向90cmを測る。遺物 土師器甌、須恵器有台坏が出土している。他に、土師器片4.46kg、須恵器片140gが出土。所見 出土遺物から8世紀前半と考えられる。



- 1 暗褐色土 FA・Ae-C層、硬化
- 2 黒褐色土 FA・Ae-C説、黒色粘質土ブロック・明褐色土ブロック混、粘質

第125図 75号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



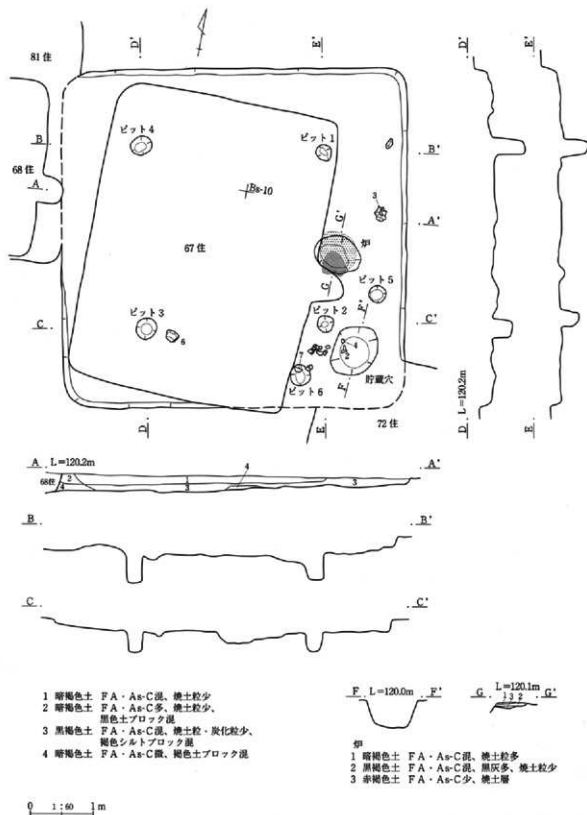
第126図 75号住居跡竈、出土遺物

76号住居跡 (第127・128図、P L23・44)

位置 Br-s-9-10 重複 67・68・72・81号住居と重複している。本住居が67・68・72号住居より古い。81号住居との重複関係は不明。形状 長軸5.5m、短軸5.4mの隅丸方形を呈する。面積 (28.33) m<sup>2</sup> 方位 N-5°-W 床面 遺構確認面から20cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.81mを測る。壁溝 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東に設置。径92cm・深さ42cmの楕円形を呈する。土師器坏・鉢が出土。柱穴 柱穴と思われるピットは6基検出された。ピット1は、径27cm・深さ30cm。ピット2は、径28cm・深さ30cm。ピット3は、径36cm・深さ33cm。ピット4は、径33cm・深さ31cm。ピット5は、径

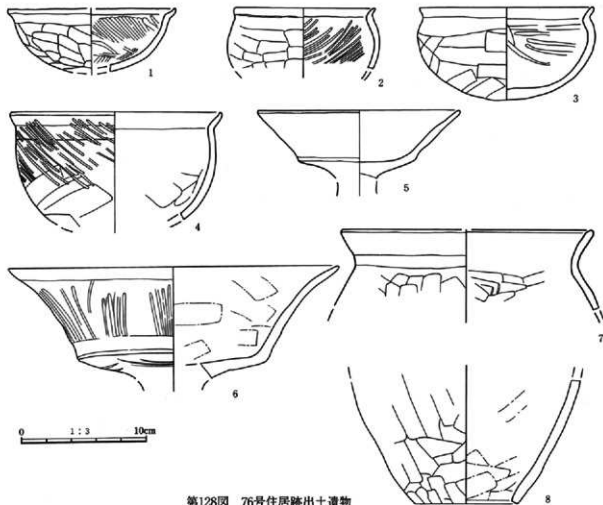
26cm・深さ23cm。ピット6は、径33cm・深さ18cmを測る。竈 東側のほぼ中央部に設置。規模は、径68cm・深さ6cmを測る。遺物 土師器坏・鉢・高坏・甕・瓶が出土している。他に、S字状口縁台付甕などの土師器片430gが出土。所見 住居の半分以上を67号住居によって壊されているため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から5世紀中～後葉と考えられる。





第127図 76号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

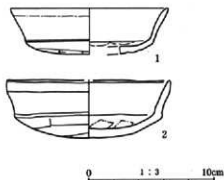


第128図 76号住居跡出土遺物

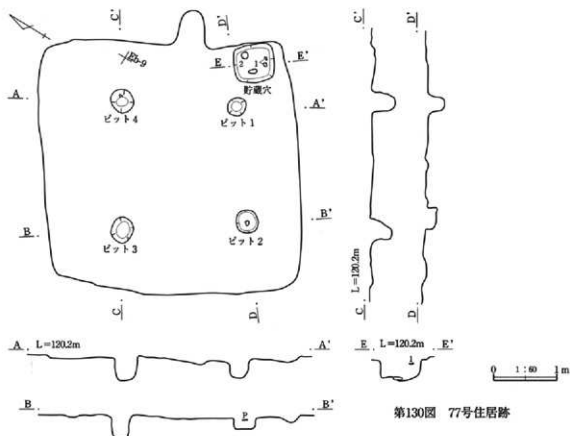
77号住居跡 (第129・130図、P.L23・44)

位置 E c - d - 8 - 9 重複なし。形状 長軸4.1m、短軸3.9mの隅丸方形を呈する。面積 15.77 m<sup>2</sup> 方位 N-64° - E 床面 攪乱のため、確認面は使用面下までおよんでおり、貯蔵穴・柱穴しか検出できなかった。一部検出された床面の標高は平均120.06mを測る。壁溝 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東に設置。長軸67cm・短軸60cm・深さ33cmの隅丸方形を呈する。土師器坏・礫が出土。柱穴 柱穴と思われるピットは4基検出された。ピット1は、径28cm・深さ26cm。ピット2は、径32cm・深さ20cm。ピット3は、径38cm・深さ34cm。ピット4は、径33cm・深さ38cmを測る。竈 東壁面の南寄りに設置されていたと思われる。削平され残存状態は悪いが、焼

土・灰が少量確認された。両袖方向46cm、煙道方向56cmを測る。遺物 土師器坏が出土している。他に、土師器片195gが出土。所見 出土遺物から6世紀中葉と考えられる。



第129図 77号住居跡出土遺物



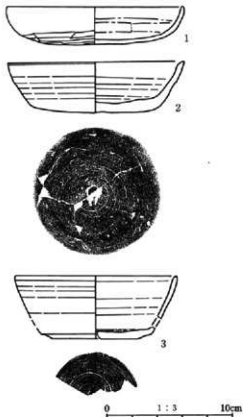
第130図 77号住居跡

78号住居跡 (第131・132図、P.L23・44)

位置 B t・E a-9 重複 73号住居・21号土坑と重複している。本住居が73号住居より新しく、21号土坑より古い。形状 長軸4.2m、短軸3.4mの隅丸長方形を呈する。面積 11.50㎡ 方位 N-90° 床面 遺構確認面から8cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.95mを測る。

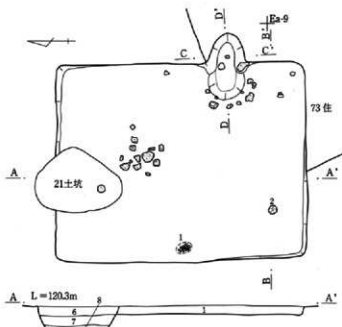
壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。袖部の前からは、被熱し赤化した凝灰岩が出土した。袖部・支脚・天井材などには、凝灰岩が構築材に用いられたと思われる。両袖方向30cm、煙道方向60cmを測る。遺物 土師器片が出土している。他に、土師器片1.57kg、須恵器片272gが出土。

所見 出土遺物から8世紀中葉と考えられる。



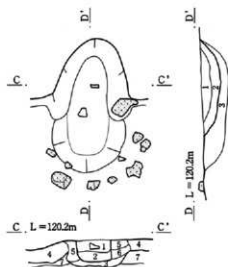
第131図 78号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物



- 1 暗褐色土 FA・As-C密、圧を受ける
- 2 暗褐色土 FA・As-C密、焼土粒少
- 3 黒灰色 灰層
- 4 黒褐色土 焼土粒・炭化粒混
- 5 暗褐色土 FA・As-C含、焼土粒少
- 6 暗褐色土 FA・As-C多、硬化
- 7 暗褐色土 FA・As-C含、焼土粒少、褐色土粒含
- 8 暗褐色土 FA・As-C少、赤褐色質粒混

0 1:60 1m



- 電
- 1 暗褐色土 FA・As-C少、焼土ブロック混
  - 2 暗褐色土 FA・As-C含、焼土粒含
  - 3 暗褐色土 FA・As-C少、焼土ブロック多
  - 4 暗褐色土 FA・As-C少、焼土粒・炭化粒含
  - 5 褐色土 焼土粒・炭化粒少、粘質
  - 6 暗褐色土 FA・As-C少、焼土粒含
  - 7 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒少、褐色土ブロック含

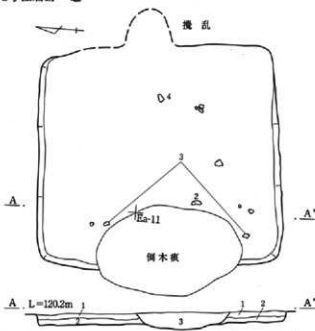
0 1:30 1m

第132図 78号住居跡・竈

79号住居跡 (第133・134図, P L23・44)

位置 B t・E a-10-11 重複 なし。形状 長軸3.8m、短軸3.2mの隅丸方形を呈する。

面積 (10.51) m<sup>2</sup> 方位 N-80°-E 床面 遺構確認面から20cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.00mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面に設置されていたと思われる。攪乱で削平され残存悪いが、焼土・灰が少量確認された。両軸方向 (70) cm、煙道方向 (58) cmを測る。遺物 土師器坏・皿・甕が出土している。他に、土師器片2.93kg、須恵器片380gが出土。所見 攪乱や倒木痕で壊されているため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から7世紀後半と考えられる。

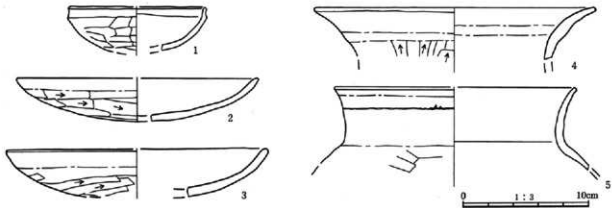


- 1 暗褐色土 FA・As-C多
- 2 黒褐色土 FA・As-C混、粘性有、硬化
- 3 褐色土 黒褐色土ブロック含、明褐色土ブロック混、締まりなし

0 1:60 1m

第133図 79号住居跡

第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構



第134図 79号住居跡出土遺物

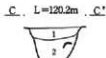
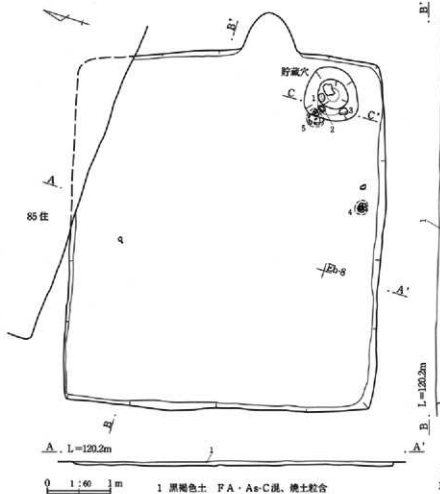
80号住居跡 (第135・136図、P.L24・44)

位置 E a-b-7-8 重複 85号住居と重複している。本住居が古い。形状 長軸5.6m、短軸4.8mの隅丸長方形を呈する。面積 (25.38) m<sup>2</sup> 方位 N-78°-E 床面 遺構確認面から5cm

掘り込んで、床面になる。標高は平均120.00mを測る。壁溝・柱穴 検出されなかった。貯蔵穴 住居の南東に設置。径90cm・深さ72cmの楕円形を呈する。土師器坏が3点出土。竈 東壁面の南寄り

を掘り込んで造られている。削平され残存悪いが、焼土粒・灰が確認された。両袖方向75cm、煙道方向62cmを測る。

遺物 土師器坏・瓶が出土している。他に、土師器片1.09kgが出土。所見出土遺物から6世紀前～中葉と考えられる。

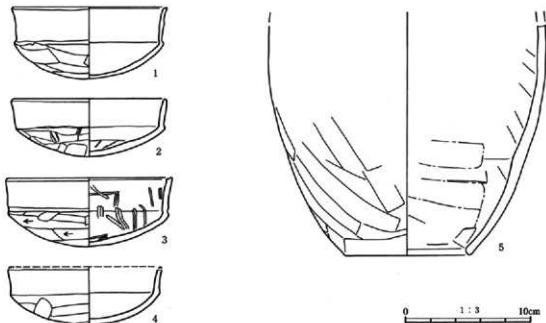


貯蔵穴

- 1 黒褐色土 FA・As-C混、焼土粒含、焼土粒・炭化粒混
- 2 黒褐色土 FA・As-C混、炭化粒

第135図 80号住居跡

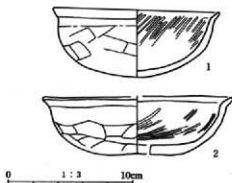
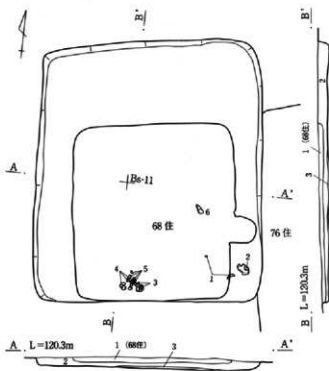
第3章 検出された遺構と遺物



第136図 80号住居跡出土遺物

81号住居跡 (第137・138図、P.L44・45)

位置 B r ~ s - 10 ~ 11 重複 68・76号住居と重複している。本住居が68号住居より古い。76号住居との重複関係は不明。形状 長軸4.1m、短軸3.5mの隅丸長方形を呈する。面積 13.99m<sup>2</sup> 方位 N-2°-W 床面 遺構確認面から20cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.90mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴・炉 検出されなかった。遺物 土師器杯・鉢・甕が出土している。他に土師器片が多量に出土。所見 本住居は、調査時に68号住居と同時に調査したが、出土遺物・土層断面等を検討した結果、別の住居として掲載することにする。出土遺物から5世紀中~後葉と考えられる。

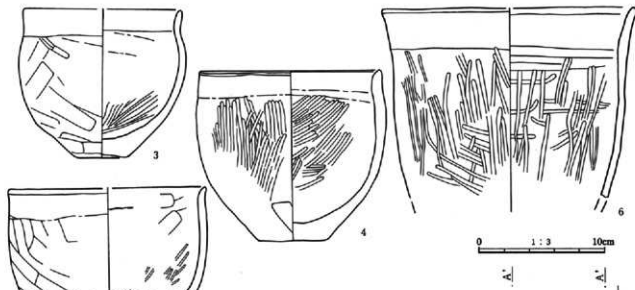


- 1 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒・炭化物少
- 2 暗褐色土 FA・As-C多
- 3 黒褐色土 明褐色土ブロックが帯状に入る



第137図 81号住居跡、出土遺物 (1)

第1節 竪穴住居跡、竪穴状遺構



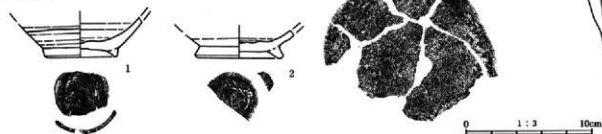
第138図 81号住居跡出土遺物(2)

82号住居跡(第139図、P L24・45)

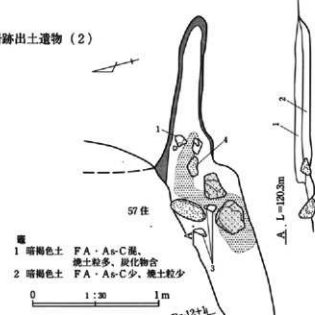
位置 Bq~r-11~12 重複 57号住居と重複している。本住居が新しい。形状 竈のみ検出。

面積 測定不可能。方位 N-74°-W 床面一部分で確認された床面の標高は平均120.15mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面南隅を掘り込んで造られている。煙道部は熱を受け赤化していた。燃焼部には、灰層が確認され、支脚に使用されたとと思われる川原石が出土した。両袖方向30cm、煙道方向110cmを測る。

遺物 須恵器埴、土師器土釜、支脚石(熱を受け割れている)が出土している。他に、土師器片190g、須恵器片350gが出土している。所見 本住居は、調査時に57号住居を先行して調査したため、竈のみの検出になってしまった。出土遺物から10世紀と考えられる。



第139図 82号住居跡竈、出土遺物

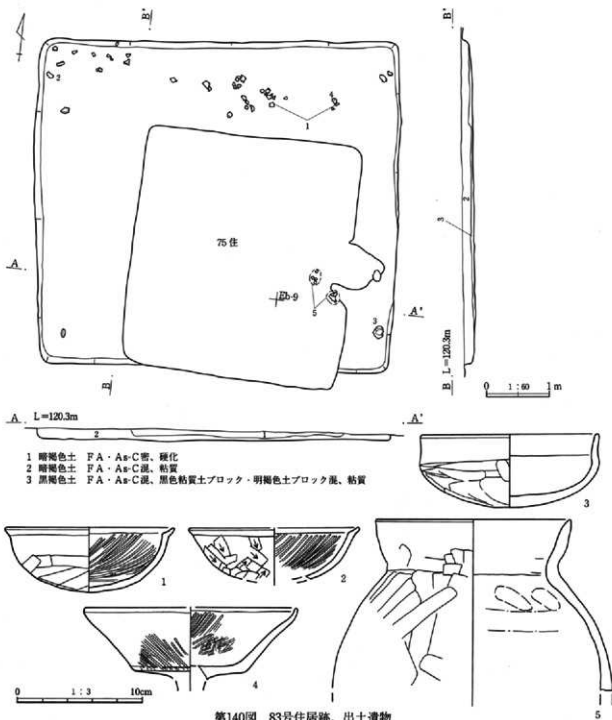


- 1 暗褐色土 FA・As-C 混、  
 焼土較多、炭化物含  
 2 暗褐色土 FA・As-C 少、焼土較少

83号住居跡 (第140図、P L24・45)

位置 E a-b-8~9 重複 75号住居と重複している。本住居が古い。形状 長軸5.7m、短軸5.5mの隅丸方形を呈する。面積 (14.85) m<sup>2</sup> 方位 N-5°-W 床面 遺構確認面から9cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.92mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴・炉 検出されなかった。

遺物 土師器坏・高坏・甕が出土している。他に、S字状口縁台付寛などの土師器片950gが出土。所見 住居の半分以上を75号住居によって壊されているため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から5世紀中~後葉と考えられる。



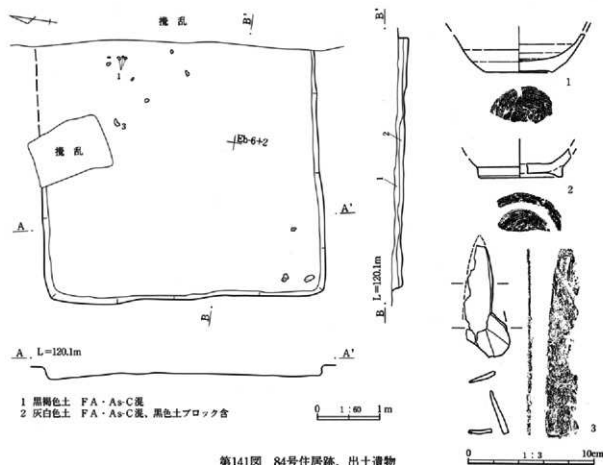
第140図 83号住居跡、出土遺物



## 84号住居跡 (第141図、P L24・45)

位置 E a ~ b - 6 重複なし。形状 長軸 (5.4) m、短軸4.5mを測る。面積 (16.35) m<sup>2</sup>  
 方位 測定不可能。床面 遺構確認面から12cm掘り込んで、床面になる。標高は平均119.81mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竪 攪乱のため、検出されなかったが、東壁面に設

置されていたと思われる。遺物 須恵器環・埴、鉄製品(腰刀)が出土している。他に、土師器片1.12kg、須恵器片520gが出土。所見 東側が攪乱によって壊されているため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から10世紀と考えられる。



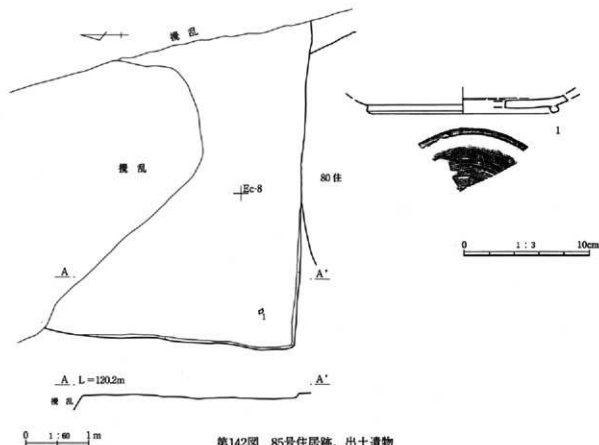
第141図 84号住居跡、出土遺物

## 85号住居跡 (第142図、P L24・45)

位置 E b ~ c - 7 ~ 8 重複 80号住居と重複している。本住居が古い。形状 長軸 (5.3) m、短軸 (4.0) mを測る。面積 (12.08) m<sup>2</sup>  
 方位 測定不可能。床面 遺構確認面から5cm掘り込んで、床面になる。標高は平均120.01mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴・竪 検出されなかった。遺物 須恵器有台坏が出土している。他に、土師器片120g、須恵器片10gが出土。所見 住居の大

部分が攪乱によって壊されているため、全容は明らかにできなかった。出土遺物から8世紀前半と考えられる。

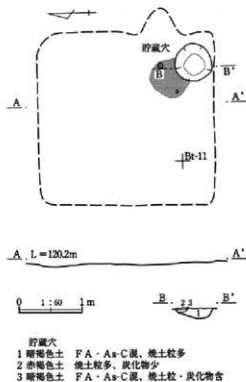
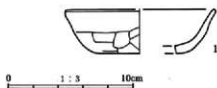
第3章 検出された遺構と遺物



第142図 85号住居跡、出土遺物

86号住居跡 (第143図、P L24・45)

位置 B s ~ t-10~11 重複なし。形状 長軸 (2.8) m、短軸 (2.8) m の隅丸方形を呈する。面積 (7.55) m<sup>2</sup> 方位 N-90° 床面 攪乱のため、確認面は使用面までおよんでおり、貯蔵穴・竈しか検出できなかった。一部検出された床面の標高は平均120.13mを測る。壁溝・貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。竈 東壁面に設置されていたが、残存悪い。焼土・灰の分布から竈と認定した。両袖方向 (50) cm、煙道方向 (40) cmを測る。遺物 土師器坏が出土している。他に、須恵器片80gが出土。所見 出土遺物から10世紀と考えられる。



第143図 86号住居跡、出土遺物

- 貯蔵穴  
 1 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒多  
 2 赤褐色土 焼土粒多、炭化物少  
 3 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒・炭化物含

## (2) 竪穴状遺構

## 1号竪穴状遺構 (第144図、P L 45)

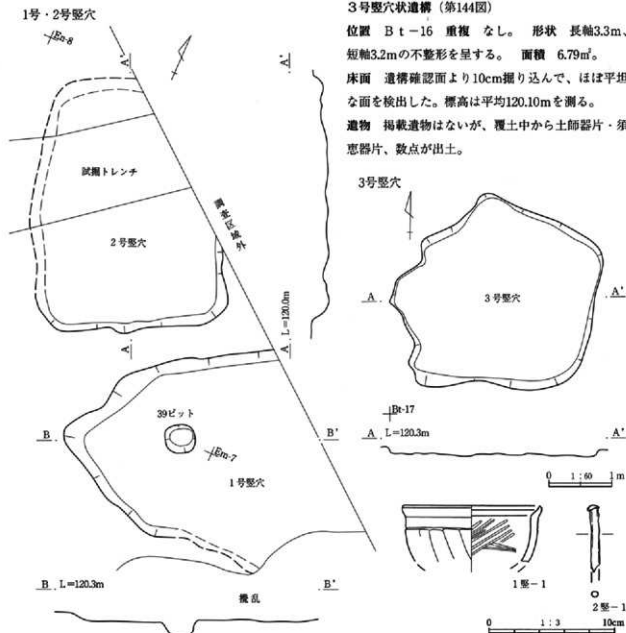
位置 E1-m-6-7 重複 39号ピットと重複。本遺構が古い。形状 長軸5.1m、短軸3.6mの不整形を呈する。面積 8.94 $\text{m}^2$ 。床面 遺構確認面より10cm掘り込んで床面らしい平坦な面を検出した。標高は平均119.80mを測る。遺物 土師器片が出土している。他に土師器片360gが出土。

## 2号竪穴状遺構 (第144図、P L 45)

位置 Em-7 重複 なし。形状 長軸4.0m、短軸3.0mの隅丸長方形を呈する。面積 8.37 $\text{m}^2$ 。床面 遺構確認面より30cm掘り込んで、ほぼ平坦な面を検出した。標高は平均119.50mを測る。遺物 鉄釘が出土している。他に土師器片110g、須恵器片10gが出土。

## 3号竪穴状遺構 (第144図)

位置 Bt-16 重複 なし。形状 長軸3.3m、短軸3.2mの不整形を呈する。面積 6.79 $\text{m}^2$ 。床面 遺構確認面より10cm掘り込んで、ほぼ平坦な面を検出した。標高は平均120.10mを測る。遺物 掲載遺物はないが、覆土中から土師器片・須恵器片、数点が出土。



第144図 1～3号竪穴状遺構、出土遺物

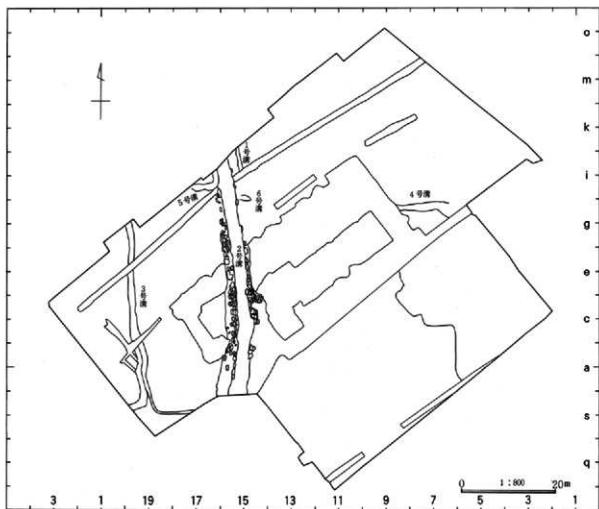
## 第2節 溝・竈構築材採掘痕群

### 溝・竈構築材採掘痕群の概要

本遺跡の調査で検出された溝は、6条である。2号溝は、上幅約3.5m、深さ約2.0mの薬研堀状の古代の溝である。上流の河川（古利根川）等の水源地から取水し、中・下流の水田域を潤した用水路と思われる。2号溝の走向方向南約1kmには上野国府推定城が存在し、何らかの関連も考えられる。3号溝は、中～近世の館（屋敷）に伴う区画溝と考えられたが、内部施設等は検出されなかった。

また、2号溝の両端で検出された竈構築材採掘痕群も本節で報告する。竈構築材採掘痕は2号溝両側で約130基検出され、竈の構築材（凝灰岩）を採掘

した痕である。本遺跡のように、大規模な竈構築材採掘痕群とその構築材を用いた竈を持つ住居群がセットで検出されたのは、あまり例がなく、貴重な発見である。なお、2号溝と竈構築材採掘痕群の平面図は付図1を参照されたい。



第145図 溝・竈構築材採掘痕群全体図

## (1) 溝

## 1号溝 (第146図)

位置 E j-15-E i-15 重複 なし。

規模 確認全長4.64m、上端0.56~0.88m、下端0.24~0.40m、深さ0.10~0.30mを測る。走向 北から南へ走向(N-10°-W) 断面形 法面の緩やかな椀状を呈する。覆土 灰褐色シルトブロックを少量含む黒褐色土で、下層に砂が堆積していた。遺物 掲載遺物はないが、覆土から土師器片60g、須恵器片60gが出土している。所見 出土遺物少なく、覆土中の軽石等も特定できなかったため、時期は不明。

## 2号溝 (付図1・第147~149図、P L 25・45・46)

位置 E i-15-B t-14・15 重複 竈構築材採掘痕群、1号井戸、5・6号溝と重複している。本遺構が古い。規模 確認全長45.92m、上端2.36~3.44m、下端0.20~0.68m、深さ1.82~2.04mを測る。走向 北から南へ走向(N-9°-W)、E c-15 Gでやや西(N-8°-E)に走向を変える。

断面形 薬研壺状(V字状)を呈する。覆土 上層はAs-Bを含む暗褐色土、下層はシルト・砂・小礫を含む褐灰色土。遺物 土師器高坏・甗、須恵器坏・皿・埴・高坏・甕・羽釜、灰軸陶器皿・埴・長頸壺、陶器甕、砥石、瓦、鉄製品が出土している。他に、覆土から土師器片8.06kg、須恵器片30.82kgが出土。所見 第5章第1節では「2号溝の層位については、FAより上位で、As-Bより下位にあると考えられる」とある。したがって、時期は古墳時代後期~平安時代と考えられる。2号溝は、土層断面・覆土・出土遺物等から、2つの溝があったと考えられる。西側に上端1.24~3.60m、下端0.32~0.40m、深さ0.80mを測る溝があり、その溝を掘り直して2号溝が造られたと想定される。底部には砂や礫が堆積し、埋没以前は水が流れていたと考えられ、水田に伴う用水路と思われる。

## 3号溝 (第146・150図、P L 25・46)

位置 E g-19-B s-17・18・19 重複 31・32・33・38・43・44・45・48・49号住居と重複している。本遺構が新しい。規模 確認全長67.76m、上端0.36~2.00m、下端0.20~0.80m、深さ0.27~0.90mを測る。走向 北から南へ走向で確認され、E a-19Gで二股に分かれる。主流は北から南へ走向(N-9°-W)で、B s-19Gで東から西へ走向(N-58°-E)を変える。もう一つの溝は、E a-19Gで二股に分かれ、北から南へ走向(N-24°-W)で、B s-18Gで西から東へ走向(N-89°-E)を変える。断面形 法面の緩やかなV字状を呈する。覆土 As-A・シルトブロックを含む淡黄褐色シルト。遺物 須恵器広口壺、陶器碗・皿・染付皿、青磁碗・皿、瓦、鉄製品(横)が出土している。また、覆土から土師器片1.71kg、須恵器片2.33kg、陶磁器片1.44kgが出土。所見 出土遺物から、中~近世と考えられる。溝の形状がV字状で、ほぼ方形に曲がって走向していることなどから、館(屋敷)に伴う区画溝と考えられたが、内部施設等は検出されず、溝の用途は不明である。

## 4号溝 (第147・150図、P L 25・46)

位置 E g-8-E g-6 重複 37・41号ピットと重複している。本遺構が新しい。規模 確認全長11.44m、上端0.88~2.84m、下端0.44~2.40m、深さ0.16~0.28mを測る。走向 西から東へ走向(N-89°-E)で、東端で消滅する。断面形 法面の緩やかな椀状を呈する。覆土 FA・As-Cを含む暗褐色土で、下層に砂質土が堆積していた。遺物 軟質陶器鉢が出土している。他に土師器片980g、須恵器片370gが出土。所見 時期は古墳~平安時代か。

## 5号溝 (第147図、P L 26)

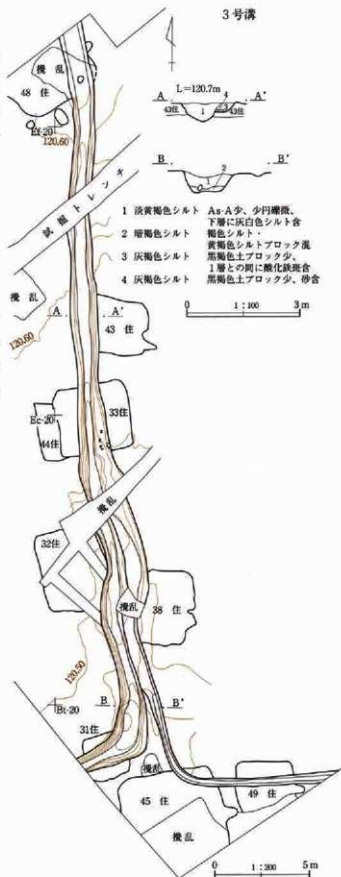
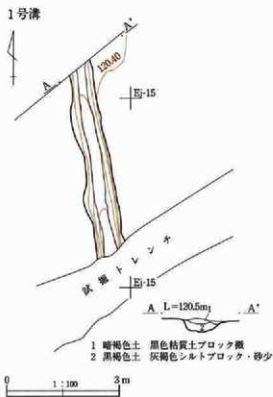
位置 E h-17-E h-16 重複 2号溝と重複している。本遺構が新しい。規模 確認全長4.32m、

### 第3章 検出された遺構と遺物

上端0.96～1.48m、下端0.64～1.44m、深さ0.20～0.22mを測る。走向 西から東へ走向(N-89°-W)で、2号溝に合流する。断面形 法面の緩やかなV字状を呈する。覆土 As-Bを含む暗褐色土。遺物 掲載遺物はないが、覆土から土師器片20gが出土。所見 時期は、As-B降下以降と考えられる。

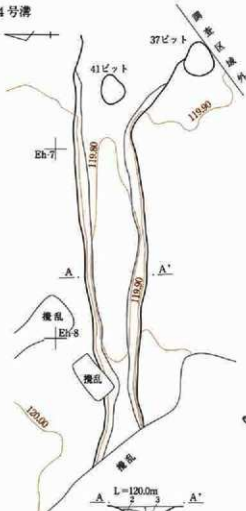
#### 6号溝 (第147図、P L26)

位置 E g-14-E h-15 重複 2号溝と重複している。本遺構が新しい。規模 確認全長2.40m、上端0.88～1.08m、下端0.60～0.72m、深さ0.42～0.52mを測る。走向 東から西へ走向(N-74°-W)で、2号溝に合流する。断面形 法面の緩やかな皿状を呈する。覆土 As-Bを含む暗褐色土。遺物 掲載遺物はないが、覆土から土師器片10gが出土。所見 時期は、As-B降下以降と考えられる。



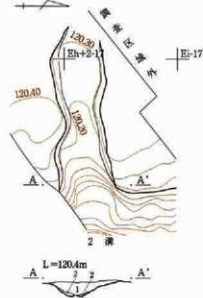
第146図 1・3号溝

4号溝



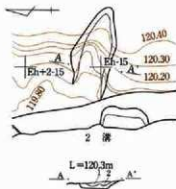
- 1 暗褐色土 FA・As-C含、粘質
- 2 暗褐色土 FA・As-C少、砂質
- 3 暗褐色土 FA・As-C微、灰色シルト混

5号溝

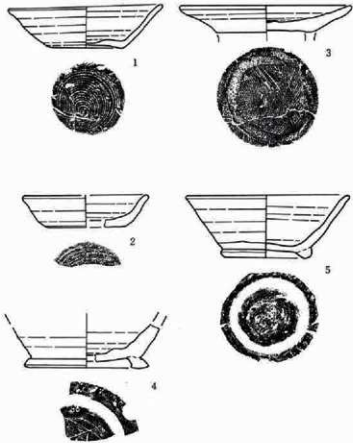


- 1 暗褐色土 As-B混
- 2 暗褐色土 As-B少、明褐色土ブロック混、粘性有

6号溝

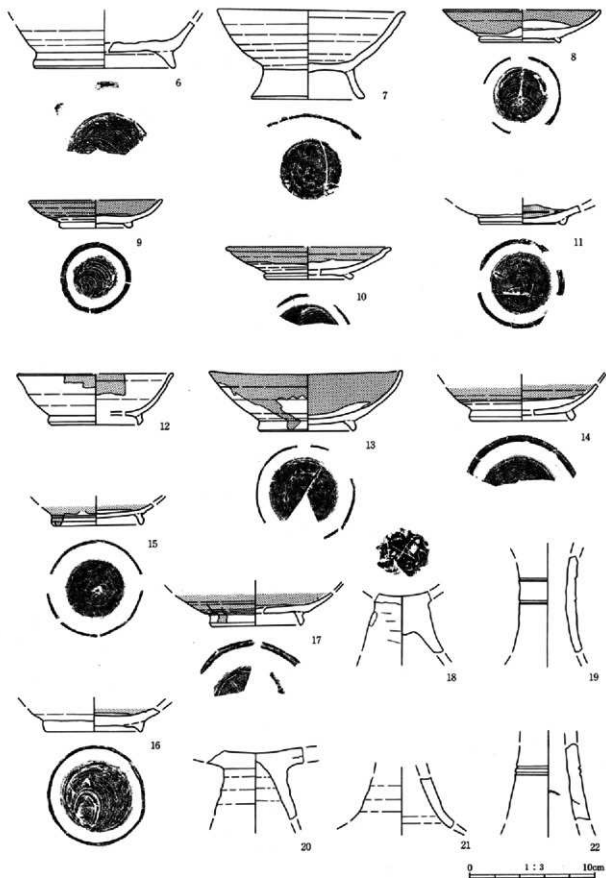


- 1 暗褐色土 As-B混
- 2 暗褐色土 灰白色土ブロック含



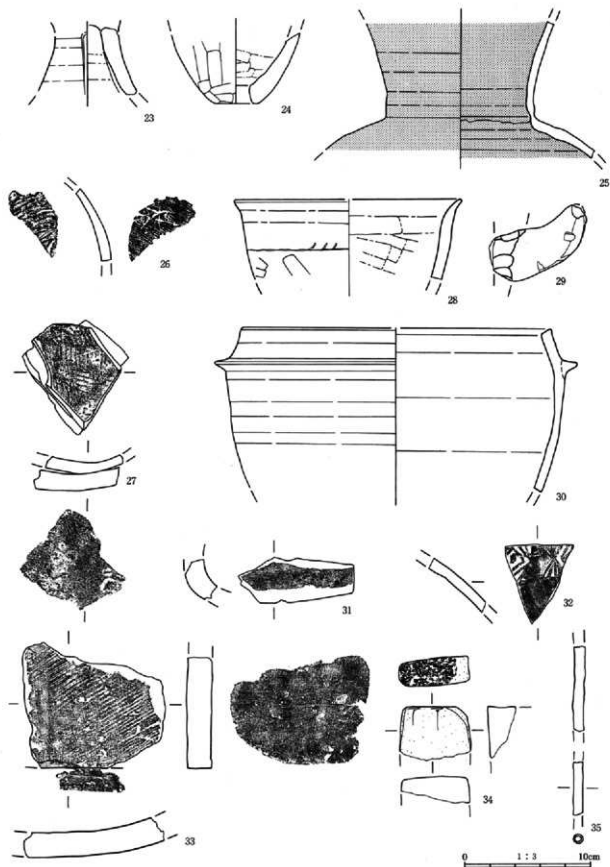
第147図 4～6号溝、2号溝出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



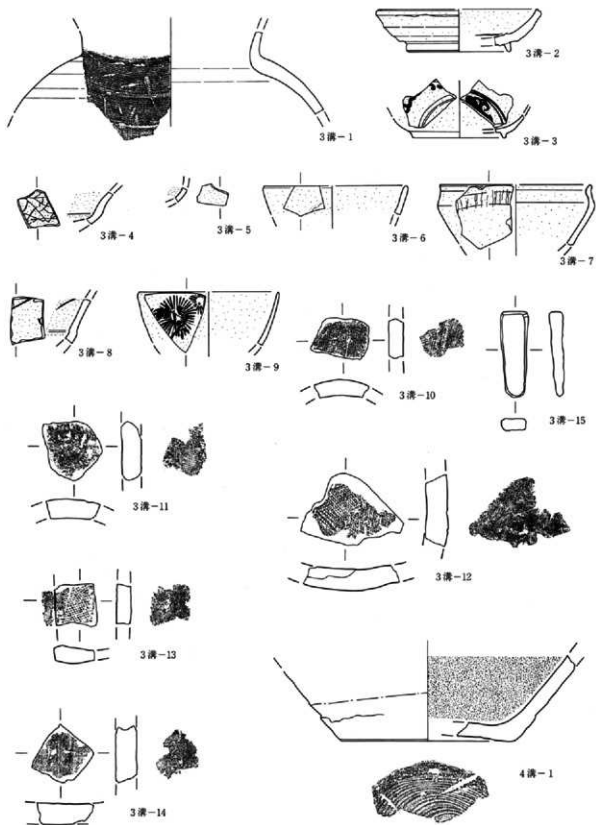
第148図 2号溝出土遺物(2)





第149図 2号溝出土遺物(3)

第3章 検出された遺構と遺物



0 1:3 10cm

第150図 3・4号溝出土遺物

## (2) 竈構築材採掘痕群

## 1 竈構築材採掘痕群 (付図1、P L26)

位置 B t-14-16からE i-15・16で、南北に走向する2号溝の両側に、幾重にも重複して採掘された痕跡130基が検出された。重複 2号溝と重複している。2号溝は、2回掘削されており、古い方の溝より、本遺構が新しく、薬研形状の新しい溝より古い。規模 長軸1m以上39基、1m未満～0.8m50基、0.8m未満～0.6m29基、0.6m未満12基。平均値は、長軸が0.88m、短軸0.36m、深さ0.15m。検出面積は約93㎡にも及ぶ。掘り方 平面形が長方形を呈するもの128基、正方形を呈するもの2基。覆土 As-Bを含む暗褐色土。遺物 掲載遺物はないが、覆土から土師器・須恵器片が出土。

採掘方法 採り残しや底面の切れ込みから判断すると、垂直方向に切れ込みを入れた後に、水平方向に切り進んだと考えられる。また、ほとんどの採掘痕の長軸が溝に沿って並んでいることから、短軸を溝に並行に採掘するより、切れ込む作業量が少なく、効率を図ったと言える。さらに、採掘痕が階段状に幾重にも重なっていることから、連続して切り出しを行っていることが看取できた。所見 科学的な根拠は得られていないが、本遺跡で検出されている奈良・平安時代の竪穴住居跡の竈に使用する構築材を採掘した痕と思われる。採掘時期を決定する遺物はないが、竈構築材を使用した竈を持つ竪穴住居跡が奈良・平安時代であることから、採掘時期もほぼ同時期と考えられる。竈構築材の石材等の詳細は、第5章付編第2節を参照されたい。

## 2 竈構築材採り残し痕① (第151図、P L26)

位置 E c-15 重複なし。規模 長軸0.84m、短軸0.28m、深さ0.12mを測る。掘り方 平面形は長方形を呈する。覆土 As-Bを含む暗褐色土。遺物 なし。採掘方法 古い方の溝の底部で平坦化された面を利用した平面採掘。所見 2号溝の西側平らな面から竈の構築材を採掘しようとした痕

(竈構築材採り残し痕)である。垂直方向に切れ込みを入れた後に、何らかの原因で構築材の切り出しを放棄したものとと思われる。

## 3 竈構築材採り残し痕② (第151図、P L26)

位置 E e-14 重複なし。規模 長軸0.80m、短軸0.36m、深さ0.21mを測る。掘り方 平面形はほぼ長方形を呈する。覆土 As-Bを含む暗褐色土。遺物 なし。採掘方法 新しい方の溝の壁面を利用して垂直に切り出す採掘方法。所見 2号溝の東側の縁から竈の構築材を採掘しようとした痕(竈構築材採り残し痕)である。垂直方向と水平方向に途中までの切れ込みを入れた後に、何らかの原因で構築材の切り出しを放棄したものとと思われる。調査時に、移植ごてを用いて採掘したら、数分で構築材が採取できた。



第151図 竈構築材採り残し痕①・②

### 第3節 井戸、土坑、ピット

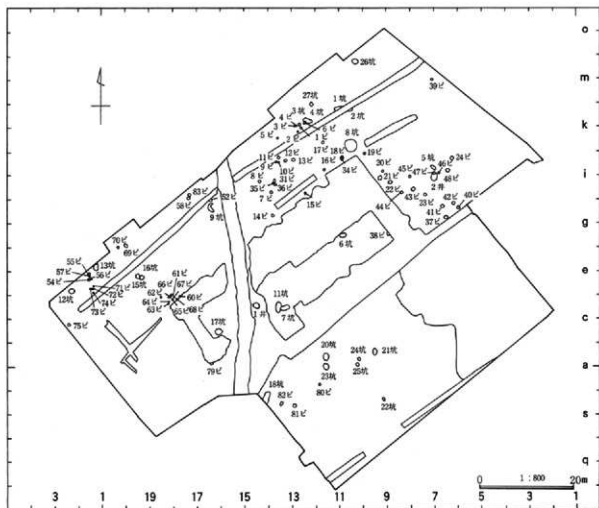
#### 井戸・土坑・ピットの概要

本遺跡で検出された井戸は、2基である。2基とも、人力で約1m掘削した後、完掘するには危険を伴うので、業者に掘削工事・調査を委託した。そのため、所見は古井戸掘削調査報告書を参考にした。

本遺跡で検出された土坑は、24基である。土坑の多くは時期認定の決め手になる遺物が含まれていなかったため、覆土や形状から時期を判別したが、概ね古墳時代から平安時代（中世が6基、1・2・6・7・8・11号土坑）の所産と思われる。また、26・27号土坑は覆土から住居の竈の残骸かとも思われ、調査時は焼土遺構と名付けたが、住居プランも

はっきりせず、遺物もほとんど出土しなかったため、土坑扱いとした。なお、10・14・19号土坑（計3基）は欠番である。

また、本遺跡で検出されたピットは、66基である。ピットのほとんどは覆土から、概ね古墳時代から平安時代の所産と思われる。25～30・32・33・49～51・53・59・76～78号ピット（計16基）は欠番である。ピットは、掲載遺物がある6基を報告する。土坑は、24基すべてを報告する。詳細については計測表を参照されたい。



第152図 井戸・土坑・ピット全体図

## (1) 井戸

1号井戸 (第153・154図、P.L27・46)

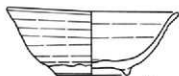
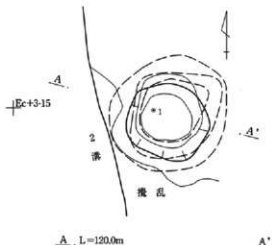
位置 E c-14グリッド 重複 竈構築材採掘痕と重複している。規模 長軸×短軸 上面1.32m×1.16m、下面1.18m×1.05m 深さ 4.47m

掘り方 地山井筒円筒型。内部施設 確認されなかった。覆土 上層は明褐色土ブロックを多量に含む褐色砂質土(人為的埋土)、中層は井壁崩落土を含む灰色シルト(自然埋土)、下層は井壁崩落土(軽石を多量に含む)と暗灰色シルト(自然堆積土)

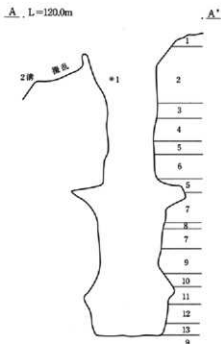
遺物 土師器壺、須恵器杯・埴が出土している。他に、土師器片290g、須恵器片620g、礫が出土。

所見 「アグリ」の大きさから長期間使用した井戸と思われる。湧水量については、湧水層の軽石層の荒れ方の少なさから、少なかったと思われる。「タナ落ち」は、帯水時に軟らかい土砂にて埋め戻し、その土砂が長い年月に取締るとときに「アグリ」となっていた上の層を引きはがして起きたものと思われる。出土遺物・覆土から、9世紀後半～10世紀前半と思われる。

1号井戸



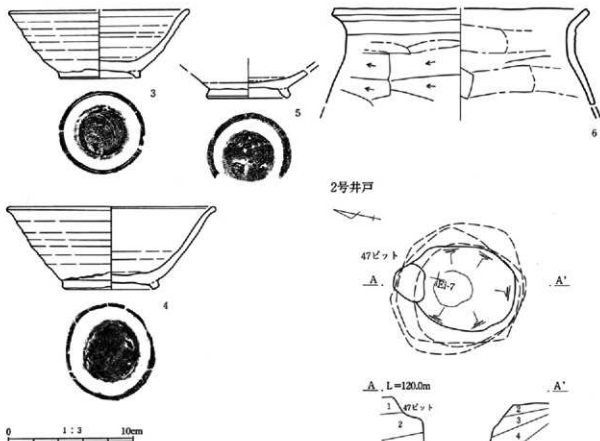
0 1:3 10cm



- 1 褐灰色土 火山灰砂
- 2 灰褐色土 火山灰砂
- 3 褐色土 火山灰細砂
- 4 褐色土 火山灰砂(固結)
- 5 灰色土 火山灰砂(固結)
- 6 灰色土 火山灰砂(固結)、角礫混
- 7 灰褐色シルト
- 8 褐色シルト
- 9 崩落土層(黒)
- 10 暗灰色シルト
- 11 暗灰色砂質シルト 軽石混
- 12 暗灰色シルト 白色軽石混、軟質
- 13 白色軽石

第153図 1号井戸、出土遺物(1)

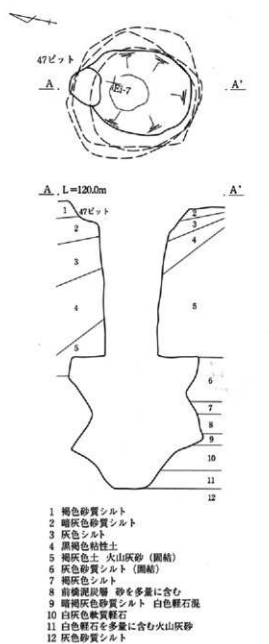
第3章 検出された遺構と遺物



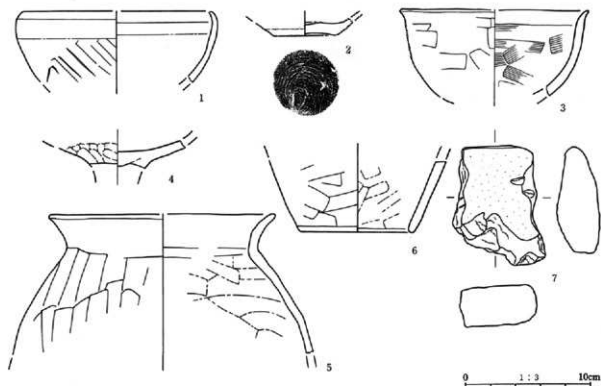
第154図 1号井戸出土遺物(2)

2号井戸 (第155・156図、P L27・46・47)  
 位置 E h-6 グリッド 重複 47号ピットと重複している。本遺構が古い。規模 長軸×短軸 上面1.76m×1.34m、下面0.61m×0.56m 深さ 4.40m 掘り方 地山井筒朝顔型。内部施設 確認されなかった。覆土 上層は黒色火山灰砂土(人為的埋土)、中層は井壁崩落土(褐灰色シルト)と黒褐色土(人為的埋土)、下層は白色軽石粒混じりの青灰色シルト(自然堆積土)。遺物 土師器坏・器台・甕・甔、須恵器碗、磨石が出土している。他に、土師器片930g、須恵器片460g、碟が多数出土。所見 湧水量については、湧水層の軽石層の荒れ方の少なから、少なかったと思われる。井壁調査時、2.8mの深さで東西方向に地層の段差を検出したが、古い時代の自然河道(縄文晩期～弥生前期)と思われる。出土遺物・覆土から、5世紀後半～6世紀前半と思われる。

2号井戸



第155図 2号井戸



第156図 2号井戸出土遺物

(2) 土坑 (第157~162図、PL27・28・47)

1号土坑



1 暗褐色土 As-B混、焼土粒含

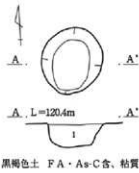
1 黒褐色土 FA・As-C多、粘質  
2 黒褐色土 FA・As-C含、粘質

2号土坑



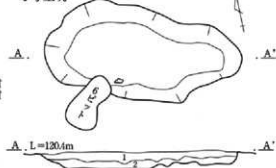
1 暗褐色土 As-B混、焼土粒含

3号土坑



1 黒褐色土 FA・As-C含、粘質

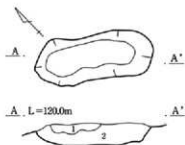
4号土坑



第157図 1~4号土坑

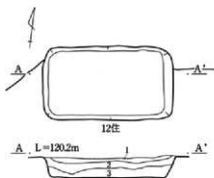
第3章 検出された遺構と遺物

5号土坑



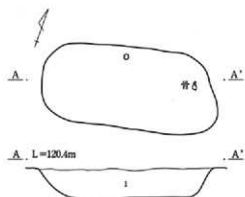
- 1 暗褐色土 FA・As・C多、  
焼土粒・炭化物含、粘質
- 2 暗褐色土 FA・As・C含、粘質

6号土坑

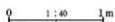


- 1 暗褐色土 As・B多
- 2 暗褐色土 As・B含、黒色土ブロック混
- 3 暗褐色土 As・B少

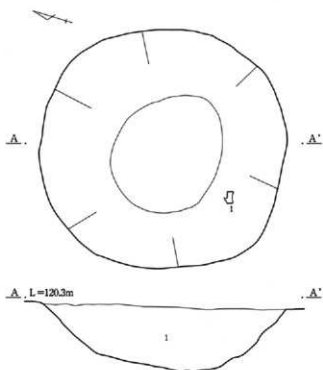
7号土坑



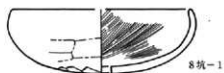
- 1 暗褐色土 As・B混、粘質



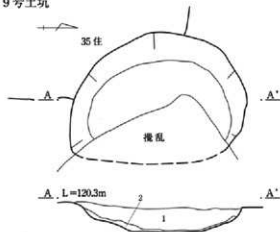
8号土坑



- 1 暗褐色土 As・B混、焼土少、砂質



9号土坑

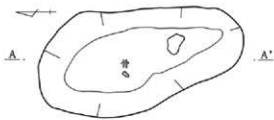


- 1 黒褐色土 FA・As・C混、砂粒
- 2 黒褐色土 FA・As・C少、  
明褐色土ブロック含、粘性有

第158図 5～9号土坑、出土遺物



11号土坑

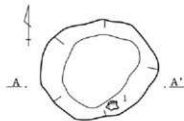


A, L=120.2m

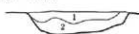


- 1 暗褐色土 A<sub>s</sub>-B多、淡褐色・黄色シルトブロック混
- 2 暗褐色土 A<sub>s</sub>-B含、淡褐色シルトブロック少
- 3 褐色土 A<sub>s</sub>-B少、淡褐色シルトブロック多

12号土坑

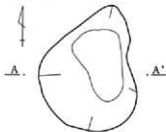


A, L=120.7m



- 1 暗褐色土 FA・As-C多
- 2 暗褐色土 FA・As-C混、明褐色土ブロック・機土脱合

13号土坑

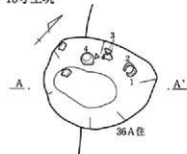


A, L=120.7m



- 1 暗褐色土 FA・As-C混、褐色土ブロック、明褐色土ブロック含
- 2 暗褐色土 FA・As-C混、粘質
- 3 褐色土 粘質

15号土坑



A, L=120.7m



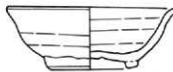
12坑-1



15坑-1



15坑-2



15坑-3



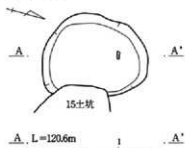
15坑-4



第159図 11~13・15号土坑、出土遺物

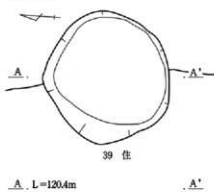
第3章 検出された遺構と遺物

16号土坑



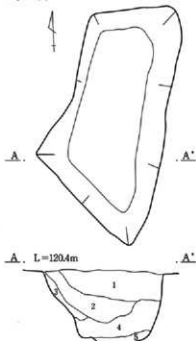
1 黒褐色土 FA・As・C混、粘質

17号土坑



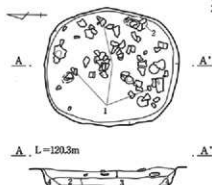
1 暗褐色土 FA・As・C多  
2 暗褐色土 FA・As・C少、焼土粒含

18号土坑



1 暗褐色土 FA・As・C混、明褐色土粒含  
2 暗褐色土 褐色土粒多、進山褐灰ブロック含  
3 褐色土 しまり無  
4 暗褐色土 褐色土粒・ブロック混  
5 褐色土 明褐色土粒・ブロック混

20号土坑

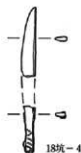
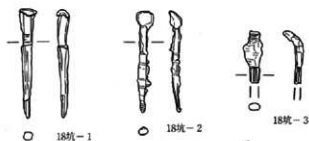


1 暗褐色土 FA・As・C混、炭化物混、  
下層に暗褐色粘質層含  
2 暗褐色土 FA・As・C含、炭化粒含、焼土粒少  
3 暗褐色土 FA・As・C少、黒色粘質土ブロック混、  
炭化粒少、焼土粒微  
4 暗褐色土 FA・As・C混、褐色土粒多

21号土坑



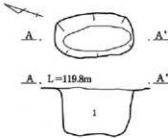
1 暗褐色土 FA・As・C多、礫化  
2 暗褐色土 FA・As・C含、焼土粒・褐色土粒含  
3 暗褐色土 FA・As・C少、赤褐色砂質粒混



第160図 16~18・20・21号土坑、出土遺物

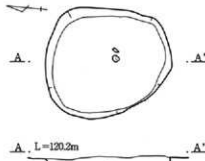
第3節 井戸、土坑、ピット

22号土坑



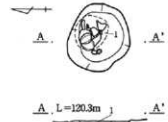
1 黒褐色土 FA・As・C混、粘質

23号土坑



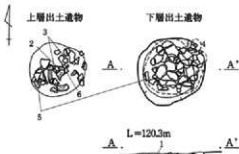
1 暗褐色土 FA・As・C混、炭化粒・焼土粒混  
2 黒褐色土 炭化物含、粘質

24号土坑



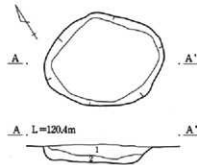
1 赤褐色土 焼土多、灰・炭化物含  
2 暗褐色土 FA・As・C混、  
焼土・炭化物含

25号土坑



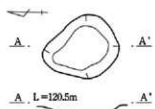
1 暗褐色土 FA・As・C混、焼土粒多、炭化物含  
2 暗褐色土 FA・As・C少、焼土粒・炭化粒少

26号土坑



1 暗褐色土 FA・As・C混、焼土粒多  
2 黒褐色土 焼土粒含

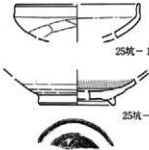
27号土坑



0 1:40 1m



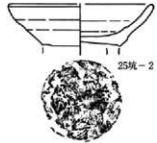
24坑-1



25坑-1

25坑-3

25坑-4



25坑-2



25坑-5

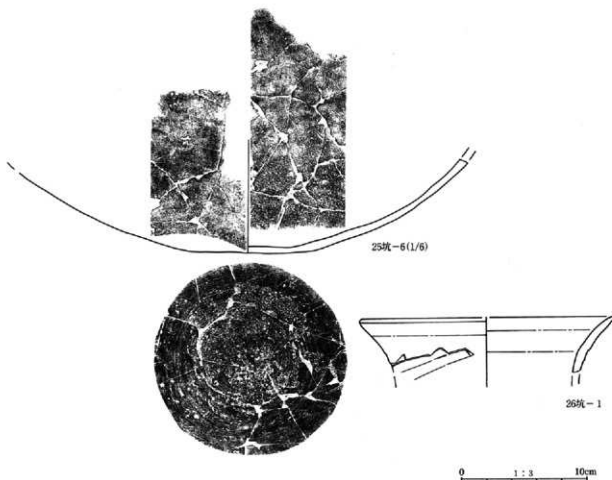


24坑-1 (1/6)

0 1:3 10cm

第161图 22~27号土坑、出土遺物 (1)

第3章 検出された遺構と遺物



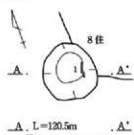
第162図 25・26号土坑出土遺物(2)

第2表 土坑計測表

番号	位置(グリッド)	形状	規模(長横×短横×高さ)	長軸方位	出土遺物(残存遺物は除く)	層土	重現関係
1	2A-10・11	楕丸長方形	1.71×0.83×0.66	N-87°-W	土師器片10g	As-B層土	なし
2	2B-10	楕丸長方形	1.28×0.54×0.36	N-85°-E	なし	As-B層土	なし
3	2B-12	円形	0.72×0.68×0.28		土師器片10g	FA・As-C層土	なし
4	2A-12	楕丸長方形	2.16×1.04×0.19	N-77°-W	土師器片140g	FA・As-C層土	なし
5	2B-7	楕丸長方形	1.24×0.52×0.25	N-68°-W	土師器片10g	FA・As-C層土	12号柱
6	2B-10	楕丸長方形	1.48×0.68×0.21	N-82°-E	土師器片50g	As-B層土	なし
7	2C-13	楕丸長方形	1.92×0.92×0.33	N-83°-E	両面	As-B層土	15号柱
8	2B-10	円形	2.68×2.64×0.66		土師器片1.1kg, 須恵器片50g	As-B層土	なし
9	2E-16	不整形	1.92×1.52×0.27	N-23°-W	土師器片80g, 須恵器片150g	FA・As-C層土	26号柱
11	2C-13	不整形	2.24×1.08×0.44	N-3°-E	土師器片160g	As-B層土	15号柱
12	2H-2	楕円形	1.26×1.14×0.23	N-78°-E	土師器片90g, 須恵器片40g	FA・As-C層土	なし
13	2E-1	不整形	1.36×1.08×0.44	N-17°-E	なし	FA・As-C層土	なし
15	2D-19	楕円形	1.20×0.96×0.38	N-45°-E	土師器片220g, 須恵器片170g	FA・As-C層土	16号土坑
16	2D-19	楕円形	1.14×0.88×0.06	N-24°-E	土師器片50g, 須恵器片10g	FA・As-C層土	15号土坑
17	2B-16	楕円形	1.42×1.36×0.30	N-9°-E	土師器片30g	FA・As-C層土	20号柱
18	2B-14	方形	2.56×1.28×0.80	N-13°-E	土師器片120g, 須恵器片180g	FA・As-C層土	なし
20	2A-11	楕丸方形	1.48×1.22×0.60	N-4°-E	土師器片270g, 須恵器片3.34kg	FA・As-C層土	なし
21	2A-9	楕円形	1.40×1.02×0.45	N-12°-E	礎1点	FA・As-C層土	28号柱
22	2B-9	楕丸方形	0.84×0.64×0.51	N-17°-W	土師器片50g	FA・As-C層土	なし
23	2B-E-11	楕円形	1.40×1.16×0.29	N-67°-W	土師器片160g, 須恵器片30g	FA・As-C層土	なし
24	2A-10	楕円形	0.80×0.68×0.28	N-48°-W	土師器片65g, 須恵器片80g	FA・As-C層土	なし
25	2A-10	楕丸方形	0.88×0.68×0.34	N-41°-E	土師器片120g, 須恵器片2.73kg	FA・As-C層土	なし
26	2Bm-10	楕円形	1.28×1.04×0.19	N-75°-W	土師器片270g	FA・As-C層土	なし
27	2E-12	楕円形	0.88×0.68×0.11	N-15°-W	なし	FA・As-C層土	なし

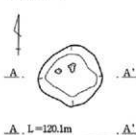
(3) ピット (第163図, PL28・47)

8号ピット



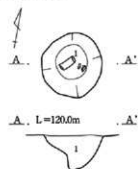
- 1 暗褐色土 FA・As-C混、粘質  
2 黒褐色土 FA・As-C含、粘質

22号ピット



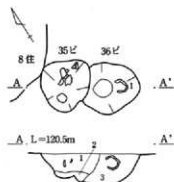
- 1 暗褐色土 FA・As-C混、粘質  
2 暗褐色土 FA・As-C混、砂含、粘質

24号ピット



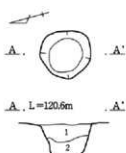
- 1 暗褐色土 FA・As-C混、砂含、粘質

35号・36号ピット



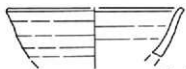
- 1 暗褐色土 FA・As-C混、焼土粒混  
2 暗褐色土 FA・As-C少、  
黒色粘質土ブロック含  
3 暗褐色土 FA・As-C含、焼土粒・  
黒色粘質土ブロック含

54号ピット



- 1 暗褐色土 FA・As-C混、少砂多  
2 暗褐色土 FA・As-C含、  
褐色土ブロック混

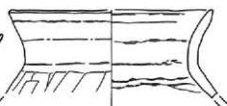
0 1:40 1m



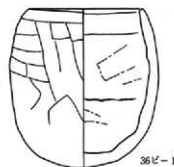
8ピ-1



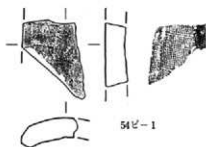
22ピ-1



24ピ-1



36ピ-1



54ピ-1

0 1:3 10cm

第163図 8・22・24・35・36・54号ピット、出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

第3表 ビット計画表

番号	位置(グリッド)	形 状	規模(長軸×短軸×高さ)	長軸方位	出土遺物(構造物は除く)	層 土	遺構関係
1	Ej-12	円形	0.36m×0.36m×0.12m		なし	FA・AsC層土	
2	Ej-12	円形	0.36m×0.32m×0.15m		遺器部片60g	FA・AsC層土	
3	Ea-12	円形	0.32m×0.28m×0.12m		なし	FA・AsC層土	
4	Ea-12	円形	0.32m×0.28m×0.16m		なし	FA・AsC層土	
5	Ej-13	楕円形	0.44m×0.52m×0.18m	N-10°-W	なし	FA・AsC層土	
6	Ea-12	楕円形	0.26m×0.48m×0.26m	N-21°-E	なし	FA・AsC層土	4号土坑
7	Eh-13	円形	0.64m×0.64m×0.16m		なし	FA・AsC層土	
8	Eh-14	楕円形	0.68m×0.60m×0.19m	(N-10°-W)	なし	FA・AsC層土	8号住居
9	Ej-13	円形	0.36m×0.36m×0.17m		なし	FA・AsC層土	
10	Ej-13	円形	0.40m×0.36m×0.13m		なし	FA・AsC層土	
11	Ej-13	楕円形	0.64m×0.48m×0.22m	N-87°-W	なし	FA・AsC層土	
12	Ej-13	楕円形	0.72m×0.52m×0.16m	(N-71°-E)	なし	FA・AsC層土	
13	Ej-12	楕円形	0.80m×0.68m×0.20m	N-88°-E	なし	FA・AsC層土	
14	Eg-13	楕円形	0.52m×0.44m×0.15m	N-62°-E	なし	FA・AsC層土	
15	Eh-12	楕円形	0.44m×0.36m×0.06m	N-56°-W	なし	FA・AsC層土	
16	Ej-11	楕円形	0.60m×0.52m×0.40m	N-28°-E	土師器片140g	FA・AsC層土	
17	Ej-11	円形	0.64m×0.60m×0.42m		土師器片20g	FA・AsC層土	
18	Ej-10	楕円形	0.84m×0.76m×0.36m	N-12°-E	土師器片130g	FA・AsC層土	34号ビット
19	Ej-9	円形	0.52m×0.48m×0.26m		なし	FA・AsC層土	
20	Ej-9	円形	0.44m×0.40m×0.28m		なし	FA・AsC層土	
21	Eh-9	楕円形	1.04m×0.80m×0.11m	N-6°-E	なし	FA・AsC層土	
22	Eh-8	円形	0.72m×0.72m×0.22m		土師器片60g	FA・AsC層土	
23	Eh-7	楕円形	0.56m×0.44m×0.16m	N-72°-W	なし	FA・AsC層土	
24	Ej-6	楕円形	0.80m×0.72m×0.35m	N-11°-E	土師器片350g	FA・AsC層土	
31	Eh-13	楕円形	0.76m×0.48m×0.06m	N-4°-E	なし	FA・AsC層土	8号住居、35号ビット
34	Ej-10	楕円形	径3.83m		土師器片80g	FA・AsC層土	16号ビット
35	Eh-13	不整形	0.72m×0.60m×0.30m	N-8°-E	土師器片360g	FA・AsC層土	8号住居、31・36号ビット
36	Eh-13	不整形	0.60m×0.60m×0.35m	N-62°-W	土師器片10g	FA・AsC層土	35号ビット
37	Eg-6	楕円形	0.62m×0.80m×0.55m	N-82°-W	土師器片20g	FA・AsC層土	4号溝
38	Ej-8	円形	径3.83m		土師器片110g	FA・AsC層土	
39	Ea-7	円形	0.52m×0.48m×0.16m		土師器片20g	FA・AsC層土	1号6次遺構
40	Eg-5	不整形	0.84m×0.68m×0.16m	N-59°-W	土師器片30g	FA・AsC層土	
41	Eg-6	楕円形	0.76m×0.64m×0.26m	N-86°-E	なし	FA・AsC層土	4号溝
42	Eg-6	円形	0.64m×0.60m×0.32m		土師器片10g	FA・AsC層土	
43	Eh-7	円形	0.76m×0.72m×0.36m		土師器片350g	FA・AsC層土	
44	Eh-8	楕円形	0.64m×0.52m×0.16m	(N-85°-W)	土師器片20g	FA・AsC層土	
45	Eh-8	円形	0.44m×0.40m×0.28m		土師器片70g	FA・AsC層土	
46	Ej-6	円形	0.52m×0.38m×0.18m		なし	FA・AsC層土	
47	Ej-7	楕円形	0.60m×0.52m×0.32m	N-56°-E	なし	FA・AsC層土	2号溝跡
48	Ej-6	円形	0.76m×0.72m×0.26m		土師器片80g	FA・AsC層土	
52	Eh-16	円形	径3.83m		土師器片20g	FA・AsC層土	
54	Fd-1	円形	0.56m×0.52m×0.32m		土師器片80g、溝底部片20g	FA・AsC層土	18号住居
55	Fd-1	不整形	0.68m×0.44m×0.44m	N-25°-E	土師器片10g	FA・AsC層土	18号住居
56	Fd-1	不整形	0.36m×0.24m×0.25m	N-62°-W	なし	FA・AsC層土	18号住居
57	Fd-1	楕円形	0.40m×0.32m×0.21m	N-26°-W	なし	FA・AsC層土	18号住居
58	Eh-17	楕円形	0.72m×0.60m×0.19m	N-59°-E	土師器片30g、溝底部片10g	FA・AsC層土	22号住居
60	Ez-17	不整形	0.62m×0.40m×0.06m		土師器片30g、溝底部片60g	FA・AsC層土	
61	Ea-18	円形	0.31m×0.32m×0.55m		なし	FA・AsC層土	
62	Ea-18	楕円形	0.31m×0.30m×0.30m		なし	FA・AsC層土	
63	Ea-18	円形	0.28m×0.24m×0.12m		なし	FA・AsC層土	
64	Ea-18	円形	0.40m×0.38m×0.29m		土師器片20g	FA・AsC層土	
65	Ea-17	円形	0.48m×0.44m×0.34m		なし	FA・AsC層土	
66	Ea-18	不整形	0.80m×0.40m×0.69m		土師器片30g、溝底部片50g	FA・AsC層土	
67	Ez-17	円形	0.30m×0.32m×0.39m		なし	FA・AsC層土	
68	Ez-17	楕円形	0.40m×0.28m×0.28m	(N-79°-W)	なし	FA・AsC層土	
69	Ez-19	楕円形	0.44m×0.34m×0.48m	(N-32°-W)	なし	FA・AsC層土	
70	Ez-20	楕円形	0.44m×0.38m×0.24m		土師器片55g	FA・AsC層土	
71	Fd-1	円形	0.31m×0.28m×0.26m		なし	FA・AsC層土	
72	Fd-1	不整形	0.48m×0.38m×0.40m	(N-85°-W)	なし	FA・AsC層土	
73	Fd-1	楕円形	0.38m×0.38m×0.22m		なし	FA・AsC層土	
74	Fd-1	楕円形	0.30m×0.24m×0.30m	(N-88°-E)	なし	FA・AsC層土	
75	Fh-2	楕円形	0.62m×0.56m×0.24m		土師器片110g	FA・AsC層土	
79	Ea-16	楕円形	0.66m×0.58m×0.72m	(N-25°-E)	なし	FA・AsC層土	51号住居
80	Eh-11	楕円形	0.52m×0.44m×0.23m	(N-48°-W)	なし	FA・AsC層土	
81	Ea-12	円形	0.76m×0.72m×0.14m		土師器片50g、溝底部片10g	FA・AsC層土	56号住居
82	Ea-13	不整形	0.86m×0.58m×0.21m	N-44°-E	なし	FA・AsC層土	56号住居
83	Eh-17	不整形	0.75m×0.58m×0.07m	N-88°-E	土師器片90g、溝底部片20g	FA・AsC層土	

## 第4節 トレンチ調査

調査区の南側、西南側に幅約1.5mの建造物（塀）が建設されるために、発掘調査をすることになった。しかし、調査区の幅が狭いため、トレンチ調査（B・Dトレンチ）を実施した。また、E区東側に旧河道（縄文時代後・晩期）下の遺構確認・旧河道埋没土内の遺物確認のため深掘トレンチ（Eトレンチ）を入れ、調査した。

### 1 Bトレンチ（第164図、P L29）

調査区の西南側に、幅1.0～1.5m、長さ31m、深さ1.3～1.6mのBトレンチを重機により掘削した。断面観察の結果、2号溝の立ち上がりと思われる落ち込みが検出された。また、覆土から少量の土器・須恵器片が出土した。

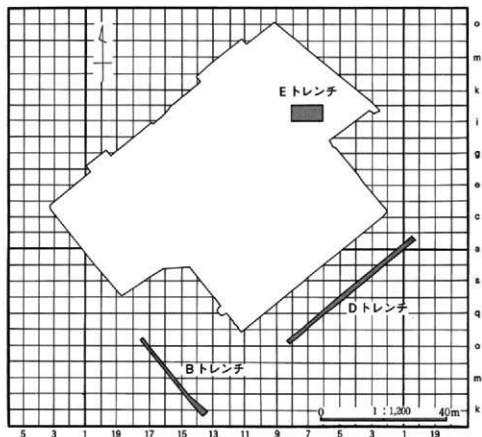
### 2 Dトレンチ（第164図、P L29）

調査区の南側に、幅約1.5m、長さ51m、深さ0.7～1.0mのDトレンチを重機により掘削した。断面

観察の結果、竪穴住居跡3軒、土坑4基、ピット3基が検出された。その内、1軒の竪穴住居跡は、竈の状況・壁の立ち上がりも明瞭に確認できた。また、覆土から土器・須恵器片が出土した。

### 3 Eトレンチ（第164図、P L29）

平成12年10月の県教委保護課試掘調査の結果、八幡川（滝川）の旧河道を構成する埋没谷が確認されている。その河道に埋没した木器などの遺物確認・その下層の遺構確認のため、幅5m、長さ10m、深さ約3mのEトレンチを重機により掘削した。その結果、遺構・遺物は確認されなかったが、下位より浅間板鼻黄色軽石（As-YP、約1.3～1.4万年前）、浅間総社軽石（As-Sj、約1.1万年前）、浅間藤岡軽石（As-Fo、約8,200年前）、As-C軽石、Hr-FA、As-B軽石などを検出することができた。詳細は、第5章付録第1節自然科学分析を参照されたい。



第164図 B・D・Eトレンチ全体図

第5節 遺構外出土遺物

本節では、住居跡・溝・土坑等の遺構出土以外の遺物を扱う。また、表土掘削時出土のものや、遺構出土ながら帰属の不詳なものを取り上げた。縄文時代の土器・石器から中世以降の陶磁器まで幅広い時期の遺物が出土した。

1 縄文（弥生）時代（第165・166図、P L47・48）

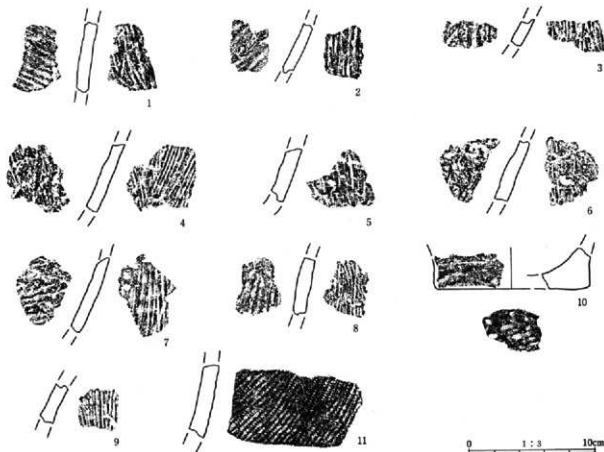
本遺跡では、旧石器・縄文・弥生時代の遺構は検出されなかった。遺物番号1～9は、縄文時代早期後半の条痕文系土器の深鉢片である。10は後期の深鉢の底部片で底部に僅かに網代痕が見られる。11は中期後半の深鉢の副部片である。

石器では、遺物番号12・13・17・18は打製石斧、

14・16は打製石斧の未製品、15はスクレイパー、19は石獣（弥生時代）である。掲載した石器以外で、出土した剥片類の石材・量をまとめたものが第4表である。

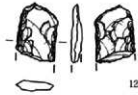
第4表 剥片類の石材・量

石 材	破片数	重さ (g)
黒色頁岩	15点	390 g
珪質頁岩	11点	140 g
細粒輝石安山岩	1点	120 g
黒色安山岩	2点	20 g
粗粒輝石安山岩	1点	18 g
砂質頁岩	1点	10 g

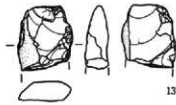


第165図 縄文（弥生）時代出土遺物（1）

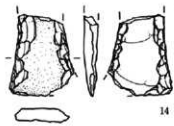




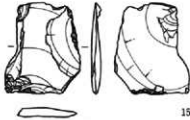
12



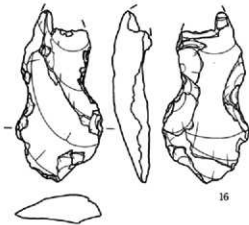
13



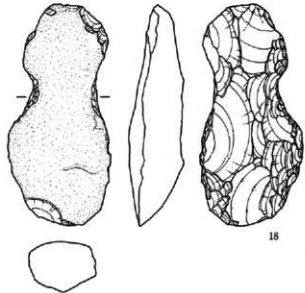
14



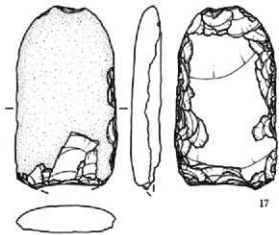
15



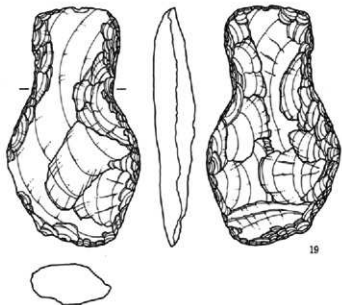
16



18



17



19



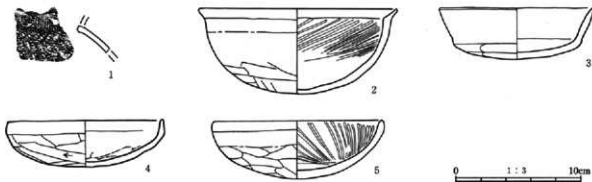
第166図 縄文(弥生)時代出土遺物(2)

### 第3章 検出された遺構と遺物

#### 2 古墳時代 (第167図、P L48)

本遺跡からは古墳時代前期4軒・中期11軒・後期14軒の竪穴住居跡が検出されているため、古墳時代の出土遺物は比較的多い。遺物番号1は、前期の土

師壺器肩部片、2は中期の土師器坏、3・4・5は後期の土師器坏である。

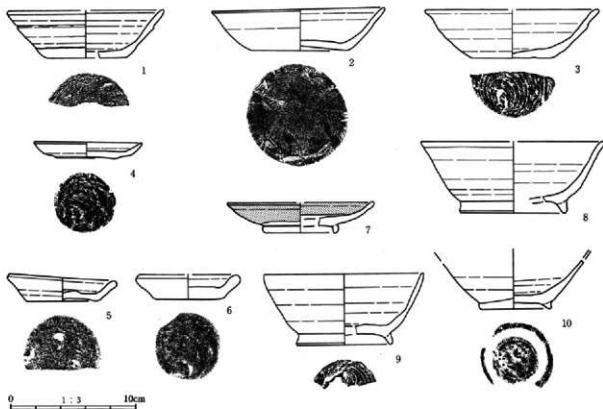


第167図 古墳時代出土遺物

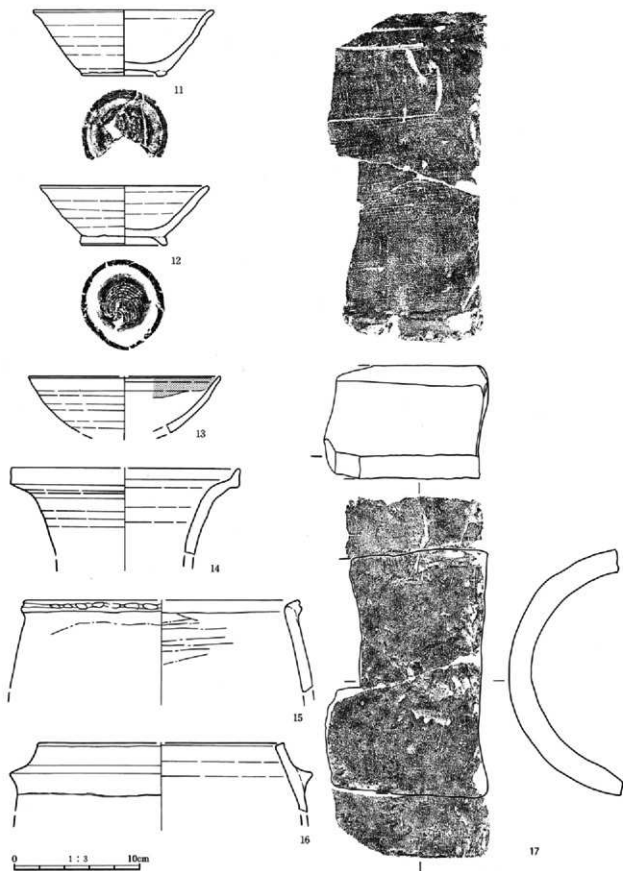
#### 3 奈良・平安時代 (第168～170図、P L48)

本遺跡の調査区全域から、49軒の8世紀～11世紀の竪穴住居跡が検出されているため、奈良・平安時代の出土遺物は、土師器土釜、須恵器坏・埴・壺・羽釜、灰釉陶器皿・埴、瓦と大変多い。また、出土

遺物の中には、住居のすぐ近くのグリッドから出土し、その住居に伴うと思われる遺物も何かあった。

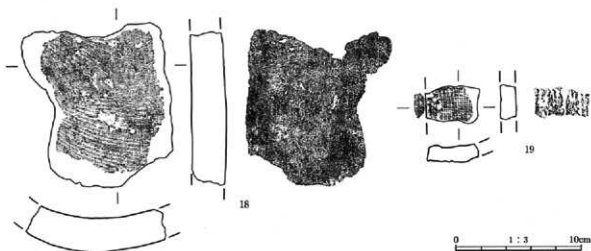


第168図 奈良・平安時代出土遺物 (1)



第169図 奈良・平安時代出土遺物（2）

第3章 検出された遺構と遺物

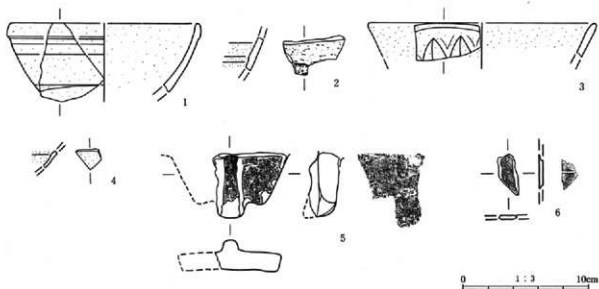


第170図 奈良・平安時代出土遺物（3）

4 中世以降（第171図、P L48）

本遺跡で検出された中世以降の遺構は、3号溝、1・2・6・7・8・11号土坑である。ここでは、

遺構外から出土した、中国産、国内産の陶磁器などを報告したい。



第171図 中世以降出土遺物

## 第4章 調査の成果

### 第1節 稲荷塚道東遺跡出土施釉陶器

神谷 佳明

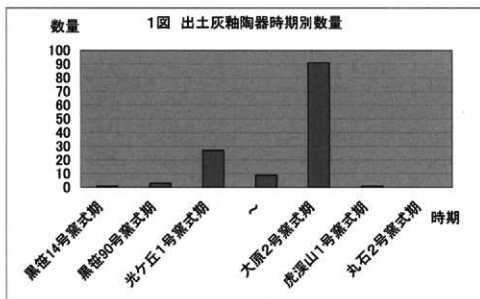
#### 1. はじめに

稲荷塚道東遺跡は上野国府、上野国分僧寺・尼寺、山王院寺など古代上野国の中枢地域に隣接する集落遺跡である。住居は古墳時代前期4世紀代から平安時代11世紀前半代まで継続的に営まれている。発掘調査範囲では近年の開発によって遺構が削平された箇所が存在するが4世紀から9世紀までは概ね1世紀あたり10軒ほどで推移しているが10世紀代には住居が20軒ほどに増加している。しかし、この増加傾向も10世紀代だけで11世紀代の住居は1軒だけと集落が終息してしまう。

こうした10世紀代の集落が多く存在することから稲荷塚道東遺跡では多少の施釉陶器が出土している。こうした施釉陶器について若干の検討を行い平安時代における国府周辺集落の様相について明らかにする。

#### 2. 出土した灰釉陶器

稲荷塚道東遺跡から出土した施釉陶器は全て灰釉陶器で緑釉陶器などの出土はみられなかった。出土した灰釉陶器は図化できなかったものも含めると総点数223点である。このうち碗・皿など食膳具が180点、長頸壺、小瓶などの貯蔵具が43点である。これら灰釉陶器の器種は碗・皿などの食膳具が碗134点、稜碗1点、輪花碗1点、皿26点、段皿1点、折縁皿1点、碗・皿類であるが小片で詳細なものが16点である。長頸壺・小瓶などの貯蔵具は長頸壺36点、小瓶3点、広口壺1点、平瓶1点、小片で詳細なものが3点である。出土した灰釉陶器は数量的にみると碗が60%、皿が11.7%と碗皿類で70%以上を占めている。その他の器種を見ると食膳具の中では稜碗、輪花碗、段皿、折縁皿が各1点、貯蔵具の中でも長頸壺が76%を占め小瓶3点、広口壺と平瓶が各1点



#### 第4章 調査の成果

づつしか見られない。こうした傾向は周辺の集落遺跡と大きな相違は見られない。(注1)

出土した灰軸陶器の産地は大部分が東濃古窯跡群からの製品であるが、猿投古窯跡群の製品も68号住居3、32号住居(未図化)、58号住居(未図化)から計3点ほど出土している。

これらの灰軸陶器の時期は猿投古窯跡群が黒笹14号窯式期から黒笹90号窯式期、東濃古窯跡群が光ヶ丘1号窯式期から虎渓山1号窯式期にかけてである。東濃古窯跡群の製品のうち時期を判定できたものの推移は1図のとおりである。(注2)

#### 3. 灰軸陶器を出土した遺構について

稲荷塚道東遺跡で灰軸陶器を出土した遺構は1表のとおり駆穴住居34軒、溝3条、井戸1基、土坑3基である。そして駆穴住居からの出土量は116点、1軒あたりは1点から14点で平均2.6点になる。ただし、灰軸陶器を出土した駆穴住居(以降「住居」と略す)には灰軸陶器生産以前の古墳時代や奈良時代の住居(住居の年代は出土した土器を主に判断した)も見られることから灰軸陶器生産以降の9世紀以降の駆穴住居1軒あたりにすると3.4点になる。他遺構からの出土量は溝が2号溝70点、3号溝7点、4号溝1点、井戸が2号井戸2点、土坑が13号土坑1点、24号土坑2点、25号土坑7点である。

灰軸陶器を出土した住居は34軒であるが、住居の年代は前述のように古墳時代4世紀から平安時代11世紀まで幅広い時期の住居からである。しかし、灰軸陶器はその生産年代が9世紀から11世紀前半までの間であることは明らかである。8世紀以前の住居からの出土は埋没過程のなかで破損などにより使用できなくなったものを廃棄した結果によるか後世の耕作などによる攪拌で混入したものである。

灰軸陶器生産段階の9世紀から11世紀前半代に比定される住居は21軒が相当する。この21軒の住居のうち灰軸陶器の時期より古い年代に比定される住居は4号住居、49号住居の2軒で他の住居は灰軸陶器の生産時期と同じ年代か新しい年代で生産時期と住

居の年代に大きな矛盾は見られない。しかし、23号住居や68号住居は出土灰軸陶器の生産時期と住居の時期が1世紀近く離れていることから後世の攪拌などによる混入の可能性も考えられる。また、38号住居や39号住居、42号住居のように住居年代と同様な時期の灰軸陶器とそれよりやや新しい時期の灰軸陶器が共存して出土する例が見られる。こうした例は

1表 灰軸陶器出土遺構の時期と出土灰軸陶器の時期

遺構	時期	黒笹14号	黒笹90号	光ヶ丘1号	大原2号	虎渓山1号	丸石2号
4号住居	9C.代					○	
9号住居	6~7C.代						
15号住居	8C.中葉					○	
18号住居	—						
20号住居	10C.Ⅰ			○			
21号住居	4C.中葉			○			
23号住居	10C.末~11C.初頭			○			
24号住居	5C.末~6C.初頭				○		
28号住居	10C.前半代					○	
32号住居	9C.Ⅳ		○				
33号住居	7C.中葉			○			
36号住居	5C.末~6C.初頭				○		
38号住居	9C.Ⅳ			○			
39号住居	9C.後半代			○			
40号住居	9C.Ⅲor11C.前半代			○			
41号住居	10C.Ⅱ			○			
42号住居	9C.前半代			○			
44号住居	10C.前半代			○			
47号住居	10C.前半代			○			
49号住居	9C.後半代			○			
51号住居	7C.後半代			○			
52号住居	10C.Ⅱ			○			
53号住居	10C.後半代			○			
54号住居	10C.Ⅰ			○			
58号住居	9C.Ⅳ		○				
65号住居	7C.Ⅳ			○			
68号住居	11C.前半代		○				
69号住居	10C.Ⅰ			○			
73号住居	7C.Ⅲ			○			
78号住居	8C.中葉			○			
79号住居	7C.後半代			○			
82号住居	9C.後半~10C.中葉			○			
83号住居	5C.後半代			○			
84号住居	10C.前半代			○			
2号井戸	6C.代			○			
13号土坑	—						
24号土坑	—						
25号土坑	10C.代			○			
2号溝	8C.~11C.	○	○	○	○	○	
3号溝	中世						
4号溝	中世						○

住居年代より新しい灰軸陶器が混入したか住居年代を再検討する必要がある可能性が考えられるが稲荷塚道東遺跡では近年の擾乱が激しく各住居でその住居の年代と異なる土器が共伴する事例が多々見られることから詳細な土器編年を行うことが難しいため今後の課題とした。

灰軸陶器の時期と住居の年代とで妥当な共伴関係を見ることができる住居は12軒である。これらの住居では灰軸陶器の時期と住居の年代が同一であるもの、同一であるが1時期古い灰軸陶器も共伴するもの、1時期古い灰軸陶器を共伴するものが見られる。こうした傾向は筆者や筆者等(注3)が以前に行った傾向と同様のものである。

なお、2号溝からは70点と稲荷塚道東遺跡から出土した灰軸陶器の3分の1を占めているが出土した灰軸陶器は黒笹14号窯式期から虎漢山1号窯式期まで幅広い時期の製品が出土しているがこれは周辺の際穴住居などから2号溝へ破損して使用が不可能になった灰軸陶器を廃棄した結果と見られる。

#### 4. 他の遺跡との比較

稲荷塚道東遺跡は国府や山王廃寺といった上野国の中核地域に近接する遺跡であるがこうした立地条件のため周囲の集落遺跡からも多くの施軸陶器が出土していることが知られている。また、施軸陶器のなかでも灰軸陶器は平安時代の集落遺跡から出土しない例は皆無であるといえる。こうした状況から緑軸陶器については小片でも報告されるのに対して灰軸陶器はある程度の残存状態でないと報告されないのが実状である。このため稲荷塚道東遺跡と比較検討できる報告は少ないが以前筆者が「下東西清水上遺跡」、「下芝五反田遺跡」で出土した灰軸陶器の全点を対象に分析・検討を行っているのでこの資料と比較を行ってみた。

下東西清水上遺跡は稲荷塚道東遺跡の北北西約3kmに位置する。遺跡は7世紀から10世紀の集落と8世紀初頭の比較的規模の大きな豪族居宅を中心に構成されている。その立地は山王廃寺の北側で総古

墳群の西側であることから山王廃寺に關係する豪族層なりこれらに付隨する集落と想定される。施軸陶器は奈良三彩陶器1点、緑軸陶器51点、灰軸陶器1162点が出土している。灰軸陶器が生産された時期の住居は80軒ほどが見つかっている。灰軸陶器の出土傾向は稲荷塚道東遺跡と同様に碗皿などの食膳具が大部分を占める。生産された時期も大原2号窯式期のものが圧倒的に多いが、その後の虎漢山1号窯式期のものも若干見られる。これを住居年代による軒数の差を考えないで割り戻すと1軒あたり14点になる。

下芝五反田遺跡は箕郷町下芝に所在する古墳時代中期と奈良平安時代の集落である。奈良平安時代の集落は6世紀代に起きた標名二ツ岳の噴火に伴う土石流などが4mほど堆積した上に構築されている。発掘調査では住居141軒、建物6棟が見つかっている。住居は8世紀代は7軒と少なく残りの134軒が施軸陶器の生産時期に比定されるものである。施軸陶器は5459点が出土し、その内訳は緑軸陶器24点、灰軸陶器5435点である。灰軸陶器の出土傾向は稲荷塚道東遺跡と同様に碗皿などの食膳具が大部分を占める。生産された時期も10世紀代の住居が多いことから大原2号窯式期のものが圧倒的に多いが、その後の虎漢山1号窯式期のものも多く見られる。これを住居年代による軒数の差を考えないで割り戻すと1軒あたり40点になる。

以上のように2遺跡と比べると稲荷塚道東遺跡での灰軸陶器使用率は非常に少ない状態である。この状態は下東西清水上が施軸陶器の時期の富民層や富豪層に伴う居宅遺構は見つかっていないものの山王廃寺に關係する豪族に付隨するような富豪に伴う集落であること、下芝五反田遺跡が律令制崩壊期の土地開発に関わる集落でその開発には大きな権力が背景に存在したと見られることから施軸陶器の出土量の多さの背景が窺える。しかし、数量的には明らかではないが稲荷塚道東遺跡と同様の国府周辺遺跡と比較して少ないと見られる。

5. まとめ

以上のように2から4項で稲荷塚道東遺跡から出土した灰軸陶器について分析・検討を行ってきた。この結果、灰軸陶器は検出した住居の盛衰と同様の出土傾向が見られること、他の遺跡と比較すると出土量が少ないことなどが明らかになった。こうした状況から稲荷塚道東遺跡は古墳時代から継続的に営まれている集落であることなどから国府関連の集落ではなく古墳時代から総社古墳群に被葬、山王廃寺創建、維持に関わる豪族層に支配された末端の農村的集落と見られる。

以上、稲荷塚道東遺跡から出土した灰軸陶器、およびこれを基にした検討を行ったが発掘調査は遺跡の一部であり近年の開発による擾乱によって欠落している部分もあり不明な点も多く存在している。しかし、こうした個々の遺跡での分析を重ねることにより古代上野国についてのより一層の解明が可能であると考える。

注

注1 拙稿「第3節 下東西清水上遺跡出土の施軸陶器について」『下東西清水上遺跡』1998(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の分析結果による。

注2 灰軸陶器の生産時期については古代の土器研究会「古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3施軸陶器」1994を基にしている。

注3 拙稿「第3節 下東西清水上遺跡出土の施軸陶器について」『下東西清水上遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998、拙稿「2. 出土施軸陶器について」『下芝五反田遺跡—奈良平安時代以降編—』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999を6とした。

参考文献

斉藤孝正 「施軸陶器年代論」『論争・学説日本の考古学』6 歴史時代 雄山閣出版 1987

「東海地方の施軸陶器—筑波圏を中心に—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3施軸陶器』古代の土器研究会 1994

高橋照彦 「東国の施軸陶器」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3施軸陶器』古代の土器研究会 1994

崎貫理男・神谷佳明・桜岡正信 「群馬における灰軸陶器の様相について(1)—消費地からのアプローチャー—」『研究紀要』9(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1992

拙稿 「第3節 下東西清水上遺跡出土の施軸陶器について」『下東西清水上遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1998

拙稿 「2. 出土施軸陶器について」『下芝五反田遺跡—奈良平安時代以降編—』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1999

拙稿 「施軸陶器にみる古代上野国」『研究紀要』19(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2001



## 第2節 竈構築材採掘痕について

今井 和久

### 1. はじめに

稲荷塚道東遺跡（位置図1）2号溝の両側で検出された竈構築材採掘痕は、竈構築材採掘痕群とその竈構築材を利用したと考えられる竈穴住居跡群がセットで発見された例としては、当事業団が関越自動車道建設に伴い調査した鳥羽遺跡0・L区（1990）（位置図2）（注1）、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が土地区画整理に伴い調査した大屋敷遺跡Ⅲ（1995）（位置図3）に次ぐ、（大規模な例としては、県内では3例目となる）貴重な発見となった。そこで、3遺跡の竈構築材採掘痕について比較・検討してみたい。なお、小規模な例としては、上野国分僧寺・尼寺中間地域（7）I区（1992）で、「竈の袖石等の部材を切り出した痕跡と考えられる土坑」3基が報告されている。（注2）3基は、「部材の切り出しに成功してはならず、途中で放棄された状態である」とも報告されている。このような途中で部材の切り出しを放棄した跡は、上記の3遺跡でも発見されている。



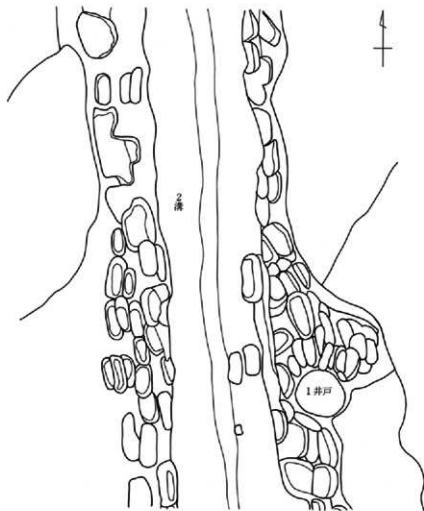
第1図 位置図（国土地理院5万分の1「前橋」使用）

### 2. 立地環境（採掘場所）

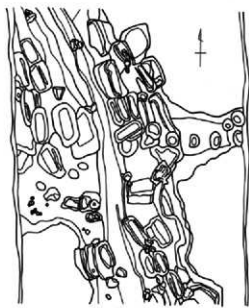
鳥羽遺跡、大屋敷遺跡で検出された竈構築材採掘痕も本遺跡同様に凝灰岩質層から構築材を切り出している。3遺跡ともに、標名山南東麓に広がる相馬ヶ原原状地の末端部と前橋台地の接する場所に立地している。また、山麓を流れる河川（鳥羽遺跡は染谷川、大屋敷遺跡と本遺跡は八幡川）の段丘上に位置している点にも共通性が見られる。標高は、鳥羽遺跡が約122m、大屋敷遺跡が約125m、稲荷塚道東遺跡約120mと差がない。特に、本遺跡と大屋敷遺跡は第1図からも分かるように、直線距離約200mの近距離にあり、同一地質上に位置している。

### 3. 採掘方法（採掘工程）

採掘方法は、稲荷塚道東遺跡・大屋敷遺跡では、溝線を利用して、凝灰岩質層を切り出し採掘している。溝によって表土が削られ凝灰岩質層が露出した場所で採掘するのは、溝線以外の場所では凝灰岩質層までの到達が深いため採掘を行うのが困難なためである。鳥羽遺跡では、台地縁辺部の凝灰岩質層の露出している場所を中心に大規模な採掘を行っている。3遺跡ともに、表土を除去することなしに凝灰岩質層の採掘可能な地点を選んで切り出している点が共通している。また、3遺跡ともに「途中で構築材の切り出しを放棄した跡＝竈構築材採り残し痕」（本報告書第3章（2）竈構築材採掘痕・採り残し痕①②参照）が検出されており、その採掘工程が同じ方法をとっていることが看取できた。まず垂直方向に切り込み、次に水平方向に切り出して採掘を行っている。



稲荷塚東遺跡



大塚遺跡Ⅲ



鳥羽遺跡L区

第2図 3遺跡の竈構築材採掘痕

0 1:100 2.5m

## 4. 検出数・面積・規模・掘り方(平面形)

検出数・面積は、本遺跡が130基・約93㎡、鳥羽遺跡が315基・約211㎡(O区93㎡、L区84㎡、その他34㎡)、大屋敷遺跡が42基・約35㎡である。

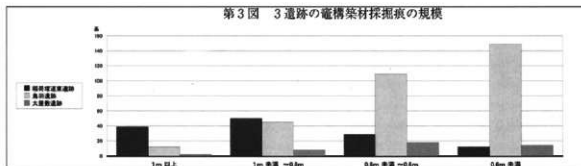
また、3遺跡の竈構築材採掘痕の規模は第1表の通りである。第1表を分かり易くするために、グラフ化したのが第3図である。検出された竈構築材採掘痕の平均値は、本遺跡が長軸0.88m、短軸0.36m。鳥羽遺跡が長軸0.61m、短軸0.17m。大屋敷遺跡が長軸0.64m、短軸0.19m。掘り方(平面形)は、第2図からも分かるように、3遺跡ともほとんどが長方形を呈し、方形のものは少ない。以上のように、

鳥羽・大屋敷の両遺跡の竈構築材採掘痕の規模は、平均値が長軸約0.60m、短軸約0.20mと小規模なのに対して、本遺跡では、長軸約0.88m、短軸約0.36mとやや大きめの部材を採掘しているところが相違点である。

第1表 3遺跡の竈構築材採掘痕の規模

長軸	1m以上	1m未満 ~0.8m	0.8m未満 ~0.6m	0.6m未 満~
遺跡名				
本遺跡	39基	50基	29基	12基
鳥羽	12基	45基	109基	149基
大屋敷	2基	8基	18基	14基

第3図 3遺跡の竈構築材採掘痕の規模



## 5. 採掘時期

鳥羽遺跡では、「同遺跡内で検出される奈良~平安期にかけての竈穴住居跡に付設される竈に用いられる構築材がこれにあたるかと考えている」と報告されていることにより、奈良・平安時代に採掘が行われたと言えよう。また、鳥羽遺跡では、同時期の遺物を伴う竈構築材採掘に従事した人々の仮設の炉跡と考えられる遺構も発見されている。大屋敷遺跡では、「6世紀代の竈穴住居跡に竈構築材が用いられており、採掘は6世紀代から始められたこと」、「竈構築材採掘痕の検出された溝の覆土上層にAs-B軽石が認められることから12世紀には採掘が行われなくなったこと」が報告されている。一方、本遺跡では、第2表・写真1のように竈構築材と思われる石材(凝灰岩)が28の住居内から出土している。表からもわかるように、本遺跡では、竈構築材採掘痕群から採掘した構築材を、7世紀前半から11世紀(古

墳時代後期から平安時代)の竈穴住居跡の竈に使用している。また、大屋敷遺跡と同様、本遺跡でも竈構築材採掘痕の検出された2号溝の覆土上層にAs-B軽石が認められたことから、12世紀には採掘が行われなくなったと考えられる。

## 6. 採掘実験とまとめ

奈良・平安時代の竈穴住居跡に付設される竈を造るときに、構築材(補強材)として、粘土、土器、瓦、川原石、また本遺跡のように凝灰岩を用いる例は、他の遺跡でもよくみられる。凝灰岩を竈構築材に利用したのは、川原石などに比べて、目的に応じて自由に加工できる点が最大の利点と思われる。また、被熱しても瓦・川原石のように割れない点も利点である。しかし、瓦・川原石は遺跡地周辺にあるものを採集すればよいが、凝灰岩は採掘場所を選んで採掘するために、時間がかかる欠点もある。そこ

## 第4章 調査の成果

第2表 稲荷塚道東遺跡竈構築材(凝灰岩)出土住居一覧

	住居番号	時期	出土数	出土位置	使用目的	主な構築材の大きさ 長軸×短軸×厚さ(cm)	備考
1	16号住居	8～9世紀	5	竈	左の袖石	24×11×8	
2	20号住居	10世紀前半	13	竈付近、床	不明	19×16×9	
3	23号住居	10～11世紀	2	竈	左右の袖石	20×10×11	
4	28号住居	10世紀前半	1	竈	右の袖石	12×6×4	
5	32号住居	9世紀後半	2	床	不明	16×12×7	
6	34号住居	10世紀中～後	4	竈	左右の袖石 煙道部	21×17×8	
7	36号住居	A住10世紀 B住9世紀後半	3	覆土	不明	22×12×13	
8	37号住居	9世紀	1	竈付近	右の袖石?	11×10×7	
9	38号住居	9世紀後半	2	覆土	不明	20×11×10	
10	40号住居	9世紀後半	2	覆土	加工前の原石	26×17×10	掲載番号16
11	41号住居	10世紀後半	12	竈、貯蔵穴	左の袖石	18×12×11	
12	42号住居	9世紀前半	3	竈	袖石	18×15×12	
13	43号住居	10世紀	1	竈	天井石?	24×12×11	
14	44号住居	10世紀前半	5	床	不明	23×12×15	
15	47号住居	10世紀前半	2	竈	左右の袖石	25×17×12	
16	49号住居	9世紀後半	2	竈、床	袖石?	18×11×10	
17	51号住居	7世紀後半	1	竈	右の袖石	13×10×4	
18	52号住居	10世紀前半	3	竈	左右の袖石	17×10×6	掲載番号8
19	53号住居	7世紀前半	4	竈	袖石、支脚石	27×16×10	
20	54号住居	10世紀中	1	竈	右の袖石	10×6×5	
21	55号住居	10世紀後半	1	覆土	不明	22×18×16	
22	64号住居	10世紀後半	7	竈	右の袖石 天井石 支脚石	18×16×13 43×16×10 22×13×9	掲載番号12 掲載番号11
23	65号住居	8世紀前半	1	覆土	不明	10×8×6	
24	68号住居	11世紀前半	1	床	不明	53×14×11	原石か?
25	69号住居	10世紀前半	3	竈	左右の袖石	29×15×11	
26	75号住居	8世紀前半	1	竈覆土	不明	16×14×10	
27	78号住居	8世紀中	1	竈、床	袖石?	28×17×4	
28	86号住居	10世紀	1	覆土	不明	10×8×6	
計	28住	時期7世紀前 半～11世紀	85	竈、床、覆 土	袖石、天井石 支脚石	平均 23×14×10	

で、発掘調査に使用する手鋸（鉄製）を用いて、本遺跡の竈構築材採掘痕の平均値（ $0.88 \times 0.36 \times 0.20$  m）の大きさの凝灰岩採掘実験（写真2・協力中沢悟氏）を試みた。その結果、採掘時間約15分で採掘することができ、それほどの時間は要しないことがわかった。この採掘実験では、平面採掘だったため15分間要したが、溝の縁辺部を利用して採掘すれば10分程で採掘できると考えられる。本遺跡では、大型の鉄鑿（釘）とも思われる鉄製品も出土しており、採掘には鉄器を使用したと思われる。また、竈構築材採掘痕や住居内から出土した凝灰岩からは、3～4 cmの工具痕も看取できた。

このように、本遺跡と大屋敷遺跡、鳥羽遺跡では、遺跡の立地環境・採掘方法に多くの共通点があげられると同時に、採掘の規模・時期については相違点がみられる。つまり、本遺跡の竈構築材採掘痕1基の規模が、他の2遺跡に比べて大きいこと。採掘を始める時期が3遺跡で多少ずれていることの2点である。また、「3遺跡とも、竈構築材採掘痕から切り出した部材を、本当に遺跡内の住居の竈構築材に利用したのか」という疑問も残る。この点は、鳥羽遺跡、大屋敷遺跡ともに「切り出した材の用途については科学的な証明（直接の証明）は得られていない」と前置きしながら、遺跡内で検出された竈穴住居跡の竈に用いられた構築材がこれにあたるかと報告している。

本遺跡の竈構築材採掘痕の規模が大きいのは、「初めは他の目的で採掘した」「周辺遺跡への竈構築材の供給地だった」とは考えられないだろうか。凝灰岩はもろくて崩れやすいので、古墳の石室の材料などには不向きだと思われるが、「初めに、直方体に切り出し一何かの目的に利用（1次利用）→竈構築材に利用（2次利用）したこと」「本遺跡の北西200～300mに位置する総社甲福荷塚大道西Ⅱ・総社兩泉明神北Ⅱ遺跡（位置図は本書11頁参照）では、竈の構築材として凝灰岩を用いている住居が検出されており、本遺跡は竈構築材の供給地だった」と考えると、本遺跡の竈構築材採掘痕が他の2遺跡より規

模が大きい証明になる。2点目の採掘時期のずれは、3遺跡とも、溝・台地縁辺部の凝灰岩質層の露出している場所を選定して採掘していることから考えて、溝・台地縁辺部の凝灰岩質層の露出する時期の違いと思われる。つまり、大屋敷遺跡では6世紀、本遺跡では7世紀、鳥羽遺跡では奈良時代（8世紀）から採掘が始められたと想定される。本遺跡周辺で、6世紀代の住居の竈構築材に凝灰岩を使用した遺跡は、総社甲福荷塚大道西Ⅱ・元総社明神Ⅴ・大友屋敷Ⅲ遺跡（前橋市の調査）と大屋敷遺跡の4例のみである。したがって、上記の3遺跡には、大屋敷遺跡で採掘した凝灰岩が供給された可能性が高い。

現在までに、竈穴住居跡の竈に、構築材として凝灰岩が使用されている例は、富岡市本宿・郷土遺跡、渋川市有馬条里遺跡、群馬町北原遺跡、伊勢崎市波志江中野面遺跡など県内各地で見ついている。周辺部の遺跡（位置図は本書11頁参照）では、山王庵寺・国分境Ⅳ・上野国分尼寺・下東西・元総社西川・弥勒・塚田村東・中尾遺跡などで使用されている。最近では、前橋長湊線に伴う調査の綿貫小林前・下滝天水遺跡でも検出されている。しかし、両遺跡とも凝灰岩を採掘した痕は見えていない。綿貫小林前・下滝天水遺跡は井野川の両側に広がる遺跡なので、おそらく井野川によって浸食され、露出した凝灰岩質層から構築材を切り出したのだろう。このように、凝灰岩質層の広がる地域では構築材の採掘が可能であるため、今後の発掘事例の増加に伴い、竈構築材採掘痕の一層の解明が進むことを期待して、本稿のまとめとしたい。

注1 「鳥羽遺跡」の竈構築材採掘痕については、発掘担当者の友廣氏・新倉氏、整理担当者の綿貫氏にご教示頂いた。

注2 「上野国分尼寺・尼寺中間地域（7）」の竈構築材採掘痕については、発掘・整理担当者の木澤氏・坂岡氏にご教示頂いた。

## 引用・参考文献

- 「鳥羽遺跡」（財団法人群馬県文化財調査事業団1990）  
 「大屋敷遺跡Ⅲ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団1995  
 「上野国分尼寺・尼寺中間地域（7）」（財団法人群馬県文化財調査事業団1992）



写真1 稲荷塚道東遺跡出土竈構築材（凝灰岩）



写真2 採掘実験で採取した構築材（凝灰岩）

## 第5章 付 編

### 第1節 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

#### I. 稲荷塚道東遺跡におけるテフラ分析

##### 1. はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっていく。

そこで、年代が不明な土層が検出された稲荷塚道東遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ分析や屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、Ej-10グリッド、Ej-7グリッド、Ej-9グリッド、2号溝脇（壁面）、2号溝SPB西側、東西トレンチ中部、東西トレンチ東部、En-8グリッド、Eb-18グリッド、20号住居址、28号住居址、2号溝北壁の12地点である。

##### 2. 土層層序

###### (1) Ej-10グリッド

Ej-10グリッド、Ej-7グリッド、Ej-9グリッドでは、遺跡が位置する台地を構成する地層の良好な断面を観察することができた。Ej-10グリッドでは、下位より灰色シルト層（層厚4cm以上）、成層したテフラ層（層厚27.3cm）、円磨された白色軽石に富む黄白色シルト層（層厚18cm、軽石の最大径17mm）、円磨された白色軽石混じり桃白色シルト質砂層（層厚23cm、軽石の最大径12mm）、黄灰色砂層（層厚18cm）、砂混じり暗灰色泥層（層厚3cm）、黒灰褐色泥層（層厚10cm）、灰色軽石に富む暗灰色泥層（層厚8cm、軽石の最大径9mm）、黒泥層（層厚8cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚0.1cm）、黒泥層（層厚0.5cm）、黄灰色シルト層（層厚0.3cm）、黒泥層（層厚0.1cm）が認められる（図1）。さらにその上位には成層した厚い水成層が認められる。

成層したテフラ層は、下位より黄白色軽石層（層厚16cm、軽石の最大径19mm、石質岩片の最大径3mm）、灰色粗粒火山灰混じり桃灰色細粒軽石層（層厚8cm、軽石の最大径5mm、石質岩片の最大径2mm）、黄灰色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、白色軽石混じり桃色細粒火山灰層（層厚3cm）からなる。このテフラ層は、その層相から、約1.3~1.4万年前<sup>\*1</sup>に浅間火山から噴出した浅間板敷黄色軽石（As-YP、新井、1962、町田・新井、1992）に同定される。また暗灰色泥層中に多く含まれる灰色軽石については、その岩相から、約1.1万年前に浅間火山から噴出した浅間総社軽石（As-Sj、早田、1991）に由来すると考えられる。

###### (2) Ej-7グリッド

Ej-7グリッドでは、下位より黄灰色砂層（層厚10cm以上）、灰色砂質土（層厚6cm）、黒泥層（層厚8cm）、灰色軽石に富む暗灰色泥層（層厚7cm、軽石の最大径5mm）、黒泥層（層厚8cm）が認められる。これらの

土層は、Ej-10グリッドにおいてAs-YPより上位にある。暗灰色泥層中に多く含まれる灰色軽石については、その岩相からAs-Sjに由来すると考えられる。

その上位には、Ej-10グリッドでもみられた成層した厚い水成層が認められる。Ej-7グリッドにおいて、この地層は下位よりラミナが発達した黄灰色シルト層（層厚18cm）、ラミナが発達した灰色砂層（層厚51cm）、桃灰色シルト層（層厚5cm）、暗灰色泥層（層厚1cm）、黄白色軽石混じりでラミナが発達した灰色砂層（層厚14cm）、スコリア質黒灰色岩片や黄白色あるいは灰白色軽石混じり灰色砂質泥流堆積物（層厚56cm、軽石の最大径33mm、岩片の最大径55mm）、ラミナが発達した灰色砂層（層厚20cm）、黄色軽石混じり灰色砂質泥流堆積物（層厚8cm、軽石の最大径8mm）、灰色シルト層（層厚4cm）、暗灰色泥層（層厚1cm）、黄色軽石混じりで固結した灰色砂質泥流堆積物（層厚33cm、軽石の最大径18mm）の連続が認められる（図2）。これらの水成層は、埋没谷によって切られている。ここでは、谷を埋没させた褐色砂礫層（層厚92cm）が最上位に認められる。

### (3) Ej-9グリッド

Ej-9グリッドでは、埋没谷の堆積物をよく観察することができた（図3）。谷を埋めた堆積物は、下位より重円礫混じり灰色砂層（層厚150cm以上、礫の最大径61mm）、灰色の砂とシルトの互層（層厚16cm）、褐色重円礫層（層厚5cm、礫の最大径31mm）、桃灰色シルト層（層厚3cm）、灰色シルト層（層厚6cm）、黄灰色シルト質砂層（層厚3cm）、灰色砂礫層（層厚64cm、礫の最大径61mm）、ラミナが発達した重円礫混じり灰色砂層（層厚49cm、礫の最大径35mm）、灰色砂層（層厚9cm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚2cm）、正の級化構造が発達した灰色砂層（層厚19cm）、砂混じり灰褐色土（層厚1cm）、灰色砂層（層厚3cm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚10cm）、灰色砂層（層厚32cm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚4cm）、灰色砂層（層厚18cm）からなる。

### (4) 2号溝脇（壁面）

2号溝脇（壁面）では、下位より灰色砂層（層厚22cm以上）、灰色砂質泥流堆積物（層厚41cm、礫の最大径44mm）、ラミナが発達した灰色砂層（層厚26cm）、重円礫混じりでラミナが発達した黄灰色砂層（層厚7cm、礫の最大径19mm）、ラミナが発達した灰色砂層（層厚17cm）、灰色砂質シルト層（層厚8cm）、重円礫を含む灰色砂質泥流堆積物（層厚51cm、礫の最大径288mm）、ラミナが発達した黄灰色砂層（層厚21cm）、黄灰色砂層（層厚13cm）、黄色砂層（層厚19cm）、灰色砂層（層厚15cm）、黒灰色土（層厚23cm）が認められる（図4）。

### (5) 2号溝SPB西側

2号溝SPB西側では、下位より褐色土（層厚3cm以上）、暗褐色土（層厚11cm）、黒褐色土（層厚17cm）、黄灰色軽石に富む暗褐色土（層厚14cm、軽石の最大径5mm）が認められる（図5）。

### (6) 東西トレンチ中部

東西トレンチ中部では、下位より黄色軽石やスコリア質黒灰色岩片混じり黄灰色砂層（層厚34cm以上、軽石の最大径26mm、岩片の最大径48mm）、灰色砂質土（層厚9cm）、灰白色粗粒火山灰を多く含む黒褐色土（層厚38cm）、重円礫混じり灰色砂層（層厚17cm、礫の最大径13mm、下部8cmは黄灰色シルト）が認められる（図6）。これらのうち、灰白色粗粒火山灰を多く含む黒褐色土からは、縄文時代中期の土器が検出されている。

### (7) 東西トレンチ東部

東西トレンチ東部では、下位より重円礫混じり黒灰色土（層厚25cm以上、礫の最大径21mm）、灰色砂層



(層厚15cm)が認められる(図7)。灰色砂層の上面では、7世紀以降の奈良・平安時代の住居址が検出されている。

#### (8) En-8グリッド

En-8グリッドでは、下位より暗灰褐色土(層厚10cm以上)、灰色砂層(層厚22cm)、黒褐色土(層厚14cm)、亜円礫混じり灰褐色土(層厚17cm、礫の最大径38mm)、盛土(層厚58cm)が認められる(図8)。

#### (9) Eb-18グリッド

Eb-18グリッドでは、21号住居址の覆土を観察することができた(図9)。下位より黄灰色軽石混じり暗褐色土(層厚8cm、軽石の最大径7mm)、黄灰色軽石に富む黒褐色土(層厚21cm、軽石の最大径13mm)、黄灰色軽石混じり暗褐色土(層厚7cm、軽石の最大径6mm)からなる。

#### (10) 20号住居址

20号住居址の覆土は、下位より黄灰色軽石混じり暗褐色土(層厚17cm、軽石の最大径14mm)、黄灰色軽石に富む黒褐色土(層厚9cm、軽石の最大径10mm)、黄灰色軽石混じり暗褐色土(層厚9cm、軽石の最大径6mm)からなる(図10)。

#### (11) 28号住居址

少なくとも黒褐色土(層厚5cm以上)の上位に構築された28号住居址土は、貼床構造をもつ(図11)。貼床は、灰白色軽石を少量含む黒褐色土(層厚5cm、軽石の最大径4mm)からなる。覆土は、灰白色軽石混じり暗褐色土(層厚4cm、軽石の最大径6mm)、成層した灰色シルト層(層厚1cm)、灰白色軽石混じり黒褐色土(層厚2cm、軽石の最大径4mm)、灰白色軽石を多く含む暗褐色土(層厚5cm、軽石の最大径4mm)からなる。

#### (12) 2号溝北壁

2号溝北壁では、2号溝の覆土を観察することができた(図12)。2号溝の覆土は、下位より亜円礫混じり灰褐色砂質土(層厚19cm、礫の最大径188mm)、白色軽石混じりで灰色泥流堆積物のブロックを含む砂混じり灰褐色土(層厚22cm、軽石の最大径7mm)、黄灰色軽石混じり暗灰褐色土(層厚24cm、軽石の最大径12mm)、黄灰色軽石(最大径6mm)や白色軽石(最大径8mm)を含む暗灰褐色土(層厚36cm)、黄灰色軽石混じり暗灰褐色土(層厚90cm、軽石の最大径4mm)、黄灰色軽石を多く含む暗灰褐色土(層厚53cm、軽石の最大径12mm)、黄灰色軽石(最大径11mm)および白色軽石(軽石の最大径17mm)混じり暗灰褐色土(層厚24cm)、白色軽石混じり灰褐色土(層厚12cm、軽石の最大径8mm)、表土(層厚27cm)が認められる。

### 3. テフラ検出分析

#### (1) 分析試料と分析方法

テフラの特徴とその降灰層準を把握するために、2号溝SPB西側、En-8グリッド、Eb-18グリッド、20号住居址、28号住居址、2号溝北壁において採取された試料のうち、36点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

#### (2) 分析結果

2号溝SPB西側では、試料3と試料1で、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径5mm）が比較的多く含まれている。この軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。またこれらの試料には、発泡がさほど良くない白色軽石（最大径2.2mm）が少量含まれている。この軽石の班品には、角閃石や斜方輝石が認められる。En-8グリッドの試料9および試料5からは、軽石は検出されなかった。

Eb-18グリッドでは、試料7～1にスポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径5.8mm）が含まれている。軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。またいずれの試料からも、角閃石を検出することができる。20号住居址の覆土についても、試料7～1のいずれからもスポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径6.0mm）が検出された。軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。ここでも、いずれの試料からも、角閃石を検出することができる。28号住居址では、試料5より上位の試料から、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径4.7mm）が含まれている。軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。また試料5、試料4、試料2には、発泡がさほど良くない白色軽石（最大径2.8mm）が少量ずつ含まれている。この軽石の班品には、角閃石や斜方輝石が認められる。

2号溝北壁では、試料56から試料30にかけて、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径7.0mm）が認められる。また試料46や試料10には、発泡がさほど良くない白色軽石（最大径2.1mm）が、少量ずつ含まれている。この軽石の班品には、角閃石や斜方輝石が認められる。さらに試料30より上位の試料からは、比較的良く発泡した淡褐色軽石（最大径4.7mm）が認められる。軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、試料26から試料14にかけて多く含まれており、その産状から試料26付近にこの軽石で特徴づけられるテフラの降灰層率があると考えられる。

#### 4. 屈折率測定

##### (1) 測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度を向上させるために、Ej-10グリッドの試料1と試料1'、En-8グリッドの試料5、2号溝北壁の試料56と試料26の合計5試料について、温度一定型屈折率測定法（新井、1972、1993）により、テフラ粒子の屈折率測定を行った。

##### (2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。Ej-10グリッドの試料1には、重鉱物として斜方輝石、単斜輝石、角閃石が含まれている。斜方輝石と角閃石の屈折率（ $\gamma$ ,  $n_2$ ）は、各々1.708-1.712と1.676±である。より純度が高い試料1'には、重鉱物として、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率（ $\gamma$ ）は、1.706-1.711 (modal range: 1.707-1.710) である。

En-8グリッドの試料5には、重鉱物として斜方輝石のほか、単斜輝石や角閃石が含まれている。斜方輝石と角閃石の屈折率（ $\gamma$ ,  $n_2$ ）は、各々1.706-1.710と1.675-1.677である。2号溝北壁の試料56に含まれる火山ガラスの屈折率（ $n$ ）は、1.514-1.521である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が認められる。斜方輝石と角閃石の屈折率（ $\gamma$ ,  $n_2$ ）は、各々1.707-1.711と1.675-1.677である。試料26に含まれる火山ガラスの屈折率（ $n$ ）は、1.525-1.532である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が認められる。斜方輝石の屈折率（ $\gamma$ ）は、1.708-1.710である。

#### 5. 考察

Ej-10グリッドの試料1'のテフラは、その層位や重鉱物の組合せ、斜方輝石の層位などから、約8,200年前に

浅間火山から噴出した浅間産同軽石 (As-Fo、早田、1991、1996) に同定される可能性が高い。したがって、本遺跡における厚い水成堆積物の堆積開始時期については、約8,000年前の可能性が考えられる。なお本遺跡の周辺、榛名山南東部に広がる扇状地の概形は、As-YP降灰までには形成されている (早田、1990)。しかしながら、その上位には、腐植質堆積物を挟んで水成層が認められることが多い。とくに前橋市総社の利根川右岸の露頭で認められる厚い砂質の堆積物については、総社砂層と呼ばれている (早田、1990)。

これら扇状地上の水成層の堆積時期については、これまでいくつかの遺跡において、放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定が試みられている。たとえば、砂層直下の腐植質堆積物の $^{14}\text{C}$ 年代測定結果は、群馬町菅谷石塚遺跡では9,910 $\pm$ 70y.BP (Beta-140925、群馬県埋蔵文化財調査事業団、未公表資料)、群馬町冷水村東遺跡では9,630 $\pm$ 60y.BP (Beta-81737、古環境研究所、1998a)、前橋市高井桃ノ木遺跡では4,970 $\pm$ 60y.BP (Beta-126770) である。とくに高井桃ノ木遺跡では、堆積物直下の腐植質土壌から、約5,400年前<sup>\*1</sup>に浅間火山から噴出した浅間六合軽石 (As-Kn、早田、1991、1996) に由来すると思われるテフラ粒子が検出されているほか (古環境研究所、1999)、縄文時代前期末葉の遺物も検出されている (山武考古学研究所、1999)。また群馬町下東西清水上遺跡では、As-Cの下位の4層準に水成堆積物が検出されており、下位より2層目、3層目、4層目の堆積物の直下の $^{14}\text{C}$ 年代は、順に6,420 $\pm$ 60y.BP (Beta-92776)、5,190 $\pm$ 60y.BP (Beta-92775)、4,830 $\pm$ 60y.BP (Beta-92774) である (古環境研究所、1998b)。なお、群馬町保渡田遺跡では、As-Sjの上位の砂礫層の上位に縄文時代早期の陥し穴が検出されている (早田、1990)。

したがって現段階において、榛名山南東麓に広がる扇状地の付加物である水成層の堆積時期については地点によってばらつきがあると言わざるを得ない。しかしその一方で、同時期に広い範囲で水成層が堆積した可能性も考えられる。緩傾斜の扇状地に分布する完新世の水成層については、今後榛名山のみならず広い範囲において、層位や年代、分布さらに成因に関する調査研究を総合的に行う必要がある。本遺跡においても、さらに $^{14}\text{C}$ 年代測定が行われることが望ましい。

En-8グリッドの灰色砂層 (試料5) からは、軽石は検出されなかったものの、重鉱物の組合せや、斜方輝石や角閃石の屈折率などから、4世紀中葉<sup>\*2</sup>に浅間火山から噴出した浅間C軽石 (As-C、荒牧、1968、新井、1979) や、6世紀初頭に榛名山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992) に由来するテフラ粒子が混在していると考えられる。したがって、この砂層の層位は、Hr-FAより上位にあると考えられる。

2号溝北壁の試料56に含まれるテフラは、軽石の特徴、重鉱物の組合せ、火山ガラス、斜方輝石、角閃石の屈折率などから、As-CやHr-FAに由来すると考えられる。また試料26に含まれるテフラは、軽石の特徴、重鉱物の組合せ、火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、1108 (天仁元) 年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ (As-B、荒牧、1968、新井、1979) に由来すると考えられる。したがって、2号溝の層位については、Hr-FAより上位で、As-Bより下位にあると考えられる。

2号SPB西側では、試料3と試料1が採取された土層の基底は、発掘調査の際に遺構確認面とされている。これらの試料からは、灰白色軽石や白色軽石が検出された。岩相から、前者はAs-C、後者はHr-FAに由来すると考えられる。Eb-18グリッドの21号住居址では、貼床構成層から、As-Cに由来する灰白色軽石のほか、Hr-FAに由来すると思われる角閃石が検出される。したがって、その層位はHr-FAより上位にあると考えられる。20号住居址でも、いずれの覆土試料からもFAに由来すると思われる角閃石が検出された。したがって、この20号住居址についても、その層位はHr-FAより上位にあると考えられる。さらに28号住居址でも、貼床構成層から、As-Cに由来する灰白色軽石と、Hr-FAに由来すると思われる白色軽石が検出された。したがって、

この住居址についても、層位はHr-FAより上位にあると考えられる。

## 6. 小 結

前橋市稲荷塚東遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より浅間板鼻黄色軽石 (As-YP、約1.3~1.4万年前\*<sup>1</sup>)、浅間総社軽石 (As-Sj、約1.1万年前\*<sup>1</sup>)、浅間藤岡軽石 (As-Fo、約8,200年前\*<sup>1</sup>)、浅間C軽石 (As-C、4世紀中葉\*<sup>2</sup>)、榛名ニッ岳浅川テフラ (Hr-FA、6世紀初頭)、浅間Bテフラ (As-B、1108年)などを検出することができた。2号溝については、Hr-FAより上位で、As-Bより下位にあると考えられる。また、21号住居址、20号住居址、28号住居址の層位は、Hr-FAより上位にあると推定される。

\*1 放射性炭素 (<sup>14</sup>C) 年代。

\*2 現在では4世紀を遡るとする説が有力になっているようである (たとえば、若狭、2000)。しかし、具体的な年代観が示された研究報告例はまだない。現段階においては「3世紀後半」あるいは「3世紀終末」と考えておくのが妥当なのかも知れないが、土器をもとにした考古学的な年代観の変更については、考古学研究者による明確な記載を待ちたい。

## 文献

- 新井房夫 (1962) 関東並地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫 (1972) 角方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフラクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
- 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
- 寛政重雄 (1968) 浅間火山の地質。地質研専報, no.45, 65p.
- 古環境研究所 (1998a) 冷水村東遺跡の放射性炭素年代測定。(財)群馬県歴史文化財調査事業団編「冷水村東遺跡・西田新田遺跡・金古北十三町遺跡」, p.346.
- 古環境研究所 (1998b) 下東西清水上遺跡における放射性炭素年代測定結果。(財)群馬県教育委員会・群馬県歴史文化財調査事業団編「下東西清水上遺跡」, p.305-307.
- 古環境研究所 (1999) 放射性炭素 (<sup>14</sup>C) 年代測定。山武考古学研究所編「高井橋ノ木遺跡」, p.64.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 坂口 一 (1986) 榛名ニッ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒流北原遺跡・今井神社古墳群・荒流青柳遺跡」, p.103-119.
- 山武考古学研究所 (1999) 高井橋ノ木遺跡。65p.
- 早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉 (1990) 群馬県自然と風土。群馬県史通史編, 1, p.39-129.
- 早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち。佐久考古通信, no.53, p.2-7.
- 早田 勉 (1996) 関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.
- 早田 勉・鹿登 健・新井房夫 (1988) 草津白根火山起源。熊倉軽石層の噴出年代。東北地理, 40, p.272-275.
- 若狭 徹 (2000) 群馬の弥生土器が終るとき、かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く—古賀が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
2号溝SPB西側	1	++	灰白>白	5.0, 2.2	+	pn	灰白>白
	3	++	灰白>白	3.1, 1.2	+	pn	灰白>白
	5	-	-	-	-	-	-
	7	-	-	-	-	-	-
En-8グリッド	5	-	-	-	-	-	-
	9	-	-	-	-	-	-
Eb-18グリッド	1	+	灰白	2.7	+	pn	灰白
	3	++	灰白	4.1	++	pn	灰白
	5	++	灰白	5.8	++	pn	灰白
	7	++	灰白	5.6	++	pn	灰白
20号住居址	1	++	灰白	4.9	++	pn	灰白
	3	++	灰白	5.1	++	pn	灰白
	5	++	灰白	6.0	++	pn	灰白
	7	+	灰白	5.9	+	pn	灰白
28号住居址	1	++	灰白	2.3	+	pn	灰白
	2	+	灰白>白	4.7, 1.3	+	pn	灰白>白
	3	+	灰白	2.0	+	pn	灰白
	4	++	灰白>白	2.1, 2.8	+	pn	灰白>白
	5	+	灰白>白	3.1, 1.1	+	pn	灰白>白
	6	-	-	-	+	pn	灰白
2号溝北壁	2	+	淡褐	2.3	+	pn	淡褐
	6	+	淡褐	3.3	+	pn	淡褐
	10	++	淡褐>白	3.7, 1.1	+	pn	淡褐>白
	14	+++	淡褐	3.9	++	pn	淡褐
	18	+++	淡褐	3.6	++	pn	淡褐
	22	+++	淡褐	4.0	++	pn	淡褐
	26	+++	淡褐	4.7	++	pn	淡褐
	30	++	淡褐, 灰白	4.1, 4.3	++	pn	淡褐, 灰白
	34	++	灰白	5.9	++	pn	灰白>白
	38	++	灰白	3.0	++	pn	灰白>白
	42	++	灰白	3.8	++	pn	灰白>白
	46	+	灰白>白	7.0, 2.1	+	pn	灰白>白
	50	+	灰白	2.9	+	pn	灰白>白
	54	+	灰白	3.0	+	pn	灰白>白
56	+	灰白	2.0	+	pn	灰白>白	

+++ : とくに多い, ++ : 多い, + : 中程度, + : 少ない, - : 認められない。最大径の単位は, mm. bw : バブル型, pn : 軽石型。

表2 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)	重鉱物	斜方輝石 ( $\gamma$ )	角閃石 (n)
Ej-10グリッド	1	-	(opx, cpx, ho)	1.708-1.712	1.676±
Ej-10グリッド	1'	-	opx>cpx	1.706-1.711 (1.707-1.710)	-
En-8グリッド	5	-	opx>cpx, ho	1.706-1.710	1.675-1.677
2号溝北壁	26	1.525-1.532	opx>cpx, (ho)	1.708-1.710	-
2号溝北壁	56	1.514-1.521	opx>cpx, (ho)	1.707-1.711	1.675-1.677

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法（新井, 1972, 1993）による。屈折率の（）は、modal rangeを示す。opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, ho: 角閃石。() は量が少ないことを示す。

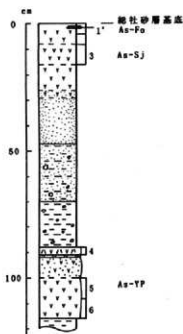


図1 Ej-10グリッドの土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

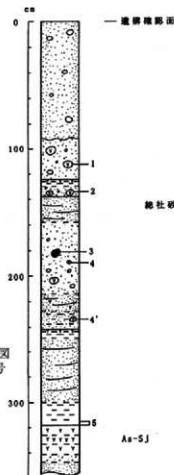


図2 Ej-7グリッドの土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

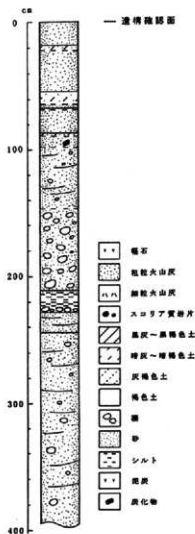


図3 Ej-9グリッドの土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

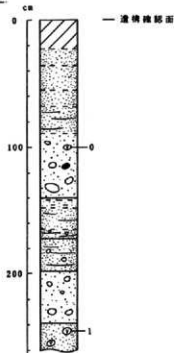


図4 2号溝壁面の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

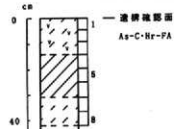


図5 2号溝SPB西側の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

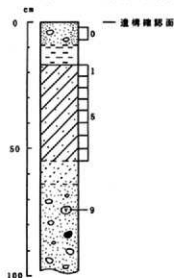


図6 東西トレンチ中部の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

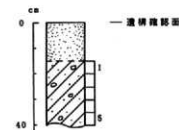


図7 東西トレンチ東部の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

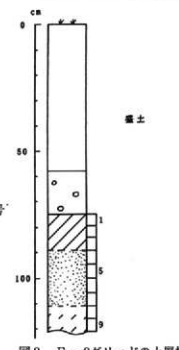


図8 E n-8グリッドの土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

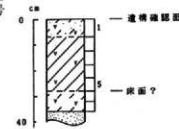


図9 21号住居の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

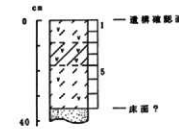


図10 20号住居の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号



図11 28号住居の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

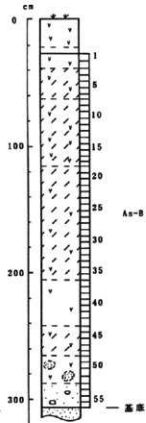


図12 2号溝北壁の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号



## II. 稲荷塚道東遺跡における植物珪酸体分析

## 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。

## 2. 試料

分析試料は、E j-10グリッドから採取された2点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

## 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った (杉山, 2000)。

1) 試料を105°Cで24時間乾燥 (絶乾)、2) 試料約1gに対し直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)、3) 電気炉灰化法 (550°C・6時間) による脱有機物処理、4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散、5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去、6) 封入剤 (オイキッ) 中に分散してプレパラート作成、7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:  $10^{-5}\text{g}$ ) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属 (ヨシ) の換算係数は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、クマザサ属 (チマザサ節・チマキザサ節) は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

## 4. 分析結果

## (1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

## [イネ科]

キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族A (チガヤ属など)、Bタイプ

## [イネ科-タケ亜科]

クマザサ属型 (チマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型 (おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

## [イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等



## (2) 植物珪酸体の検出状況

As-Sj直下層(試料3)および総社砂層直下(試料1)について分析を行った。その結果、As-Sj直下層(試料3)ではヨシ属が比較的多く検出され、キビ族型、ウシクサ族A、クマザサ属型なども少量検出された。総社砂層直下(試料1)では、ヨシ属が大幅に増加している。おもな分類群の推定生産量によると、各層準ともヨシ属が優勢であり、とくに試料1ではヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

## 5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

浅間総社軽石(As-Sj、約1.1万年前)直下層および総社砂層直下層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地の環境であったと考えられ、とくに総社砂層直下層ではヨシ属が繁茂する状況であったと推定される。また、調査区周辺にはキビ族やササ類なども分布していたと考えられる。

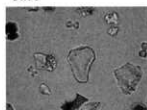
文献

杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)、考古学と植物学、同成社、p.189-213.

藤原空志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-、考古学と自然科学、9、p.15-29.

表1 群馬県、稲荷塚遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)		地点・試料		EJ-10グリッド			
分類群	学名	1	3	おもな分類群の推定生産量(単位: kg/ha・ca)			
イネ科	Cereales (Gramineae)			ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	23.68	7.14
キビ族型	Panicum type	7	13	ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.35	
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	375	113	クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )		0.10
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	28		ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	0.02	
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae</i> A type			クマザサ属の比率(%)			
Bタイプ	B type	14	7	メダケ節型	<i>Phlebotanum</i> sect. <i>Medake</i>		
タケ類科	Bambusoideae (Bamboo)			ネザサ節型	<i>Phlebotanum</i> sect. <i>Nesasa</i>		
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )		13	クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i> )		100
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	7		ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	100	
未分類等	Others		33				
その他のイネ科	Others						
表皮毛起源	Hair origin	28	7				
棒状珪酸体	Rod-shaped	212	180				
茎部起源	Stem origin	50	213				
未分類等	Others	496	400				
植物珪酸体総数	Total	1218	956				

キビ族型  
試料1ヨシ属  
試料1イネ科Bタイプ  
試料1ススキ属型  
試料1クマザサ属型  
試料3イネ科の茎部起源  
試料3

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

50 μm

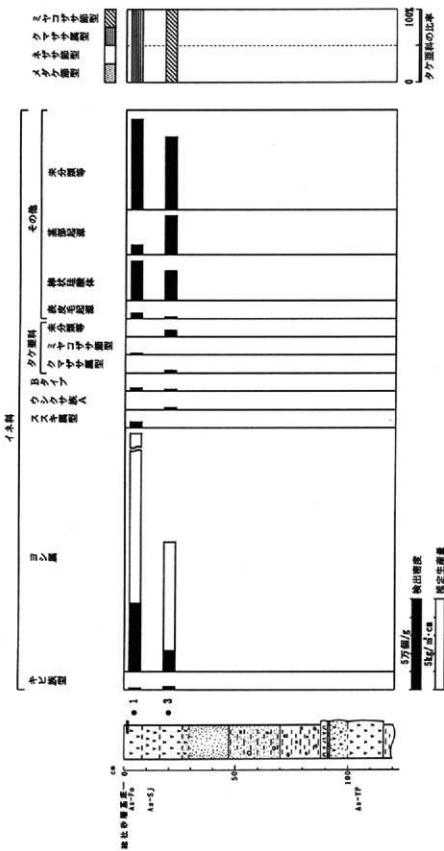


図1 稲荷塚道東遺跡、Ej-10グリッドにおける植物組織体分析結果

## III. 稲荷塚道東遺跡における花粉分析

## 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

## 2. 試料

試料は、Ej-10グリッドから採取された2点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

## 3. 方法

花粉粒の分離抽出は、中村 (1973) の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉 (1973) および中村 (1980) をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (—) で結んで示した。

## 4. 結果

## (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉11、草本花粉9、シダ植物孢子2形態の計22である。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

## 〔樹木花粉〕

ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属—アサダ、クリ、コナラ属コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ

## 〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、フウロソウ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

## 〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴

As-Si直下層（試料3）では、草本花粉の占める割合が非常に高い。草本花粉では、ヨモギ属が優占しており、イネ科も多い。また、キク亜科、アブラナ科、フウロソウ属、タンポポ亜科も低率に出現する。植物珪酸体分析の結果から、イネ科はおもにヨシ属と考えられる。樹木花粉では、スギ、シイ属、コナラ属コナラ亜属が低率に出現する。

総社砂層直下（試料1）では、樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が高く、シダ植物胞子も多い。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科の出現率が高く、ヨモギ属、タデ属サナエタデ節、アカザ科—ヒユ科も出現する。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属が優占しており、カバノキ属、スギ、マツ属複雑管束亜属なども低率に出現する。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

浅間総社軽石（As-Sj、約1.1万年前）直下層の堆積当時は、ヨシ属などのイネ科植物が生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはヨモギ属などが繁茂する乾燥地も分布していたと推定される。森林植生としては、周辺地域にコナラ属コナラ亜属（ナラ類）などが分布していたと考えられる。

総社砂層直下層の堆積当時は、イネ科やカヤツリグサ科などが生育する湿地の環境であったと考えられ、周辺にはヨモギ属やシダ類などが生育する比較的乾燥したところも分布していたと推定される。森林植生としては、周辺地域にコナラ属コナラ亜属（ナラ類）をはじめ、ハンノキ属、カバノキ属、クリなどが分布していたと考えられる。

文献

- 中村 純 (1973) 花粉分析, 古今書院, p.82-110.  
 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.  
 高倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.  
 中村 純 (1980) 日本産花粉の標本, 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

表1 稲荷塚道東遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	EJ-10グリッド	
		1	3
Arboreal pollen	樹木花粉		
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	2	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	2	2
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	
<i>Betula</i>	カバノキ属	2	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	1	
<i>Castanea crenata</i>	クリ	1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	20	1
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	1	
-----			
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Gramineae	イネ科	24	93
Cyperaceae	カヤツリグサ科	32	3
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	3	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	
Cruciferae	アブラナ科		1
<i>Geranium</i>	フウロソウ属		2
Lactuoidaeae	タンポポ科		2
Asteroidaeae	キク科		12
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	10	240
-----			
Fern spore	シダ植物胞子		
Monilate type spore	単条溝胞子	374	35
Trilate type spore	三條溝胞子	16	4
-----			
Arboreal pollen	樹木花粉	31	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	70	353
Total pollen	花粉総数	101	356
-----			
Unknown pollen	未同定花粉	2	2
Fern spore	シダ植物胞子	390	39
-----			
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)
-----			
	明らかでない消化残渣	(-)	(-)

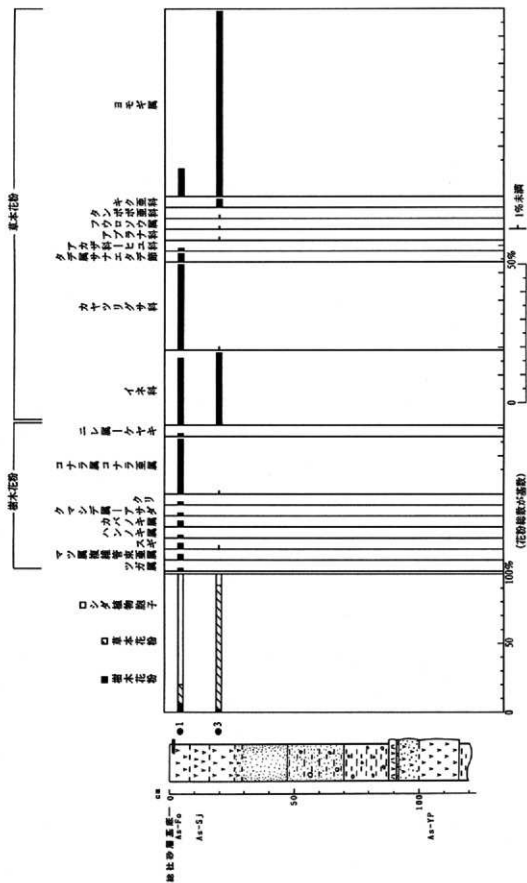
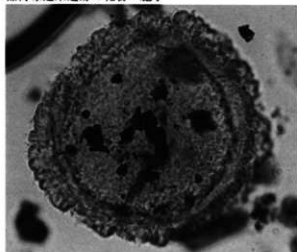
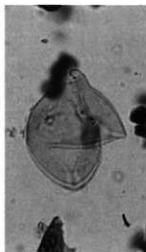


図1 稲荷塚東遺跡、E-j-10グリッドにおける花粉ダイアグラム

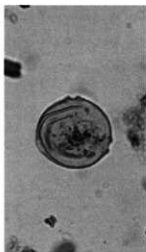
種荷塚道東遺跡の花粉・胞子



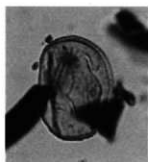
1 ツガ属



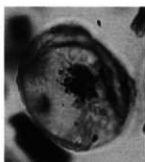
2 スギ



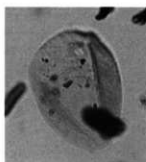
3 クマシデ属-アサダ



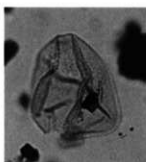
4 コナラ属コナラ亜属



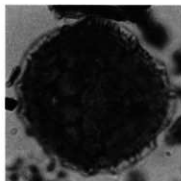
5 ニレ属-ケヤキ



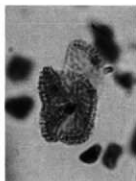
6 イネ科



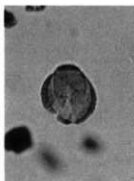
7 カヤツリグサ科



8 タテノキ属サナエタテノキ



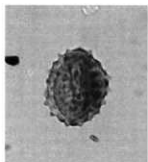
9 アブラナ科



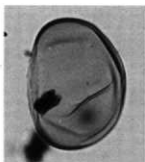
10 ヨモギ属



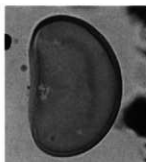
11 ヨモギ属



12 キク亜科



13 シダ植物単条溝胞子



14 シダ植物単条溝胞子



15 シダ植物三条溝胞子

— 10 μm

## IV. 稲荷塚道東遺跡における蛍光X線分析

## 1. 試料

試料は、稲荷塚道東遺跡の住居跡から出土した4点の土器に付着した赤色顔料である。分析は、21住-3(埴)の赤色部と非赤色部、21住-1(片口鉢)の赤色部、33住-7(埴)の赤色部と非赤色部、60住-14(壺)の赤色部の計6カ所について行った。

## 2. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム(日本電子製、JSX3201)を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法(FP法)による定量分析を行った。土器片については、絶乾後、分析装置の固定試料ステージに固定し、測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定した。X線発生部の管球はロジウム(Rh)ターゲット、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。

なお、21住-1(片口鉢)は赤色顔料が土器の内側、60住-14(壺)は赤色顔料が土器の湾曲部に付着しており、そのまま測定することは困難であった。そこで、これらの土器については、ごく微量の顔料を粘着テープで採取して測定対象とした。この粘着テープの構成元素は99.8%が炭素であり、水銀や鉛などは含まれていない。

## 3. 分析結果

各元素の定量分析結果(wt%)を、表1に示す。なお、21住-1(片口鉢)と60住-14(壺)については、測定対象が微量であることから、定量分析結果の数値は正確なものではない。

## 4. 考察

赤色顔料としては、一般的に水銀朱(硫化水銀:  $\text{HgS}$ )、ベンガラ(酸化第二鉄:  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )、鉛丹(酸化鉛:  $\text{Pb}_3\text{O}_4$ )が知られている(市毛、1998、本田、1995)。

分析の結果、21住-3(埴)の赤色部、21住-1(片口鉢)の赤色部、33住-7(埴)の赤色部では、Hg(水銀)およびS(イオウ)の明瞭なピークが認められた。HgOの含量は1.5~2.8%、 $\text{SO}_3$ の含量は2.6~7.3%である。比較試料として分析を行った21住-3(埴)と33住-7(埴)の非赤色部では、これらの元素は検出されなかった。なお、各土器の赤色部ではFe(鉄)も検出されたが、非赤色部と比較して $\text{Fe}_2\text{O}_3$ の含量にとくに大きな差異は認められなかった。

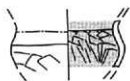
60住-14(壺)の赤色部では、Fe(鉄)の明瞭なピークが認められ、Hg(水銀)やPb(鉛)は検出されなかった。 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ の含量は31.7%を示しており、その他の試料と比較して明らかに高い値である。

以上の結果から、21住-3(埴)、21住-1(片口鉢)、33住-7(埴)に付着した赤色顔料は水銀朱、60住-14(壺)に付着した赤色顔料はベンガラと推定される。

## 文献

- 市毛 勲(1998) 新編朱の考古学。考古学叢書。雄山閣出版  
 本田光子(1995) 古墳時代の赤色顔料。考古学と自然科学。31・32, p.63-79.

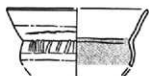




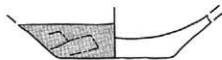
21住-3



21住-1



33住-7



60住-14

0 5cm

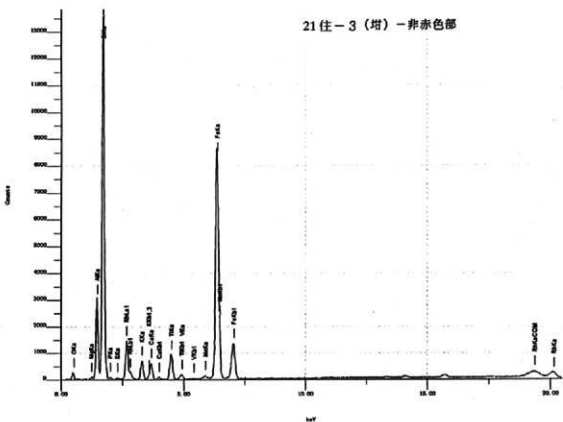
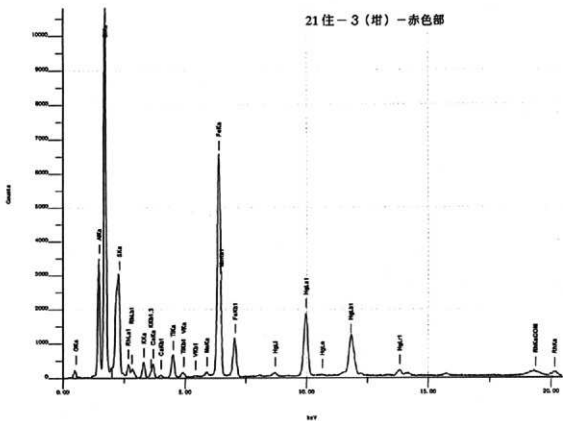
表1 群馬県、稲荷塚道東遺跡から出土した土器の蛍光X線分析結果

単位: wt(%)

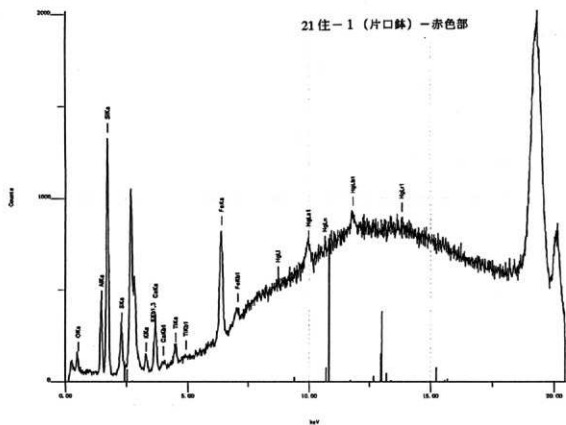
地点・試料		21住-3		21住-1	33住-7		60住-14
		埴		片口鉢	埴		臺
原子No.	化学式	赤色部	非赤色部	赤色部	赤色部	非赤色部	赤色部
12	MgO		0.75			1.42	
13	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	24.00	19.60	22.52	20.73	19.64	10.73
14	SiO <sub>2</sub>	57.34	66.93	54.65	63.15	68.86	28.23
15	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>		0.49				
16	SO <sub>3</sub>	5.68	0.00	7.32	2.64		11.79
19	K <sub>2</sub> O	1.29	1.75	2.24	1.58	1.59	3.11
20	CaO	1.00	1.32	5.19	1.36	1.42	10.41
22	TiO <sub>2</sub>	1.32	1.69	1.79	1.67	1.45	3.56
23	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.06	0.04		0.06	0.06	
25	MnO	0.24			0.27		
26	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	6.26	7.42	4.78	6.95	5.50	31.73
30	ZnO						0.45
40	ZrO <sub>2</sub>					0.05	
80	HgO	2.82		1.53	1.58		

※微量

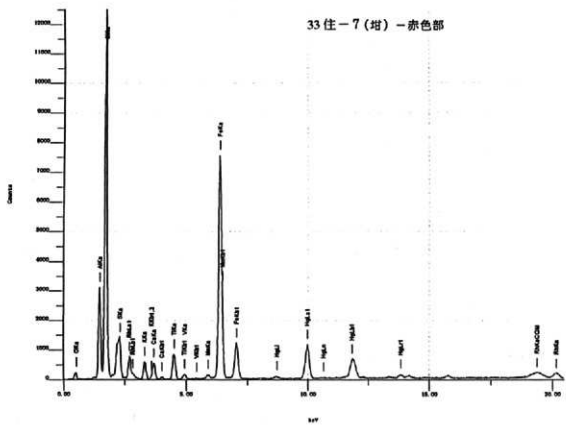
※微量

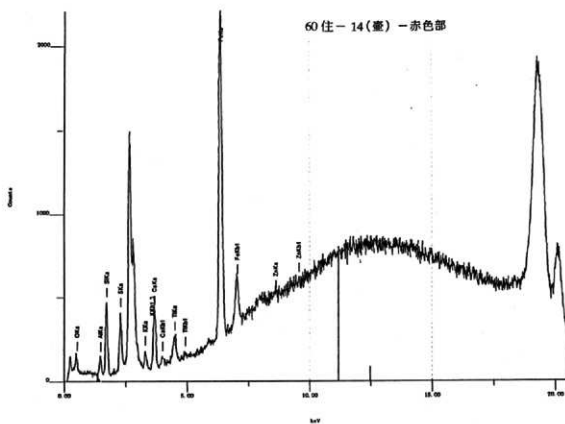
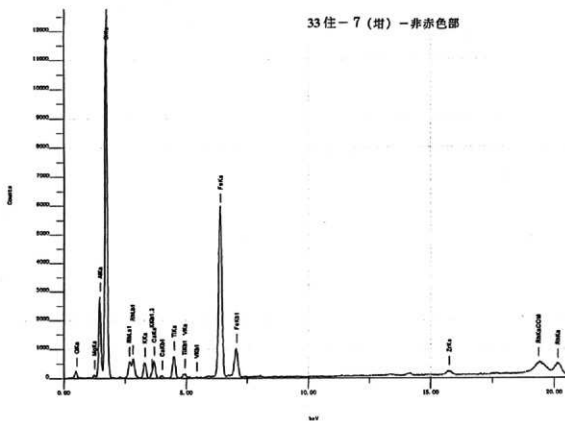


21 住-1 (片口鉢) - 赤色部



33 住-7 (埴) - 赤色部





## 第2節 稲荷塚道東遺跡の土坑より採取した試料について

群馬地質研究会 飯島静男

岩石名：未固結凝灰岩

稲荷塚道東遺跡のかまど材採掘坑より採取した土塊は、固結度が低く、ふつうは岩石とは呼べない。しいて岩石としてみれば未固結凝灰岩である。遺跡内に露出した地層は成層しており、細粒凝灰岩、粗粒凝灰岩、ラピリ質凝灰岩などに相当する粒度の単層が認められた。試料は粗粒凝灰岩層の部分より採取した。

性状：乾燥時は明るい褐色を呈し、湿時は暗色となる。粗しょうである。かさ比重は採取後約10ヵ月の室温放置後で、約1.6である。おもに径2～4mm内外の軽石と、0.5～1mm内外の結晶および少量の岩片等よりなり、やや粗い黄白色軽石片がわずかに散在する。火砕岩の分類法に従えば、クリスタル（結晶）軽石凝灰岩である。

岩質：両輝石安山岩質である。

通例の火山灰分析法に従って処理した。無色鉱物ではほとんどが斜長石であるが、ごく少量（1パーセント以下）の両錐形石英およびその破片、ならびに融食して丸みをおびた石英などが含まれる。有色鉱物ではしそ輝石が多く、ついで普通輝石、さらに黒色不透明磁性鉱物があり、まれに新鮮な角閃石がみられる。岩片は量的には少ない。おおむね安山岩で、赤褐色、灰色、暗灰色、黒色のものなどがある。鉱物組成からみた、この未固結凝灰岩の岩質は両輝石安山岩質である。外来岩片あるいは異質岩片をほとんど含まず。少量の類質岩片を含むものの、きわめて本質的である。

考状：遺跡の地理的位置は榛名山麓にあたる。しかしながら榛名火山の新規噴出物には有意な量の角閃石が含まれ、古期噴出物にはしばしば粗粒の普通輝石が含まれる。当該試料中にはそのような榛名火山を特徴づけるものが、ほとんど認められない。また現在の利根川の川砂などには、多かれ少なかれ異質岩片が混在しており、当該試料は通常の洪水堆積物とは考え難い。「鳥羽遺跡L・M・N・O区」報告書の中で、類似の半固結凝灰岩について、新井房夫教授の所見が掲載されており、おそらく浅間火山起源と推定された。記載の性質は必ずしも一致しないが、同様の起源の推定が可能である。

### 第3節 稲荷塚道東遺跡出土馬歯・馬骨

植崎修一郎

はじめに

稲荷塚道東遺跡は、群馬県前橋市総社町に位置し、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が平成14(2002)年1月7日～同年6月30日まで行われた。この遺跡の、2号溝・3号溝・39号住居・7号土坑・11号土坑・1号井戸の6ヶ所より、馬(ウマ) [*Equus caballus*] の歯及び骨が出土したので以下に報告する。なお、馬歯の計測方法は、von den Driesch (1976) に従った。ちなみに、馬(ウマ)は、恐らく、5世紀の古墳時代に日本に渡来したと考えられている。

#### 1. 2号溝出土獣骨(写真1・写真2・表1参照)

時代は、古墳時代～平安時代に比定されている。10に分けて取り上げられているが、残念ながら出土位置が不明である。ここでは、最も保存状態が良かったものについて記載する。

##### ①出土部位

上下顎の馬歯が出土している。

##### ②個体数

重複部位が無いため、個体数は1個体と推定される。

##### ③性別

馬の場合、性別は上下顎にある犬歯の有無あるいは、寛骨により推定できる。従って、性別の推定は難しい。

##### ④死亡年齢

歯高計測値より、死亡年齢は約6歳と推定される。

##### ⑤外傷や病理

出土馬歯には、歯石の付着は認められなかった。しかしながら、同じく2号溝から出土した馬歯の内、下顎歯3本の舌側面に幅約3mmの溝が近遠心方向に認められた。これは、恐らくエナメル質減形成と呼ばれるもので、人間の場合歯の形成時期である乳幼児期に栄養不良や病気(麻疹・水痘・風疹・猩紅熱・ジフテリア・肺炎・結核等)が原因でエナメル質の石灰化不全がおこり、それが線状・小窩状・溝状に痕跡を残す状態である。したがって、この個体は成長時期に何らかの栄養不良や病気にかかっていた可能性が高い。

#### 2. 3号溝出土獣骨

時代は、出土遺物より、中世～近世に比定されている。

##### ①出土部位

破損している馬の下顎左第3大臼歯が1本出土している。

##### ②個体数

1本しか出土していないので、個体数は1個体である。

##### ③性別

馬の場合、性別は上下顎にある犬歯の有無あるいは、寛骨により推定できる。従って、性別の推定は難しい。

い。

④死亡年齢

破損しているため、死亡年齢の推定は不可能である。

⑤外傷や病理

頬側面及び舌側面に、わずかな歯石の付着が認められた。

3. 39号住居出土獣骨

時代は、9世紀に比定されている。馬の下顎臼歯片が出土しているが、破片であり、歯種の同定は不可能である。従って、個体数・性別・死亡年齢等の推定も不可能である。

4. 7号土坑出土獣骨

7号土坑は、15号住居内に掘り込まれて検出されており、時代は、平安時代～中世前半に比定されている。馬の下顎歯の破片が出土している。破片であるため、歯種の同定は不可能である。従って、個体数・性別・死亡年齢等の推定も不可能である。

5. 11号土坑出土獣骨

時代は、平安時代～中世前半に比定されている。馬の上顎臼歯が出土しているが、破損しており、歯種の同定は不可能である。従って、個体数・性別・死亡年齢等の推定も不可能である。

6. 1号井戸出土獣骨

時代は、出土遺物より、9世紀後半～10世紀前半に比定されている。

①出土部位

破損している馬の上顎左第3大臼歯1本及び馬骨破片多数が出土している。

②個体数

恐らく、個体数は1個体と推定される。

③性別

馬の場合、性別は上下顎にある犬歯の有無あるいは、寛骨により推定できる。従って、性別の推定は難しい。

④死亡年齢

全歯高が約45mmであるので、死亡年齢は約8歳と推定される。

⑤外傷や病理

歯石の付着は認められなかった。

まとめ

稲荷塚東遺跡の内、2号溝・3号溝・39号住居・7号土坑・11号土坑・1号井戸の6ヶ所から馬歯・馬骨が出土した。2号溝（古墳時代～平安時代）からは約6歳の馬の上下顎歯が、3号溝（中世～近世）からは馬の下顎左第3大臼歯が、39号住居（9世紀）からは馬の下顎臼歯片が、7号土坑（平安時代～中世前半）からは馬の下顎歯片が、11号土坑（平安時代～中世前半）からは馬の上顎臼歯片が、1号井戸からは馬の上

顎左第3大白歯及び馬骨片が出土した。溝や井戸から馬歯や馬骨が出土した場合、折雨祭祀に伴い水神に捧げるためや井戸を埋める際の祭祀のために殉殺した可能性が疑われる。

表1 稲荷塚道東遺跡2号溝出土馬歯計測表

	歯 種	左 右	歯 冠 長	歯 冠 幅	頰側歯冠高
上 顎	P2(第2小臼歯)	右	—	—	—
		左	—	—	—
	P3(第3小臼歯)	右	—	—	—
		左	28 mm	26 mm	52 mm
	P4(第4小臼歯)	右	—	—	—
		左	27 mm	26 mm	破損
	M1(第1大白歯)	右	—	—	—
		左	23 mm	26 mm	46 mm
	M2(第2大白歯)	右	—	—	—
		左	24 mm	24 mm	55 mm
	M3(第3大白歯)	右	—	—	—
		左	25 mm	21 mm	52 mm
下 顎	P2(第2小臼歯)	右	31 mm	14 mm	35 mm
		左	—	—	—
	P3(第3小臼歯)	右	27 mm	16 mm	49 mm
		左	—	—	—
	P4(第4小臼歯)	右	26 mm	15 mm	60 mm
		左	破損	15.5 mm	破損
	M1(第1大白歯)	右	24.5 mm	13.5 mm	56 mm
		左	24.5 mm	13.5 mm	56 mm
	M2(第2大白歯)	右	25 mm	13 mm	63 mm
		左	25 mm	13 mm	61 mm
	M3(第3大白歯)	右	29 mm	12 mm	59 mm
		左	30 mm	12 mm	60 mm

注：「破損」とあるのは、破損で計測できなかったことを示す。





写真1 2号溝出土馬歯右側傾側面観



写真2 2号溝出土馬歯左側傾側面観

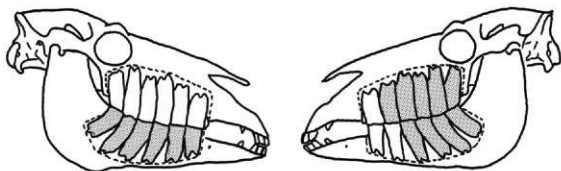


図1 2号溝出土馬歯出土部位



写真3 2号溝出土馬歯 [下顎] エナメル質減形成

遺物觀察表

## 1号住居遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
10-1 PL30	土師器 鉢	床直・掘り方 口-体部1/2	口-(12.8) 底- 高-(10.9)	①細砂、白色軽石 ②酸化焰 ③にぶい赤褐5YR5/4	体部は丸みを持ち、口縁部は短く外反する。 外面 体部は刷毛目。 内面 口縁から体部はへらナデ。
10-2 PL30	土師器 鉢台	床直 器受部片	径-12.9 厚-0.6	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③にぶい燈7.5YR7/4	外面の周囲に刺突点と円形の粘土痕貼付。 上面はへら磨き後、赤色塗彩。
10-3 PL30	土師器 小型壺	覆土 口縁部片	口-(11.2) 底- 高-(3.8)	①細砂 ②酸化焰 ③にぶい燈7.5YR5/3	口縁部は外反し、指頭圧痕が見られる。 外面 口縁部横ナデ。 内面 口縁部横ナデ。頸部へらナデ。
10-4 PL30	土師器 小型甕	床直 口縁部片	口-(11.8) 底- 高-(3.3)	①細砂 ②酸化焰 ③燈7.5YR6/8	口縁部は外反する。 口縁部内外面横ナデ。
10-5 PL30	土師器 台付甕	床直 口縁部片	口-(9.8) 底- 高-(2.5)	①細砂、石英 ②酸化焰 ③燈5YR7/8	頸部から直立気味に立ち上がるS字状口縁。 外面 口縁部横ナデ、以下斜め刷毛目。 内面 口縁部横ナデ。

## 2号住居遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
11-1 PL30	土師器 小型壺	床直+6 口-胴部2/3	口-(9.2) 底- 高-(4.5)	①細砂 ②酸化焰 ③にぶい黄緑10YR7/4	胴部は丸くふくらみ、口縁部はやや外反する。 外面 口縁部刷毛目後横ナデ、以下刷毛目。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。
11-2 PL30	土師器 高坏	床直 坏-脚部4/5	口-(20.8) 底- 高-(9.5)	①細砂、輝石 ②酸化焰 硬質 ③燈7.5YR6/6	坏底部に稜を持ち、口縁部は大きく外反する。 外面 口縁端部は横ナデ、以下刷毛目後へら磨き。 内面 口縁端部は横ナデ、以下へら磨き。
11-3 PL30	土師器 台付甕	+6 口-胴部片	口-(19.0) 底- 高-(7.6)	①細砂 ②酸化焰 ③灰黄2.5YR6/2	外反するS字状の口縁部。 外面 口縁部は横ナデ。胴部は縦方向刷毛目。 内面 口縁部は横ナデ。頸部に指頭圧痕あり。

## 3号住居遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
13-1 PL30	須恵器 坏	貯蔵穴 口-底部1/2	口-(12.6) 底-(6.6) 高-2.8	①細砂 ②還元焰 ③灰5Y5/1	口縁部は直線的に開きながら、外傾する。 外面 轆轤痕強く残る。右回轆轤成形。 底部は右回転糸切り。
13-2 PL30	土師器 甕	貯蔵穴 口-胴部片	口-(17.8) 底- 高-(7.7)	①細砂、輝石 ②酸化焰 硬質 ③燈5YR6/8	口縁部は「コ」の字状を呈す。 外面 口縁から頸部は横ナデ。胴部はへら削り。 内面 口縁から頸部は横ナデ。頸部に指頭圧痕残る。

## 4号住居遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
14-1 PL30	須恵器 蓋	貯蔵穴覆土 破片	口-(18.0) 径- 高-(2.5)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焰 硬質 ③灰5Y6/1	天井部は直線的に開く。口唇部は折り曲げて直立する。

## 5号住居遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
15-1 PL30	須恵器 坏	覆土 口-底部片	口-(12.8) 底-(7.4) 高-(3.5)	①細砂、白色軽石 ②還元焰 ③黄灰2.5Y5/1	胴部がやや張り、直線的に立ち上がる。 底部は回転糸切り。
15-2 PL30	土師器 台付甕	覆土 台部片	口- 底-(9.0) 高-(3.0)	①細砂、輝石 ②酸化焰 硬質 ③燈7.5YR4/3	台部は2段階で外反する器受部。 外面 弱いへら削り。裾部は横ナデ。 内面 裾部は横ナデ。

遺物観察表

6号住居遺物観察表

排阻番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
16-1 PL30	土師器 坏	貯蔵穴裏土 □～底部1/5	□-(10.8) 底-(4.2) 高-2.3	①細砂 ②酸化焙 ③にぶい澄7.5YR6/4	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 口縁部内外面横ナデ。 外面 体から底部へら削り。
16-2 PL30	土師器 坏	貯蔵穴 □～体部1/4	□-(10.4) 底- 高-(2.6)	①細砂、輝石 ②酸化焙 硬質 ③澄5YR6/8	体部は丸みを持ち、口縁部はやや内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ。

8号住居遺物観察表

排阻番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
18-1 PL30	土師器 坏	覆土 口縁部片	□-(12.8) 底- 高-(3.6)	①細砂 ②酸化焙 ③澄5YR6/8	体部下位に稜を持ち、口縁部は外反する。 内外面とも荒れがひどく調整不明。

9号住居遺物観察表

排阻番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
19-1 PL30	土師器 坏	甕 口縁部片	□-13.0 底- 高-(3.2)	①細砂、輝石 ②酸化焙 硬質 ③明赤焼5YR5/8	内湾する口縁部。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 へらナデ。
19-2 PL30	須恵器 甕	甕 口縁部片	□- 底- 高-	①細砂、白色軽石 ②還元焙 硬質 ③灰10Y5/1	口縁部は外反し、中位に1条の凸帯を持つ。口唇部は折り返し。外面には波状文。内面に自然輪が見られる。

12号住居遺物観察表

排阻番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
23-1 PL30	土師器 坏	貯蔵穴 □～底部片	□-(16.0) 底- 高-(5.0)	①細砂、輝石 ②酸化焙 ③澄5YR6/6	体部は丸みを帯び、口縁部は直立する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ。
23-2 PL30	須恵器 坏	貯蔵穴 □～底部片	□-(12.0) 底-(6.8) 高-(3.8)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焙 やや軟質 ③灰5Y6/1	体部はやや丸みを帯び、直線的に立ち上がる。 右回転輪軸成形。底部は回転糸切り。
23-3 PL30	須恵器 坏	貯蔵穴 □～底部片	□-(12.0) 底-(7.2) 高-(3.5)	①細砂、白色軽石 ②還元焙 ③灰2.5Y5/1	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。 右回転輪軸成形。
23-4 PL30	土師器 甕	甕・貯蔵穴 □～胴部片	□-(22.6) 底- 高-(11.3)	①細砂、輝石 ②酸化焙 ③澄5YR6/8	口縁部は外反し、胴部は丸みを持つ。口縁部は横ナデ。 胴上半部は横方向・中央部は縦方向のへら削り。

13号住居遺物観察表

排阻番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
24-1 PL30	土師器 坏	床直 ほぼ定形	□-10.6 底-丸底 高-3.5	①細砂、小礫 ②酸化焙 ③澄5YR6/6	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は直立する。 外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ。
24-2 PL30	土師器 坏	+5 1/2	□-10.0 底-丸底 高-3.2	①細砂 ②酸化焙 ③澄7.5YR6/6	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ。
24-3 PL30	土師器 坏	覆土 □～底部1/5	□-(12.0) 底- 高-(3.1)	①細砂 ②酸化焙 ③澄5YR6/6	体部は丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ。
24-4 PL30	土師器 甕	床直～+8 口縁部1/2	□-(20.2) 底- 高-(10.2)	①粗砂、輝石 ②酸化焙 ③にぶい黄褐色10YR5/4	口縁部は外反し、胴部はあまりふくらまず直線的にのびる。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。

13号住居こも編み石計測表

押図番号 図版番号	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				石材	押図番号 図版番号	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				石材
		長さ	幅	厚さ	重量				長さ	幅	厚さ	重量	
25-5 PL30	+9 完形	15.2	6.7	5.2	990	変質安山岩	25-6 PL30	+6 完形	13.7	7.5	4.9	809	粗粒輝石安山岩
25-7 PL30	床直 完形	16.2	6.9	4.6	884	粗粒輝石安山岩	25-8 PL30	+9 完形	15.4	5.0	4.8	627	溶結凝灰岩
25-9 PL30	+10 完形	14.4	5.4	4.3	505	砂岩	25-10 PL30	+4 完形	13.4	6.9	4.5	608	粗粒輝石安山岩
25-11 PL30	+7 完形	13.2	5.8	3.6	499	ひん岩							

14号住居遺物観察表

押図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
29-1 PL30	土師器 坏	+12 口-底部3/4	口-12.5 底-丸底 高-3.9	①細砂、輝石 ②還元焰 ③肌5YR6/5	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面 丁寧な横ナデ。
29-2 PL30	土師器 坏	掘り方 口-底部2/3	口-13.0 底-丸底 高-3.6	①細砂、輝石 ②還元焰 硬質 ③肌5YR6/5	口縁部は直立し、底部は丸底を呈す。 外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面 口縁から体部まで横ナデ。
29-3 PL30	土師器 坏	+6・ビット3 口-底部2/3	口-12.3 底-丸底 高-3.4	①細砂、輝石 ②還元焰 ③肌5YR6/5	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ。
29-4 PL30	土師器 坏	床直 口-底部2/5	口-(17.2) 底-丸底 高-(4.5)	①細砂、輝石 ②還元焰 硬質 ③肌5YR6/5	体部は丸みを持つ。 外面 口縁部横ナデ、以下不定方向のへら削り。 内面 口縁から底部丁寧なナデ。
29-5 PL30	須恵器 坏	掘り方・北壁 口-底部片	口-(14.0) 底-(10.5) 高-3.6	①粗砂 ②還元焰 ③肌5Y5/1	体部は丸みを帯び、口縁部は直線的に立ち上がる。底部は平底を呈す。体から底部の外周は自然釉がかかる。
29-6 PL30	須恵器 坏	+11 底部1/2	口- 底-(14.0) 高-(2.8)	①粗砂、白色軽石 ②還元焰 ③肌2.5Y6/1	底部は平底を呈し、右回転へら削り。
29-7 PL31	須恵器 有台坏	+6 口-底部1/4	口-(17.2) 底-(13.0) 高-4.1	①粗砂、黒色鉱物 ②還元焰 ③肌5Y6/1	体部は丸みを帯び、口縁部は直線的に立ち上がる。付高台。 底部は回転へら削り。
29-8 PL31	須恵器 高坏	床直 胴部1/2	口- 底-(13.2) 高-(5.5)	①緻密、黒色鉱物 ②還元焰 ③肌5Y5/1	胴部は「ハ」の字状に開く。 脛部成形。
29-9 PL31	須恵器 長頸壺	+4 頸部片	口- 底- 高-(5.4)	①細砂 ②還元焰 ③肌7.5Y6/1	頸部片。頸部中位に2条の沈線走る。
29-10 PL31	土師器 壺	掘り方 口縁部片	口-(20.0) 底- 高-(6.5)	①粗砂、輝石 ②還元焰 ③にぶい肌7.5YR6/4	口縁部は大きく外反し、胴部は丸みを持つ。 外面 口縁から頸部横ナデ、以下へら削り。 内面 胴部へら削り。
30-11 PL31	土師器 壺	床直 口-胴部1/2	口-(22.3) 底- 高-(12.5)	①粗砂、小礫 ②還元焰 ③肌7.5Y6/6	胴部は直線的で頸部は括れず、口縁部は外反する。 外面 口縁部横ナデ、以下縦方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。 床直・掘り方・ビット6・東壁・床下土坑出土遺物報告。
30-12 PL31	土師器 壺	床直・北壁 口-底部2/5	口-(25.4) 底-4.0 高-(34.4)	①粗砂、輝石 ②還元焰 ③にぶい肌5YR6/4	胴部はみくらず、頸部も括れず口縁下は外反する。 外面 口縁部は横ナデ、以下縦方向のへら削り。 内面 口縁部は横ナデ、以下へらナデ。

14号住居こも編み石計測表

押図番号 図版番号	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				石材	押図番号 図版番号	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				石材
		長さ	幅	厚さ	重量				長さ	幅	厚さ	重量	
26-13 PL31	床直 完形	14.1	6.6	4.5	670	粗粒輝石安山岩	26-14 PL31	床直 完形	13.8	6.0	4.7	722	変質安山岩
26-15 PL31	床直 完形	12.8	6.9	3.8	550	アイサイト	26-16 PL31	壁溝 完形	14.2	5.2	4.6	575	溶結凝灰岩
26-17 PL31	床直 完形	12.8	6.1	4.7	575	石英閃緑岩	26-18 PL31	壁溝 完形	12.1	5.7	3.7	373	石英閃緑岩

遺物観察表

採回番号 図版番号	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				石 材	採回番号 図版番号	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				石 材
		長さ	幅	厚さ	重量				長さ	幅	厚さ	重量	
26-19 PL31	+4 定形	16.5	6.7	3.0	581	実質安山岩	26-20 PL31	壁溝 定形	12.9	5.2	4.8	477	石英閃緑岩
26-21 PL31	壁溝 定形	12.9	6.9	2.8	398	粗粒輝石安山岩	26-22 PL31	壁溝 定形	10.8	6.3	3.6	297	ひん岩
26-23 PL31	壁溝 定形	13.6	6.8	4.1	571	実質安山岩	26-24 PL31	壁溝 定形	10.2	6.8	5.0	699	粗粒輝石安山岩
27-25 PL31	掘り方 定形	14.5	5.8	4.0	481	雑質安山岩							

15号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
31-1 PL31	須恵器 有台坏	覆土 底部片	口一 底一(10.0) 高一(1.4)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焰 ③灰白7.5Y7/1	底部回転へら削りと削り出し高台。胎土に黒色鉱物が多量に混じる。
31-2 PL31	須恵器 長頸壺	覆土 胴部片	口一 底一 高一(3.5)	①細砂、白色軽石 ②還元焰 ③灰N6/	胴部外面に不規則な刺突痕が残る。
31-3 PL31	土師器 甕	貯蔵穴 口一胴部片	口一(16.0) 底一 高一(5.7)	①細砂、輝石 ②還元焰 やや軟質 ③赤褐5YR4/8	口縁部は外反し、胴部は球状の丸みを持つ。外面 口縁部は横ナテ。胴部は横方向のへら削り。

16号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
33-1 PL31	須恵器 坏	+3 胴一底部1/5	口一 底一(7.8) 高一(2.4)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焰 ③灰N4/	体部は直線的に立ち上がる。底部は右回転糸切り。
33-2 PL31	須恵器 壺	甕 破片	口一(18.0) 紐一 高一(2.4)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焰 ③灰5Y6/1	口縁部は折り曲げて直立する。

17号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
34-1 PL31	須恵器 埴	床下土坑 底部片	口一 底一6.6 高一(2.2)	①細砂、輝石 ②還元焰 ③黒5Y2/1	付高台。高台は「ハ」の字状に開く。底部は右回転糸切り。
34-2 PL31	須恵器 羽釜	床直 口縁部片	口一(22.0) 底一 高一(5.9)	①細砂、輝石 ②還元焰 硬質 ③灰白7.5YR8/2	口縁部は内湾する。甕は断面三角形を呈し、水平方向を向く。

19号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
37-1 PL31	須恵器 皿	床直 口一底部1/3	口一(8.8) 底一(5.4) 高一1.2	①細砂、輝石 ②還元焰 ③橙10YR6/6	体部から口縁部は直線的に開く。底部は回転糸切り(回転方向不明)。
37-2 PL31	須恵器 皿	甕 口一底部1/4	口一(7.0) 底一(4.3) 高一1.6	①細砂、小礫 ②還元焰 ③にぶい橙7.5YR6/4	器壁が厚く、口縁部はやや内湾する。底部は右回転糸切り。
37-3 PL31	須恵器 羽釜	床直 口縁部片	口一(19.2) 底一 高一(4.6)	①細砂、小礫 ②還元焰 硬質 ③弱7.5YR4/3	口縁部は内湾し、口唇部は外傾して突出する。甕は断面三角形を呈し、水平方向を向く。口縁は内外面横ナテ。
37-4 PL31	平瓦	甕 破片	長一(20.2) 幅一(10.3) 厚一2.1	①鉱物含、重 ②差 還元気味 ③灰黄色2.5Y7/2	製作法は1枚作り。叩き目無文。甕部面取り回数2回。製作地は吉井。時期は8・9世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王庵寺。

## 20号住居遺物観察表

押図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴		
						長さ	幅
38-1 PL31	土師器 坏	床直 口～底部1/2	口-11.8 底-(7.0) 高-3.4	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③赤褐色2.5YR4/6	直線的に立ち上がり、口縁部はやや直立する。 外面 口縁部と内面全面はナデ調整。		
38-2 PL31	須恵器 坏	覆土 口～底部3/5	口-12.6 底-6.0 高-3.6	①粗砂、白色軽石 ②還元塩 やや軟質 ③黄灰2.5Y6/1	直線的に立ち上がり、口縁は外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。		
38-3 PL31	須恵器 坏	覆土 1/4	口-(13.5) 底-(7.2) 高-3.7	①細砂、黒色鉱物 ②還元塩 ③灰10Y6/1	直線的に立ち上がる。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。		
38-4 PL31	須恵器 坏	床直 口～底部1/5	口-(11.0) 底-(5.3) 高-3.1	①粗砂、輝石 ②酸化塩 ③にぶい黄橙10YR7/3	胴部が張り、口縁部は外反する。 底部は回転糸切り(回転方向不明)。		
38-5 PL31	須恵器 埴	床直 口～底部1/2	口-(13.7) 底-6.4 高-5.6	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③にぶい黄橙10YR6/3	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 付高台。右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。		
38-6 PL31	須恵器 埴	掘り方 1/2	口-13.4 底-(6.6) 高-5.1	①細砂、白色軽石 ②還元塩 ③灰5Y6/1	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 付高台。高台は短く「ハ」の字状に開く。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。		
38-7 PL31	須恵器 埴	床直 口～底部1/4	口-14.0 底-6.4 高-5.0	①細砂 ②酸化塩 硬質 ③にぶい黄橙10YR7/3	体部は丸みを帯び立ち上がり、口縁部は外反する。右 回転轆轤成形。付高台。底部は右回転糸切り。		
38-8 PL31	須恵器 埴	覆土 底部1/2	口- 底-(7.0) 高-(4.3)	①細砂、小礫 ②酸化塩 ③にぶい黄7.5YR5/4	体部は直線的に立ち上がり、高台は「ハ」の字状に開く。 付高台。轆轤強く残る。		
38-9 PL32	灰輪陶器 埴	覆土 口～底部1/3	口-(16.0) 底-8.0 高-5.1	①緻密 ②還元塩 硬質 ③灰白10YR7/1	体部は丸みを持ち、口縁部はやや外反する。 付高台。高台は「ハ」の字状に開く。 抽輪方法は掛け掛け。胎調は灰白色。大塚2号壺式期。		
38-10 PL32	須恵器 羽釜	覆土 口～胴部片	口-(17.0) 底- 高-(10.9)	①細砂、小礫 ②酸化塩 ③にぶい黄7.5YR6/4	口縁部は内湾し、胴部はゆるい丸みを持つ。胴は断面三 角形を呈し、水平を向く。		
39-11 PL32	須恵器 羽釜	床直 口～胴部片	口-(24.0) 底- 高-(16.2)	①細砂、輝石 ②還元塩 硬質 ③灰10Y6/1	胴は断面三角形。口縁は内湾する。 外面 口縁は横ナデ。胴中部へら削り。 内面 口縁横ナデ。		
39-12 PL32	須恵器 羽釜	床直 口～胴部片	口-(22.0) 底- 高-(9.6)	①白色細粒、小礫 ②酸化塩 硬質 ③にぶい黄7.5YR6/4	胴は断面三角形。口縁は内湾する。 外面 口縁部は横ナデ。 内面 口縁部は横ナデ。		
39-13 PL31	須恵器 羽釜	床直 口～胴部片	口-(19.2) 底- 高-(9.1)	①細砂、輝石 ②還元塩 ③灰5Y4/1	胴部は丸みを帯び、口縁部は内湾する。 胴は細身で断面三角形を呈す。口縁部内外面横ナデ。		
押図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)			特 徴	
39-14 PL32	鉄製品 釘	床直	(4.2)	0.4	0.4		1.92

## 21号住居遺物観察表

押図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
40-1 PL32	土師器 片口鉢	貯蔵穴 定形	口-12.7 底-5.1 高-5.9	①細砂 ②酸化塩 ③にぶい黄褐10YR6/4	平底で体部は丸みを帯び立ち上がる。 外面 口縁部横ナデ。体部へら磨き。底部指頭圧痕。 内面 口縁部横ナデ。以下へら磨き。赤色塗彩。
40-2 PL32	土師器 器台	+11 台部1/2	口- 底-(13.0) 高-(3.3)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③にぶい黄7.5YR6/4	ラッパ状に開く台部。 内外面へら磨き、胴部は横ナデ。
40-3 PL32	土師器 埴	覆土 胴～胴部片	口- 底- 高-(3.6)	①細砂 ②酸化塩 ③灰黄褐10YR5/2	碗状の胴部。 外面 胴上部は横ナデ。以下へら削り。内面へらナデ。 内面に赤色顔料付着。容器に使用したものと考えられる。
40-4 PL32	台付壺	覆土 台部片	口- 底- 高-(2.9)	①細砂 ②酸化塩 ③にぶい黄橙10YR7/4	接合部に砂粒を多量に含む粘土を付加。 外面 刷毛目。

遺物観察表

22号住居遺物観察表

棟号 図面番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
43-1 PL32	土師器 坏	甕 口-底部片	口-12.6 底- 高-3.8	①細砂、輝石 ②酸化焰 やや軟質 ③にぶい赤褐5YR5/4	口縁部は外反し、底部は平底を呈す。 外面 口縁部は横ナデ。体部はへら削り。 内面 体部はへらナデ。
43-2 PL32	須恵器 埴	覆土 口-体部1/4	口-17.0 底- 高-5.2	①細砂、小礫 ②還元焰 硬質 ③灰白10Y7/1	胴部、体部ともに直線的に立ち上がる。 口縁部は外反する。轆轤成形。
43-3 PL32	土師器 甕	甕 口-頸部片	口-19.8 底- 高-5.7	①細砂、輝石 ②酸化焰 硬質 ③褐7.5YR4/6	口縁部は弱い「コ」の字状を呈し、外反する。 外面 口縁から頸部横ナデ、以下横方向へら削り。 内面 口縁から頸部横ナデ、以下へらナデ。
43-4 PL32	土師器 甕	ビット1 口縁部片	口-16.1 底- 高-4.1	①細砂、輝石 ②酸化焰 やや軟質 ③明赤褐5YR5/8	口縁部は「コ」の字状を呈し、内外面とも横ナデ。 内面 頸部はへらナデ。

23号住居遺物観察表

棟号 図面番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
44-1 PL32	須恵器 皿	床直 口-底部3/5	口-9.6 底-5.4 高-1.9	①粗砂、輝石 ②酸化焰 ③明黄褐10YR7/6	器壁厚く、口縁部は直線的に立ち上がる。底部は右回転 糸切り。
44-2 PL32	須恵器 坏	床直 口-底部2/3	口-9.3 底-6.0 高-2.1	①細砂 ②酸化焰 ③黄褐6YR6/6	外傾し右がら直線的に立ち上がる。 底部は右回転糸切り。
44-3 PL32	須恵器 埴	覆土 口-底部1/4	口-13.6 底-(7.7) 高-5.7	①細砂 ②酸化焰 ③灰黄褐10YR6/2	体部は丸みを持ち立ち上がり、口縁部はやや外反する。 付高台。高台は「ハ」の字状に開く。 右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
44-4 PL32	土師器 土塗	床直 口-胴上部 1/6	口-(25.6) 底- 高-(10.9)	①粗砂、白色軽石 ②酸化焰 ③にぶい褐7.5YR5/4	口縁部は短く外反し、胴部は大きくふくらむ。 外面 口縁部横ナデ、以下縦方向へら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下横方向へらナデ。
44-5 PL32	平瓦	覆土 小破片	長-(5.0) 幅-(4.0) 厚-1.9	①麻物含、軽 ②硬 還元燻気味 ③にぶい黄褐10YR4/3	製作法は1枚作りか、叩き目格子。側部欠損。製作地は 笠懸。時期は8世紀。流用元は国府・国分尼寺か。
44-6 PL32	平瓦	覆土 小破片	長-(4.6) 幅-(2.7) 厚-2.6	①麻物含、軽 ②軟 酸化 ③にぶい黄褐10YR6/3	製作法は不明。叩き目無文。側部欠損。製作地は不明。 時期は7・8世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王院寺。
44-7 PL32	九瓦	覆土 破片	長-(8.0) 幅-(9.4) 厚-1.6	①麻物含、軽 ②硬 還元 ③暗灰黄2.5Y4/2	製作法は不明。叩き目無文。側部面取り回数2回。製作 地は笠懸。時期は8世紀。流用元は国府・国分尼寺か。
45-8 PL32	九瓦	覆土 小破片	長-(6.0) 幅-(9.1) 厚-1.0	①麻物含、重 ②硬 還元燻気味 ③灰オリーブ5Y6/2	製作法は2枚作り。幅寄木痕あり。回転糸痕あり。叩き 目無文。側部面取り回数2回。製作地は西毛。時期は7・ 8世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王院寺。
45-9 PL32	九瓦	覆土 破片	長-(14.0) 幅-(11.0) 厚-1.7	①麻物含、軽 ②硬 還元燻気味 ③暗灰黄2.5Y5/2	製作法は不明。叩き目無文。側部面取り回数2回。製作 地は笠懸。時期は8世紀。流用元は国府・国分尼寺か。
45-10 PL32	九瓦	覆土 破片	長-(18.3) 幅-(11.5) 厚-1.5	①麻物含、重 ②硬 還元燻気味 ③黄灰2.5Y5/1	製作法は2枚作り。回転糸痕あり。叩き目無文。側部面 取り回数3回。製作地は東毛。時期は7〜9世紀。流用 元は国府・国分尼寺か。

24号住居遺物観察表

棟号 図面番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
47-1 PL32	土師器 坏	甕 2/3	口-13.8 底- 高-5.0	①細砂、輝石 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐5YR5/8	底部から体部は丸みを持ち、口縁部やや内斜する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。体部に指頭圧痕。 内面 口縁部横ナデ、以下へら磨き。
47-2 PL32	土師器 坏	甕 口-体部1/6	口-(13.8) 底- 高-(4.8)	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③明赤褐2.5YR6/6	体部は丸みを帯び立ち上がり、口縁部は内斜する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ。体部はへら磨き。



遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
47-3 PL33	土師器 坏	床直 口-底部1/4	口-(13.7) 底-丸底 高-5.2	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③にぶい黄緑7.5YR6/4	口縁部は内斜し、底部は丸底を呈す。 外面 口縁部横ナデ。体から底部へら削り。 内面 口縁部横ナデ、ナデ後へら磨き。
47-4 FL33	土師器 坏	覆土 口-体部片	口-(12.0) 底- 高-(4.3)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③澄2.5YR6/8	体部は丸みを持ち、口縁部は内斜する。 外面 口縁部は横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部は横ナデ、以下へら磨き。
47-5 FL33	土師器 坏	床直 口-底部1/5	口-(15.8) 底-丸底 高-4.3	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③明赤褐5YR5/6	体部は丸みを持ち、口縁部は内斜する。 外面 口縁部は横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ。
47-6 FL33	土師器 坏	甕 口-底部3/5	口-10.0 底-丸底 高-5.0	①粗砂、白色軽石 ②酸化塩 軟質 ③澄7.5YR6/5	底部から体部は丸くふくらみ、口縁部は内湾する。 外面 体部から底部へら削り。成形が確。
47-7 FL33	土師器 高坏	甕 脚部4/5	口- 底-(14.6) 高-(4.3)	①粗砂、白色軽石 ②酸化塩 ③にぶい黄緑10YR6/4	ラッパ状に開く脚部。裾端部は丸い。裾部は内外面横ナデ。
47-8 FL33	土師器 高坏	床直 坏部破片	口-(17.0) 底- 高-(4.7)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③明赤褐7.5YR5/8	坏部は直線的に立ち上がり、口縁部やや受け口状を呈す。 外面 坏口縁部は横ナデ、以下へら磨き。 内面 口縁部は横ナデ、以下へら磨き。
47-9 FL33	土師器 甕	甕 ほぼ完形	口-16.3 底-5.0 高-19.0	①細砂、小礫 ②酸化塩 ③にぶい黄緑10YR7/4	口縁部は外反し、胴部は丸くふくらむ。 外面 口縁部横ナデ、以下縦方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下横方向のへらナデ。
47-10 FL33	土師器 甕	甕 胴-底部1/3	口- 底-7.5 高-(22.5)	①粗砂 ②酸化塩 ③にぶい濁7.5YR5/4	胴部は球状にふくらみ、底部は平底を呈す。 器面の荒れがひどい。胴下半部にはへら削り痕見られる。
48-11 PL32	土師器 小型甕	甕 口縁部片	口-(15.8) 底- 高-(5.9)	①粗砂、輝石 ②酸化塩 ③澄5YR6/8	口縁部は折り返し後、内外面とも横ナデ。折り返し痕残る。 胴部は縦方向のへら削り後、横ナデ。 内面は横方向の刷毛目。
48-12 FL33	土師器 甕	甕 口-底部3/4	口-13.7 底-6.5 高-14.7	①粗砂 ②酸化塩 ③にぶい黄緑10YR6/4	胴部はゆるくふくらみ、口縁部は短く外反する。底部に孔あり。口縁部横ナデ。底部へら削り。器目が荒れている。
48-13 FL33	土師器 甕	床直 口-胴部片	口-(23.8) 底- 高-(10.2)	①粗砂 ②酸化塩 ③澄7.5YR6/5	外反する口縁、長めの胴部。 外面 縦方向のへら削り、口縁は横ナデ。 内面 ヒビ状の接合痕が残る。
48-14 FL33	土師器 甕	床直+6 甕 口-底部3/4	口-22.6 底-9.0 高-24.4	①細砂、小礫 ②酸化塩 軟質 ③浅黄緑10YR8/3	口縁部はやや外反し、胴部はほぼ直線的にすぼまる。 外面 口縁部横ナデ。胴部上位は縦方向・不定方向のへら削り。内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。

25号住居遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
49-1 FL33	須恵器 埴	甕 口-体部片	口-(16.8) 底- 高-(5.2)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③暗灰黄2.5Y5/2	やや丸みを持ち立ち上がり、口縁部は外反する。 右回転縦線成形。
49-2 FL33	土師器 台付甕	甕覆土 台部片	口- 底- 高-(3.0)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③澄7.5YR7/6	台付甕の台部片。台部端部は「ハ」の字状に開く。 外面は横ナデ。

26号住居遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
51-1 FL33	土師器 坏	甕 口-体部片	口-(15.0) 底- 高-(4.0)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③明赤褐2.5YR5/6	体部は丸みを持ち、口縁部は内斜する。 外面 口縁部横ナデ。体部へら磨き。底部へら削り。 内面 口縁部横ナデ。体部へら磨き。
51-2 FL33	土師器 高坏	床直 坏部1/2	口-17.4 底- 高-(6.4)	①細砂 ②酸化塩 ③澄5YR6/8	坏底部に横を持ち坏部は外反し、口縁部は短く直立する。 内外面とも荒れている。 内外面一部にへら磨き痕あり。

遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
51-3 FL33	土師器 器台	覆土 脚部片	口一 底一 高-(6.0)	①細砂 ②酸化塩 ③にぶい黄褐色10YR7/4	脚部はフツパ状に開き、円孔3ヶ所あり。 外面 へら削り。 内面 磨部横ナデ。
51-4 FL33	土師器 甕	床直 口一胴部片	口一(21.0) 底一 高-(8.0)	①粗砂 ②酸化塩 ③にぶい黄褐色10YR7/4	口縁部は大きく外反し、胴部はややふくらむ。口縁部は横ナデ。胴部はへら削り。
51-5 FL33	土師器 甕	甕 口一胴部1/4	口一(21.6) 底一 高-(14.9)	①細砂 ②酸化塩 ③橙7.5YR6/6	胴部はややふくらみ、口縁部は外反する。 内外面口縁部横ナデ。外面胴上部へら削り。 内面はへらナデ。胴中部以下は器面の荒れはげしい。
51-6 FL33	土師器 甕	床直 口一胴部片	口一(22.6) 底一 高-(5.8)	①粗砂、輝石 ②酸化塩 ③橙5YR6/6	口縁部は、頸部から外反して立ち上がる。 口縁部は、内外面横ナデ。 内外面とも摩滅している。

27号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
52-1 FL33	土師器 甕	床直 口縁部片	口一(17.7) 底一 高-(6.5)	①粗砂、輝石 ②酸化塩 ③にぶい赤褐色5YR5/4	口縁部は、外反し、胴部はふくらみを持つ。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。

28号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
54-1 FL33	須恵器 埴	覆土 口一底部片	口一(15.0) 底一 高-(5.8)	①細砂、小礫 ②還元塩 ③黄灰2.5Y6/1	やや丸みを帯びて立ち上がり、口縁はやや外反する。 右回転轆轤成形。
54-2 FL33	灰胎陶器 皿	ビット1 口一底部1/4	口一(13.2) 底一(6.6) 高-(2.7)	①細密 ②還元塩 硬質 ③灰白5Y8/1	やや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は軽く外反する。 付高台。施釉方法不明。釉調は灰白色。大原2号窯式期。
54-3 FL33	灰胎陶器 埴	覆土 体一底部片	口一 底一(8.0) 高-(3.3)	①細砂、黒色鉱物 ②還元塩 ③灰白2.5Y7/1	高台は肩部に丸みを持ち、やや開く。 施釉方法は不明。釉調は灰白色。 大原2号窯式期。
54-4 FL33	須恵器 羽釜	甕 口縁部片	口一(21.2) 底一 高-(5.7)	①粗砂、小礫 ②酸化塩 軟質 ③にぶい橙7.5YR6/4	口縁部は内湾し、口唇部はやや直立する。甕は断面三角形を呈す。甕は水平方向を向く。

29号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
56-1 FL33	須恵器 埴	床下土坑 体一底部1/3	口一 底一7.4 高-(3.5)	①粗砂、小礫 ②還元塩 ③黄灰2.5Y6/1	体部は丸みを持ち立ち上がる。付高台。右回転轆轤成形。 底部は右回転糸切り。
56-2 FL33	土師器 土釜	覆土 口縁部片	口一(19.4) 底一 高-(9.6)	①粗砂、輝石 ②酸化塩 ③黄7.5YR4/6	胴部はやや丸みを帯び立ち上がり、口縁部は直立する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ。
56-3 FL33	須恵器 羽釜	覆土 口一胴部片	口一(24.6) 底一 高-(12.1)	①粗砂、輝石 ②酸化塩 ③橙7.5YR6/6	口縁部は直線的に立ち上がる。甕は小さく水平方向を向く。 外面 胴部は弱いへら削り。 内面 指ナデ。作りが雑。

31号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
58-1 FL34	土師器 坏	甕 口一底部1/4	口一(16.2) 底一丸底 高-(5.6)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③明褐色7.5YR5/8	口縁部は外反し、体部に弱い稜を持つ。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部から体部横ナデ。
58-2 FL34	須恵器 甕	覆土 鉢一天井部 1/6	口一 底一(6.0) 高-(2.3)	①細砂、白色輝石 ②還元塩 ③灰SY6/1	鉢は輪状を呈す。 天井部の上部半分は、回転へら削り。 内面を転用として使用。磨面と朱墨痕あり。

遺物観察表

拝因番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	
			口	底			
58-3 PL34	土師器 長甕	床直 口-胴部片	口-(22.0) 底- 高-(10.0)		①粗砂、輝石 ②酸化塩 ③にぶい黄緑10YR6/3	口縁部は大きく外反し、胴部は直線的にのびる。 外面 口縁部横ナデ、以下縦方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。	
拝因番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				特 徴
			長さ	幅	厚さ	重量	
58-4 PL34	石製品 火打石	覆土	2.45	2.3	1.8	11	石英 分割製。表面上位の鏡上によるつぶれあり。

32号住居遺物観察表

拝因番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	
			口	底			
60-1 PL34	須恵器 坏	+6 完形	口-13.4 底-7.4 高-3.2		①細砂、白色軽石 ②還元塩 ③黄灰2.5Y6/1	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。成形時の重み大きい。	
60-2 PL34	須恵器 坏	床直 口-底部4/5	口-13.5 底-7.2 高-3.0		①細砂、黒色鉱物 ②還元塩 ③黄灰2.5Y6/1	胴部が張り、口縁部は外反する。右回転轆轤成形。底部は内側で盛り上がり、右回転糸切り。作りが硬で重み大きい。	
60-3 PL34	須恵器 皿	覆土 口-底部1/4	口-(10.6) 底-(5.4) 高-2.1		①細砂 ②酸化塩 ③灰白2.5Y6/2	体部から口縁部は直線的に開く。付高台。高台は直立きみ。 底部は回転糸切り。	
60-4 PL34	灰釉陶器 皿	覆土 底部片	口- 底-(7.4) 高-(2.0)		①磁器 ②還元塩 硬質 ③灰白2.5Y7/1	付高台。高台部は三日月形を呈す。 胎土方法は刷毛塗り。胎土は緑灰色。内面に重ね焼き痕残る。光ヶ丘1号壺式期。	
60-5 PL34	須恵器 鉢	+5 口-底部3/4	口-15.7 底-7.2 高-5.1		①細砂、小礫 ②酸化塩 ③黄灰2.5Y7/2	体部は丸みを帯び、口縁部はやや外反する。付高台。右回転轆轤成形。轆轤痕強く残る。底部は右回転糸切り。	
60-6 PL34	須恵器 埴	+21 体-底部1/4	口- 底-7.2 高-(4.0)		①粗砂、輝石 ②酸化塩 ③にぶい黄緑10YR6/3	高台はやや丸をもつ断面四角形を呈す。付高台。 底部は右回転糸切り。	
60-7 PL34	須恵器 埴	+7 底部片	口- 底-6.4 高-(2.0)		①細砂、輝石 ②酸化塩 ③にぶい黄緑10YR7/3	高台は〔ハ〕の字状に開く。付高台。 底部右回転糸切り。	
60-8 PL34	須恵器 埴	覆土 体-底部1/5	口- 底-(6.6) 高-(4.3)		①細砂、輝石 ②酸化塩 ③黄灰2.5Y7/2	体部は丸みを帯びて立ち上がる。付高台。 高台は段を持ち低い。底部回転糸切り。右回転轆轤成形。	
60-9 PL34	須恵器 壺	覆土 口-天井部片	口- 口-(7.4) 高-(1.7)		①細砂、黒色鉱物 ②還元塩 ③灰5Y6/1	壺は扁平状を呈す。 天井部は回転へら削り。	
60-10 PL34	須恵器 壺	覆土 口縁部片	口-(15.8) 口- 高-(1.9)		①細砂 ②還元塩 硬質 ③灰白2.5GY8/1	轆轤成形。口唇部は折り曲げ。	
60-11 PL34	土師器 甕	覆土 口-胴部片	口-(16.0) 口- 高-(6.0)		①細砂 ②酸化塩 ③にぶい黄7.5YR7/3	口縁部は外反し、胴部は丸みを持つ。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 へらナデか。	
拝因番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				特 徴
			長さ	径	厚さ	重量	
60-12 PL34	鉄製品 紡錘車	+4	(12.9)	(5.1)	0.5	21.1	円形の輪部の少穴と輪部両端調査時欠損。輪部と輪部は直交せず輪部傾く。輪部断面円形。木質などの付着なし。層状剥落多少なく遺存良好。

33号住居遺物観察表

拝因番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
			口	底		
61-1 PL34	土師器 坏	掘り方 完形	口-11.8 底-丸底 高-3.2		①細砂 ②酸化塩 硬質 ③橙7.5YR6/8	底部から体部は丸みを持ち、口縁部は直立する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ。
61-2 PL34	土師器 坏	掘り方 ほぼ完形	口-11.8 底-丸底 高-3.1		①細砂 ②酸化塩 硬質 ③橙5YR6/8	底部から体部は丸みを持ち、口縁部は直立する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ。

遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
61-3 PL34	土師器 坏	床直 口一丸底3/4	口一11.0 底一丸底 高-3.5	①細砂 ②酸化焰 ③橙SYR6/6	体部は丸みを持ち立ち上がり、口縁部は直立する。底部は丸底を呈す。口縁部内外面、横ナデ。
61-4 PL34	土師器 坏	床直 口一底部3/4	口一(9.6) 底一丸底 高-3.4	①細砂、小礫 ②酸化焰 硬質 ③橙7.5YR6/6	底部から体部は丸みを持ち、口縁部はやや内傾する。外面 口縁部は横ナデ、以下へら削り。内面 口縁部から体部は横ナデ。
61-5 PL34	土師器 坏	覆土 口一底部片	口一(11.8) 底一丸底 高-(3.1)	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③橙SYR6/6	体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は直立する。口縁下部に稜を持つ。口縁内外面横ナデ。外面体部から底部へら削り。
61-6 PL34	土師器 坏	覆土 口一底部片	口一(11.8) 底一 高-(3.0)	①細砂 ②酸化焰 ③橙SYR6/6	体部は丸みを帯び稜を持つ。口縁部は直立する。口縁部内外面横ナデ。外面 体部から底部へら削り。
61-7 PL34	土師器 罎	覆土 口一縁部片	口一(11.0) 底一 高-(4.5)	①粗砂、輝石 ②酸化焰 硬質 ③にぶい黄褐10YR4/3	直線的に立ち上がり、外反する口縁部。腕状の胴部。口縁部横ナデ後、頸部はミガキ調整。内部に赤色顔料付着。容器に使用したと考えられる。
61-8 PL34	土師器 小型壺	覆土 口一胴部片	口一(14.0) 底一 高-(4.0)	①粗砂、輝石 ②酸化焰 やや軟質 ③にぶい赤褐5YR4/4	口縁部はやや外反する。外面 口縁部は横ナデ。胴部はへら削り。内面 頸部はへらナデ。

34号住居遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
62-1 PL34	須恵器 坏	竈 口一底部1/5	口一(10.8) 底-(4.8) 高-(4.1)	①細砂、小礫 ②酸化焰 やや軟質 ③にぶい黄褐10YR6/3	丸みを持ち立ち上がり、口縁部はやや外反する。輪轆成形。底部は回転糸切り(回転方向不明)。
62-2 PL34	須恵器 埴	床直 口一底部1/4	口一(12.6) 底-(7.2) 高-(5.5)	①細砂 ②酸化焰 やや軟質 ③灰黄褐10YR6/2	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。右回転輪轆成形。付高白。
62-3 PL34	須恵器 羽釜	床直 口一縁部1/4	口一18.0 底一 高-(7.0)	①粗砂、輝石 ②酸化焰 硬質 ③にぶい黄褐10YR5/4	口縁部は強く内湾し、胴部も丸みを持つ。踵は小さく、上方を向く。
62-4 PL34	須恵器 羽釜	床直 口一胴上部片	口一(21.4) 底一 高-(10.9)	①粗砂、白色軽石 ②酸化焰 軟質 ③にぶい褐7.5YR5/3	口縁部は内湾する。踵は両面三角形を呈す。胴部は直線的でありふくらまない。右回転輪轆成形。

35号住居遺物観察表

押出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
64-1 PL34	土師器 坏	床直 1/4	口一13.4 底一丸底 高-(5.4)	①粗砂、輝石 ②酸化焰 ③橙7.5YR6/6	口縁部は内斜し、底部は丸底を呈す。外面 口縁部は横ナデ、底部へら削り。内面 口縁部は横ナデ、体部の一部へらナデ。
64-2 PL34	土師器 坏	貯蔵穴2覆土 1/5	口一(12.8) 底一 高-(4.8)	①粗砂、輝石 ②酸化焰 ③にぶい赤褐5YR4/4	体部は丸くふくらみ、口縁部は内斜する。外面 口縁部は横ナデ、以下へら削り。内面 口縁部は横ナデ、以下へら磨き。
64-3 PL34	土師器 坏	貯蔵穴2覆土 口一底部1/4	口一14.4 底一丸底 高-6.3	①細砂 ②酸化焰 ③橙SYR6/8	丸みを帯びた体部。内斜する口縁。口縁部内外面横ナデ。体部は磨成し調整不明。
64-4 PL34	土師器 坏	+16~+18 口一底部2/3	口一13.0 底一丸底 高-(5.1)	①粗砂、輝石 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐5Y5/6	底部から体部は丸みを帯び、口縁部はやや内湾する。外面 口縁部は横ナデ、以下へら削り。内面 口縁部は横ナデ、体部はへら磨き。
64-5 PL34	土師器 坏	貯蔵穴2覆土 口一底部1/5	口一(6.8) 底一 高-(8.1)	①細砂 ②酸化焰 ③黄褐10YR5/6	丸みを帯びた体部。内斜する口縁。外面 口縁部は横ナデ、以下へら削り。内面 口縁部は横ナデ、以下へらナデ。
64-6 PL34	土師器 甗	竈 口一縁部片	口一(16.2) 底一 高-(5.0)	①粗砂、白色軽石 ②酸化焰 ③灰褐7.5YR4/2	口縁部は2段階に開く。内面はへらナデ。成形が確。

36号住居遺物観察表

神田番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴			
65-1 PL35	須恵器 羽釜	+16 口一胴上部片	口-(19.6) 底- 高-(10.1)	①細砂、白色軽石 ②還元焰 やや軟質 ③灰白2.5Y7/1	口縁部はやや内湾し、口唇部は外側に突出する。胴部は丸みを帯びる。肩は断面三角形を呈す。口縁は内外面横ナデ。			
65-2 PL35	須恵器 羽釜	+15~+19 口一胴部1/4	口-(19.0) 底- 高-(11.5)	①細砂、小糠 ②還元焰 ③灰黄褐10YR4/2	口縁はやや内湾する。肩は断面三角形。口縁は内外面ともに横ナデ。右回転轆轤成形。			
65-3 PL34	須恵器 羽釜	+21 口縁部片	口-(23.6) 底- 高-(7.0)	①細砂、白色軽石 ②還元焰 ③黄灰2.5Y6/1	口縁部はやや内湾し、口唇部は平坦で水平。肩は断面三角形を呈し、水平方向を向く。口縁は内外面横ナデ。			
65-4 PL35	須恵器 坏	+2 口一底部3/4	口-13.2 底-6.8 高-4.0	①細砂 ②還元焰 ③灰青リブ5Y6/2	体部はやや丸みを持ち立ち上がる。右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。			
65-5 PL35	土師器 壺	+7 ほぼ完形	口-20.5 底-4.0 高-28.5	①細砂、輝石 ②還元焰 ③にぶい赤褐5YR4/4	器壁薄く口縁部は外反し胴部は上位でふくらむ。外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。内面 口縁部横ナデ、以下へら削り。			
65-6 PL35	土師器 施	+17 口一底部1/4	口-(13.3) 底- 高-(5.0)	①細砂 ②還元焰 硬質 ③にぶい赤褐5YR4/4	口縁部は内湾し、体部は丸くふくらむ。外面 口縁部は横ナデ、以下へら削り。内面 口縁部は横ナデ、体部は荒れている。			
65-7 PL35	土師器 坏	覆土 口一底部1/5	口-15.0 底- 高-(5.5)	①細砂、輝石 ②還元焰 ③焼7.5YR7/6	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾する。外面 口縁部は横ナデ、以下横方向のへら削り。内面 口縁から体部は丁寧なへら磨き。			
65-8 PL35	土師器 坏	覆土 口一底部片	口-(14.0) 底- 高-(6.9)	①細砂 ②還元焰 ③明赤褐5YR5/6	体部は丸みを持ち、口縁部は外反する。外面 口縁は横ナデ、以下へら削り。内面 口縁は横ナデ。			
65-9 PL35	土師器 壺	口一胴部片	口-(15.2) 底- 高-(11.4)	①細砂、白色軽石 ②還元焰 ③にぶい橙7.5YR6/4	口縁部は外反し胴部は丸みを帯びる。口縁部内外面は横ナデ。胴部内外面荒れている。			
神田番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				石材	特徴
65-10 PL35	石製品 紡錘車	+4 完形	長さ	原さ	孔径	重量	純紋岩	成形が粗く、雑。
65-11 PL35	石器 凹・磨石	+6 完形	12.3 長さ	11.8 幅	4.0 原さ	744	粗粒輝石安山岩	中央部に磨耗と敲打による凹みあり。裏面に研磨部分あり。磨耗は非金剛による。

37号住居遺物観察表

神田番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
42-1 PL35	須恵器 施	床直 底部のみ	口- 底-5.5 高-(1.7)	①細砂、白色軽石 ②還元焰 ③灰青リブ5Y6/2	付高台。高台は、短く「ハ」の字状に開く。底部右回転糸切り。
42-2 PL35	須恵器 長頸甕	床直 底部	口- 底-9.6 高-(3.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白5Y8/2	底部・胴下半部は回転へら削り。付高台。底部内面の一部に自然輪かかる。
42-3 PL35	土師器 台付壺	口- 底-(8.5) 高-(5.0)	口- 底-(8.5) 高-(5.0)	①細砂 ②還元焰 ③焼7.5YR4/6	台部は大きく開く。外面 胴部へら削り。台部横ナデ。内面 胴部へら削り。台部横ナデ。
42-4 PL35	土師器 台付壺	覆土 台部1/2	口- 底-(10.7) 高-(3.7)	①細砂、弱色粒 ②還元焰 ③焼7.5YR4/6	台部は下半で大きく開く。台部の内外面ともに横ナデ。

38号住居遺物観察表

神田番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
67-1 PL35	須恵器 坏	掘り方 1/4	口-(14.5) 底-6.0 高-4.3	①粗砂、白色軽石 ②還元焰 ③にぶい橙7.5YR6/4	体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反する。右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。

遺物観察表

押図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調		成・整形技法の特徴		
				長さ	幅			
67-2 PL35	須恵器 埴	覆土 口一底部片	口-(12.0) 底- 高-(2.7)	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③灰黄緑10YR6/2		直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 右回転轆轤成形。		
67-3 PL35	須恵器 埴	掘り方 口一底部片	口-(12.8) 高-(3.1)	①細砂、輝石②酸化焰 ③にぶい雫7.5YR6/3		直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。轆轤成形。 底部は右回転糸切り。		
67-4 PL35	須恵器 埴	床直 口一底部2/3	口-15.0 底-6.9 高-5.1	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③にぶい黄緑10YR7/3		体部は丸みを持ち、口縁部は外反する。 付高台。高台は短い。右回転轆轤成形。 底部は右回転糸切り。		
67-5 PL35	須恵器 埴	覆土 口一底部2/5	口-(15.4) 底-(6.4) 高-4.8	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③灰黄2.5Y6/2		腰部が張り、口縁は外反する。高台は断面三角形を呈し、 直立する。付高台。底部は回転糸切り。		
67-6 PL35	須恵器 埴	+3 体一底部1/2	口- 底-(7.8) 高-(3.5)	①細砂、小礫 ②酸化焰 ③灰黄緑10YR6/2		体部は丸みを帯び、高台は短く、断面逆台形を呈す。 付高台。底部は左回転糸切り。		
67-7 PL35	須恵器 埴	床直 体一底部1/2	口- 底-(7.4) 高-(3.5)	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③にぶい雫5YR6/4		高台は「ハ」の字状に開く。付高台。右回転轆轤成形。 底部は右回転糸切り。		
67-8 PL35	須恵器 埴	床直 底部	底-6.0 高-(1.5)	①細砂、輝石②酸化焰 ③灰黄2.5Y7/2		高台部は欠損。底部は右回転糸切り。		
67-9 PL35	灰釉陶器 埴	覆土 口縁部片	口-14.2 底- 高-(3.3)	①緻密、白色軽石 ②還元焰 硬質 ③灰白5Y7/1		体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反する。 施釉方法は漬り掛け。釉調は灰白色。大塚2号窯式期か。		
67-10 PL35	土師器 甕	床直 口一胴部片	口-(16.8) 底- 高-(7.0)	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③橙7.5YR6/6		口縁部は「コ」の字状を呈し、肩部はふくらむ。 外面 口縁部横ナデ。以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ。以下へらナデ。		
67-11 PL35	土師器 甕	床直 口縁部片	口-(20.6) 底- 高-(6.2)	①細砂 ②酸化焰 ③にぶい雫7.5YR6/4		口縁部は外反し、胴部は丸みを持つ。 口縁部は横ナデ、胴部は横方向のへら削り。		
押図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)		石材	特徴		
67-12 PL35	石製品 火打石か	覆土	長さ 3.4	幅 2.8			重量 2.8	28

39号住居遺物観察表

押図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調		成・整形技法の特徴
				長さ	幅	
68-1 PL35	土師器 坏	覆土 口一底部片	口-(13.8) 底- 高-(2.6)	①細砂、輝石 ②還元焰 ③橙5YR6/6		体部から口縁部は丸みを帯びて開き、器高は低い。 口縁部は横ナデ。 内面に指摺圧痕が見られる。
68-2 PL35	灰釉陶器 埴	覆土 底部1/2	口- 底- 高-(2.3)	①緻密 ②還元焰 硬質 ③浅黄2.5Y7/3		直線的に立ち上がる。付高台(高台部欠損) 施釉方法は刷毛塗り。釉調は乳白色。 内面底部にも、釉が付着。光ヶ丘1号窯式期。
68-3 PL36	丸瓦	覆土 小破片	長-(3.5) 幅-(8.1) 厚-1.5	①底物含、重 ②硬 還元 ③灰7.5Y5/1		製作法は2枚作り。布合せ目なし。回転糸切り。叩き 目無文。側部欠損。製作地は不明。時期は8・9世紀。 流用元は国府・国分尼寺か山王庵寺。

40号住居遺物観察表

押図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調		成・整形技法の特徴
				長さ	幅	
69-1 PL36	須恵器 坏	覆土 2/5	口-(13.0) 底-7.8 高-3.3	①細砂 ②還元焰 ③灰黄5PB6/1		直線的に立ち上がる。轆轤痕強く残る。右回転轆轤成形。 底部は右回転糸切り。
69-2 PL36	須恵器 坏	覆土 口一底部3/5	口-(12.2) 底-6.0 高-4.4	①細砂 ②還元焰 ③灰白5Y7/1		直線的に立ち上がり、口縁はやや外反する。 右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
69-3 PL36	灰釉陶器 皿	覆土 底部片	口- 底-(8.0) 高-(2.0)	①緻密 ②還元焰 硬質 ③灰黄2.5Y7/2		高台は逆台形を呈し、やや開く。付高台。 施釉方法は刷毛塗り。釉調は緑灰色。光ヶ丘1号窯式期。

拝図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	
			長さ	幅			
69-4 PL36	灰輪陶器 皿	覆土 口-底部片	口-(14.6) 底-(8.0) 高-(2.9)		①織造 ②還元焼 硬質 ③褐灰10YR6/1	直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。付高台。右回転轆轤成形。施釉方法は漬け掛け。釉調は緑灰色。内面底部に重ね焼き痕あり。大塚2号溝式期。	
69-5 PL36	灰輪陶器 埴輪	覆土 底部片	口- 底-(7.8) 高-(1.9)		①織造 ②還元焼 硬質 ③灰白5YR/1	高台は断面四角形を呈し、肩部が丸みを持つ。付高台。施釉方法は漬け掛け。釉調は灰色。大塚2号溝式期。	
70-6 PL36	土師器 甕	+25 口-胴部1/2	口-19.8 底- 高-(11.0)		①細砂、輝石 ②酸化焼 ③にぶい澄5YR5/4	口縁部は外反し、胴部は丸くふくらむ。外面 口縁部から頸部横ナデ、以下へら削り。内面 口縁部から頸部横ナデ、以下へらナデ。	
70-7 PL36	土師器 甕	+10 口縁部片	口-(19.8) 底- 高-(7.0)		①細砂 ②酸化焼 ③澄5YR6/6	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部は上位でふくらむ。外面 口縁部から頸部横ナデ、以下へら削り。内面 口縁部から頸部横ナデ、頸部に指掘り痕あり。	
70-8 PL36	平瓦	覆土 小破片	長-(7.0) 幅-(5.2) 厚-1.5		①織物織、重 ②締 還元 ③灰5Y4/1	製作法は2枚作り。回転条痕あり。春日園粘土板余切痕あり。叩き目無文。側部面取り回数3回。製作地は秋岡・飯野山。時期は7・8世紀中。流用元は国府・国分尼寺か山王庵寺。	
70-9 PL36	平瓦	覆土 小破片	長-(4.6) 幅-(3.0) 厚-1.2		①織物織、やや軽 ②軟 酸化灰味 ③澄7.5Y7/6	製作法は輪物作り。布合せ目あり。叩き目縄線状消し。側部面取り回数1回。製作地は秋岡。時期は8・9世紀前。流用元は国府・国分尼寺か山王庵寺。	
70-10 PL36	九瓦	覆土 小破片	長-(7.8) 幅-(8.4) 厚-1.3		①織物織、重 ②硬 酸化後還元 ③灰7.5Y5/1	製作法は2枚作り。回転条痕あり。叩き目無文。側部面取り回数1回。断面のへら切れ目あり。製作地は秋岡。時期は7・8世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王庵寺。	
70-11 PL36	九瓦	覆土 小破片	長-(5.2) 幅-(6.5) 厚-1.6		①織物織、軽 ②軟 弱酸化 ③浅黄橙10YR8/4	製作法は2枚作り。粘土板合せ目あり。叩き目無文。側部欠損。製作地は秋岡。時期は7・8世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王庵寺。	
70-12 PL36	九瓦	覆土 破片	長-(9.1) 幅-(11.0) 厚-1.3		①織物織、重 ②締 還元後焼 ③暗灰黄2.5Y5/2	製作法は2枚作り。回転条痕あり。春日園粘土板余切痕あり。叩き目無文。側部面取り回数2回。製作地は秋岡。時期は7・8世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王庵寺。	
70-13 PL36	九瓦 有段	覆土 小破片	長-(8.5) 幅-(7.1) 厚-1.3		①織物織、重 ②硬 還元 ③灰7.5Y5/1	製作法は2枚作り。春日園粘土板余切痕あり。粘土板接合なし。表面無文。横で痕。側部面取り1回。割れ口に接合痕あり。製作地は秋岡。時期は7世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王庵寺。	
70-14 PL36	九瓦	覆土 小破片	長-(5.6) 幅-(8.8) 厚-1.5		①織物織、重 ②硬 還元灰味 ③灰黄2.5Y6/2	製作法は2枚作り。回転条痕あり。春日園粘土板余切痕あり。叩き目無文。側部面取り回数2回。製作地秋岡。時期7～9世紀。流用元国府・国分尼寺か山王庵寺。	
70-15 PL36	九瓦	覆土 小破片	長-(6.3) 幅-(10.5) 厚-2.0		①織物少、やや軽 ②並 微還元 ③灰白2.5Y8/2	製作法は2枚作り。回転条痕あり。叩き目無文。側部欠損。製作地は笠懸。時期は8世紀。流用元は国府・国分尼寺か。	
図版番号	器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)			石材	
PL36	石製品材料	覆土	長さ	幅	厚さ		重量
			26.0	16.5	9.5	5700	固結凝灰岩

## 41号住居遺物観察表

拝図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
			長さ	幅		
71-1 PL36	須恵器 坏	覆土 3/4	口-13.2 底-2.8 高-4.2		①細砂 ②還元焼 ③灰白10Y8/1	やや丸みを持ち立ち上がり、口縁部は外反する。右回転轆轤成形。底部は右回転余切り。
71-2 PL36	須恵器 埴輪	貯蔵穴 口-底部3/4	口-14.5 底-7.2 高-5.2		①細砂、輝石 ②酸化焼 ③暗灰黄2.5Y5/2	腰部が張り、口縁部は外反する。付高台。右回転轆轤成形。底部は右回転余切り。
71-3 PL36	須恵器 埴輪	貯蔵穴 口-底部1/2	口-13.6 底-6.6 高-4.8		①細砂、輝石 ②酸化焼 ③にぶい黄褐10YR6/4	丸みを持ち立ち上がり、口縁部はやや外反する。付高台。右回転轆轤成形。底部は右回転余切り。
72-4 PL36	須恵器 埴輪	床直 1/4	口-14.2 底-7.8 高-5.6		①細砂 ②還元焼 ③灰白7.5Y7/2	やや丸みを持ち立ち上がり、口縁部は外反する。付高台。高台は「ハ」の字状に開く。底部は右回転余切り。

遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
72-5 PL36	須志器 埴	貯蔵穴 ほぼ完形	口-15.8 底-7.6 高-6.1	①細砂、白色軽石 ②酸化焰 ③黒7.5YR4/3	直線的に開き、口縁部は外反する。 付高台。高台は長く [ハ] の字状に開く。 右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
72-6 PL36	灰釉陶器 長頸壺	床直 胴一胴部片	口- 底- 高-(5.2)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焰 硬質 ③灰白2.5Y7/1	胴部は丸みを帯びている。 右回転轆轤成形。外面全体に施釉、施釉方法不明。 輪調は緑白色。
72-7 PL36	須志器 羽釜	覆土 口縁部片	口-(21.7) 底- 高-(6.0)	①細砂、小礫 ②酸化焰 硬質 ③にぶい黒7.5YR7/3	口縁部は内湾する。胴は断面三角形を呈し、下方に垂れる。
72-8 PL36	丸瓦	覆土 小破片	長-(4.2) 幅-(4.8) 厚-1.3	①鉱物含、重 ②硬 還元 ③灰黄2.5Y7/2	製作法は2枚作り。回転条痕あり。叩き目無文。側面 取り回数2回。製作地は西毛。時期は7・8世紀。 流用元は国府・園分尼寺か山王廃寺。

42号住居遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
73-1 PL36	須志器 坏	覆土 口-底部2/5	口-12.2 底-(6.3) 高-3.7	①細砂、白色軽石 ②酸化焰 ③にぶい黒7.5YR5/4	直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。 底部は回転糸切り(回転方向不明)。

43号住居遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)		①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	
			長さ	厚さ			
76-1 PL36	須志器 坏	掘り方 底部片	口- 底-7.4 高-(1.7)		①細砂、黒色鉱物 ②還元焰 やや軟質 ③浅黄橙10YR8/4	器壁が厚く、底部は平底を呈す。 底部は右回転糸切り。	
76-2 PL36	須志器 羽釜	掘り方 口縁部片	口-(18.2) 底- 高-(3.7)		①細砂、小礫 ②酸化焰 ③にぶい黒7.5YR5/4	口縁部は内湾し、胴は小さめで下方へ垂れる。器壁は薄い。 外面 口縁部横ナデ。	
検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				特 徴
長さ			厚さ	孔径	重量		
76-3 PL36	土製品 土鉢	掘り方 完形	4.0	1.8	0.5	11	中央部が膨らむ管状土鉢。
76-4 PL36	石製品 天井石	壺 完形	26.5	9.9	6.6	2670	石材 ダイヤサイト

44号住居遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
77-1 PL36	須志器 埴	覆土 底部1/4	口- 底-7.0 高-(2.1)	①細砂、黒色鉱物 ②還元焰 ③灰白5Y8/1	高台は断面三角形を呈し、[ハ] の字状に開く。 付高台。底部は右回転糸切り。
77-2 PL36	灰釉陶器 皿	覆土 口-底部片	口-(15.2) 底-(6.6) 高-3.0	①密着 ②還元焰 硬質 ③灰白2.5Y7/1	直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。 付高台。施釉方法刷毛塗り。輪調は灰白色。 光ヶ丘1号窯式期。
77-3 PL36	須志器 羽釜	覆土 口縁部片	口-(20.8) 底- 高-(4.5)	①細砂 ②酸化焰 ③にぶい黄橙10YR7/4	口縁部は内湾し、胴は細身で長く水平方向を向く。

45号住居遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
79-1 PL37	土師器 坏	床直 完形	口-11.6 底-丸底 高-3.8	①細砂 ②酸化焰 ③明褐色7.5YR5/6	底部から体部は丸みを帯び体部は後を持つ。口縁部は短く、直立する。外面 口縁部横ナデ。以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。
79-2 PL37	土師器 坏	+7 口-底部2/3	口-10.2 底-丸底 高-3.4	①細砂 ②酸化焰 ③褐色5YR6/6	底部から口縁部にかけて内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ、体部に指摺痕あり。



## 遺物観察表

探函番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	
						長さ
79-3 PL37	土師器 坏	+11 ほぼ定形	口-10.8 底-丸底 高-3.4	①細砂 ②酸化塩 ③明赤褐5YR5/6	体部は横を持ち、口縁部はほぼ直立する。 外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ、体部に指頭圧痕あり。	
79-4 PL37	土師器 坏	+5 3/4	口-10.6 底-丸底 高-3.4	①細砂 ②酸化塩 ③橙5YR6/8	底部から口縁部にかけて内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ。	
79-5 PL37	須恵器 蓋	床直 天井-口縁部 1/4	口-(10.2) 径-(1.6) 高-2.2	①銀青、黒色鉱物 ②還元塩 ③灰N6/7	蓋は宝珠状を呈し先端が欠損している。内面には身受けのカエリを持つ。天井部は回転へら削り。	
79-6 PL37	土師器 甕	覆土 口縁部片	口-(12.0) 底- 高-(6.9)	①細砂、黒色鉱物 ②酸化塩 ③橙7.5YR6/6	口縁部はやや外反し、立ち上がる。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。	
79-7 PL37	土師器 甕	床直 口-胴部片	口-20.8 底- 高-(14.0)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③明黄褐10YR7/6	口縁部は大きく外反し、胴部はあまりふくらまない。 外面 口縁から頸部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。	

## 46号住居遺物観察表

探函番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	
						長さ
74-1 PL37	須恵器 坏	甕 口-底部1/2	口-(12.6) 底-7.6 高-3.5	①細砂、黒色鉱物 ②還元塩 ③灰白10YR7/1	直線的に立ち上がる。底部は回転へら切り後、不規則なへら削り。	
74-2 PL37	須恵器 埴	覆土 口-体部片	口-(12.0) 底- 高-(3.6)	①細砂、黒色鉱物 ②還元塩 ③黄灰2.5Y6/1	体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部部やや外反する。 機械成形(回転方向不明)。	
74-3 PL37	須恵器 甕	+16 口-底部片	口-(20.8) 底-(17.2) 高-2.6	①細砂、白色輝石 ②還元塩 ③灰5Y6/1	体部から口縁部にかけて直線的に開く。体部は下位に2段の回転へら削り。底部も回転へら削り。	

## 47号住居遺物観察表

探函番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
			長さ	幅	高さ	厚さ		
81-1 PL37	土師器 坏	貯蔵穴 1/2	口-13.5 底-6.3 高-3.5				①細砂 ②酸化塩 ③にぶい橙7.5YR6/4	直線的に立ち上がり、口縁部大きく外傾する。 口縁部は横ナデ。体部はへら削り。
81-2 PL37	須恵器 埴	貯蔵穴 体-底部1/3	口- 底-6.7 高-(4.3)				①細砂、輝石 ②酸化塩 ③オリーブ黒5Y3/1	体部は丸みを帯びて立ち上がる。 付高台。底部は回転系切り。 右回転機械成形。
81-3 PL37	須恵器 坏	貯蔵穴覆土 1/3	口-(13.8) 底-6.2 高-5.5				①細砂、輝石 ②酸化塩 ③灰黄2.5Y7/2	体部は丸みをもち、口縁部部やや外反する。付高台。右回転機械成形。底部は回転系切り。
81-4 PL37	土師器 甕	貯蔵穴・+12 口縁部片	口-(19.0) 底- 高-(7.4)				①細砂 ②酸化塩 ③明赤褐5YR5/6	口縁部は外反し、胴部はふくらむ。 外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下横方向のへらナデ。
81-5 PL37	須恵器 羽蓋	甕 口-胴上部片	口-(21.8) 底- 高-(9.5)				①細砂、小礫 ②酸化塩 ③橙5YR6/8	口縁部は内湾し、胴部は丸をもつ。蓋は断面三角形を呈し、やや上方を向く。 口縁部は内外両面横ナデ。
81-6 PL37	石製品 砥石	床直	長さ 4.2 幅 5.0 高さ 2.9	厚さ 5.0	重量 60	砥沢石		中砥・手持砥。使用は表・裏・側面4面。手前は旧欠損。奥小口は割断面となる。砥沢砥。

## 48号住居遺物観察表

探函番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	
						長さ
82-1 PL37	土師器 坏	掘り方 ほぼ定形	口-12.4 底-丸底 高-5.4	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③橙5YR6/6	口縁部は内湾し、底部は丸底を呈す。 外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ後へら磨き、以下へら磨き。	

遺物観察表

埴田番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
82-2 PL37	土師器 甕	甕口-胴上部 1/4	口-22.0 底- 高-9.3	①粗砂、小礫 ②酸化塩 ③浅黄褐色7.5YR8/4	口縁部は大きく外反し、胴部はふくらむ。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。
82-3 PL37	土師器 甕	+15 口縁部片	口-(18.9) 底- 高-8.4	①粗砂、礫石 ②酸化塩 ③明褐色7.5YR5/6	口縁部は外反する。 内外面とも横ナデ。 胴部外面は横方向のへら削り。

49号住居遺物観察表

埴田番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				石材	特徴	
			長さ	幅	厚さ	重量			
83-1 PL37	須恵器 坏	覆土 底部1/2	底-(6.5) 高-(2.1)					①粗砂 ②酸化塩 ③灰黄褐色10YR5/2	右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
83-2 PL37	須恵器 埴	+5 体-底部1/3	口- 底-6.7 高-(5.0)					①細砂、白色軽石 ②還元塩 ③灰白2.5Y7/1	体部は丸みをもつ。付台高。右回転轆轤成形。 底部は右回転糸切り。
83-3 PL37	土師器 甕	床下土坑 口-胴部	口-(18.0) 底- 高-(4.5)					①細砂、礫石 ②酸化塩 ③橙5YR6/6	口縁部は外反し、胴部は〔く〕の字状を呈す。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ。
83-4 PL37	石製品 砥石	覆土	長さ 3.2 幅 4.2	1.1	21			砥沢石	中砥・手持砥。6面使用。使用消耗した砥石を再利用か。 小形製品研磨に使用か。砥沢砥。
83-5 PL37	鉄製品 紡錘車	覆土	(12.9) 輪部	6.2 輪部	0.6 輪部	23.63 輪部			円形の輪部の調整時欠輪と輪部両端に欠損あり。輪部と輪部は直交状態。 輪部断面円形。木質などの付着なし。層状剥落少なく、遺存良い。

50号住居遺物観察表

埴田番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)				①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	
			長さ	幅	厚さ	重量			
85-1 PL37	土師器 坏	+5~+9 口-底部1/3	口-13.6 底-九底 高-5.0					①粗砂 ②酸化塩 ③明赤褐色5YR6/8	底部から体部は丸みをもち、口縁部は強く内倒する。 外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下丁寧へら磨き。
85-2 PL37	土師器 坏	床直 口-底部4/5	口-13.0 底-九底 高-(5.3)					①細砂 ②酸化塩 ③明赤褐色5YR5/6	体部に稜をもち、口縁部はやや外反する。 外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へら磨き。
85-3 PL37	土師器 鉢	甕 完形	口-11.6 底-5.4 高-7.6					①粗砂、白色軽石 ②酸化塩 ③明黄褐色10YR6/8	体部はゆるい丸みをもち、口縁部は直立気味。 外面 口縁部横ナデ、体部刷毛目？、底部へら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。
85-4 PL37	土師器 鉢	甕 完形	口-10.5 底-3.0 高-6.8					①粗砂、白色軽石 ②酸化塩 ③にぶい橙7.5Y6/4	体部は丸みをもち、口縁部は内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。

51号住居遺物観察表

埴田番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)				①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	
			長さ	幅	厚さ	重量			
86-1 PL37	土師器 坏	床直 口-底部2/3	口-12.9 底-九底 高-4.2					①粗砂 ②酸化塩 ③明赤褐色2.5YR5/6	底部から体部は丸みをもち、立ち上がる。 口縁部横ナデ。底部はへら削り。 器面荒れている。
86-2 PL37	須恵器 皿	+13 2/5	口-14.6 底-(7.8) 高-(2.2)					①粗密、黒色紅物 ②還元塩 硬質 ③灰白2.5Y7/1	体部から口縁部にかけて直線的に開く。 高台は細身で、やや外傾する。底部は回転糸切り。
86-3 PL37	土師器 甕	甕 口-胴部1/5	口-(16.5) 底- 高-(15.1)					①粗砂、小礫 ②酸化塩 ③にぶい黄褐色10YR6/4	口縁部は外反し、胴部は下張れ状。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデか。

52号住居遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴		
88-1 PL37	土師器 坏	床直 口一休上部片	口-(13.6) 底- 高-(4.0)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③にぶい燈7.5YR6/4	体部はやや丸みを帯び、口縁部は外反する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ。		
88-2 PL38	須恵器 埴	床直 体一底部1/4	口- 底-7.8 高-(5.5)	①細砂、小礫 ②還元塩 ③黄灰7.5YR6/1	体部は丸みを帯び、付高台。高台は「ハ」の字状に開く。 底部は回転糸切り(回転方向不明)。		
88-3 PL37	灰輪陶器 埴	掘り方 底部片	口- 底-(7.8) 高-(1.3)	①細砂、黒色鉱物 ②還元塩 ③灰白2.5Y7/1	高台はほぼ直立し、端部は丸みを持つ。付高台。施釉方法 刷毛塗りか。釉調は緑灰色。		
88-4 PL38	土師器 甕	床直 口一胴部片	口-17.6 底- 高-13.1	①細砂 ②酸化塩 ③燈5YR6/6	口縁部はやや外反し、胴部はふくらむ。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。		
88-5 PL38	土師器 甕	床直 口縁部片	口-(19.8) 底- 高-(4.5)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③明赤帯2.5YR5/6	口縁部は「コ」の字状を呈し、横ナデ。口縁部に指頭圧 痕のこる。胴部へら削り。		
88-6 PL38	須恵器 羽蓋	床直 口縁部片	口-(21.0) 底- 高-(5.5)	①粗砂、小礫 ②酸化塩 ③にぶい黄燈10YR6/4	口縁部は内湾し、口唇部は直立する。胴は断面三角形を 呈し、やや上方を向く。胴下部に接合痕あり。		
検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)		特 徴		
			輪部径	厚さ			
88-7 PL38	鉄製品 紡錘車小	床直	5.5	0.6	14.36	輪部の欠損は旧時と調査時。円形の輪部の中央に径5.5mmの孔あり。上方付 近よじれあり。横断面は耳が厚くならずにはほぼ同じ厚さで、内部が空洞になり、 2枚設け一枚の折り曲げ鍛錬。上方の少孔のめくれは再用の結果か。	
検出番号 図版番号	器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				
			長さ	幅	厚さ	重量	
88-8 PL38	石製品 掬石	甕 ほぼ完形	18.0	10.0	8.0	1250	固結凝灰岩

53号住居遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
90-1 PL38	土師器 坏	貯蔵穴覆土 口一休部片	口-(11.4) 底- 高-(3.8)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③燈5YR6/8	外面の削りは弱く不明瞭。内面のナデは丁寧で平滑に仕 上げている。
90-2 PL38	土師器 甕	貯蔵穴 3/4	口-15.3 底-(7.3) 高-(28.7)	①粗砂、白色軽石 ②酸化塩 ③にぶい燈7.5YR6/4	口縁部はやや外反し、胴部は丸みを持つ。 外面 口縁部横ナデ、以下縦方向のへら削り。 内面 口縁部横ナデ、胴部へらナデ。

54号住居遺物観察表

検出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
92-1 PL38	須恵器 坏	+10 完形	口-12.2 底-5.6 高-3.9	①細砂、輝石 ②還元塩 ③灰黄2.5Y6/2	丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。成形時の歪みあり。
92-2 PL38	須恵器 坏	床直 完形	口-11.0 底-5.2 高-3.4	①細砂、小礫 ②還元塩 ③灰白2.5Y7/1	体部は丸みを帯び、口縁部は外反する。右回転轆轤成形。 底部は右回転糸切り。成形時の歪みあり。
92-3 PL38	須恵器 坏	+8 完形	口-12.2 底-6.0 高-4.0	①細砂、小礫 ②還元塩 ③にぶい黄燈10YR6/4	体部は丸みを帯びて立ち上がる。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
92-4 PL38	須恵器 坏	+8 口一底部3/4	口-11.4 底-6.2 高-5.8	①細砂、輝石 ②還元塩 ③にぶい黄燈10YR7/4	直線的に立ち上がる。轆轤目痕強い。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
92-5 PL38	須恵器 坏	甕 1/5	口-(13.4) 底-5.8 高-3.8	①細砂、小礫 ②還元塩 ③灰黄弱10YR6/2	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。 底部は右回転糸切り。

遺物観察表

拝因番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴		
						計測値 (cm・g)	特 徴
92-6 PL38	須志器 埴	+11 底-6.4 高-4.9	口-12.0 底-6.4 高-4.9	①細砂、 ②酸化焰 ③灰黄褐10YR6/2	丸みをもち立ち上がり、口縁部は外反する。 付高台。右回転輪成。底部は右回転糸切り。		
92-7 PL38	須志器 埴	+7 口-底部1/2	口-14.0 底-6.0 高-(8.3)	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③にふい煙7.5YR6/4	直線的に立ち上がる。付高台。高台は長く「ハ」の字状に開く。 右回転輪成。底部は回転糸切り。		
92-8 PL38	灰釉陶器 埴	+9 口-底部1/2	口-(13.0) 底-(6.8) 高-4.0	①細砂 ②還元焰 ③灰白2.5Y8/1	丸みを帯び立ち上がり、口縁部はやや外反する。付高台。 大原2号窯式。		
92-9 PL38	須志器 羽釜	+7~+10 口-胴部1/4	口-(20.0) 底- 高-(13.7)	①細砂、小礫 ②酸化焰 ③黄褐2.5Y5/3	口縁部はやや内湾し、罫は断面三角形を呈し、水平方向を向く。 外面 口縁から胴部横ナテ。胴部縦方向のへら削り。 内面 口縁部横ナテ。		
92-10 PL38	須志器 羽釜	+6~+11 口-胴上部片	口-(21.8) 底- 高-(14.2)	①細砂、輝石 ②還元焰 ③灰10Y6/1	口縁部は直立し、胴部は丸みを帯びながらすぼまる。罫は弱く断面三角形を呈す。口縁部内外面横ナテ。 外面 胴部へら削り。		
拝因番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				特 徴
92-11 PL38	鉄製品 刀跡	床下土坑 近旧痕	長さ	径	厚さ	重量	
			7.5	1.2	0.3	11.84	特殊形状の刃物で工具か。錆色黒々とし、良鉄。基部折り曲げ、旧時欠損。

55号住居遺物観察表

拝因番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
93-1 PL38	土師器 坏	覆土 口-底部片	口-(11.6) 底-(5.6) 高-3.4	①細砂 ②酸化焰 ③淡黄2.5Y8/4	体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。体部から底部は手持ちへら削り。
93-2 PL38	須志器 埴	床直 底部片	口- 底-(7.4) 高-(2.2)	①粗砂、輝石 ②酸化焰 軟質 ③にふい煙7.5YR6/4	底部回転糸切り(回転方向不明)。 付高台。作りが雑。
93-3 PL38	丸瓦	床直 小破片	長-(7.4) 幅-(7.2) 厚-2.3	①総物少、重 ②硬 酸化 ③にふい煙7.5YR6/4	製作法は2枚割り。粘土板合せ目あり。回転糸痕あり。 叩き目無文。無面取り回数2回。製作地は笠懸。時期は7・8世紀。流用元は国府・国分尼寺か。

56号住居遺物観察表

拝因番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴		
						計測値 (cm・g)	特 徴
94-1 PL38	土師器 甗	床直 口縁部片	口-(23.6) 底- 高-(6.5)	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③褐7.5YR4/6	口縁部は外反し、胴部はあまりふくらまない。口縁部は内外面横ナテ。胴部外面へら削り。		
94-2 PL38	平瓦	覆土 小破片	長-(4.6) 幅-(5.1) 厚-1.1	①総物少、重 ②締 還元 ③灰5Y6/1	製作法は種巻作り。種巻木痕あり。回転糸痕あり。布目側粘土板糸切り痕あり。叩き目無文。側面取り回数2回。製作地は秋田。時期は7・8世紀。流用元は国府・国分尼寺か山王庵寺。		
拝因番号 図版番号	種 別 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				特 徴
94-3 PL38	鉄洋 鏡型	床直 旧痕	長さ	径	厚さ	重量	
			10.5	7.0	3.6	360	半欠強の圓形で凸部に平底材わずかに付着。割れ口は、旧時であるが2枚が重なっている様にも見える。やや軽い。

57号住居遺物観察表

拝因番号 図版番号	種 類 器 種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
97-1 PL39	土師器 鉢	+21~+27 口-胴部1/2	口-21.0 底- 高-(11.3)	①細砂、輝石 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐5YR5/6	口縁部は外反し体部は丸く底部に向かってすぼまる。外面口縁部は横ナテ後へら磨き。体部は刷毛目後へら磨き。内面口縁部横ナテ後へら磨き。体部へらナテとへら磨き。
97-2 PL39	土師器 高坏	+5 胴部1/2	口- 底-(11.8) 高-(7.0)	①細砂、輝石 ②酸化焰 硬質 ③にふい煙7.5YR7/4	裾部はラッパ状に開く。 外面 縦方向のへら磨き。 内面 へらナテ。

遺物観察表

押印番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
97-3 PL39	土師器 高坏	+9~+10 坏-脚部1/8	口- 底-(14.9) 高-10.3	①粗砂、白色軽石 ②酸化塩 硬質 ③靑5YR6/6	坏部直線的に立ち上がり、脚部はラック状に開く。 脚部に円孔4ヶあり。外面 へら磨き。 内面 脚上部へら磨き。器部ナダ。
97-4 PL39	土師器 器台	床直 器受け部	口-18.4 底- 高-(9.5)	①細砂、小礫 ②酸化塩 硬質 ③明赤釉5YR5/6	器受け部底部に筒を持ち、口縁部は大きく開く。 外面 口縁部横ナダ、以下刷毛目後へら磨き。 内面 口縁部横ナダ。坏部へら磨き(内面荒れている)。
97-5 PL39	土師器 器台	床直 3/4	口-8.2 底-(13.0) 高-9.0	①細砂、輝石 ②酸化塩 硬質 ③にぶい靑7.5YR6/3	器受け部は丸みを持ち、口縁部はやや外反する。脚部は 大きく開く。脚部に円孔3ヶあり。外面口縁部横ナ ダ、以下は磨き。内面器受け部へら磨き、以下へら磨り。
97-6 PL39	土師器 器台	床直 3/4	口-10.0 底-15.3 高-9.8	①細砂、白色軽石 ②酸化塩 硬質 ③明靑7.5YR5/6	口縁部は外反し脚部は頸部が開く。脚部に円孔3ヶあり。 外面 口縁部は横ナダ。以下はへら磨き。 内面 接合部へらナダ。脚部へら磨き。
97-7 PL39	土師器 器台	+4~+21 器受け-脚部	口-(7.4) 底-10.8 高-6.2	①細砂、輝石 ②酸化塩 やや軟質 ③にぶい靑7.5YR7/4	口縁部は外反し脚部はラック状に開く。 外面 口縁部横ナダ。脚部は刷毛目後へら磨き。裾部は 横ナダ。内面 口縁部横ナダ。脚部へらナダ。
97-8 PL39	土師器 器台	床直 器受け-脚部	口-8.0 底- 高-(3.5)	①細砂 ②酸化塩 ③靑5YR6/6	器受け部は大きく開く。脚部に円孔3ヶあり。外面 口 縁部横ナダ、以下へら磨き。 内面 口縁部横ナダ、以下へら磨き。
97-9 PL39	土師器 器台	+9 器受け-脚部	口-7.0 底- 高-(4.2)	①細砂 ②酸化塩 ③靑7.5YR6/6	器受け部直線的に開き、口縁部は直立気味。脚部に円 孔3ヶあり。外面 口縁部横ナダ、以下へら磨き。 内面 口縁部横ナダ。
97-10 PL39	土師器 器台	+14 脚部片	口- 底- 高-(5.5)	①細砂 ②酸化塩 ③靑5YR6/6	脚部は大きく開く。円孔3ヶあり。 外面 へら磨き。 内面 へらナダ。
97-11 PL39	土師器 壺	床直 口-底部4/5	口-13.1 底-5.2 高-21.2	①細砂 ②酸化塩 硬質 ③明赤釉5YR5/8	口縁部は外反し、胴部はほぼ球形を呈す。 外面 口縁部は横ナダ、以下へら磨き。内面 口縁部 は横ナダ。口縁部はへら磨き。胴部は刷毛目。
97-12 PL39	土師器 壺	+4 口-頸部片	口-15.2 底- 高-(5.4)	①細砂 ②酸化塩 硬質 ③にぶい靑5YR6/4	口縁部は大きく外反する。 外面 口縁部横ナダ、以下へら磨き。 内面 口縁部横ナダ、以下へら磨き。
97-13 PL39	土師器 壺	+6~+15 口-底部5/6	口-13.3 底-5.8 高-25.4	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③にぶい靑10YR6/4	口縁部は大きく外反し、胴部は球形を呈す。外面口縁部 横ナダ、以下刷毛目後へら磨き。底部は未調整。内面口 縁部は横ナダ後へら磨き。胴部刷毛目。底部へら磨り。
98-14 PL39	土師器 直口壺	床直 口-胴部1/2	口-15.4 底- 高-(17.0)	①細砂 ②酸化塩 硬質 ③靑5YR6/6	口縁部は直線的に立ち上がり外傾し、胴部は丸くふくら む。外面口縁部横ナダ、以下へら磨き。内面口縁部横 ナダ後へら磨き。口縁から頸部は横ナダ。胴部へら磨き。
98-15 PL39	土師器 壺	+4 口縁部片	口-14.3 底- 高-(4.5)	①細砂、輝石 ②酸化塩 硬質 ③靑5YR6/6	口縁部は大きく外反する。 外面 口縁部は横ナダ。以下は刷毛目後へら磨き。 内面 口縁部は横ナダ、以下は丁寧なへら磨き。
98-16 PL39	土師器 壺	+24 胴下位-底部	口- 底-5.4 高-(2.5)	①細砂、角閃石 ②酸化塩 ③にぶい靑10YR7/4	外面 底部から胴下部へら磨り。底部に木葉痕あり。 内面 へら磨き。
98-17 PL39	土師器 壺	+6 口-頸部片	口-25.3 底- 高-(11.5)	①細砂、白色軽石 ②酸化塩 ③にぶい靑7.5YR6/4	頸部は「コ」の字状に屈曲し、外反する複合口縁。外面 口縁部は横ナダ、以下刷毛目後へら磨き。胴部刷毛目後 ナダ。内面口縁部横ナダ、以下へら磨き。頸部へらナダ。
98-18 PL40	土師器 壺	床直 口-底部4/5	口-13.4 底-4.6 高-13.5	①細砂 ②酸化塩 ③明赤釉2.5YR5/6	口縁部は外反し、胴部は丸くふくらむ。 外面 全面に丁寧なへら磨き。赤色塗彩。 内面 口縁部はへら磨き。胴部はへらナダ。
98-19 PL40	土師器 台付壺	床直 口-頸部片	口-(14.0) 底- 高-(5.2)	①細砂 ②酸化塩 硬質 ③にぶい靑7.5YR7/4	外反するS字状の口縁部。 外面 口縁部横ナダ。胴部上部は縦位の刷毛目後横位の 刷毛目。内面 口縁部横ナダ。胴部上位指摺痕残る。
98-20 PL40	土師器 台付壺	床直 口-胴部1/2	口-18.0 底- 高-(10.0)	①粗砂、白色軽石 ②酸化塩 硬質 ③にぶい靑10YR7/3	外反するS字状の口縁。胴部は肩が張らず丸い。 外面 口縁部横ナダ、以下刷毛目。 内面 口縁部横ナダ、以下へらナダ。
押印番号 図版番号	器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)	石材	
96-21 PL40	石製品 炉石	伊 宛形	長さ 幅 厚さ 重量	32.4 12.3 10.1 4350	溶結凝灰岩

遺物観察表

58号住居遺物観察表

拝因番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
100-1 PL40	須恵器 埴	床直 □～底部4/5	□-14.8 底-6.9 高-(5.5)	①粗砂 ②酸化焰 ③灰2.5Y7/1	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。付高台。高台端部は欠損。右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
100-2 PL40	須恵器 埴	床直 □～底部1/2	□-(12.8) 底-6.4 高-5.2	①粗砂、小礫 ②酸化焰 ③灰質2.5Y7/2	やや丸みを帯び立ち上がる。付高台。高台は「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。
100-3 PL40	須恵器 埴	床直 □～底部1/4	□-(12.8) 底-(6.8) 高-(5.0)	①粗砂、輝石 ②酸化焰 やや軟質 ③にぶい黄緑10YR6/3	直線的に立ち上がる。右回転轆轤成形。底部回転糸切り。高台部欠損。

59号住居遺物観察表

拝因番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
102-1 PL40	土師器 坏	覆土 □～底部1/2	□-12.4 底-九底 高-(3.1)	①細砂 ②酸化焰 ③にぶい橙7.5YR6/4	底部から体部に丸みを持ち、口縁部はやや開く。外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。内面 口縁部横ナデ。
102-2 PL40	須恵器 坏	+8 □～底部3/5	□-13.0 底-9.0 高-3.8	①細砂、黒色底物 ②還元焰 ③灰5Y6/1	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。右回転轆轤成形。底部はナデ。
102-3 PL40	須恵器 埴	+8 □～底部1/3	□-(12.2) 底-6.5 高-5.0	①細砂、白色輝石 ②還元焰 ③灰5Y1/6	体部から口縁部は直線的に立ち上がる。付高台。高台は「ハ」の字状に開く。底部は回転糸切り。
102-4 PL40	土師器 坏	+14 □～体部片	□-(20.0) 底- 高-(5.0)	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③にぶい橙5YR7/4	体部は丸みを帯び、口縁部はやや内湾する。外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。内面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。
102-5 PL40	土師器 甕	甕 底部欠損	□-20.4 底- 高-(18.5)	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③橙5YR6/8	器壁は薄く、口縁部は外反し胴部はふくらむ。外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。

60号住居遺物観察表

拝因番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
104-1 PL40	土師器 坏	床直 ほぼ完全形	□-12.8 底-九底 高-5.2	①細砂 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐5YR5/8	底部から体部は丸みを持ち、口縁部は内斜する。外面 口縁部横ナデ、以下横方向へら削り。内面 口縁部横ナデ。
104-2 PL40	土師器 坏	+19 □～底部1/3	□-15.0 底-九底 高-5.3	①細砂、輝石 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐5YR5/8	底部から体部は丸みを持ち、口縁部は内斜する。外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。内面 口縁部横ナデ、以下へら磨き。
104-3 PL40	土師器 坏	甕 □～体部1/6	□-(13.0) 底- 高-(4.1)	①細砂 ②酸化焰 ③赤褐5YR4/6	体部に丸みを持ち、内斜する口縁部。外面 口縁部横ナデ、以下へら削り後ナデ。内面 口縁部横ナデ、以下丁取なへら磨き。
104-4 PL40	土師器 坏	床直 □～体部1/4	□-(14.5) 底- 高-(4.0)	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③橙5YR6/6	体部は丸みを帯び、口縁部は内斜する。外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。内面 口縁部横ナデ。体部は丁取なへら磨き。
104-5 PL40	土師器 坏	甕 3/4	□-13.2 底-九底 高-5.0	①細砂 ②酸化焰 ③にぶい赤褐5YR4/3	底部から体部は丸みを帯び、口縁部は内斜する。外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。内面 口縁部横ナデ、以下不明瞭だがへら磨き底残る。
104-6 PL40	土師器 坏	床直 □～底部4/5	□-13.0 底-九底 高-5.1	①細砂、褐色底物 ②酸化焰 ③にぶい橙7.5YR7/4	底部から体部は丸みを持ち、口縁部はやや内湾する。外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。内面 全面縦方向のへら磨き。
104-7 PL40	土師器 坏	床直 □～底部1/2	□-13.0 底-九底 高-4.8	①細砂、輝石 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐5YR5/6	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は強く内湾する。外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。内面 口縁部横ナデ、以下へら磨き。
104-8 PL40	土師器 坏	床直 □～体部1/4	□-13.8 底- 高-(7.8)	①細砂、輝石 ②酸化焰 硬質 ③明赤褐5YR5/6	内斜する口縁部。体部は丸くふくらむ。外面 口縁部横ナデ、以下不定方向のへら削り。内面 口縁部横ナデ。体部丁取なナデ。

標図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①粘土②焼成				成・整形技法の特徴
				③色調				
104-9 PL40	土師器 碗	甕 ほぼ定形	口-12.5 底-丸底 高-5.8	①細砂 ②酸化塩 硬質 ③赤黒2.5YR4/6				底部から体部は丸くふくらみ、口縁部は直立する。 外面 口縁部横ナデ、体部へら削り後横ナデ。底部へら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。
104-10 PL40	土師器 高坏	甕・+3 坏-脚部2/3	口-19.4 底- 高-(9.8)	①細砂、輝石 ②酸化塩 硬質 ③橙5YR6/8				坏底部は後を持ち、直線的に開く。 外面 へら磨き。 内面 口縁部横ナデ、脚部へらナデ。
104-11 PL40	土師器 高坏	覆土 脚部片	口- 底-(13.8) 高-(3.1)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③橙5YR6/6				直線的に外傾しながら開く脚部。 外面 へら磨き。 内面 裾部は横ナデ。
105-12 PL40	土師器 高坏	床直 坏部	口-28.8 底- 高-(11.0)	①細砂、小礫 ②酸化塩 ③明赤7.5YR5/6				坏底部は後を持ち、口縁部は大きく外反する。 外面 口縁部横ナデ。坏部へら磨き後丁寧なナデ。坏部はへら削り。内面 口縁部横ナデ、以下へら磨き。
105-13 PL40	土師器 小型壺	覆土 口-胴下位 1/4	口-(5.6) 底- 高-(4.5)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③にぶい赤黒5YR5/4				胴部は丸みを帯び、口縁部は直立する。 外面 縦方向の刷毛目。 内面 口縁部横に指頭圧痕残る。
105-14 PL40	土師器 壺	+15 底部片	口- 底-9.0 高-(3.3)	①細砂、白色軽石 ②酸化塩 やや軟質 ③にぶい黄橙10YR6/4				甕の底部片。底部は平底を呈す。 外面赤色塗彩。へらナデ。
105-15 PL41	土師器 壺	甕 胴-胴部1/3	口- 底- 高-(18.2)	①細砂、輝石 ②酸化塩 硬質 ③明赤黒5YR5/6				胴部は球形を呈す。 外面 横方向へら削り。 内面 へらナデ。
105-16 PL41	土師器 壺	床直 胴部下位	口- 底- 高-(12.5)	①粗砂、輝石 ②酸化塩 ③明赤黒5Y5/6				大型壺胴下部片、断面に接合痕が残っている。
105-17 PL41	土師器 小型甕	甕 底部	口- 底-4.5 高-(6.0)	①細砂、小礫 ②酸化塩 ③にぶい橙7.5YR6/4				底部は平底を呈す。 外面 へら削り。 内面 へらナデ。
105-18 PL41	土師器 甕	甕 口-底部3/4	口-12.0 底-(7.1) 高-23.2	①粗砂、輝石 ②酸化塩 ③橙5YR6/6				口縁部は外反し、胴部は丸く下膨れ状を呈す。 外面 口縁部横ナデ。胴部は不定方向へら削り。 内面 口縁部横ナデ。胴部はへらナデ。
105-19 PL41	土師器 甕	甕 胴-底部1/2	口- 底-6.5 高-(21.2)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③にぶい橙5YR6/4				器壁は厚く胴部は丸くふくらむ。 外面 胴部は縦なへら削りのため凹凸多い。 内面 胴部はへらナデ。
標図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			長さ	厚さ	孔径	重量		
105-20 PL41	石製品 紡錘車	床直 完形	4.0	1.1	0.7	23	鮫紋岩	金属製の工具で精巧に成形されている。光沢有り。

61号住居遺物観察表

標図番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①粘土②焼成				成・整形技法の特徴
				③色調				
107-1 PL41	土師器 坏	+13 1/5	口-13.0 底-丸底 高-5.4	①細砂、輝石 ②酸化塩 硬質 ③橙5YR6/8				体部に後を持ち、口縁部はやや外反する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ、指頭圧痕あり。
107-2 PL41	土師器 坏	貯蔵穴1・覆 土・甕 1/6	口-(14.0) 底- 高-(5.8)	①細砂、輝石 ②酸化塩 ③明赤黒5YR5/8				体部は丸みを持ち、口縁は外反する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ。
107-3 PL41	土師器 坏	貯蔵穴2・覆 土 1/4	口-(13.5) 底- 高-(4.8)	①細砂、白色軽石 ②酸化塩 ③にぶい橙7.5YR5/3				体部は丸みを帯び、口縁部は強く内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ。
107-4 PL41	土師器 高坏	床直 坏-脚部1/2	口- 底-12.3 高-(9.1)	①細砂 ②酸化塩 硬質 ③橙7.5YR6/8				脚部上半はゆるいふくらみをもち、裾部はやや水平に開く。 外面 脚部から裾部へら磨き。 内面 脚部へら削り。裾部横ナデ。
107-5 PL41	土師器 高坏	床直 脚部片	口- 底- 高-(7.7)	①細砂、輝石 ②酸化塩 硬質 ③橙7.5YR6/6				裾部はやや水平に開く。 外面 へら磨き。 内面 へら削り。裾部は横ナデ。

遺物観察表

押国番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
107-6 PL41	土師器 壺	貯蔵穴・+8 口縁部片	口-25.6 底- 高-(8.0)	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③にぶい黄橙5YR6/4	口縁部は外反し、胴部は大きくふくらむ。 外面 口縁部横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。
107-7 PL41	土師器 甕	床直・掘り方 口縁部片	口-(19.0) 底- 高-(5.5)	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③にぶい赤黒5YR5/4	口縁部は外反し、[く]の字状を呈す。 外面 口縁部横ナデ、以下刷毛目。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナデ。接合痕が残る。

63号住居遺物観察表

押国番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
			長さ	幅	厚さ	重量		
108-1 PL41	須恵器 埴	+19 口-底部1/5	口-(13.6) 底-(6.0) 高-4.8	①細砂、輝石 ②酸化焰 ③にぶい黄橙10YR6/4	体部はやや丸みを帯び立ち上がり、口縁部は外反する。 付高台。右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。			
108-2 PL41	銅・鉄製品 原形か	覆土 旧態	7.5	4.5	1.5	62.00	銅鑄には湯流状の湯が見え、銅材整形。発達したクラックを伴う銅鉄 様の鉄材が付着。そのため、原料として再利用時の原料化遺物か。	

64号住居遺物観察表

押国番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				①粘土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴							
			長さ	幅	厚さ	重量									
109-1 PL41	須恵器 埴	口-底部4/5	口-11.5 底-7.0 高-3.7	①細砂、輝石 ②還元焰 ③にぶい黄橙10YR7/2	体部は丸みをもち立ち上がる。右回転轆轤成形。底部は 回転糸切り。底部の摩滅激しい。										
109-2 PL41	須恵器 埴	口-底部1/2	口-(12.5) 底-6.0 高-3.8	①細砂、輝石 ②酸化焰 硬質 ③灰黄2.5Y7/2	胴部に丸をもつ。体部上平から直線的に立ち上がる。 右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。										
110-3 PL41	須恵器 埴	+12 口-底部1/2	口-12.0 底-5.8 高-2.8	①細砂、小礫 ②酸化焰 ③にぶい黄橙10YR7/3	体部は丸みを帯びて立ち上がる。右回転轆轤成形。 底部、体部は回転へら削り。										
110-4 PL41	須恵器 埴	覆土 口-底部1/3	口-13.8 底-(6.6) 高-(5.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白10Y7/1	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。付高台。右回転 轆轤成形。底部は回転糸切り。										
110-5 PL41	須恵器 埴	口-底部3/4	口-14.8 底-8.5 高-6.5	①細砂、褐色灰物 ②酸化焰 ③にぶい黄橙10YR7/2	体部は丸みを帯びて立ち上がる。付高台。高台は長く[ハ] の字状に開く。右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。										
110-6 PL41	須恵器 埴	+3 底部片	口- 底-8.0 高-(5.0)	①細砂 ②酸化焰 ③にぶい黄橙10YR7/3	体部は丸みを帯び、高台は長く[ハ]の字状に開く。 付高台。底部は回転糸切り(回転方向不明)。										
110-7 PL41	須恵器 羽釜	+5 口-胴部片	口-(20.2) 底- 高-(10.1)	①粗砂、小礫 ②還元焰 ③5YR6/6	口縁部はやや内湾し、肩部は直立的。肩は断面三角形 を呈し、水平方向を向く。口縁部内外面横ナデ。										
110-8 PL41	須恵器 羽釜	口-胴上部片	口-(18.6) 底- 高-(7.4)	①細砂、黒色灰物 ②還元焰 ③にぶい黄橙10YR7/2	口縁部はほぼ直立的。肩は断面三角形で水平方向を向く。 口縁部内外面横ナデ。										
110-9 PL41	須恵器 羽釜	床直 口-胴上部片	口-(20.0) 底- 高-(11.6)	①粗砂、小礫 ②酸化焰 硬質 ③にぶい橙7.5YR7/4	胴部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや内湾する。肩 は断面三角形を呈す。口縁部内外面横ナデ。										
110-10 PL41	須恵器 羽釜	口- 胴-底部1/4	口- 底-(6.2) 高-(13.2)	①粗砂、小礫 ②還元焰 ③にぶい黄橙10YR7/4	胴部は丸みを帯びて立ち上がる。右回転轆轤成形。 外面胴下部へら削り。										
押国番号 図版番号	器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				石材	押国番号 図版番号	器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				石材
110-11 PL42	石製品 支脚石	壺 ほぼ定形	22.0	13.0	9.0	3300	固結凝灰 岩	110-12 PL42	石製品 天井石	壺 ほぼ定形	43.0	16.0	10.0	7950	固結凝灰 岩



65号住居遺物観察表

拝因番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
112-1 PL42	土師器 坏	覆土 口-底部1/4	口-(12.4) 底- 高-(3.0)	①細砂 ②酸化焼 ③明赤褐5YR5/8	体部は丸みを帯び、口縁部は直立する。 外面 口縁部は横ナデ、以下へら削り。 内面 口縁部は横ナデ。
112-2 PL42	灰輪陶器 埴	覆土 口-体部片	口-(16.8) 底- 高-(3.0)	①緻密、黒色灰物 ②還元焼 硬質 ③灰白5Y7/1	体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁はやや外反する。 施釉方法は刷毛塗り。釉調は灰白色。光ヶ丘1号甕式期。
112-3 PL42	須恵器 有台坏 (転用規)	床直 底部	口-(14.0) 底- 厚さ-1.5	①細砂、黒色灰物 ②還元焼 ③灰5Y6/1	底部は右回転へら削り。削り出し高台付坏を転用したもの。 内面は全体的に平滑で特に右側に滑面光沢あり。
112-4 PL42	土師器 台付罌	覆土 台部片	口- 底-(6.6) 高-(4.1)	①粗砂、白色軽石 ②酸化焼 ③明赤褐2.5YR5/6	台部は直線的に開く。外面接合部縦方向のへら削り。 踵部は縦方向のへら削り。内面はへらナデ。
112-5 PL42	土師器 罌	+12 口-胴部片	口-(19.0) 底- 高-(6.8)	①粗砂、輝石 ②酸化焼 ③明黄褐10YR6/8	胴部は直線的で、口縁部は外反する。 口縁部は横ナデ。胴部は縦方向のへら削り。

66号住居遺物観察表

拝因番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴		
114-1 PL42	須恵器 埴	+8 底部1/2	口- 底-(7.2) 高-(2.5)	①細砂、輝石 ②酸化焼 硬質 ③にぶい褐7.5YR5/4	高台は紐帯でやや開く。付高台。底部は回転糸切り(回転方向不明)。		
拝因番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				特徴
114-2 PL42	土製品 土 罌	+6 完形	長さ	厚さ	孔径	重量	
114-2 PL42	土製品 土 罌	+6 完形	3.6	1.7	0.4	10	やや中央部が膨らむ管状土罌。
拝因番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				特徴
114-3 PL42	鉄製品 釘(鑿)	床直 完存	長さ	幅	厚さ	重量	
114-3 PL42	鉄製品 釘(鑿)	床直 完存	21.9	3.9	1.5	260	頭部折り曲げの釘で、2.8cmの板と5.6cmの打ち込みによる榫木貫付着。 榫抜きか縦方向の少割削れあり。

67号住居遺物観察表

拝因番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
116-1 PL42	土師器 坏	床直 口-底部3/5	口-(11.6) 底-丸底 高-3.7	①細砂、輝石 ②酸化焼 ③にぶい褐7.5YR6/4	底部から体部は丸みを持ち、口縁部は直立する。 外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら削り。 内面 口縁部へら磨き後丁寧横ナデ。
116-2 PL42	須恵器 蓋	床直 鉦-口縁部 1/3	口-(20.5) 鉦-(8.8) 高-2.7	①緻密、黒色灰物 ②還元焼 ③灰白5Y8/1	鉦は扁平状を呈し、内面には見受けのカエリをもつ。 表面に磨盤が付着し、全体的に自然釉がかかる。
116-3 PL42	土師器 罌	貯蔵穴 胴-底部1/2	口- 底-5.7 高-(13.0)	①細砂、輝石 ②酸化焼 ③にぶい褐7.5YR6/4	底部は平底を呈し、胴部はあまりふくらまず、直線的にのびる。 外面 斜めのへら削り。内面 へらナデ。

68号住居遺物観察表

拝因番号 図版番号	種別 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
118-1 PL42	須恵器 皿	覆土 口-底部3/4	口-9.4 底-7.2 高-2.0	①細砂、白色軽石 ②酸化焼 ③にぶい黄褐10YR5/3	直線的に立ち上がる。 右回転縦線成形。底部は右回転糸切り。
118-2 PL42	須恵器 皿	覆土 口-底部1/2	口-9.8 底-(4.4) 高-2.1	①細砂、小礫 ②酸化焼 硬質 ③にぶい褐7.5YR6/4	直線的に立ち上がる。 縦線成形。底部は右回転糸切り。
118-3 PL42	灰輪陶器 埴	覆土 口-体部片	口-(23.0) 底- 高-4.0	①緻密、黒色灰物 ②還元焼 硬質 ③灰5Y6/1	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 施釉方法は刷毛塗り。釉調は緑灰色。黒袋14号甕式期。

遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)				①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
			長さ	幅	高さ	重量		
118-4 PL42	土師器 土釜	+5 口-胴部片	口-(24.0)	底- 高-(10.2)			①細砂、小礫 ②燻灰焰 やや軟質 ③赤黒5YR4/8	胴部は丸くふくらみ、口縁部は外反する。 外面 口縁部横ナテ。胴部に指環状痕残り。 内面 口縁部横ナテ、以下ナテ。
採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			長さ	幅	高さ	重量		
118-5 PL42	石製品 磨石	+3	13.7	9.3	6.8	1136	粗粒輝石 安山岩	点描部が磨石部で青金属による。中央右寄りに敲打部あり。 右側部から手前小口に打ち欠きあり。

69号住居遺物観察表

採回番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)				①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
			長さ	幅	高さ	重量		
119-1 PL42	須恵器 埴	床直・貯蔵穴 口-底部1/5	口-13.1 底-7.0 高-3.5				①細砂、黒色鉱物 ②還元焰 硬質 ③灰黄2.5Y6/1	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
119-2 PL42	須恵器 埴	甕 口-底部1/3	口-(12.6) 底-(6.8) 高-4.1				①細砂 ②燻灰焰 ③にぶい黄橙10YR7/2	丸みを帯び立ち上がり、口縁部はやや外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
119-3 PL42	須恵器 埴	床直 口-底部3/4	口-(12.8) 底-6.9 高-3.6				①細砂、黒色鉱物 ②還元焰 ③灰黄7.5YR6/1	直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
119-4 PL42	須恵器 埴	覆土 口-底部2/5	口-(11.3) 底-(5.8) 高-3.4				①細砂、黒色鉱物 ②燻灰焰 硬質 ③にぶい黄橙10YR7/3	直線的に立ち上がる。 右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
119-5 PL42	須恵器 埴	覆土 口-底部3/5	口-13.1 底-6.8 高-5.3				①細砂 褐色鉱物 ②燻灰焰 ③にぶい橙5YR6/4	体部は丸みを持ち、口縁部は外反する。付高台。高台は 細身で直立する。体部外面に[金]の墨書。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
120-6 PL42	須恵器 埴	+9 口-底部3/4	口-12.8 底-6.4 高-4.6				①細砂、小礫 ②燻灰焰 硬質 ③にぶい黄橙10YR6/4	腰部が張り、口縁部は外反する。付高台。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
120-7 PL42	須恵器 埴	床直・甕 口-底部1/2	口-12.8 底-6.1 高-4.8				①細砂 白色軽石 ②還元焰 ③灰2.5Y6/1	直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 付高台。高台は[ハ]の字状に開く。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
120-8 PL42	須恵器 埴	貯蔵穴 口-底部1/2	口-15.3 底-(7.1) 高-6.1				①細砂、小礫 ②還元焰 硬質 ③灰黄2.5Y7/2	腰部がやや張り、口縁部は外反する。高台は内外面とも に外傾する。付高台。右回転轆轤成形。底部は回転糸切り。
120-9 PL42	須恵器 埴	床直 口-底部2/3	口-(12.8) 底-7.0 高-4.0				①細砂、黒色鉱物 ②還元焰 ③灰5Y7/1	体部から口縁部は丸みを持ち立ち上がる。付高台。 高台は[ハ]の字状に開く。 右回転轆轤成形。底部は右回転糸切り。
120-10 PL42	須恵器 埴	甕 底部1/2	口- 底-(6.7) 高-(2.8)				①細砂、黒色鉱物 ②還元焰 ③灰白5Y8/2	底部内面中央部にヘラ状工具による同心円状の凹凸あ り。付高台。底部は右回転糸切り。
120-11 PL42	灰輪軸器 皿	床直 体-底部1/3	口- 底-(7.0) 高-(2.1)				①観青 ②還元焰 硬質 ③灰黄2.5Y6/2	直線的に立ち上がる。付高台。高台は三日月形を呈する。 轆轤成形。施軸方法は別項より。軸調は乳白色。光ヶ丘 1号産式調。
120-12 PL42	須恵器 鉢	甕・貯蔵穴 口-胴部2/3	口-12.8 底- 高-(9.2)				①細砂、黒色鉱物 ②還元焰 ③灰黄2.5Y6/1	胴部は丸みを帯び、口縁部はやや外反する。 外面 口縁部横ナテ、以下へら磨き。 内面 口縁部横ナテ、以下ナテ。
120-13 PL42	須恵器 小型甕	床直 口縁部片	口-(12.2) 底- 高-(4.8)				①細砂、白色軽石 ②還元焰 硬質 ③灰白10Y7/1	胴部は丸みを持ち、口縁部はやや外反する。 口縁部内外面横ナテ。轆轤成形(回転方向不明)。
120-14 PL42	土師器 羽釜	+5 口-胴上部片	口-(20.1) 底- 高-(10.5)				①細砂 ②還元焰 ③灰5Y6/1	口縁部は内湾し、胴部は直線的にのびる。胴は断面三角 形を呈し、水平方向を向く。右回転轆轤成形。

遺物観察表

70号住居遺物観察表

神国番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
112-1 PL42	須恵器 埴	覆土 底部片	口- 底-(8.2) 高-(3.0)	①細砂、輝石 ②酸化焙 硬質 ③にぶい黄橙10YR6/3	器壁は厚く、高台は「ハ」の字状に開き、底部糸切り痕は不鮮明である。

72号住居遺物観察表

神国番号 図版番号	種類 器種	出土位置 残存状態	計測値 (cm)	①胎土②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴
121-1 PL43	土師器 坏	+7 完形	口-11.7 底-丸底 高-3.7	①細砂、輝石 ②酸化焙 硬質 ③にぶい橙5YR6/4	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら割り。 内面 口縁部横ナデ、指頭圧痕あり。
121-2 PL42	土師器 坏	+5 ほぼ完形	口-11.2 底-丸底 高-3.5	①細砂、輝石 ②酸化焙 硬質 ③明赤陶5YR5/6	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら割り。 内面 口縁部横ナデ、内面のナゲが丁寧。
121-3 PL43	土師器 坏	+5 口-底部5/6	口-12.6 底-丸底 高-4.1	①細砂、小礫 ②酸化焙 ③褐7.5YR4/6	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら割り。 内面 口縁部横ナデ、内面のへら割りがやや雑。
121-4 PL43	土師器 坏	+5 口-底部2/3	口-14.0 底-丸底 高-4.4	①細砂、輝石 ②酸化焙 ③にぶい褐7.5YR5/4	底部から体部に丸みを持ち、口縁部はほぼ直立する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら割り。外面のへら割りがやや雑。内面 口縁部横ナデ。
121-5 PL43	土師器 坏	+6 口-底部1/2	口-(13.0) 底-丸底 高-4.1	①細砂、輝石 ②酸化焙 ③にぶい橙7.5YR7/4	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は短く内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら割り。 内面 口縁部横ナデ、指頭圧痕あり。
121-6 PL43	土師器 坏	+9 口-底部2/3	口-(12.8) 底-丸底 高-4.0	①細砂、輝石 ②酸化焙 ③にぶい橙5YR6/4	底部から口縁部まで内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら割り。 内面 口縁部横ナデ。底部に指頭圧痕あり。
121-7 PL43	土師器 坏	+14 口-体部1/4	口-(13.0) 底- 高-(3.6)	①細砂 ②酸化焙 硬質 ③明褐7.5YR5/6	体部は丸みを持ち、口縁部は直立する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら割り。 内面 口縁部横ナデ。
122-8 PL43	土師器 坏	+4~+6 口-底部1/4	口-16.0 底-丸底 高-5.3	①細砂、小礫 ②酸化焙 ③橙7.5YR6/6	底部から体部に丸みを持ち、口縁部は内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら割り。 内面 口縁部横ナデ、以下丁寧なナゲ調整。
122-9 PL43	土師器 坏	床直~+4 ほぼ完形	口-17.7 底-丸底 高-5.9	①細砂 ②酸化焙 ③明赤陶2.5YR5/6	底部から口縁部にかけて内湾する。 外面 口縁部横ナデ、以下横方向のへら割り。 内面 口縁から底部まで丁寧なナゲ。
122-10 PL43	須恵器 坏	甕 口-底部1/4	口-(9.8) 底-(7.4) 高-2.9	①細砂、黒色鉱物 ②還元焙 やや軟質 ③灰白2.5Y8/1	直線的に立ち上がる。底部は平底を呈し、回転へら割り。 轆轤成形。
122-11 PL43	土師器 坏	+8 口-底部1/4	口-(21.0) 底-丸底 高-(4.5)	①細砂、小礫 ②酸化焙 ③橙7.5YR6/6	体部は丸みを帯び立ち上がり、口縁部は大きく外反する。 外面 口縁部横ナデ、以下不定方向のへら割り。 内面 口縁部横ナデ、以下ナゲ。
122-12 PL43	須恵器 埴	掘り方 口-底部1/4	口-(16.2) 底-(10.0) 高-4.6	①細砂、黒色鉱物 ②還元焙 硬質 ③灰白2.5Y7/1	体部から口縁部にかけて、わずかに丸みをもつ。底部は回転糸切り後、全面に回転へら割りが施されている。
122-13 PL43	須恵器 蓋	+4 ほぼ完形	口-17.5 径-7.3 高-3.1	①細砂、黒色鉱物 ②還元焙 ③灰5Y6/1	天井部から口縁部にかけて直線的に開き、内面にカエリをもつ。径は大型の扁平形。天井部の中央は回転へら割り。
122-14 PL43	須恵器 長頸甕	床直 頸部-肩部片	口- 底- 高-(6.0)	①緻密 ②還元焙 ③灰2.5Y5/1	頸部から肩部片。轆轤成形(回転方向不明)。 内外面とも自然輪が付着。
122-15 PL43	土師器 甕	貯蔵穴 口-胴部1/6	口-20.8 底- 高-(11.5)	①細砂 ②酸化焙 ③にぶい褐7.5YR3/5	口縁部は大きく外反し、胴部はあまりふくらまない。 外面 口縁部横ナデ、以下へら割り。 内面 胴部へらナゲ。
122-16 PL43	土師器 甕	+3~+6 1/3	口-21.6 底- 高-(28.4)	①細砂 ②酸化焙 ③明褐7.5YR5/6	胴上部にふくらみをもち、口縁部は大きく開く。 外面 口縁部横ナデ、以下縦方向のへら割り。 内面 口縁部横ナデ、以下縦方向のナゲ。
122-17 PL43	土師器 甕	甕 口-胴部片	口-(21.9) 底- 高-(19.0)	①細砂、輝石 ②酸化焙 ③橙5YR5/6	胴上部にふくらみをもち、口縁部は大きく外反する。 外面 口縁部横ナデ、以下へら割り。 内面 口縁部横ナデ、以下へらナゲ。